

Title	京都大学における国際交流の現状と新たな展開への視点： 第4回アンケート・インタビュー調査報告書
Author(s)	京都大学国際交流センターアンケート調査班
Citation	(2012)
Issue Date	2012-03
URL	http://hdl.handle.net/2433/155866
Right	
Type	Research Paper
Textversion	publisher

京都大学における
国際交流の現状と新たな展開への視点

第4回アンケート・インタビュー調査報告書

平成23年度京都大学全学共通経費 1-2. 教育研究活動支援
「国際交流と留学支援体制に関する調査・研究」

京都大学国際交流推進機構 国際交流センター
The International Center
Kyoto University

2012年（平成24年）3月

報告書刊行にあたって

国際交流センターが3年毎に実施してきた、京都大学の留学と国際交流を扱うアンケート・インタビュー調査の4回目の報告書が刊行されることになった。

前回の調査および報告書の刊行時点から3年間で、留学と国際交流の動きは一段と加速したといえる。加速化を促した大きな要因として、2009年度から着手した「大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業（グローバル30）」が挙げられる。この政策は、京都大学の各部局が多様なプログラムを通じて英語による教育を増やし、外国の留学生の日本留学を可能とする一方、日本人学生の海外留学を全学的に支援するという二大方針を基本にしている。この政策を推進することにより、この3年間だけをみても、受け入れ留学生は1353名から1658名と大きくその数を増やしている。海外に派遣する日本人学生数は受け入れ数には及ばないが、京大全体の留学推進の方針のもと、3年前と比較するとその数を着実に伸ばしている。現在も引き続き「グローバル30事業」は進められており、京大全体として研究・教育を横断する国際化の機運が高まっている。

以上の政策の推進と同じ時期に、国際交流センターの組織改編が行われたことにも触れておきたい。国際交流センターは、2011年4月から国際交流推進機構国際交流センターに配置換えし、留学生教育、修学・生活上のアドバイジング、学生の海外派遣に関する業務を実施する部署として、主に留学教育と学生交流に携わることとなった。

グローバル30事業推進によって、国際交流推進機構の教員も増員された。それまで国際交流センターは9名の定員で運営されてきたが、2011年度現在、国際企画連携部門の特定・特任教員を加え13名の教員が配置されている。これも国際交流事業の拡大を如実に反映したものといえる。

このような背景のもと、留学生数の増加、内容の多様化が、京都大学の留学生及び留学生と共に学ぶ日本人学生の留学志向や国際感覚、進路選択にどのような変化をもたらしているのか、3年前の調査時と比較して最も顕著にデータとして現れているのか。それらが、今回のアンケート・インタビュー調査報告の最も注目すべき点であろう。

今回の報告書では、調査に携わった国際交流センター教員を始め、留学や国際交流に深い関心を抱く若手の研究者が、各々の問題意識を尖鋭化させ、以前とは違った新しい視点で留学生生活を切り取り、着実かつ意欲的に論を進めている。現時点における京都大学の留学生交流の実態と今後の展開を考える上で、この報告書の提言は見逃すことのできない内容を含んでいるといえよう。

本報告書が、留学教育、留学交流、国際交流に携わるより多くの方々に資するものとなることを心より祈念するものである。

2012（平成24）年3月

京都大学国際交流推進機構 国際交流センター
センター長 森 真理子

目 次

はじめに	1
調査の方法	3
分析結果の概要	11
第Ⅰ部 論稿	
第一章 留学先選択に関する規定要因 ー留学生対象アンケートの分析と考察ー	渡部 由紀・・・21
第二章 「大学院重点化大学」の留学生の進路 ー日本での就職志向に注目してー	木下 昭・・・37
第三章 留学生アドバイジングへの「被援助志向性」に関する分析	戸梶 民夫・・・65
第四章 留学生と家族関係	赤枝 香奈子・・・89
第五章 京都大学における留学生と日本人学生の交流の実態	貫田 優子・・・113
第Ⅱ部 資料編	
2011年度 留学生アンケート (R 票)	141
アンケート調査票・単純集計	
各設問「その他」項目への回答	
自由記述	
2011年度 一般学生アンケート (A 票)	273
アンケート調査票・単純集計	
自由記述	
インタビュー	343
留学生対象「留学生生活と進路に関するインタビュー」依頼文・質問内容	
留学生対象「留学生アドバイジング利用に関するインタビュー」	
依頼文・質問内容	

はじめに

本報告書は、2011 年度に実施した本学の国際交流に関する 2 種類のアンケート調査、すなわち留学生を対象とした『京都大学における留学生生活に関する調査』（以下、留学生調査）及び、一般学生を対象とした『国際交流と留学支援制度に関する調査』（以下、一般学生調査）の結果を集計、分析したものである。

国際交流センターでは、2002 年度を初回として、3 年ごとに本調査研究を実施してきたており、今回の調査で 4 回目の実施となった。前回（2008 年度）と同様、今回も平成 23 年度全学共通経費（I-2. 教育研究活動支援）の助成により大規模な調査を実現することができた。留学生調査においては、本学の留学生全員に調査票を配布し、全学の 46%の留学生から回答が得られた。また、アンケートだけでなくインタビュー調査も取り入れ、より詳細なデータを得た。一般学生についても、関係教員の協力を得て前回以上の規模のアンケート調査を実施することができた。

本報告書の執筆者は下記の通りである。いずれのメンバーも調査票の作成から、集計、分析、報告書執筆に至るまで本調査に関わり、議論を重ねてきた。

森 眞理子	京都大学国際交流推進機構 国際交流センター
河合 淳子	京都大学国際交流推進機構 国際交流センター
渡部 由紀	京都大学国際交流推進機構 国際企画連携部門
赤枝 香奈子	京都大学大学院文学研究科特定助教
戸梶 民夫	京都大学大学院文学研究科グローバル COE 研究員
木下 昭	京都大学大学院人間・環境学研究科修了 現在、立命館大学非常勤講師
貫田 優子	京都大学大学院教育学研究科修了 現在、大阪大学/近畿大学/京都精華大学 非常勤講師

高等教育における国際交流の状況は急速に進展し、その形態は多様化の様相を見せている。そのような状況に対応するには、実態の把握と当事者の意見を聴取することは不可欠である。また、現状への対応にとどまることなく、中期、長期的展望に立った議論を行うためには、こうした調査を定期的に実施し、時系列的考察を可能とするデータを蓄積していく必要がある。今回の調査では、過去 3 回の調査で明らかになった傾向をより詳細に把握すること、及び、今後の国際交流の活性化への視点を提供することを目標に、留学生の進路志向や生活実態、日本人学生と留学生の交流状況等に関する分析を行った。

調査の実施にあたり、調査票の配布・回収にご協力いただいた本学国際交流委員会委員の先生方、国際交流推進機構協議会の先生方、各学部の留学生担当教員の先生方、そして

各部局の事務担当の職員の方々のお力添えなくしては、実現は不可能だったであろう。この場を借りて深謝を申し上げたい。

また、本学総合人間学部在籍の大久保杏奈さん、竹内彩帆さん、糟野進一さん、教育学研究科在籍の三木恵里子さん、本学人間・環境学研究科出身の伊藤亜希子さんには、調査実施及び報告書刊行に関わる様々な作業を補助していただいた。

最後に、多忙な中、貴重な時間を割いて本調査票への記入、インタビューに協力してくれたすべての皆様に、心より御礼を申し上げたい。皆様各々の学生生活のさらなる充実と発展へとつながるよう、本調査結果の幅広い活用を期待する。

京都大学国際交流推進機構 国際交流センター アンケート調査班

調査の方法

本年度は、2種のアンケート調査（1）留学生を対象とした『京都大学における留学生生活に関する調査』、（2）日本人学生を対象とした『国際交流と留学支援制度に関する調査』を実施した。さらに、留学生を対象としたインタビューも行った。

【表1】

（1）2011年度 留学生対象アンケート（R票）の実施方法

回収部数 763

調査対象	実施期間	配布・実施方法	配布対象	回収部数	配布数	回収率		備考
							全体	
京都大学に在籍する全留学生	2011年6-7月	1)国際交流センター実施票：授業内又は留学生課経由で配布。回収は授業内回収又は回収箱に投函	a)文部科学省国費留学生日本語予備教育集中プログラム学生 b)日本語日本文化研修留学生 c)KUINEP学生 d)一般交換留学生	87	102	85.3%	46.0% (全留学生数の46.0%)	各部局への配布依頼数は2011年5月1日現在の統計による。
		2)部局実施票：各部局事務に配布を依頼。回収は回答者による学内便返送又は各部局回収箱に投函	各部局に在籍する全留学生（上記a)-d)を除く）	676	1,556	43.4%		

（2）2011年度 日本人学生対象アンケート（A票）の実施方法

回収部数 581

調査対象	実施期間	配布・実施方法	配布対象	回収部数	配布数	回収率		備考
							全体	
京都大学に在籍する日本人学部生・大学院生（正規学生）	2011年6-7月	1)国際交流センター実施票：センター教員によるKUINEP, 多文化交流教育クラス, ポケットゼミ, 全学共通科目, 大学院担当科目などで配布・回収又は回収箱へ投函	左記授業の受講生	160	215	74.4%	61.2% (全学生数の2.5%)	各部局への配布依頼数は2011年5月1日現在の所属学生統計により735部を配分。
		2)部局実施票：全学の国際交流委員会及び国際交流推進機構協議委員会委員により各部局の担当講義内などで配布回収	左記委員から配布を受けた学生・大学院生	421	735	57.3%		

1. アンケート調査について

(1) 2011 年度 留学生対象アンケート (R 票) の実施方法

留学生アンケートは、まず日本語で作成し、英語訳を用意した。アンケート中の記述式設問に対しては日本語、英語、中国語、韓国語のどの言語でも回答可能とした。今回の調査では、留学の入口から出口に至るまでの留学生の留学に対する認識への理解を深めるため、下記の三点において質問票の変更を行った。

一点目は、留学の入口である留学先選択の理由をより体系的に把握するため、問 22「日本を留学先に選ぶ時」、問 23「京都大学を留学先に選ぶ時」の理由項目を充実させた。また、近年日本でも英語で学ぶ留学生数が増加傾向にあり、留学先選択と教授言語の関係を探索するため、新たに問 8-b「主要な教授言語」に関する質問を追加した。

二点目は、留学の過程においての生活実態の理解を深めるにあたり、主に留学生の社会的ネットワークと悩みに関する質問項目の改訂を行った。まず、留学生の社会的ネットワークを把握するため、問 20「家族との同居」に関する質問をより詳細なものにした。そして、新たに問 41「他の留学生との交流」に関する質問と問 48「利用している SNS (ソーシャル・ネットワーキング・サービス)」を追加した。次に留学生の抱える悩みについては、問 42「心配事や悩み」でこれまでの相談相手を回答する質問 (問 42-b) に加え、5 種類の悩んでいる事柄を 4 段階スケールで悩みの程度を回答する質問 (問 42-a) を追加した。また、留学生の抱える悩みと関係が高いと考えられる二つの質問、問 11「1 か月の生活費」、問 21「睡眠時間」を追加した。経済面に関する質問は問 11 を追加したことにより、問 12-a「奨学金の支給期間」問 19「一か月のお金の使い途」、問 20「今一番欲しいもの」は削除した。

三点目は、留学の出口に関する質問、問 39「卒業後の進路」を充実させた。職種や就職先の選択肢を増やし、より詳細に留学生の進路希望の把握を目指した。

アンケートの配布・回収は 2011 年 6、7 月に実施した。調査対象は、京都大学に在籍中の留学生 (研究生や研修員などを含む) 全員である。配布および回収は以下の 2 つの方法で実施した。(【表 1】(1) を参照のこと)

1) 国際交流センター実施票：

a) 文部科学省国費留学生日本語予備集中プログラム、b) 日本語日本文化研修留学生プログラム、c) KUINEP 留学生、d) 京都大学との学術交流協定による留学生 (一般交換留学生) に対しては、国際交流センターの授業内あるいは留学生課を経由して配布した。回収は授業担当教員による直接回収、もしくは留学生課前に設置した回収箱への投入を依頼した。配布数は 102 部、回収は 87 票で回収率は 85.3%であった。

- 2) 部局実施票：各部局事務の協力を得て、京都大学に在籍中の全留学生に配布した。各部局への依頼数は、2011年5月1日現在の在籍留学生数に数部の予備を含めたものとした。各部局から留学生への配布方法は各部局の判断に任せた。回収は回答者による学内便での返送、もしくは各部局に設置した回収箱にて行った。配布数（実際に対象となった留学生数）は1,556部¹、回収は676部で、回収率は43.4%であった。

（2）2011年度 日本人学生対象アンケート（A票）の実施方法

2011年度の日本人学生対象アンケートは2008年度の内容をほぼ踏襲しているが、主要な変更点が一点ある。日本人学生の留学経験に関する認識を理解するために二つの質問を追加した。質問は留学したいと思ったことがある、または思ったことがない学生を対象とした問36「もし、あなたが留学したら、その経験は、帰国してから、次のことに役立つと思いますか。」と留学が決定している学生を対象とした問47「留学の経験は、帰国してから、次のことに役立つと思いますか。」である。

アンケートの配布・回収は2011年6、7月に行った。調査対象は、京都大学に在籍中の日本人学部生と大学院生である。配布および回収は以下の2つの方法で実施した。（【表1】（2）を参照のこと）

- 1) 国際交流センター実施票：センターの教員が提供する授業のうち、日本人学生が受講しているKUINEP英語講義、多文化間交流教育クラス、ポケットゼミ、全学共通科目で配布した。回収は教員による直接回収、若しくは留学生課前に設置した回収箱にて行った。配布数は215部、回収は160票で回収率は74.4%であった。
- 2) 部局実施票：国際交流委員会委員、及び国際交流センター協議員の先生方に依頼し、各学部・研究科でのそれぞれの担当講義内で配布・回収してもらった。配布数は735部で、回収は421票、回収率は57.3%であった。

いずれのアンケートにおいても、サンプリングを厳密に行ったわけではないことを予め断っておきたい。回収票の属性などに見られる偏りについては、本章3において述べる。

設問の多くは多肢選択あるいはスケールになっており、回答者は自分にあった番号を選ぶというものである。回収票の数値データはすべて統計的に処理した。また留学生アンケートにおいて英語、中国語、韓国語で書かれた自由記述回答は日本語に訳し入力していっ

¹ 各部局に依頼したアンケート票の数は合計1,675部である。これには、部局毎に、数部の予備と配布担当者参照用の票数を含んでいる。そのためここでは、5月1日現在の全留学生数1,658人から、国際交流センター実施票の対象者102人を除いた数、すなわち1,556人に配布したとみなし、回収率を算出した。

た。本調査に使用した調査票と単純集計、および自由記述回答は、本報告書に【資料編】として掲載した。

2. インタビューについて

今回の調査では、留学生を対象としたインタビューを取り入れた。アンケートの回答結果の分析から重要と思われる論点を絞り、それらを基にインタビュー対象者を決め、依頼した。

(1) 留学生対象インタビューの実施方法

留学生に対して2種類のインタビュー、a)「留学生アドバイジングの利用状況に関するインタビュー」、b)「卒業後の進路に関するインタビュー」を行った。「留学生アドバイジングの利用状況に関するインタビュー」では、留学生活における問題点や悩みに留学生がどう対処しているのかを把握することを目的とした。「大学院留学生の進路に関するインタビュー」では、日本での就職を希望している修士課程の学生を対象に、留学過程と就職希望の関係を探索することを目的とした。インタビューの質問事項及び依頼文は【資料編】に記載した。

インタビュー対象者はすべてアンケート調査の回答者の中から選んだ。インタビュー対象者決定の手順は、以下の通りに行った。(i)それぞれの論点から対象者を絞る²。(ii)アンケート票の最後に設けられた任意で氏名・連絡先を記入する欄に、記入のあった対象者に対しEメールでインタビュー依頼をする。(iii)場所、日時を決め、インタビューを実施する。その結果、「留学生アドバイジング利用に関するインタビュー」4名、「留学生活と進路に関するインタビュー」7名に対し、インタビューを行うことができた。

「留学生アドバイジング利用に関するインタビュー」は、一対一、二対一の半構造化インタビューを採用し、質問内容の項目は事前に設定したが、その質問事項や順序は決めることなく、調査者とインタビュー対象者の会話の中でインタビューを進める形式をとった。直接面談できる場合には対面インタビューとし、遠方の場合にはスカイプを使用し、オンライン映像を通して対話を行った。さらに電話での簡単なやり取りの後、質問事項についてはメールで回答を得る場合もあった。インタビューにかかる時間は一人につき1時間程度であったが、時には1時間を超えることもあった。インタビューは、日本語か英語のどちらかで行った。インタビュー対象者の許可が得られた場合にICレコーダーで録音した。

「留学生活と進路に関するインタビュー」も、一対一の半構造化インタビューを採用した。インタビューにかかる時間は、一人につき1時間程度であった。インタビュー対象者の許可が得られた場合に、ICレコーダーで録音した。

² 「留学生アドバイジング利用に関するインタビュー」の対象者の選定方法については本報告書の戸梶論文、「留学生活と進路に関するインタビュー」については、木下論文を参照のこと。

3. 京都大学全体の統計から見たアンケートデータの概要

(1) 留学生対象アンケート (R 票)

【表 2】

	①R票における回答数		②京都大学全体 2011年5月1日現在		R票比率
	(人)	(%)	(人)	(%)	(②に占める ①の割合)
出身地域					
アジア	615	80.6%	1,346	81.2%	45.7%
欧州(NIS諸国を含む)	55	7.2%	125	7.5%	44.0%
中南米	21	2.8%	52	3.1%	40.4%
アフリカ	16	2.1%	51	3.1%	31.4%
中東	32	4.2%	41	2.5%	78.0%
北米	14	1.8%	29	1.7%	48.3%
大洋州	7	0.9%	14	0.8%	50.0%
無回答	3	0.4%	—		
全体	763	100.0%	1,658	100.0%	46.0%
京都大学における身分					
学部正規生	38	5.0%	164	9.9%	23.2%
大学院正規生	562	73.7%	1,213	73.2%	46.3%
研究生・聴講生	96	12.6%	193	11.6%	49.7%
KUINEP学生	18	2.4%	27	1.6%	66.7%
交流協定による一般交換留学生※1	12	1.6%	23	1.4%	52.2%
日本語・日本文化研修生	16	2.1%	20	1.2%	80.0%
その他	10	1.2%	18	1.1%	55.6%
無回答	11	1.4%	—		
全体	763	100.0%	1,658	100.0%	46.0%
文系/理系/融合系※2					
文系	202	26.5%	494	29.8%	40.9%
理系	450	59.0%	938	56.6%	48.0%
文理融合系	64	8.4%	226	13.6%	28.3%
未決定	9	1.2%	—		
無回答	38	5.0%	—		
全体	763	100.1%	1,658	100.0%	46.0%

※1. 大学間交流協定による一般交換留学生を指す。(部局間交流協定による受入留学生は含まない。)

※2. 文系/理系/融合系の別は R 票では回答者個人の回答に拠ったが、京都大学全体の統計は、学部・研究科単位で文系/理系/融合系に分類し、所属学生はすべてその分類に属するものとして算出した。従って、実際とは若干の差があると考えられるが、全学における留学生の文系/理系/融合系比率の概要を示すものとして掲載した。

分析に入る前に、回収したアンケートデータの偏りを把握しておく必要がある。

上記【表 2】は出身地域、京都大学における身分、文系/理系/融合系の別について、アンケートデータと京都大学全体の統計を比べたものである。「R 票比率」は、アンケートデータの偏りを表すのに便利な指標である。総回収数は 763 部で、これは全学の留学生の 46.0%にあたるので、R 票比率が 46.0%より大きい項目は、分析結果に必要以上の影響を与

える可能性があり、逆に 46.0%未満の項目は分析結果に十分な影響を与えられない可能性があるということになる。これを基に考えると、まず出身地域に関しては、比較的バランスよく回答が集まってはいるが、中東（78.0%）が高めで、アフリカ（31.4%）がやや低めであることに留意しておきたい。次に、京都大学における身分に関しては、正規生より非正規生の R 表比率が高い傾向が見られた。また学部正規生からの回答（23.2%）が少なく、日本語・日本文化研修生からの回答（80.0%）が特に多かった。文系／理系／融合系については、文系と理系はバランスよく回答が得られたが、文理融合系（28.3%）がやや低めであることに留意して分析を進めたい。

（２）日本人対象アンケート

【表 3】

	①A票における回答数		②京都大学全体 2011年5月1日現在		A票比率
	(人)	(%)	(人)	(%)	(②に占める①の割合)
所属学部・研究科					
文学部・文学研究科	63	10.8%	1,637	7.2%	3.8%
教育学部・教育学研究科	14	2.4%	514	2.3%	2.7%
法学部・法学研究科	47	8.1%	2,099	9.2%	2.2%
経済学部・経済学研究科	42	7.2%	1,397	6.1%	3.0%
理学部・理学研究科	82	14.1%	2,541	11.1%	3.2%
医学部・医学研究科	40	6.9%	2,232	9.8%	1.8%
薬学部・薬学研究科	24	4.1%	614	2.7%	3.9%
工学部・工学研究科	171	29.4%	6,407	28.1%	2.7%
農学部・農学研究科	44	7.6%	2,265	9.9%	1.9%
総合人間学部・人間環境学研究科	31	5.3%	1,262	5.5%	2.5%
エネルギー科学研究科	8	1.4%	380	1.7%	2.1%
アジア・アフリカ地域研究研究科	0	0.0%	170	0.7%	0.0%
情報学研究科	9	1.5%	573	2.5%	1.6%
生命科学研究科	0	0.0%	266	1.2%	0.0%
地球環境学	1	0.2%	171	0.7%	0.6%
公共政策教育部	3	0.5%	91	0.4%	3.3%
経営管理教育部	0	0.0%	200	0.9%	0.0%
研究所・センター	0	0.0%	—	—	—
無回答	2	0.3%	—	—	—
全体	581	100.0%	22,819	100.0%	2.5%
京都大学における身分					
学部の正規生	429	73.8%	13,387	58.7%	3.2%
修士課程の正規生	106	18.2%	5,475	24.0%	1.9%
博士課程の正規生	45	7.7%	3,727	16.3%	1.2%
研究生※・聴講生・科目等履修生	0	0.0%	230	1.0%	0.0%
研修員	0	0.0%	—	—	—
その他	0	0.0%	—	—	—
無回答	1	0.2%	—	—	—
全体	581	100.0%	22,819	100.0%	2.5%

※京都大学全体学生数統計には、研究生は含まれていない。

A 票比率は【表 3】の通りである。人数が多い工学部・工学研究科、法学部・法学研究科、理学部・理学研究科、医学部・医学研究科、農学・農学研究科において、前者 2 部局から基準値に非常に近い回答が、また後者 3 部局からは基準値に比較的近い回答が集まり、全体のバランスに大きな問題はないといってよいだろう。しかし分析に当たっては、回答が得られなかった部局（アジア・アフリカ地域研究研究科、生命科学研究科、経営管理教育部）が 3 部局あることに留意する必要がある。

（渡部由紀・河合淳子）

分析結果の概要

国際交流センターでは、これまで 2002 年度、2005 年度、2008 年度と 3 年毎に外国人留学生、一般学生を対象にした全学的なアンケート調査を実施してきた。今回はその 4 回目として、2011 年 6、7 月に外国人留学生及び一般学生を対象としたアンケート調査を実施した。その後アンケート調査で得られた結果をより詳細に把握するためにインタビュー調査を行なった。それらの調査をもとに分析を行ない、各自が論稿にまとめた。

本章では今回掲載された 5 編の論稿の概要を記す。留学生を対象とした論稿 4 編と、留学生と一般学生双方を対象とした論稿 1 編である。本章では、各論稿が扱う内容から大きく二つのグループに分け、それぞれの論稿に見られる本学における現在の留学、国際交流の実状、課題を概括する。

1. 留学生における京都大学留学の意味と将来

渡部 由紀 「留学先選択に関する規定要因
ー留学生対象アンケートの分析と考察ー」(第一章)

木下 昭 「『大学院重点化大学』の留学生の進路
ー日本での就職志向に注目してー」(第二章)

2. 実態調査・意識調査ー人間関係と大学支援を中心に

戸梶 民夫 「留学生アドバイジングへの『援助志向性』に関する分析」
(第三章)

赤枝 香奈子 「留学生と家族関係」(第四章)

貫田 優子 「京都大学における留学生と日本人学生の交流の実態」(第五章)

1. 留学生における京都大学留学の意味と将来

留学生はどのような動機で京都大学留学を決意し、そして留学後はどのような進路を希望しているのだろうか。これらの論点は 2008 年度調査から引き続き検討された。

渡部「留学先選択に関する規定要因ー留学生対象アンケートの分析と考察ー」(第一章)

渡部論文は、まず留学生数増加に伴い、留学生の属性、留学目的が多様化している京都大学の現状の指摘から始まる。これまで本学における留学生の多数を占めてきた大学院での研究を目的とする学生に加え、大学間交流協定による学位取得を目的としない交換留学生、2009 年に始まった国際化拠点事業(グローバル 30)による英語で学位取得可能なプログラムに在籍する学生も増加してきている。そこで、渡部論文では、留学先選択要因(「なぜ日本を留学先に選んだのか。」及び「なぜ京都大学を留学先に選んだのか。」)に注

目して、こうした留学生の多様化の実態を体系的に明らかにすることを試みている。

分析結果

学生を3つの観点からグループ分けし、留学先を選択する際に重視される要因について、各グループ間でいかなる共通点、相違点が見られるかを検証した。グループ分けの観点は、a)留学の目的（「学位取得を目的とするグループ」、「学位取得を目的としないグループ」）、b)プログラムの教授言語（「日本語を教授言語とするプログラム」、「英語を教授言語とするプログラム」）、c)文系か理系かである。

1) 全グループに見られる共通点

(1) 国の選択では「日本留学による利益」「日本に関する知識や認識（を有しているか否か）」が重視される。

(2) 大学の選択では「教育・研究の質」「大学との適合性」が重視される。

2) 特定のグループに見られる特徴

(1) 「学位取得を目的としないグループ」は、大学選択の際に他グループと同様、「研究・教育の質」を重視する傾向はあるものの、「日本に関する知識や認識」をより重視する傾向がある。

(2) 「英語を教授言語とするプログラム」に所属する学生は「他者の助言」、特に「母国の先生の勧め」を重視する傾向がある。

問題提起

以上を踏まえ、「英語を教授言語とする留学生グループ」について次の2つの問題提起がなされている。

1) このグループに属する学生は、日本語能力の不足により留学前の情報収集に困難が伴うことから、母国の先生の助言や大学の持つ社会的ネットワークの有無が国、大学を選択する際により重要な要因となっており、この点を踏まえた情報提供が必要であること。

2) 今後この新しい留学生グループを対象として日本の大学に留学する動機、留学に対する認識、態度、行動などについて詳細な調査の必要があること、の2点である。

木下『『大学院重点化大学』の留学生の進路－日本での就職志向に注目して－』（第二章）

木下論文は、対象を大学院に在籍する留学生に絞り、彼らの進路希望について詳細な分析を行った。分析から得られた重要な結果の一つに、就職を希望する者、特に研究職以外の就職を希望する者が大学院レベルの留学生に少なからず存在するということがある。以下に分析結果の詳細を羅列する。

分析結果

1) 修士課程に在籍する留学生（以下、修士留学生）の内、研究職および研究職以外を合わせた就職希望者は6割強であった。このような、進学ではなく就職を希望する者の増加は2008年度調査時に既に確認されていたが、今回も同様の傾向が見られる。

- 2) 「研究職以外の就職希望者」は、修士留学生全体の約4割、博士では約1割存在する。
- 3) 修士留学生では、「日本での就職希望者」の7割以上が「日本・日系企業」で職を得たいと考えている。
- 4) 「日本での就職希望者」の多寡は、所属研究科及び出身国による相違が見られる。その割合が大きい研究科は、情報学研究科、経営管理大学院、及び工学研究科で、出身国では中国である。上記の研究科及び出身国では、就職希望の修士学生の6～8割が日本で就職したいと思っている。
- 5) 「日本での研究職以外の就職希望者」には、日本語能力の自己評価が高く、且つ英語能力の自己評価が低い者が多い傾向がある。
- 6) 進路に関する悩みを抱える留学生は、専門研究に対する悩みに次いで多い。悩みの相談相手として多いのは、指導教員 46.4%、家族 44.8%、同国出身の留学生 37.4%であり、キャリアサポートセンターなどの学内諸機関を相談先に挙げた者は5%以下である。
- 7) <インタビューより>「日本での研究職以外の就職希望者」の就職後の展望は漠然としており、就職後どの程度その会社に留まるのか、明確に設定していない場合が多い。
- 8) <インタビューより>「日本での研究職以外の就職希望者」の就職活動のプロセスは、日本人学生のそれとほぼ変わらない。

今後の課題と提案

以上の結果を踏まえ、いくつかの課題を指摘しながら、下記1)～5)の提案を行った。

- 1) 日本語以外での就職情報の提供：日本語ができない留学生の5人に一人は日本での就職を希望している。今後は日本語に堪能な留学生だけでなく、高い英語能力や国際経験、日本語以外の言語能力を有する人材の需要が高まることが予想される。大学側と企業側が協力して情報提供し、日本での就職を導くような積極的な行動が必要である。
- 2) 日本人学生と同等レベルの進路の選択肢に触れることのできる支援の提供：1)で述べた傾向がみられる一方で、現在の「研究職以外の就職希望者」の多くは、日本語能力が高く、日本人学生と同様の就職活動を行っている。この実情を踏まえて、留学生がより自然に就職活動の流れに乗っていけるよう情報提供と支援が必要である。
- 3) 大学院生の「研究職以外の就職希望者」に対する大学による就職支援の提供：すでに大学内外で実施されている様々な活動—本学キャリアサポートセンターの留学生向け情報提供、国際交流センターのビジネス日本語講座、京都市が行うジョブフェア等—それぞれの認知度を高め、連携していく必要がある。
- 4) 就職希望者の多い研究科における留学生向け就職フェアの実施：一般企業への就職を希望する在学生全般に有益であるだけでなく、就職時の有利さを重視して留学してくる学生の多い研究科でのフェアの実施は、日本で将来の留学生獲得にも資することになる。
- 5) 各大学間の協力による調査を実施：大学院生の就職動向に関する研究蓄積は乏しい。そのため全国的な調査が望まれる。

2. 実態調査・意識調査－人間関係と大学支援を中心に

次の3編の論稿は、これまで考察の必要性が認識されつつも取り上げることが少なかった留学生に関わる「人間関係」を扱ったものとなった。いずれも、留学生を取り巻く人間関係の実態やそれに対する意識を探究する内容となっているが、同時に大学が提供する支援をどのように有効に機能させるかという視点も提供している。

戸梶「留学生アドバイジングへの『被援助志向性』に関する分析」(第三章)

戸梶論文は、本学の留学生アドバイジング（国際交流センターが提供する「留学生相談室」と「ラウンジ Kizuna のピアサポート」）に焦点を当て、このサービスを利用するかどうかの選択に影響を与える諸要因について考察している。

分析結果

1) 利用率に影響を与える要因

留学生アドバイジングの利用率との影響が見出された要因は次の通りとなった。括弧内は（利用率が高いグループ＞利用率が低いグループ）を示す。

- (1) 出身国（欧米諸国出身者＞非欧米諸国出身者）
- (2) 生活費（生活費が高い層＞生活費が低い層）
- (3) 文系／理系／融合系（融合系＞文系、理系）
- (4) キャンパス（吉田キャンパス＞他キャンパス）
- (5) 他の留学生と知り合う機会（多い＞少ない）
- (6) アドバイジングのイメージ：親身になって相談を聞いてくれる（そう思う＞そう思わない。）
- (7) アドバイジングのイメージ：紹介なしに利用するのは難しい（そう思わない＞そう思う）
- (8) アドバイジングのイメージ：何をやる場所かよくわからない（そう思わない＞そう思う）

2) 悩みの度合いとアドバイジングの利用

アンケート調査票では、「専門研究」「人間関係」「日本生活」「心身問題」「卒業後進路」に関して、それぞれどの程度悩んでいるかを、「全く悩んでいない」～「とても悩んでいる」の四段階で尋ねている。その合計点数を「総合的な悩みの程度」として、アドバイジング利用率との関係を検討した。

「総合的な悩みの程度」を高、中、低の3グループに分けて比較すると、高と低の両極において利用率が高い傾向があった。一見、解説が難しい結果であったが、インタビューからは、この両グループ間にアドバイジングにアクセスする形式に違いがあることが示唆された。「悩みの程度の低い」留学生は、住居の探し方、書類作成の助けなどアドバイジングを手段的に利用する傾向が強く、アドバイジング担当の教職員や留学生同士の関係構築はそれほど重視していなかった。一方、「悩みの程度が高い」留学生は、相談にあたっては「悩みを相談しても自分が傷つかない」場や関係を、アドバイジング担当の教職員らと構

築する必要性を伴っていた。学生にとって悩みの程度が高くなるにつれ、アドバイジングを利用するためにより多くのエネルギーを要することになっていく。このことから、悩みの程度が中のグループ、高のグループの相談率は、本来相談したい留学生の率よりも低く抑えられた数値となっている可能性が大きい。

提言

アドバイジング以外で Kizuna 利用している者は、留学生アドバイジングを利用する率が高いという結果が出ている。故に、Kizuna 利用と留学生アドバイジングをつなげ、アドバイジングをより留学生に身近なものにする試みは一定の成功を収めているように見える。しかし、留学生が留学生アドバイジングを利用する際にどのような要因が働いているのかについては、今後も詳細な検討が必要である。戸梶論文では、悩みの度合いによってアドバイジングへのアクセスの形式が異なることが示唆されたが、まずはアドバイジングを提供する方もその点を十分踏まえ、下記のような複層的なアプローチの重要性を指摘する。

- 1) 「悩みの程度が高い」学生に対しては、アドバイジングが「悩みや辛い気持ちを打ち明けられる」「親身になって相談を聞いてくれる」「簡単なことでも相談できる」場所であるとのイメージを強化していくことが重要である。例えば、HP や資料を見ただけで留学生が相談を疑似体験できるように、実際の相談のプロセスや経緯を目に見えるようにすること等を提案している。
- 2) 「悩みの程度が低い」留学生に対しては、「情報の流通」が重要である。現在、留学生相談室では、住居契約、公共料金、健康保険に関するやり取りを蓄積し、データベース化している。それをさらに拡充し、多くの留学生に利用可能な形式で提供する必要がある。

赤枝「留学生と家族関係」（第四章）

赤枝論文は、留学生の家族関係の実態を多方面から考察した報告となっている。留学生の家族関係に関する研究蓄積は全国的にも十分とは言えず、3年に一度の本調査においても主題として取り上げられたことはなかった。その意味で貴重な論稿である。

分析結果

- 1) 回答した留学生の約 18%が日本で家族と一緒に生活しており、家族を母国に残して単身で留学している者（以下、単身者）は約 7%である。これらを合わせると留学生の約 25%に家族がいることになる。
- 2) 家族との同居者（135 名）の内訳は、「男性 69%、女性 30%、無回答 1%」、「博士課程 82%、博士課程以外 17%、無回答 1%」、「文系 16%、理系 68%、文理融合系 9%、未決定等 7%」となっている。
- 3) 単身者には比較的女性が多い。一方、同居者には男性が多いことは 2) の通りであるが、自分自身が先に一人で来日し、あとから家族を呼び寄せるケースが多い。
- 4) 家族と同居する理由として最も多いのは、「家族だから当たり前」との回答であった。

家族と同居することは特別な理由やメリットを考慮してなされるものではないことが示唆されている。

5) 家族は心配事や悩みの相談相手として重要な存在である。単身者の場合は、より物理的に近くにいる人々に心配事や悩みを相談する傾向が見て取れる。

6) 悩みや心配事によっては、同じ国からの留学生、違う国からの留学生、チューター以外の日本人学生、指導教員らも重要な相談相手となっている。

7) 家族と一緒に生活している学生はそうでない学生に比べて、留学前の情報入手先として、「日本から帰国した留学生」「家族や親戚」を挙げる者が多い。さらに「同窓会組織がある」「留学生が多く国際的な環境である」ことを留学先選定の際に重視する傾向も強い。

問題提起

1) 家族がいる留学生は、回答者の4分の1を占め、決して無視できる人数ではない。家族の来日の有無にも様々な事情がある。家族を巡る多様な状況を心に留めて、留学生活や将来設計などの相談に応じる体制が今後も求められる。

2) 悩みや心配事によっては、他の留学生、日本人学生、指導教員らも重要な相談相手となっており、留学生はこれらの人間関係のネットワークの中で生活していることが分かる。そして、人間関係の構築はすでに留学前から始まっている。京都大学に関する情報源についての分析結果から明らかになったように、京都大学で学んだ留学生は、また別の留学生を京都大学に呼びよせる牽引力を持っている。そのような留学を終えた者も含めた留学生間ネットワークについても、今後考察を深めることが重要である。

貫田「京都大学における留学生と日本人学生の交流の実態」(第五章)

貫田論文は、留学生票と一般学生票の2つの調査票を用いて、留学生と一般学生（その多くは日本人学生である）双方の視点から交流の実態を明らかにしている。

分析結果

<一般学生データから>

1) 学部生の場合は留学生と知り合う機会は比較的少なく、一部の特別な層、すなわち英語力が比較的高い学生、異文化接触経験や異文化に対する強い関心を持つ学生が、留学生と積極的に交流している傾向が目立つ。

2) 留学生と接点を持つことが出来た日本人学生は、留学生から多方面にわたるポジティブな影響を受けている。留学生のいる研究室で学ぶ日本人学生は研究環境への満足度が高い傾向もある。

<留学生データから>

1) 日本語能力の高い留学生よりも英語能力の高い留学生の方が、日本人学生と知り合う機会が多い。

2) 日本人学生は、留学生からの相談をあまり受けていない。一方、日本人学生に悩みを

打ち明けられる状態にある留学生ほど日本人学生との交流に対して満足している。日本人学生とのもっと「深い」交友関係を求めている留学生が少なくないことが示唆されている。

3) 日本人学生との交流も留学生との交流も不十分であると回答した人は留学生全体の約20%近くを占めており、しかも、このカテゴリーに属する留学生たちが、さまざまな深刻な悩みを抱え込みがちであるとの結果が見られた。

今後の課題と提案

1) 留学生と日本人学生の交流の実態を把握し、その改善に向けた支援を行うにあたっては、少なくとも2つの段階の存在を認識する必要がある。1つは、両者が知り合う段階であり、2つ目は知り合った後に両者が交流を進展させていく段階である。前者については、知り合う機会の拡大、後者については、その交流の質を問うことが求められている。

2) 今回の日本人学生の調査結果では、留学生との交流が生み出すポジティブな影響のみに焦点を当てたのだが、逆に留学生との交流に伴う様々な困難や葛藤についても今後追究する必要がある。

3) 日本語がよく出来る留学生の方が日本人学生との接点を持てず、交流を妨げられているのはなぜなのだろうか。日本人学生と留学生の接触を増やしていくためには、留学生が日本語を上達させるのみでは不十分なのであり、それ以外にある要因を突き止めていくことこそが必要である。

4) 日本人学生との交流も留学生との交流も不十分であると回答した留学生が回答者の20%弱を占めており、こうした留学生はキャンパス内で孤立している可能性がある。彼らをどのように支援していくのかは重要な視点である。

以上、本報告書に掲載された5論稿の概要を示した。各論稿は、それぞれの問題意識に立ち、分析方法を工夫し、本学における留学、国際交流の実状、課題の指摘を行っている。最後に、これらの論稿及び調査データから、本報告書の特徴を2点指摘しておきたい。

1点目は、留学生及び一般学生を取りまく「人間関係」を手がかりに、学生個々の置かれた具体的な状況と個人の意識を捉える視点を提供していることである。本調査は2002年から3年毎に実施しており、考察の中心はその時々で変化してきているが、こうした個人の置かれたより具体的な状況への視点は、今回の報告の特徴といえる。

参考のためにこれまでの報告書の特徴を述べるならば、初回の2002年度調査は留学生センター（現、国際交流センター）の自己点検、外部評価を兼ねていたこともあって、本学でのセンターの位置づけを5種のアンケートから考察することが中心に行われた¹。2回目の2005年度調査では、留学生と一般学生対象の2種のアンケートに絞り、国際交流に関する全学的な課題の指摘を行った²。3回目の2008年度調査は留学生の生活実態、日本人学

¹ 京都大学留学生センター（2002）「京都大学留学生センター自己点検・評価報告書」

² 京都大学国際交流センター（2006）「京都大学における国際交流の現状と可能性―第2回アンケート調

生の海外志向の考察を行うと共に、2005 年調査で指摘した課題を提言にまで発展させた³。そして今回は、全国的に留学生施策が「30 万人計画」へとステージを移し、留学生の受入れ、日本人学生の海外送出しの規模拡大が進められる中で行われた。この間、本学の留学生数は、1,197 人(2002 年)、1,244 人(2005 年)、1,253 人(2008 年)、1,658 人(2011 年)と増加し、多様な留学生受入れ、派遣プログラムが展開されるようになった。留学の量的拡大が目指され且つ学生の背景が多様化している時期であるがゆえに、個々の学生の置かれた状況に関するより具体的で実質的な議論を導く視点の提供は有意義であったと思われる。

2 点目は、留学生と日本人学生との共学、さらには両者に対する支援の連携と融合についての視点である。例えば、木下論文では日本人学生とほぼ変わらない就職活動を行う留学生が一部存在することを取り上げている。木下が指摘するように、こうした留学生がより一層「自然に」日本人学生と同様に多くの進路の選択肢に触れられる支援が必要ということになる。また、貫田論文では、留学生のいる研究室で学ぶ日本人学生は研究環境への満足度が高い傾向があると指摘している。これは単に研究室に留学生がいるかいないかが満足度を左右するというよりも、異なる背景を有する学生を受け入れる研究室の雰囲気や学生の満足度を高め、「優れた教育・研究環境」の重要な要素となっていることを示しているのではなかろうか。さらに論稿では取り上げられていないが、資料編の一般学生票の自由記述欄には、『＜大学が提供する＞支援としては適切だと思うが、もう少しナチュラルにならないものかと思う。つまり、もう少し自然に＜留学生や国際交流に＞接点を持てればよいのではと思っている。(理／学部生)(＜ ＞内、筆者補足)』と、留学生の存在や国際交流を特別視することへの違和感を示す記述が複数見られる。過去 3 回の調査ではほとんど見られなかった意見である。

しかし一方で、渡部論文が指摘するように、新しい英語プログラムの開設に伴いこれまでとは異なる属性、ニーズを持つ留学生も増えてきており、やはり特徴をよく理解した上で、個別の支援が必要なケースも多々存在する。また、家族を有する留学生が回答者全体の 25%を占めること(赤枝論文)、人的交流が不十分と答え、学内で孤立している可能性がある留学生が 20%も存在すること(貫田論文)、悩みの大きさによって留学生アドバイジングの利用方法に違いがあり、悩みの大きい者ほど公的サービスの利用率が低い可能性があること(戸梶論文)等、今後も慎重な検討を要する課題が提示された。これらの課題を念頭に置きつつ、留学生と日本人学生との共学、さらには両者に対する支援の連携と融合について検討していく必要がある。

今回の調査の実施により、2002 年度から過去 10 年の変遷を追うデータが蓄積された。今後も検討を続けたい。(河合 淳子)

査報告書」<http://hdl.handle.net/2433/79576> (第 1 回調査のデータも掲載されている。)

³ 京都大学国際交流センター(2009)「京都大学における国際交流の現状と発展に向けての問題提起―第 3 回アンケート・インタビュー調査報告書」<http://hdl.handle.net/2433/79575>

第 I 部

論稿

第一章

留学先選択に関する規定要因
—留学生対象アンケートの分析と考察—

渡部 由紀

1. はじめに

世界の留学生数は3百万人を超え、日本の留学生数も着実に増加し15万人に近づこうとしている。2011年度の京都大学の留学生数は1,658人で、10年前の1.4倍となっている¹。留学生の増加に伴い、留学生のプロファイルも多様化している。現在も学位取得を目的とした留学生が多くを占めるが、大学間交流協定による学位取得を目的としない1年未満在籍する交換留学生は1996年に10名であったが、2010年には92名にまで増加した²。これらの交換留学生の約4割が日本語で学び、残りの6割は英語で学んでいる。また、2009年に始まった国際化拠点事業（グローバル30）の実施で、英語で学位取得が可能な教育プログラムの増加により、英語で学ぶ留学生数は着実に増えている。

京都大学で学ぶ留学生のプロファイルの変化に伴い、留学生がなぜ日本を、また京都大学を留学先として選択したのかをより体系的に理解する必要がある。本稿の目的は、留学生が特定の留学先を選択する要因を探索することにある。まず、留学先である国と大学の二つのレベルにおける選択理由について因子分析を行い、共通因子を探索する。次に、留学の目的（学位取得を目的とする、しない）、プログラムの教授言語（日本語、英語）、文系理系の相違により、留学先の選択要因に有意差があるかを検証し、多様化する留学生のプロファイルにより留学先の選択要因に違いがあるかを検討する。

本稿では、国際交流センターが3年に一度実施している京都大学に在籍する留学生を対象とした留学生アンケート調査票のデータを基に分析を行った。調査票の問22「日本を留学先に選ぶ時に、以下の理由はどれくらい重要でしたか。」と問23「京都大学を留学先に選ぶ時に、以下の理由はどれくらい重要でしたか。」による、日本を留学先に選ぶ理由尺度の18項目と京都大学を留学先に選ぶ理由尺度の14項目をデータとして使用した。分析はSPSS Statistics 19を用いて、留学先の選択要因の探索的因子分析（最尤法・プロマックス回転）と、留学の目的（学位取得を目的とする、目的としない）、プログラムの教授言語（日本語、英語）、文系理系の相違と留学先の選択要因の尺度得点の関係をt検定で検証した。

2. 調査結果

2-1. 記述統計による検討

まず、日本を留学先に選んだ理由の尺度の18項目と京都大学を留学先に選んだ理由の尺度14項目において、項目分析を行った。「重要でない」を1、「あまり重要でない」を2、

¹ 2011年5月1日時点。京都大学ホームページ

(http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/issue/ku_profile/documents/2011/gaiyo11_16.pdf)

² 京都大学研究国際部留学生課「大学間交換留学生（受入れ）」データより

「ある程度重要」を3、「非常に重要」を4として得点化した。表1、表2は、項目ごとの有効度数、平均値、標準偏差を示し、また項目は平均値の大きい順に並べてある。

日本を留学先に選んだ理由で平均値が3以上の項目は「質の高い学問・研究」「国際的な経験を獲得したかった」「日本文化・社会への関心」「奨学金」の4項目であった。最初の3項目は日本留学で何を修得したいかに言及しており、最後の「奨学金」はその目的達成の手段であり、日本留学の学習目的に関する項目が日本を留学先として選択する理由で最も重視されている。一方、平均値が2以下の項目は「母国に入学するのが難しかった」「親類や知人が日本に住んでいる」「アルバイトができる」「自分の出身地の留学生がいる」「友人や知人の勧め」「家族や親族の勧め」の6項目であった。これらの項目を見ると、「親類や知人が日本に住んでいる」「自分の出身地の留学生がいる」「アルバイトができる」といった日本での生活支援の環境は留学先を選ぶ理由としてあまり重視されていない。また、「友人や知人の勧め」「家族や親族の勧め」など他者からの助言は留学先の国の選択にはあまり影響がないことがわかる。「母国の大学に入学するのが難しかった」は平均値が最も低く1.36であり、母国の大学の入学の難易度は日本の大学を留学先として選択する理由としては重要でない者が多いことが伺える。

平均値が2以上3以下の項目は「就職に有利」「治安」「母国での日本留学に対する高い評価」「日本語の能力」「留学生が多く、国際的な環境である」「母国の先生の勧め」「母国との地理的な距離」「母国に適当な大学・プログラムがない」の8項目であった。これら8項目のなかでも、「就職に有利」（平均値2.97）「母国での日本留学に対する高い評価」（平均値2.90）といった日本留学で学習目的以外に獲得できると考えられているものや「治安」（平均値2.67）といった日本の安全性は比較的重視されている。また、「日本語の能力」（平均値2.58）の有無も日本留学の選択の理由としてある程度重視されている。

表1. 日本を留学先に選んだ理由の尺度項目の基本統計量

	N	平均値	標準偏差
質の高い学問・研究	756	3.70	0.579
国際的な経験を獲得したかった	753	3.47	0.763
日本文化・社会への関心	755	3.19	0.759
奨学金	747	3.14	1.005
就職に有利	749	2.97	0.987
治安	750	2.90	0.948
母国での日本留学に対する高い評価	747	2.67	0.904
日本語の能力	741	2.58	1.041
留学生が多く、国際的な環境である	750	2.42	0.985
母国の先生の勧め	748	2.34	1.072
母国との地理的な距離	750	2.06	0.994
母国に適当な大学・プログラムがない	731	2.03	1.035
家族や親戚の勧め	750	1.94	0.930
友人や知人の勧め	743	1.93	0.881
自分の出身地の留学生がいる	744	1.84	0.893
アルバイトができる	746	1.68	0.871
親類や知人が日本に住んでいる	749	1.59	0.870
母国の大学に入学するのが難しかった	741	1.36	0.722

次に京都大学を留学先に選んだ理由で平均値が3以上の項目は「質の高い研究の評判」「質の高い教育の評判」「優れた教員がいる」「充実した施設・研究環境」「京大への受入れ許可が得られた」「適したプログラムがあった」の6項目であった。これらの項目は全て京大の教育・研究の質に関する項目であり、最後の2項目はそれに適した留学生自身の能力と資質を指していると解釈できる。大学の教育・研究の質が大学を選択する理由として最も重視されていることがわかる。

一方、平均値が2以下の項目は「友人や知人の勧め」「同窓会組織がある」「家族や親族の勧め」「自分の出身地の留学生がいる」の4項目であった。大学を留学先として選択する理由として、他者からの助言や同郷支援の環境は重視されていないと言える。

平均値が2以上3以下の項目は「京都への興味」「就職に有利」「留学生が多く、国際的な環境である」「母国の先生の勧め」の4項目であった。「京都への興味」(平均値 2.96)「就職に有利」(平均値 2.95)は、平均値がほぼ3に近く、ある程度重視されている。

表2. 京都大学を留学先に選んだ理由の尺度項目の基本統計量

	N	平均値	標準偏差
質の高い研究の評判	744	3.75	0.585
質の高い教育の評判	737	3.63	0.642
優れた教員がいる	739	3.57	0.700
充実した施設・研究環境	738	3.43	0.739
京大への受入れ許可が得られた	741	3.21	0.954
適したプログラムがあった	736	3.20	0.887
京都への興味	736	2.96	0.882
就職に有利	734	2.95	0.970
留学生が多く、国際的な環境である	735	2.43	0.987
母国の先生の勧め	737	2.40	1.115
友人や知人の勧め	732	1.96	0.966
同窓会組織がある	733	1.90	0.957
家族や親戚の勧め	736	1.89	0.963
自分の出身地の留学生がいる	737	1.73	0.846

2-2. 質問調査結果に対する因子分析の実施と因子解

まず、国と大学の二つのレベルの留学先の選択理由の調査結果を概観したが、質問項目間の関係をより実証的に把握するため、日本を留学先に選択した理由尺度18項目と京都大学を留学先に選択した理由尺度14項目に対して探索的因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行った。この分析を行うために、留学先選択理由の項目に欠損値(無回答)がある場合、分析の対象外とした。その結果、国の選択理由の因子分析の対象としたのは690名、大学の選択理由の因子分析の対象としたのは716名である。分析に使用した理由尺度項目は、因子負荷量の絶対値.35を基準に、日本を留学先に選択した理由尺度では、5因子18項目を採用し、京都大学を留学先に選択した理由尺度では4因子14項目を採用した。

2-2-1. 日本を留学先に選択した理由尺度の因子分析

日本を留学先に選択した理由尺度は、5 因子構造が適当と考えられた（表 3）。第一因子は「就職に有利」「母国での日本留学に対する高い評価」「治安」「国際的な経験を獲得したかった」といった項目が高い負荷を示した。これらの項目は、日本留学によって学生が獲得できると認識している項目であることから、「日本留学による利益」因子と命名した。第二因子は「自分の出身地の留学生がいる」「母国との地理的な距離」「親類や知人が日本に住んでいる」といった項目が高い負荷を示し、「文化的・社会的・地理的つながり」因子と命名した。第三因子は「家族や親戚の勧め」「友人や知人の勧め」「母国の先生の勧め」といった項目が高い負荷を示したので、「他者の助言」因子と命名した。第四因子は、「母国の大学に入学するのが難しかった」「母国に適当な大学・プログラムがない」といった項目が高い負荷を示した。これらの項目は、母国の大学の高等教育の質・量に関する内容であることから、「母国における高等教育のキャパシティ」因子と命名した。第五因子は、「日本語の能力」「日本文化や社会への関心」といった項目で高い負荷を示したので、「日本に関する知識や認識」因子と命名した。

表 3. 日本を留学先に選択した理由尺度の因子分析結果（プロマックス回転後の因子パターン）（n=690）

	共通性	I	II	III	IV	V
就職に有利	.400	.671	-.234	.048	.170	-.060
母国での日本留学に対する高い評価	.315	.502	-.055	.137	.065	.056
治安	.316	.467	.167	-.028	.049	.068
国際的な経験を獲得したかった	.254	.447	-.041	-.002	-.039	.241
奨学金	.144	.404	-.015	-.071	.078	-.019
留学生が多く、国際的な環境である	.397	.387	.385	-.021	-.090	.057
質の高い学問・研究	.179	.385	-.152	.053	-.181	.061
自分の出身地の留学生がいる	.572	.185	.668	-.026	-.068	-.213
母国との地理的な距離	.323	-.197	.582	.005	.067	.067
親類や知人が日本に住んでいる	.219	-.160	.436	.132	-.003	.078
アルバイトができる	.318	-.001	.366	.007	.234	.207
家族や親戚の勧め	.753	-.077	.002	.900	-.022	.057
友人や知人の勧め	.433	.135	.138	.514	-.047	-.063
母国の先生の勧め	.258	.171	.033	.368	.042	-.132
母国の大学に入学するのが難しかった	.510	.013	.048	-.016	.702	-.013
母国に適当な大学・プログラムがない	.173	.199	-.021	-.019	.389	-.057
日本語の能力	.365	-.004	.096	.051	.072	.565
日本文化や社会への関心	.337	.194	-.027	-.104	-.125	.543
因子相関		I	II	III	IV	V
I		—	.415	.406	.026	.063
II			—	.479	.339	.038
III				—	.242	-.022
IV					—	.200
V						—

因子抽出法：最尤法 回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス

次に因子間相関を見てみると、第一、二、三因子は他の因子の組み合わせよりもその相関が高めであり、3つの因子間にはいずれも正の相関があるので、「日本留学による利益」（第一因子）、「文化的・社会的・地理的つながり」（第二因子）、「他者の助言」（第三因子）の3因子のうちどれか一つが高ければ、他の二つも高い傾向がある。

2-2-2. 京都大学を留学先に選択した理由尺度の因子分析

京都大学を留学先に選択した理由尺度は4因子構造が適当と考えられた。第一因子は「質の高い研究の評判」「質の高い教育の評判」「優れた教員がいる」「充実した施設・研究環境」といった項目が高い負荷を示したので、「教育・研究の質」因子と命名した。第二因子は「家族や親戚の勧め」「友人や知人の勧め」「母国の先生の勧め」といった項目が高い負荷を示したので、「他者の助言」因子と命名した。第三因子は「自分の出身地の留学生がいる」「同窓会組織がある」「留学生が多く、国際的な環境である」「就職に有利」といった項目が高い負荷を示した。これらの項目は留学生が京都大学に在籍することによって得ることが可能な社会的ネットワークと考えられるので、「社会的ネットワーク」因子と命名した。第四因子は「適したプログラムがあった」「京大への受入れ許可が得られた」「京都への興味」といった項目が高い負荷を示したので、「大学との適合性」因子と命名した。

表4. 京大を留学先に選択した理由尺度の因子分析結果（プロマックス回転後の因子パターン）（n=716）

	共通性	I	II	III	IV
質の高い研究の評判	.656	.890	-.016	-.052	-.149
質の高い教育の評判	.705	.867	.033	.000	-.065
優れた教員がいる	.545	.719	.103	-.098	.072
充実した施設・研究環境	.409	.405	-.138	.252	.164
家族や親戚の勧め	.618	.039	.772	-.053	.130
友人や知人の勧め	.559	-.010	.694	.103	.023
母国の先生の勧め	.304	.045	.462	.057	.143
自分の出身地の留学生がいる	.530	-.012	.165	.750	-.329
同窓会組織がある	.413	-.104	-.018	.614	.125
留学生が多く、国際的な環境である	.395	.020	.037	.551	.093
就職に有利	.290	.061	-.048	.355	.241
適したプログラムがあった	.404	.133	-.059	.166	.465
京大への受入れ許可が得られた	.210	-.060	.140	-.022	.455
京都への興味	.129	-.096	.132	-.079	.394
因子間相関					
I		—	.108	.671	.502
II			—	.427	.162
III				—	.513
IV					—

因子抽出法：最尤法 回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス

次に因子間相関を見てみると、第一、三、四因子の組み合わせはその相関が高く、3つの因子間にはいずれも正の相関があるので、「教育・研究の質」（第一因子）、「社会的ネットワーク」（第三因子）、「大学との適合性」（第四因子）の3因子のうちどれか一つが高ければ、他の二つも高い傾向がある。一方、第二因子は第三因子との相関のみがやや高い。従って、「他者の助言」（第二因子）が高ければ、「社会的ネットワーク」（第三因子）も高い傾向が見られる。

2-2-3. 下位尺度得点の平均値の比較

次に、上記で探索した日本、そして京都大学を留学先に選択した理由尺度の下位尺度得点の平均値を比較し、留学先選択の要因として、どの因子を重視しているのかを検証する。

まず、日本を留学先に選択した理由として、「日本留学による利益」（3.04）、「日本に関する知識や認識」（2.89）、「他者の助言」（2.06）、「文化的・社会的・地理的つながり」（1.78）、「母国における高等教育のキャパシティ」（1.69）の順に重要だと考えられている（表5）。また、スケールが2＝「あまり重要ではない」3＝「ある程度重要」であるので、平均値が2以下の「文化的・社会的・地理的つながり」「母国における高等教育のキャパシティ」は日本を留学先に選択した理由として、あまり重要ではないと考えられている。

表 5. 日本を留学先に選択した理由尺度の下位尺度得点の平均値

	因子	N	平均値	標準偏差
第一因子	日本留学による利益	734	3.04	0.521
第二因子	文化的・社会的・地理的つながり	735	1.78	0.608
第三因子	他者の助言	741	2.06	0.748
第四因子	母国における高等教育のキャパシティ	724	1.69	0.699
第五因子	日本に関する知識や認識	737	2.89	0.733

京都大学を留学先に選択した理由では、「教育・研究の質」（3.59）、「大学との適合性」（3.13）、「社会的ネットワーク」（2.25）、「他者の助言」（2.08）の順に重要だと考えられている（表6）。各因子の平均値が2以上であり、4つの全ての因子が京都大学を留学先に選択した理由として、重要の部類に入ると言える。しかし前者2因子と後者2因子では重要と考えられている程度は大きく異なり、前者2因子「教育・研究の質」「大学との適合性」のほうが、大学を選択する要因として重視されている。

表 6. 京大を留学先に選択した理由尺度の下位尺度得点の平均値

	因子	N	平均値	標準偏差
第一因子	教育・研究の質	734	3.59	0.534
第二因子	他者の助言	728	2.08	0.809
第三因子	社会的ネットワーク	727	2.25	0.674
第四因子	大学との適合性	732	3.13	0.624

2-3. 留学の目的・プログラムの教授言語・文系理系の相違と留学先の選択理由尺度得点の関係

次に留学先の選択理由が留学の目的（学位取得を目的とする、しない）、プログラムの教授言語（日本語、英語）、文系理系の違いにより、有意に異なっているかどうかを検証する。

2-3-1. 日本を留学先に選択した理由尺度得点の比較

まず日本を留学先に選択した理由尺度において、留学の目的（学位取得）、プログラムの教授言語、文系理系で差異は見られるであろうか。表7を見ながら、分析結果を見ていく。

表7. T検定による各下位尺度得点の平均値の比較：日本を留学先に選択した理由尺度の因子

因子	N		平均値		t 値	自由度	有意確率
留学の目的（学位取得）	目的とする	目的としない	目的とする	目的としない			
日本留学による利益	655	66	3.05	2.86	2.847	719	.005
文化的・社会的・地理的 つながり※	656	66	1.82	1.46	5.612	87.335	.000
他者の助言	663	65	2.07	1.96	1.177	726	.240
母国における高等教育の キャパシティ	646	65	1.69	1.61	.944	709	.346
日本に関する知識や認識	659	65	2.85	3.24	-4.159	722	.000
プログラムの教授言語	日本語	英語	日本語	英語			
日本留学による利益	366	254	2.95	3.22	-6.619	618	.000
文化的・社会的・地理的 つながり	365	253	1.85	1.77	1.739	616	.083
他者の助言	369	258	2.02	2.15	-2.133	625	.033
母国における高等教育の キャパシティ	363	247	1.74	1.62	2.181	608	.030
日本に関する知識や認識	368	255	3.02	2.59	7.616	621	.000
文系理系	文系	理系	文系	理系			
日本留学による利益	194	436	2.91	3.05	-3.053	628	.002
文化的・社会的・地理的 つながり	193	438	1.70	1.82	-2.239	629	.026
他者の助言	195	440	1.97	2.08	-1.752	633	.080
母国における高等教育の キャパシティ	192	427	1.74	1.68	1.001	617	.317
日本に関する知識や認識	195	437	3.24	2.73	8.452	630	.000

※等分散性が仮定できない場合は Welch の補正を行って検定した。

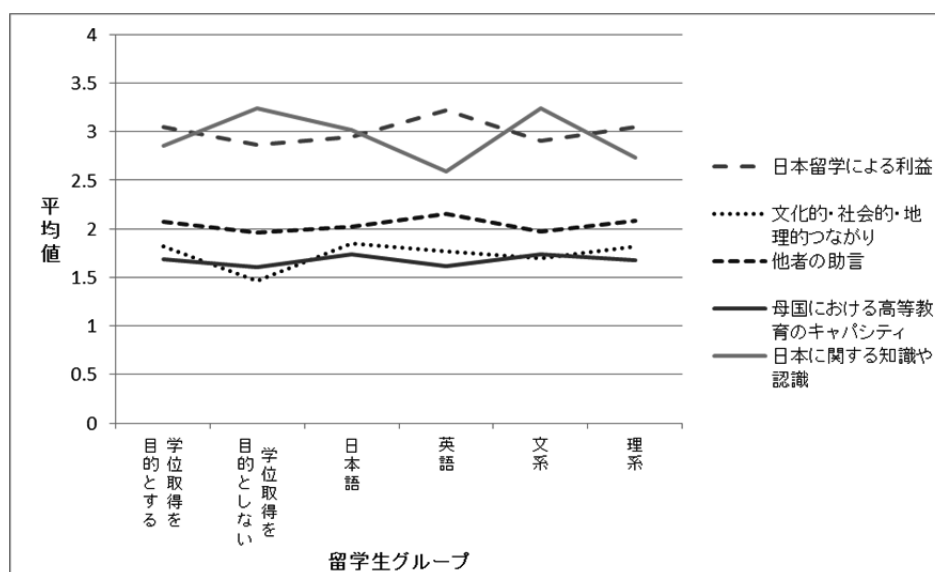


図 1. 日本を留学先に選択した理由尺度の下位尺度得点の平均値：留学生グループ間比較

各因子の下位尺度得点の平均値を比較すると、学位取得を留学の目的としたグループと目的としないグループでは、「日本留学による利益」「文化的・社会的・地理的つながり」「日本に関する知識や認識」に関しては 1%水準で有意な差がみられた。次にプログラムの教授言語が日本語のグループと英語のグループでは「日本留学による利益」「日本に関する知識や認識」に関しては 1%水準、「他者の助言」「母国における高等教育のキャパシティ」に関しては 5%水準で有意な差がみられた。最後に文系グループと理系グループでは「日本に関する知識や認識」に関しては 1%水準、「日本留学による利益」「文化的・社会的・地理的つながり」に関しては 5%水準で有意な差がみられた。

有意差が見られたものの中で、二つのグループの平均値の差をみると、4段階の評定値で平均差が 0.4 にもならないものがほとんどであり、0.4 程度、または 0.4 以上の差があるものは、留学の目的（学位取得）（平均差 0.39）、プログラムの教授言語（平均差 0.43）、文系理系（平均差 0.51）の全てにおいて、「日本に関する知識や認識」のみであった。学位取得を目的としないグループ、日本語を教授言語とするグループ、文系グループのほうが、日本を留学先に選択する際に、「日本に関する知識や認識」に関する要因を重視している（表 7, 図 1）。

次に、日本を留学先に選択した理由の各項目のスコア平均値を比較し、更に細かく留学の目的（学位取得）、プログラムの教授言語、文系理系の相違により、留学先の選択要因に差異はないか検証した（表 8）。p 値が 5%以下で、平均差が 0.4 以上あり、どちらか一方のグループの平均値が 2 以上³の項目を対象とした。但し、下位尺度得点の平均値を比較して、既に明らかな違いがあることが分かっている「日本に関する知識や認識」に関する項目については、ここでは説明を省くことにする。

³ スケールが 2＝「あまり重要ではない」、3＝「ある程度重要」であるため、2 以上を基準とした。

表 8. T 検定による各項目のスコア平均値の比較：日本を留学先に選択した理由

	留学の目的 (学位取得)			プログラムの教授言語			文系理系		
	目的とする	目的としない	有意差	日本語	英語	有意差	文系	理系	有意差
治安	2.92	2.71		2.79	3.13	*	2.72	2.95	*
就職に有利	2.96	2.97		2.73	3.29	**	2.81	2.97	
母国での日本留学に対する高い評価	2.69	2.42	*	2.62	2.82	*	2.62	2.65	
国際的な経験を獲得したかった	3.47	3.48		3.43	3.53		3.43	3.46	
奨学金	3.17	2.83	*	3.11	3.28	*	2.97	3.19	*
留学生が多く、国際的な環境である	2.43	2.27		2.28	2.64	**	2.27	2.42	
質の高い学問・研究	3.74	3.33	**	3.73	3.77		3.58	3.76	**
母国との地理的な距離	2.10	1.67	*	2.22	1.93	**	1.98	2.11	
親類や知人が日本に住んでいる	1.20	1.30	*	1.62	1.62		1.49	1.60	
自分の出身地の留学生がいる	1.88	1.47	**	1.79	1.97	*	1.59	1.94	**
アルバイトができる	1.71	1.39		1.80	1.58	**	1.82	1.63	
家族や親戚の勧め	1.96	1.74		1.98	1.94		1.84	1.95	
友人や知人の勧め	1.94	1.78		1.91	2.01		1.83	1.95	
母国の先生の勧め	2.34	2.35		2.20	2.54	**	2.26	2.36	
日本語の能力	2.54	2.91	*	2.80	2.16	**	2.97	2.40	**
日本文化・社会への関心	3.15	3.54	**	3.24	3.00	**	3.50	3.06	**
母国に適当な大学がない母国の大学に入学するのが難しかった	2.03	1.97		2.11	1.92	*	2.16	2.00	
	1.36	1.26		1.38	1.33		1.32	1.37	

(**) 1%水準で有意, (*) 5%水準で有意

その結果、留学の目的（学位取得）による有意差（1%水準）が見られたのは、「質の高い学問・研究」である。学位取得を目的とするグループとしないグループの平均値は前者 3.74、後者 3.33 で、差異は 0.41 であった。学位取得を目的とするグループのほうが日本を留学先として選択する際の理由として、「質の高い学問・研究」を重視している。次に教授言語による差は、「就職に有利」という変数において見られた。日本語グループと英語グループの平均値は前者 2.73、後者 3.29 で、差異は 0.56 であった。英語グループのほうが日本を留学先として選択する際の理由として、「就職に有利」を重視している。

2-3-2. 京都大学を留学先に選択した理由尺度得点の比較

次に、京都大学を留学先に選択した理由尺度において、留学の目的（学位取得）、プログラムの教授言語、文系理系で差異は見られるであろうか。表 9 を見ながら、分析結果を見ていく。各因子の下位尺度得点の平均値を比較すると、学位取得を留学の目的としたグループとしないグループでは、「教育・研究の質」「社会的ネットワーク」に関しては、1%水準、「他者の助言」「大学との適合性」に関しては5%水準で有意な差が見られた。次にプログラムの教授言語が日本語のグループと英語のグループでは「社会的ネットワーク」に関しては1%水準で有意な差が見られた。最後に文系グループと理系グループでは「社会的ネ

ットワーク」に関しては1%水準、「教育・研究の質」「他者の助言」に関しては5%水準で有意な差が見られた。

有意差がみられたものの、二つのグループの平均値の差をみると、4段階の評定値で平均差が0.4にもならないものがほとんどであり、0.4程度、または0.4以上の差があるものは、留学の目的では「教育・研究の質」（平均差0.39）のみ、プログラムの教授言語では「社会的ネットワーク」（平均差0.43）のみであった。文系理系に関しては、平均差が0.4程度になるものは一つもなかった。

表9. T検定による各下位尺度得点の平均値の比較：京都大学を留学先に選択した要因

因子	N		平均値		t 値	自由度	有意確率
留学目的（学位取得）	目的とする	目的としない	目的とする	目的としない			
教育・研究の質	662	61	3.64	3.18	4.459	721	.000
他者の助言	656	61	2.10	1.90	2.343	715	.022
社会的ネットワーク	657	59	2.28	2.00	3.132	714	.002
大学との適合性	660	61	3.15	2.92	2.332	719	.023
プログラムの教授言語	日本語	英語	日本語	英語			
教育・研究の質	369	255	3.63	3.66	-.961	622	.337
他者の助言	369	250	2.06	2.19	-1.908	617	.057
社会的ネットワーク	369	251	2.13	2.52	-7.552	618	.000
大学との適合性	368	254	3.12	3.17	-1.111	620	.267
文系理系	文系	理系	文系	理系			
教育・研究の質	190	438	3.53	3.63	-2.127	626	.034
他者の助言	189	434	2.02	2.11	-1.260	621	.208
社会的ネットワーク	189	434	2.03	2.30	-5.095	621	.000
大学との適合性	188	440	3.19	3.07	2.269	626	.024

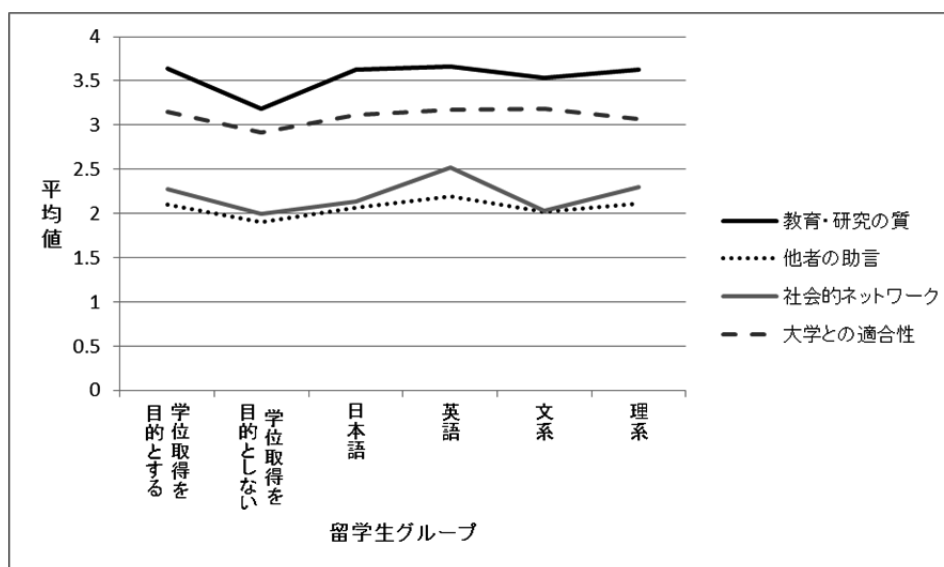


図2 京都大学を留学先に選択した理由尺度の下位尺度得点の平均値：留学生グループ間比較

この結果から、留学の目的（学位取得）によって、京都大学を留学先として選択した理由で明らかな違いがあるのは「教育・研究の質」であった。学位取得を目的とするグループのほうが、京都大学を留学先として選択する際に、「教育・研究の質」を重視している。プログラムの教授言語によって、明らかな違いがあったのは「社会的ネットワーク」であった。英語グループのほうが、京都大学を留学先として選択する理由として、「社会的ネットワーク」を重視している。文系理系においては、平均値が 0.4 を超えるものは一つもなかったもので、京都大学を留学先として選択する際の理由に文系グループと理系グループで明らかな違いはなかった。

次に、京都大学を留学先に選択した理由の各項目のスコア平均値を比較し、更に細かく留学の目的（学位取得）、プログラムの教授言語、文系理系の相違で、留学先の選択要因に違いはないか探索した（表 10）。p 値が 5%以下、平均差が 0.4 以上あり、どちらか一方のグループの平均値が 2 以上⁴の項目を対象とした。但し、下位尺度得点の平均値を比較して、既に明らかな違いがあることが分かっている項目はここでの説明を省くことにする。

表 10. T 検定による各項目のスコア平均値の比較：京都大学を留学先に選択した要因

	留学目的 (学位取得)			プログラムの教授言語			文系理系		
	目的とする	目的としない	有意差	日本語	英語	有意差	文系	理系	有意差
質の高い研究の評判	3.80	3.21	**	3.81	3.81		3.66	3.80	*
質の高い教育の評判	3.67	3.19	**	3.66	3.71		3.59	3.64	
優れた教員がいる	3.60	3.21	**	3.62	3.58		3.61	3.56	
充実した施設・研究環境	3.46	3.05	**	3.42	3.56	*	3.24	3.50	**
家族や親戚の勧め	1.93	1.49	*	1.95	1.91		1.79	1.93	
友人や知人の勧め	1.99	1.66		1.99	2.01		1.94	1.97	
母国の先生の勧め	2.39	2.52		2.23	2.67	**	2.32	2.45	
就職に有利	2.96	2.77		2.76	3.27	**	2.78	2.97	*
留学生が多く、国際的な環境である	2.44	2.30		2.34	2.64	**	2.31	2.43	
同窓会組織がある	1.94	1.51	*	1.70	2.31	**	1.57	1.95	**
自分の出身地の留学生がいる	1.77	1.37	**	1.72	1.85		1.45	1.83	**
適したプログラムがあった	3.24	2.67	*	3.18	3.31		3.20	3.17	
京大への受入れ許可が得られた	3.24	2.85	*	3.22	3.25		3.18	3.19	
京都への興味	2.94	3.18	*	2.96	2.94		3.18	2.87	**

(**) 1%水準で有意, (*) 5%水準で有意

その結果、留学の目的（学位取得）による有意差（1%水準）が見られたのは、「適したプログラムがあった」という項目である。学位取得を目的とするグループとしないグループの平均値は前者 3.24、後者 2.67 で、差異は 0.57 であった。学位取得を目的とするグル

⁴ スケールが 2＝「あまり重要ではない」、3＝「ある程度重要」であるため、2 以上を基準とした。

ープのほうが京都大学を留学先として選択する際の理由として、「適したプログラムがあった」を重視している。次に教授言語では、「母国の先生の勧め」で 1%水準での有意差があった。日本語グループと英語グループの平均値は前者 2.23、後者 2.67 で、差異は 0.44 であった。英語グループのほうが京都大学を留学先として選択する際の理由として、「母国の先生の勧め」を重視している。

3. 考察

本稿の目的は、留学生が特定の留学先を選択する要因を探索することであった。留学先である国と大学の二つのレベルにおける選択理由の共通因子を探索し、さらに留学の目的（学位取得を目的とする、しない）、プログラムの教授言語（日本語、英語）、文系理系の相違により留学先の選択要因に違いがあるかを検証した。これまで行った分析結果を総合的に考察し、留学先選択に影響があると考えられる要因を推察する。

3-1. 留学する国を選択する要因

日本を留学先に選択した理由尺度は 5 因子構造で、5 つの因子は「日本留学による利益」「文化的・社会的・地理的つながり」「他者の助言」「母国における高等教育のキャパシティ」「日本に関する知識や認識」と命名した。日本を留学先に選択した理由として重要だと考えられている要因は、「日本留学による利益」「日本に関する知識や認識」因子に関する項目であった。これは、留学の目的（学位取得を目的とする、しない）、プログラムの教授言語（日本語、英語）、文系理系の異なるグループにおいて共通した傾向であった（図 1）。日本を留学先として選択する留学生は留学の目的（学位取得）、プログラムの教授言語、文系理系の違いに関わらず、日本留学によって何が得られるか、また留学前の日本への興味が留学する国を選択する要因として影響していることが伺える。「日本に関する知識や認識」因子に関しては、学位取得を目的としないグループ、日本語を教授言語とするグループ、文系グループのほうが、平均値が高く有意差もあった（表 7, 図 1）。これらのグループの留学生にとって、留学前の日本への興味が日本留学の選択に及ぼす影響がより大きいことが伺える。

一方、「母国における高等教育のキャパシティ」「文化的・社会的・地理的つながり」因子に関する項目は日本を留学先として選択する要因として、どの留学生グループでもあまり重要だと考えられていない。これらの要因は前述の 2 因子と比較すると、副次的な要因とも言える。前述の 2 因子「日本留学による利益」「日本に関する知識や認識」は留学によって獲得できると考えられる、言わば留学の目的要素であるが、「母国における高等教育のキャパシティ」「文化的・社会的・地理的つながり」因子は留学を考慮する環境的要因と言える。「母国における高等教育のキャパシティ」は母国における環境要因、「文化的・社会的・地理的つながり」因子は留学先における環境要因と考えられる。また、「母国における高等教育のキャパシティ」因子の項目のうち、「母国の大学に入るのが難しかったから」は

全ての項目の中で平均値（1.36）が最も低く（表1）、母国での大学教育の代用を求めているよりは日本の質の高い大学教育の獲得を目指している留学生が多いことが推察される。この調査の対象者が日本で有数の研究型大学の留学生であることを考慮すれば、この結果は当然と言えるのかもしれない。

最後に「他者の助言」因子であるが、助言者が「家族や親戚」「友人や知人」「母国の先生」の3種のうち「母国の先生」のみが、平均値が2.0を超え（表1）、どちらかと言えば重要だと考えられている。英語を教授語とする留学生グループに関しては、その平均値は他のグループの平均値よりも高めであった（図1）。日本語を教授語とする留学生グループとは平均値の実数の差はあまりないが、1%水準で有意であった（表8）。これらの結果から、英語を教授言語とする留学生グループは日本語での情報獲得の難しさから、母国の教員からの情報や助言が日本を留学先として選択する際の要因として、他の留学生グループに比べ、重視されていることが推察される。

3-2. 留学する大学を選択する要因

京都大学を留学先に選択した理由尺度は4因子構造で、4つの因子は「教育・研究の質」「他者の助言」「社会的ネットワーク」「大学との適合性」と命名した。京都大学を留学先に選択した理由として重要だと考えられている要因は、「教育・研究の質」「大学との適合性」因子に関する項目であった。これは、留学の目的（学位取得を目的とする、しない）、プログラムの教授言語（日本語、英語）、文系理系の異なるグループにおいて共通した傾向であった（表7, 図2）。留学生が大学を選択する際に、留学の目的（学位取得）、プログラムの教授言語、文系理系の違いに関わらず、大学の提供する研究・教育の質と、それらと学生のニーズまたは資格の適合性が選択の要因として影響が大きいことが推察される。

しかし、学位取得を目的としない留学生グループに関しては、「教育・研究の質」因子を重視する程度が他のグループと比較すると低い傾向にある（表9, 図2）。また、「大学との適合性」因子を項目別に見ると、「適したプログラムがあった」（平均値2.67）「京大への受入れ許可が得られた」（平均値2.85）という大学の教育・研究の質的要因に関する項目より、「京都への興味」（平均値3.18）という大学の地域的・文化的特徴に関する項目を重視する傾向が見られる（表10）。さらに、日本を留学先に選択する理由尺度の因子に「日本に関する知識や認識」因子があるが、学位取得を目的としない留学生グループの平均値は文系グループと同じで、他の留学生グループに比べ高めである（表7, 図1）。これらの結果から、学位取得を目的としない留学生グループは、日本の大学の研究・教育の質を重視しながらも、その留学目的は日本文化・社会の理解にあることが推察される。

次に「他者の助言」「社会的ネットワーク」因子の項目に関しては、前述の2因子に比べ、京都大学を留学先に選択する要因としての重要度は低い。しかし、項目別に見ていくとある程度重視されているものがある。「他者の助言」因子に関しては、留学先の国を選択する際と同様に、3つのタイプの助言者のうち、「母国の先生」のみがある程度影響があること

を伺える。特に英語を教授言語とする留学生グループはその傾向が強い（表 10）。「社会的ネットワーク」因子に関しては、「就職に有利」「留学生が多く、国際的な環境である」という 2 項目がある程度重要だと認識されており（表 10）、将来のキャリア形成に関するネットワークが重視されていることが伺える。英語を教授言語とする留学生グループは他の留学生グループに比べ、「社会的ネットワーク」因子を留学先の大学を選択する要因としてより重要だと考えており、「就職に有利」「留学生が多く、国際的な環境である」に加え、「同窓会がある」という項目もある程度重要だと考えている（表 10）。英語を教授言語とする留学生グループにとって、日本語能力の不足から大学の持つ社会的ネットワーク基盤の有無に関する要因がより重視されている可能性が考えられる。

4. まとめ

本稿では京都大学に在籍する留学生を対象として、国・大学の二つのレベルの留学先選択における理由尺度の因子構造を探索した。また各因子と理由尺度項目のうち留学先選択の際に影響が大きいと考えられる要因について、異なる留学生グループにおいての相違を考慮しながら検討した。

まず、国・大学の二つのレベルの留学先選択における理由尺度の因子構造については、日本を留学先に選択した理由尺度は 5 因子構造で、5 つの因子は「日本留学による利益」「文化的・社会的・地理的つながり」「他者の助言」「母国における高等教育のキャパシティ」「日本に関する知識や認識」と命名した。京都大学を留学先に選択した理由尺度は 4 因子構造で、4 つの因子は「教育・研究の質」「他者の助言」「社会的ネットワーク」「大学との適合性」と命名した。

留学先を選択する際に重要だと認識されている要因に関しては、国レベルの選択では「日本留学による利益」「日本に関する知識や認識」、大学レベルの選択では「教育・研究の質」「大学の適合性」に関する項目であった。これは、留学の目的（学位取得を目的とする、しない）、プログラムの教授言語（日本語、英語）、文系理系の異なるグループにおいて共通した傾向であり、日本の大学を留学先として選択する留学生にとって、留学によって何が得られるか、また留学前の日本への興味が留学先を選択する要因として重要だと考えられていた。この結果から、留学先を選択する際の要因として、留学の目的に関する要因が最も重要であり、母国や留学先の環境要因や留学に対しての第三者からの助言は二次的な要因と考えられていることがわかった。

次に、留学の目的（学位取得を目的とする、しない）、プログラムの教授言語（日本語、英語）、文系理系の各留学生グループにおいて、留学先を選択する際の要因に相違があるかを検証したが、その結果から以下二つの留学生グループにある特徴的な傾向が見られた。まず、学位取得を目的としない留学生グループは、他のグループの留学生と同様に日本の大学の研究・教育の質を留学先選択の要因として重視しながらも、より日本に関する知識や認識を重要だと考えており、その留学の目的が専門分野の学習というよりも日本文化・

社会の理解であることが推察された。

次に、英語を教授言語とする留学生グループは他の留学生グループに比べ、大学を選択する要因として「社会的ネットワーク」因子を、国・大学を選択する要因として「他者の助言」因子のうち「母国の先生の勧め」をより重要だと考えていた。英語を教授言語とする留学生グループにとって、日本語能力の不足により自助努力での情報収集に困難が伴うことから、母国の先生の助言や大学の持つ社会的ネットワーク基盤の有無が国・大学を選択する際により重要な要因となっていることが推察された。

本稿では国・大学の二つのレベルの留学先選択における理由尺度の因子構造と多様化する留学生のプロファイルとの関係を探索したが、これまでの京都大学の典型的な留学生のプロファイルに当てはまらない二つのグループ（学位取得を目的としないグループ・英語を教授言語とするグループ）に関して、留学先を選択する要因に特徴的な傾向が見られたことは興味深い。学位取得を目的としないグループの留学生は着実に増加傾向にあり、今後この留学生グループの留学先の選択要因に関するより詳細な調査に加え、日本留学の目的に関する調査が必要であろう。彼らの留学目的を理解することは、留学生のニーズにあった質の高い教育プログラムを提供するために不可欠である。

次に英語を教授言語とするグループについても、グローバル30の推進により今後増加が見込まれる。日本語能力を要求されない留学生が他の留学生グループよりも情報収集のための基盤が留学先に整っているかどうかを重視していたことから、今後英語での情報発信の在り方、またこのグループがより母国の教員の助言を重視していたことから情報発信のルートを検討していくことが今後の課題として挙げられる。英語を教授言語とする留学生グループに関する調査は非常に限られており、今後この留学生グループを対象として日本の大学への留学の動機、認識や態度、また行動などについての調査が必要であろう。

第二章

「大学院重点化大学」の留学生の進路：

日本での就職志向に注目して

木下 昭

はじめに 日本における留学生の増加と大学院重点化

近年は留学生の進路、ことに日本における就職について関心が急速に高まっている。これは、1983年に始まった「留学生十万人計画」が多くの学生を日本に導く一方、日本の少子高齢化・人口減少、そしてますます拡大する企業の海外展開、といった日本社会の根本的な変化による。留学生は、こうした変化に対応するための人材源として注目を集めるようになってきたのである。実際に日本で就職する留学生の数は年々上昇し、とりわけ2000年前後からその急増ぶりが目に付く（法務省入国管理局 2010）。2009年のデータによると、学部卒業生の24.3%、修士課程修了者の23.3%、博士課程修了者の30.1%が日本で就職している（日本学生支援機構 2011）。したがって、新規の人材としての留学生という位置づけは、今後ますます広い分野で受け入れられていくと考えられる。この点は、日本政府としてさらなる留学生の受け入れ拡大を謳う「留学生三十万人計画」においても、その重要性が指摘されており、日本の留学生政策のなかでも欠くことのできない意味を持つようになってきた。こうした日本側の立場が明確になりつつある今日、留学生側の進路の志向を把握する重要性は高まる一方である。本稿の問題意識もここにある。

一方、彼らを受け入れる日本の大学においても、上記の動向と重なる形で大きな変化が生じていた。それが「大学院重点化」である。大学院重点化とは、大学の教育研究組織を、学部を基礎とした形態から大学院を中心とした形態に組み換え、大学院の定員を増加することである。1990年代からいわゆる旧帝国大学、そしてそれに準ずる主要国立大学が、この組織変革を行ってきた（以下、この種の大学を「大学院重点化大学」と呼ぶ）。この政策の功罪はともかく、この結果日本の主要大学で拡大した大学院に、多くの留学生が在籍しているのである。その彼らがどのような進路を選択しているのかは、単に留学生の分析を越えて、今日の日本の高等教育そのものを捉えるうえで意義があろう。

1. 調査の視角と手法

本稿ではまず、このテーマに関するこれまでの調査のレビューを行い、本稿における課題をより明確にする。留学生の進路に関してさまざまな調査・分析が積み重ねられているが、神谷論文（2010）のような例外を除けば、そのレビューが行われることはあまりなかった。これを踏まえて今回の調査に基づき、大学院留学生の進路を精査したい。最後に、調査結果を日本での就職志向を中心にまとめるとともに、それに対する大学としての課題を明示したい。

本稿の議論の基盤となるのは、別稿に詳細が記されているアンケート調査である。加えて、これを補足するためにインタビュー調査の結果を組み合わせる。インタビューを行ったのは、工学研究科（3人）、情報学研究科（2人）、経営管理大学院（2人）の学生である。先の二つは、修士課程と博士課程が組み合わさって、一つの研究科を構成する一般的な理系の大学院である。残りの一つは、文系のいわゆる専門職大学院である。これは、「高度の専門性が求められる職業」を担うための学識と能力を培うことを目的としており、修了すると修士号にあたる専門職学位が授与される。したがって、研究者の養成に重点がある従来の大学院とは性格を異にしている。しかし、このような相違はありつつも、これらの研究科では日本での就職希望者が相対的に多いという共通点がある。そこで、調査時にこれらの研究科の修士課程に所属し、日本での就職を希望していることを条件に、アンケート協力者のなかからインフォーマントを抽出した。修士課程の学生を選択したのは、経営管理大学院所属学生との比較のため、そして研究職以外の就職先を選ぶことが多いためである。インタビューは、京都大学吉田キャンパスにおいて、一対一の半構造化法¹でおこなった。時間は約一時間で、インフォーマントの了承のもとに、ICレコーダに記録した。

2. 留学生の進路はいかにとらえられてきたか

留学生の進路において、日本での就職が無視できない部分を占めることが認知されるとともに、これを主要テーマとする調査が盛んに行われるようになった。本節では、その概要をおさえておきたい。

2.1 調査の主体

まず留学生の進路をテーマとする調査の担い手を見ておきたい。これは、大きく次の五つに分類することができる。

- ①経済産業省、労働政策研究・研修機構（厚生労働省）
- ②文部科学省、日本学生支援機構
- ③受け入れ機関（大学）
- ④地域
- ⑤就職情報会社

それぞれの特徴をあげてみると次のようになる。

①は、人材供給源としての留学生の雇用・定着を促進するという視点に立って、調査を行っている。したがって、雇用者側と留学生（厳密にいうとすでに日本企業に就職を果たした元留学生）双方に目配りされ、両者の意向の一致・不一致が一つのポイントとなって

¹ 半構造化法とは、質問内容の概要は事前に設定するものの、その質問事項や順序に厳格には沿うことなく、調査者とインフォーマント（インタビュー対象者）の会話のなかでインタビューを進めるスタイルのことを示す。

いる（労働政策研究・研修機構調査部 2009）。

②は、「留学生三十万人計画」に代表されるような留学生受け入れ政策の一環として、就職問題をとらえている。すなわち、来日留学生の増加を可能にするための施策の一つとして、出口としての就職が議題に上ってきたことを反映している。したがって、「留学生支援」の延長線上に、彼らの就職問題が捉えられている（日本学生支援機構 2008;2011）。

③は、②と類似した視点に立ちながらも、個々の受け入れ機関（とりわけ大学）固有の留学生支援の一環として、その留学生センターや国際交流センターなどを主体として、取り組まれている。これは、就職の支援やその実績が、受け入れ留学生の増加、ひいては大学の生存競争における勝利に直結することが意識されているためである。また、日本語能力と就職が密接にかかわっているとみなし、教育の一環としての就職支援という論点が見出せる（伊藤他 2009；中村 2008；森 2009）。

④は、外国人の存在を自治体として重視してきた地域で行われているもので、視点としては、①と②を合わせたようなところがある（愛知県地域振興部国際課 2011；大分経済同友会 国際委員会・大学コンソーシアムおおいた 2007；岡山県留学生交流推進協議会 2011；袴田 2009）。

最後の⑤の民間業者は、留学生の増加にビジネスチャンスを見出しており、その特徴の一つとして、すでに保有している日本人学生のデータとの比較がある（ディスコ 2010）。

このような多様な主体によって留学生調査が行われているところにも、現在の留学生の存在の大きさを察することができる。

2.2 先行調査の成果

これまでの調査結果から、考慮すべき今日の留学生の就職動向をまとめたい。まず前節の①、なかでも、最も包括的で最近の成果である労働政策研究・研修機構の調査（2009）を取り上げる。企業側の情報を見ると、留学生を採用する理由として突出しているのは、「国籍に関係なく、優秀な人材をとるため」であり（65.3%）、外国語の使用や国際業務のような留学生ならではの資質を求めての採用よりも、比率が 30%近く高いことが注目される。ただ、この傾向が現実にとどこまで日本人と区別なく留学生を採用することにつながっているかは定かではない。また「外国人ならではの技能・発想を採り入れるため」が採用理由として 9.4%と低い。これは、保守的な気風を持つ企業が、日本社会に適応済みとの想定のもとに留学生を採用している可能性を示唆している。現在、元留学生を雇用している日本企業のうち、9 割が中国出身者を採用しており、続いて韓国 24.0%、台湾 11.9%で、東アジア出身者が多くを占めている。欧州は 5.9%、北米は 5.6%、アフリカは 2.0%にすぎない。定着率（正社員採用した元留学生うち、5 年以上勤務している割合）をみると、留学生の採用開始後から 5 年以上たった企業のうち、半数弱の企業が 7 割以上、21.8%が 4 - 6 割、29.5%が 3 割以下と回答している。

元留学生（大学卒業 40.8%、修士課程修了 42.7%、博士課程修了 11.2%）が日本に就職した理由としては、「仕事の内容に興味があったから」が 66.0%と最も高い。理系に関しては、「日本の学校で学んだ専門性を生かせるから」、「日本企業の高い技術力に魅力を感じたから」が 5 割近くと高く、一方文系に関しては「母国語や日本語などの語学力を生かしたいから」が 6 割近くと高い。今後の就労可能性としては、33.6%が現在の会社での就労継続を希望し、今の会社であるかどうかはこだわらないが日本での就労継続希望が 28.4%である。では、いつ頃かれらは日本を離れる意向なのかというと、30 代前半が 39.6%、後半が 29.7%と 30 代が中心になっている。母国出身の留学生に日本企業への就職を勧めたいか否かについては、83.5%が「勧めたい」および「どちらかといえば勧めたい」を選択している。留学生の日本企業への就職における障害としては、採用する企業、求人数の少なさを指摘するものが多い。これに関しては大学側としてはいかんともしがたい部分が大きいが、それ以外の、情報の少なさと筆記試験の難しさ、日本語のレベルなどの指摘に関しては、大学側も対応できる余地がある。希望する将来のキャリアとしては「海外の現地法人の経営幹部」（31.6%）が最も比率が高い。

上記の調査が就職後の元留学生を対象としたものであるのに対して、残りの調査の多くは、卒業・修了前に調査を行っている。例えば⑤のひとつであるディスコ（2010）によると、日本での勤務予定で、「1 年以内」「3 年以内」「5 年以内」の合計が 21%なのに対して、「10 年以内」「11 年以上」が合わせて 45.3%、さらに「期間は決めていない」が 33.7%もいることが注目される。希望就職先として人気があるのは、文系が「商社（総合）」、「ホテル・旅行」、「電子・電機」、理系は「電子・電機」、「商社（総合）」、「情報インターネット・サービス」である。日本人学生との相違は「ホテル・旅行」が上位に来ている点である。就職先企業を選ぶ際に重視する点として、「将来性がある」が 61.4%とずば抜けて高く、次に「職場の雰囲気が良い」、「有名企業である」、「給与・待遇が良い」が続く。また「母国で働ける」が 8 番目で 19.2%と、それほど重要視されていないようにみえる。こうした情報以外では、②の場合、就職活動そのものを取り扱っている点が重要である。例えば日本学生支援機構（2008）は、日本での留学生の就職活動における必要事項を整理し、その体験記において、日本企業への就職動機や就職活動の実情を例示している。

③や④で注目すべきは、調査主体により、顕著な結果の相違が重要な項目でみられることである。例えば就職先の選択にあたって重視する点について、「母国と日本との架け橋になって働きたいから」が松本大学の調査で上位に来ている。この答えは日本学生支援機構の体験記にも出てくるが、全くデータに表れない調査も見られる。こうした相違の要因としては、個々の地域や大学の個性に加えて、選択肢の有無などのデータの取り方や、調査時期が影響している可能性が高い。ことに興味深いのは、就職希望地と大学の所在地に関連がしばしばみられることである。例えば、山梨大学での調査では希望勤務地として山梨県が「東京・その近郊」、「どこでもよい」に次ぐ 3 位、静岡県下の高等教育機関における

調査では静岡県が希望勤務地の1位、愛知県における調査でも愛知県が希望勤務地の1位である。この傾向は、就職活動全般に関連する以上、注視すべき点である（愛知県地域振興部国際課 2011；伊藤他 2009；中村 2008；袴田 2009）²。

2.3 調査における課題

これまで整理してきた先行調査の成果を踏まえると、今回の京都大学における調査でどのような点に配慮すべきなのだろうか。

(1) 地域・大学の特殊性

これまでの個々の大学ないし地域の調査から、その大学の所在地が日本国内での就職先に影響することが示されている。したがって、彼らの希望就職先と地域との関係を見なければならぬ。とりわけ京都大学は、京都という日本社会では相対的に特殊な地域に存在するが、これがどのような意味を持つのか考察する必要がある。また、京都大学の知名度ないし評価に、日本国内と留学生の出身国との間に、著しい格差がしばしばあることが前回の調査で示されている（木下 2009）。こうした点が、彼らの就職動向にどのように影響するのか、あるいはしないのかを注視する。

(2) 大学院生

京都大学の留学生の多数は大学院生であるが、これまでの留学生調査においては、学部生と大学院生との相違は、考慮されていないことが多い。しかし、日本で就職したと考えられる留学生の29.3%を元大学院生が占めており、45.9%の学部出身者との相違を無視することは不適當であろう（法務省入国管理局 2010）。

「大学院重点化大学」である京都大学の大学院留学生においても、日本での就職志向は高まりを見せている。本稿は彼らの動向が議論の中心であるが、それに当たっては、修士課程と博士課程との区分を常に念頭に置く。というものの、この区分は、単なる専門知識の程度や社会的評価だけではなく、年齢や帰国予定時期とも深く関係するからである。加えて、前回調査でも示されていた専攻と出身地域による相違にも配慮したい（森 2009）。

(3) 「留学過程」全体との関連

これまでの調査の多くは、当然ながら就職関連の質問に限定して行われてきた。しかし本調査には、日本への留学理由や家族との関係など、留学にかかわる幅広い項目が含まれている。これは、留学前、留学中、留学後という連続した「留学過程」全体から学生たち

² 岡山での進路調査でも、学部卒業者・大学院修了者とも県内就職が70%を超える（岡山県留学生交流推進協議会 2011）。一方、大分における調査では、この傾向は見られなかった（大分経済同友会 国際委員会・大学コンソーシアムおおいた 2007）。

の就職をとらえることに貢献できるのではないだろうか。例えば、大分における調査によれば、卒業後の希望進路が留学中に変化し、日本での就職希望が 41%から 61%へと増加している（大分経済同友会 国際委員会・大学コンソーシアムおおいた 2007）。こうした現象の理解に、本研究は新たな示唆を与えることを目指したい。

3. 大学院留学生の進路

3.1 全般的傾向

本調査における回答者全般（763 人）の進路希望は、「研究職への就職（留学前の仕事に復職する場合も含む）」44.7%、「学生として研究を継続」26.0%、「研究職以外への就職（留学前の仕事に復職する場合も含む）」21.2%、「その他・無回答」8.1%となっている（第 II 部、資料編 p.156 参照）。研究職への希望者が多いのは、京都大学のように大学院正規学生が多い大学では当然といえよう。本調査でも回答者全体の 73.6%は大学院生（博士課程正規学生 44.4%、修士課程正規学生 29.2%）である（第 II 部、資料編 p.144 参照）。

このうち、就職を希望する者（503 人）だけを取り出し、就職希望地と希望就職先の組み合わせでその傾向を検討したのが、表 1 と表 2 である。

まず、表 1 から、希望就職先としては、「研究職に新たに就職」48.3%、「日本・日系企業への就職」22.3%、「日本・日系企業以外の企業への就職」8.7%、「留学前の仕事への復職」6.4%、その他・無回答 14.4%となっている。母国への就職希望者のうち過半数（55.2%）が研究職に新たに就職することを希望し、留学前の仕事に復職 13.9%、日本・日系企業希望 10.8%、それ以外の企業希望 7.7%となっている。一方、日本での就職希望者は、日本・日系企業希望 45.1%、研究職に新たに就職 33.3%、日本・日系以外の企業希望 10.3%となっている。その他の国での就職を希望する者の 68.0%は、研究職に新たに就職することを求めている。

表 1：就職希望地別（就職したい国別）の希望就職先

就職 したい国	希望就職先						合計 (%) (人)	
	復職	研究職	日本・ 日系企業	非日本・ 日系企業	その他	無回答		
母国	13.9	55.2	10.8	7.7	8.2	4.1	100.0	194
日本	1.5	33.3	45.1	10.3	4.6	5.1	100.0	195
その他の国	0.0	68.0	3.0	9.0	11.0	9.0	100.0	100
無回答	14.3	21.4	0.0	0.0	7.1	57.1	100.0	14
全体 (%)	6.4	48.3	22.3	8.7	7.4	7.0	100.0	503

次に、表 2 より就職希望地を見ると、母国 38.6%、日本 38.8%、その他の国 19.9%、無回答 2.8%となっている。その他の国として、自由記述欄で名前を記されることが多いのは、北米（とりわけアメリカ）ないしヨーロッパ諸国である。表 2 で希望就職先を起点に就職したい国との関係を見ると、「留学前の仕事に復職したい」学生は、母国 84.4%、日本 9.4%と当然大部分が母国での就職を希望する。「研究職に新たに就職を希望する」学生の希望地は、母国 44.0%、日本 26.7%、その他の国 28.0%となっており、「日本・日系企業に就職を希望する」学生は、母国 18.8%、日本 78.6%、その他の国 2.7%、「日本・日系企業以外の企業への就職を希望する」学生は、母国 34.1%、日本 45.5%、その他の国 20.5%である。

表 2：希望就職先別の就職したい国

希望就職先	就職したい国				合計	
	母国	日本	その他の国	無回答	(%)	(人)
復職	84.4	9.4	0.0	6.3	100.0	32
研究職	44.0	<u>26.7</u>	28.0	1.2	100.0	243
日本・日系企業	18.8	<u>78.6</u>	2.7	0.0	100.0	112
非日本・日系企業	34.1	<u>45.5</u>	20.5	0.0	100.0	44
その他	43.2	24.3	29.7	2.7	100.0	37
無回答	22.9	28.6	25.7	22.9	100.0	35
合計 (%)	38.6	38.8	19.9	2.8	100.0	503

以上の結果から、京都大学においても日本での就職、それも日本・日系以外を含めて一般企業を希望する学生が、無視しえないほど存在していることが分かる。

3.2 身分との関係

これまでの京都大学における調査でも、身分、所属、そして出身国・地域による差異が、様々な項目に影響を与えていることが示されてきた。そこで本稿でも、これらの変数を用いて分析を行いたい。まず身分については、大学院生を中心に分析するが、それにあたっては、これまでの多くの調査で考慮されていなかった修士課程正規学生と博士課程正規学生の区分を明確にする。

(1) 修士課程正規学生

修士課程正規学生の内、研究継続を希望する者は 29.0%、就職を希望する者は 64.9%であった。したがって、修士課程正規学生には就職希望者が多いことを、まずは認識する必要がある。しかも、就職希望者 64.9%のうち、留学前の仕事に復職する場合も含めて 38.2%が研究職以外の就職を希望していた。就職希望者の希望就職地は、日本 53.9%、母国 29.8%、その他の国 15.6%である。つまり、過半数が日本での就職を望んでいる（表省略）。

表 3 の通り、日本での就職を考えている学生の就職希望先は、日本・日系企業 71.1%、日本・日系企業以外の企業 14.5%、研究職 11.8%となっている。比較のために付け加えると、母国での就職希望者の希望就職先は、研究職 50.0%、日本・日系企業 19.0%、その他の企業 14.3%となっている。一方、その他の国を希望している学生は、研究職に新たに就職することを希望しているものが大部分（72.7%）である。

表 3：就職したい国別の希望就職先(修士課程)

就職 したい国	希望就職先						合計 (%) (人)	
	復職	研究職	日本・ 日系企業	非日本・ 日系企業	その他	無回答		
母国	2.4	50.0	19.0	14.3	11.9	2.4	100.0	42
日本	0.0	11.8	71.1	14.5	1.3	1.3	100.0	76
その他の国	0.0	72.7	0.0	4.5	18.2	4.5	100.0	22
無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	100.0	1
合計 (%)	0.7	32.6	44.0	12.8	7.1	2.8	100.0	141

(2) 博士課程正規学生

博士課程正規学生になると、留学前の仕事に復職する場合も含めて 69.5%と、当然ながら圧倒的に研究職を目指している者が多い³。希望就職地は、母国 43.3%、日本 30.2%、その他の国 23.1%となっており、日本での就職希望者の比率が修士課程正規学生と比較して顕著に低くなっている（表省略）。

表 4 からは、母国での就職を希望する学生の 62.1%が研究職に新たに就職、20.7%が留学前の仕事に復職を考えていることが分かる。日本・日系あるいはその他の企業への就職希望者は、合わせても 10%に達しない。一方、日本での就職を希望する学生の 49.4%が新たに研究職、25.9%が日本・日系企業、6.2%が日本・日系企業以外の企業を希望している。その他の国を希望している学生は 69.4%と大部分が研究職を希望しており、日本・日系以外の企業を 11.3%が希望している。

表 4：就職したい国別の希望就職先（博士課程）

就職 したい国	希望就職先						合計 (%) (人)	
	復職	研究職	日本・ 日系企業	非日本・ 日系企業	その他	無回答		
母国	20.7	62.1	1.7	5.2	6.0	4.3	100.0	116
日本	2.5	49.4	25.9	6.2	8.6	7.4	100.0	81
その他の国	0.0	69.4	1.6	11.3	8.1	9.7	100.0	62
無回答	11.1	11.1	0.0	0.0	0.0	77.8	100.0	9
合計 (%)	10.1	58.2	9.0	6.7	7.1	9.0	100.0	268

³ 学生として研究を継続する場合、その希望地は母国 52.2%、日本 23.9%で、69.8%が日本での継続を希望していた修士課程正規学生と非常に異なっている。

博士課程正規学生の大部分が研究職を希望しており、また希望就職地としては、修士課程正規学生が日本に比重があるのに対し、母国に比重が置かれていることがわかる。しかし、日本での就職、しかも研究職以外への就職を考えている学生が、博士課程の留学生にも無視しえないほど存在している。

(3) 学年による変化

次に、学年ごとの変化を見てみたい。修士課程正規学生について大きな変化がみられるのは、研究職以外への就職で、1回生が27.0%であるのに対して、2回生は50.0%になる。逆に、学生として研究継続が36.5%から19.2%に減少している。つまり当初は、博士課程進学を考えていたが、のちに方針転換する学生が多いことを示唆している（表5）。

表5：修士課程正規学生の学年別進路志向

学年	留学後の進路				合計	
	学生として 研究継続	研究職に 就職	研究職以外 に就職	その他	(%)	(人)
1	36.5	33.8	27.0	2.7	100.0	74
2	19.2	28.8	50.0	1.9	100.0	52
3	25.8	22.6	38.7	12.9	100.0	31
4	16.7	16.7	50.0	16.7	100.0	6
無回答	26.7	33.3	33.3	6.7	100.0	15
合計(%)	28.1	29.8	37.1	5.1	100.0	178

同様の傾向は、博士課程正規学生についてもあてはまる。1回生から3回生へと、研究職への就職希望が72.7%から57.1%へと減少し、一方研究職以外への就職希望が8.2%から17.9%と増加している。これは、自己の研究能力への現実的な評価、あるいは博士課程修了後の就職難といった現実が、次第に意識されていく結果と考えられる。ただ、本調査におけるサンプル数が、博士課程の場合、1回生は110人に対して、3回生が28人と大きな差があることの影響は考慮しなければならない（表6）。

表6：博士課程正規学生の学年別進路志向

学年	留学後の進路				合計	
	学生として 研究継続	研究職に 就職	研究職以外 に就職	その他	(%)	(人)
1	13.6	72.7	8.2	5.5	100.0	110
2	16.7	64.1	15.4	3.8	100.0	78
3	14.3	57.1	17.9	10.7	100.0	28
4	15.4	76.9	0.0	7.7	100.0	13
無回答	3.8	65.4	19.2	11.5	100.0	26
合計(%)	13.7	67.8	12.2	6.3	100.0	255

(4) 学部正規学生

本稿では、学部正規学生（全学生の 5%）は議論の中心ではないが、基本的な情報を提供したい。学部正規学生は、64.9%と大部分が学生として研究継続、つまり進学を希望している。そのうち、45.8%が日本、50.0%がその他の国での進学を希望しており、母国はほとんど念頭にない。一方、就職希望者（全体比：32.4%、実数：12 人）のうち、就職する国としては、母国、日本とも 41.7%で、その他の国は 16.7%である。一方、就職先としては、日本・日系企業 50.0%、日本・日系以外の企業 25.0%である。

(5) 研究生・聴講生

本節の最後に、研究生・聴講生（全回答者の 12.6%）について簡単に触れておきたい。彼らの 33.7%が学生として研究継続、46.7%が研究職就職、17.4%が研究職以外に就職、をそれぞれ希望している。学生として研究を継続する場合の希望地は、日本 71.0%、その他の国 12.9%である。これは、大学院入学準備のために研究生となる学生がいるためである。就職希望者の希望地は、日本 45.8%、母国 27.1%、その他の国 22.0%となっている。

3.3 所属との関係

次に、所属（データが全部で少なくとも 14 名以上ある研究科）による相違に注目してみよう。本調査では、文系 26.5%、理系 59.0%、文理融合 8.4%、未決定・無回答 6.2%となっており、理系学部が 6 割の留学生を集めている。これは京都大学の全体的な文系・理系・文理融合系の比率とほぼ差はない（本報告書「調査の方法」参照）。工学研究科所属留学生は、なかでも本調査の大学院正規学生票の 25.5%を占める（2 位は農学研究科 13.0%）。工学研究科留学生の希望進路は、留学前の仕事へ復職する場合も含めて研究職への就職が 50.7%と過半数であるが、他の研究科（例えば理学研究科 69.7%）比べてその比率は低い。一方、例外的な結果を示すのは経営管理大学院で、研究職以外への就職希望が 92.3%と突出している。経営管理大学院は、経営学修士（いわゆる MBA）の習得を目的にする修士課程のみの専門職学位課程であることから、この結果は必然的である（表省略）。

上記の経営管理大学院を除けば、全般的には研究職志望の比率が高いが、修士課程の学生だけに注目すると、大きく二つのグループに分かれる。一つは、研究職以外への就職希望の比率が高い研究科である。この典型が工学研究科で、修士課程正規学生の内、研究職以外への就職希望者が 40.9%を占める。同様の傾向があるのが、人間・環境学研究科、情報学研究科、地球環境学舎である。他の研究科は修士課程の留学生数が少なく、研究職以外に就職することを望む学生の比率が低いところが多い。例えば農学研究科で研究職以外の就職を望んでいるのは 15.4%しかいない。このことは、修士課程段階においては、将来の志向が所属研究科によって大きく異なっていることを示している。博士課程においては、概して研究職希望者がどの研究科でも多数派になっている（表省略）。

表7の通り、修士課程学生全体では、日本での就職を目指している留学生が53.9%いる。その比率は所属によって違いが見られるが、情報学研究科83.3%、経営管理大学院76.0%、工学研究科61.5%は、比率の高さが目につく。一方、日本での就職希望の比率が低いのは、人間・環境学研究科44.4%や農学研究科25.0%である。

博士課程の場合、全体としては職を得たい場所として、母国が40%を超え、30.2%の日本を上回っていた。この傾向は、人間・環境学研究科、医学研究科、工学研究科など大部分の研究科に当てはまり、とりわけ農学研究科の母国での就職希望62.2%は突出している。ただ日本での就職希望者が50.0%の情報学研究科や、その他の国での就職を希望する学生が41.2%で最も比率が高い理学研究科とエネルギー科学研究科のような例外もある。

表7：所属研究科別の就職したい国

所属研究科	就職したい国				合計 (%) (人)	
	母国	日本	その他の国	無回答		
修士課程	人間・環境学研究科	55.6	44.4	0.0	0.0	100.0 9
	文学研究科	71.4	28.6	0.0	0.0	100.0 7
	法学研究科	50.0	25.0	25.0	0.0	100.0 4
	理学研究科	22.2	33.3	44.4	0.0	100.0 9
	医学研究科	50.0	0.0	50.0	0.0	100.0 2
	薬学研究科	0.0	50.0	25.0	25.0	100.0 4
	工学研究科	19.2	61.5	19.2	0.0	100.0 26
	農学研究科	58.3	25.0	16.7	0.0	100.0 12
	エネルギー科学研究科	25.0	50.0	25.0	0.0	100.0 4
	情報学研究科	8.3	83.3	8.3	0.0	100.0 12
	地球環境学舎	21.4	50.0	28.6	0.0	100.0 14
	経営管理大学院	24.0	76.0	0.0	0.0	100.0 25
	修士課程合計 (%)	29.7	53.9	15.6	0.8	100.0 128
博士課程	人間・環境学研究科	41.2	29.4	11.8	17.6	100.0 17
	文学研究科	60.0	30.0	10.0	0.0	100.0 10
	法学研究科	70.0	20.0	10.0	0.0	100.0 10
	理学研究科	23.5	35.3	41.2	0.0	100.0 17
	医学研究科	45.5	36.4	18.2	0.0	100.0 22
	薬学研究科	33.3	25.0	33.3	8.3	100.0 12
	工学研究科	44.2	31.2	22.1	2.6	100.0 77
	農学研究科	62.2	16.2	18.9	2.7	100.0 37
	エネルギー科学研究科	29.4	29.4	41.2	0.0	100.0 17
	情報学研究科	22.2	50.0	16.7	11.1	100.0 18
	地球環境学舎	40.0	33.3	26.7	0.0	100.0 15
	博士課程合計 (%)	43.7	30.2	22.6	3.6	100.0 252
	修士・博士課程合計 (%)	38.9	38.2	20.3	2.6	100.0 380

希望就職先として、京都大学全体の平均値では、22.3%が日本・日系企業を選択しており、研究職の次に位置していた。修士課程でこの比率が高いのが工学研究科 61.5%である（工学研究科は上記のように日本での就職希望者が多いが、その場合日本・日系企業への就職希望者が 87.5%を占める）。この研究科に続いて日本・日系企業への就職希望比率が高いのが経営管理大学院 52.0%である。この研究科は、非日本・日系企業を希望する比率も、44.0%と例外的な高い数値を示している。また人数は少ないが人間・環境学研究科 55.6%や情報学研究科 50.0%も、日本・日系企業を希望する学生の比率が高い。一方、博士課程の場合、日本・日系企業を希望する留学生の比率は低く、薬学研究科と情報学研究科（16.7%）、そして人数がやや多い工学研究科（8人）が目につく程度である（表8）。

表8：所属研究科別の希望就職先

所属研究科		希望就職先					合計 (%) (人)		
		復職	研究職	日本・ 日系企業	非日本・ 日系企業	その他			無回答
修士課程	人間・環境学研究科	0.0	11.1	55.6	0.0	33.3	0.0	100.0	9
	文学研究科	0.0	42.9	42.9	0.0	14.3	0.0	100.0	7
	法学研究科	0.0	25.0	25.0	25.0	0.0	25.0	100.0	4
	理学研究科	0.0	55.6	33.3	0.0	11.1	0.0	100.0	9
	医学研究科	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	2
	薬学研究科	0.0	50.0	25.0	0.0	0.0	25.0	100.0	4
	工学研究科	0.0	26.9	61.5	7.7	3.8	0.0	100.0	26
	農学研究科	0.0	58.3	33.3	0.0	8.3	0.0	100.0	12
	エネルギー科学研究科	0.0	25.0	50.0	0.0	25.0	0.0	100.0	4
	情報学研究科	0.0	33.3	50.0	8.3	0.0	8.3	100.0	12
	地球環境学舎	0.0	42.9	14.3	21.4	14.3	7.1	100.0	14
	経営管理大学院	0.0	4.0	52.0	44.0	0.0	0.0	100.0	25
	修士課程合計 (%)	0.0	31.3	43.8	14.1	7.8	3.1	100.0	128
博士課程	人間・環境学研究科	5.9	52.9	11.8	5.9	0.0	23.5	100.0	17
	文学研究科	10.0	90.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	10
	法学研究科	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	10
	理学研究科	5.9	70.6	11.8	0.0	5.9	5.9	100.0	17
	医学研究科	22.7	31.8	4.5	13.6	9.1	18.2	100.0	22
	薬学研究科	8.3	58.3	16.7	0.0	0.0	16.7	100.0	12
	工学研究科	9.1	55.8	10.4	7.8	9.1	7.8	100.0	77
	農学研究科	18.9	54.1	8.1	2.7	5.4	10.8	100.0	37
	エネルギー科学研究科	11.8	41.2	11.8	5.9	23.5	5.9	100.0	17
	情報学研究科	0.0	66.7	16.7	5.6	5.6	5.6	100.0	18
	地球環境学舎	6.7	73.3	6.7	6.7	6.7	0.0	100.0	15
	博士課程合計 (%)	10.3	58.3	9.5	5.6	7.1	9.1	100.0	252
	修士・博士課程合計 (%)		6.8	49.2	21.1	8.4	7.4	7.1	100.0

3.4 出身地域との関係

本調査では全データの 80.6%をアジア出身者が占めている。したがって、進路の全般的傾向には、彼らの動向が大いに反映されていることを念頭に置く必要がある。その上で、特徴のある地域を大学院正規学生に関して取り上げてみよう。

まず、出身地域別に就職に関する全体像をみると、留学前の仕事に復職する場合も含めて研究職を希望する学生が多数派であるが、その比率が際立って高いのが「他アジア（東アジアおよび東南アジア以外のアジア）」71.1%、欧州 65.2%、南米 63.2%である。一方、留学前の仕事に復職する場合を含めて研究者以外への就職希望率が高いのは、台湾 43.6%、中国 30.3%である。逆に日本から遠方の発展途上国出身者で研究職以外を希望する者は、アフリカが 0%、他アジアは 2.2%、南米が 10.5%と極端に低くなっている（表省略）。

表 9 より、修士課程の場合、日本での就職志向が高いのは、中国 61.3%で、これに東南アジア 52.6%、韓国 47.4%が続く。台湾は日本での就職希望者が少なく（33.3%）、母国での就職を希望する比率が高い（46.7%）。一方、博士課程の場合、母国での就職志向が、日本でのそれを上回るのが一般的だが、この傾向が明白なのが中国である（母国 48.8%、日本 23.8%）。同様の傾向を示すのが、台湾や東南アジアである。これ以外の特徴を示すのは、日本での就職希望者が多数派 44.4%の欧州、母国と日本での就職希望者が 40.6%で拮抗する他アジア、母国と日本とその他の国の希望者が 30%程度でほぼ同じの韓国である。

表 9：出身地域別の就職したい国

出身地域		就職したい国				合計 (%) (人)	
		母国	日本	その他の国	無回答		
修士課程	台湾	46.7	33.3	20.0	0.0	100.0	15
	中国	27.5	<u>61.3</u>	10.0	1.3	100.0	80
	韓国	31.6	<u>47.4</u>	21.1	0.0	100.0	19
	東南アジア	21.1	<u>52.6</u>	26.3	0.0	100.0	19
	他アジア	0.0	0.0	100.0	0.0	100.0	1
	欧州	0.0	100.0	0.0	0.0	100.0	1
	アフリカ	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0	1
	南米	25.0	50.0	25.0	0.0	100.0	4
博士課程	台湾	57.1	28.6	14.3	0.0	100.0	21
	中国	<u>48.8</u>	23.8	21.4	6.0	100.0	84
	韓国	<u>33.3</u>	<u>30.0</u>	<u>30.0</u>	6.7	100.0	30
	東南アジア	47.4	26.3	24.6	1.8	100.0	57
	他アジア	<u>40.6</u>	<u>40.6</u>	18.8	0.0	100.0	32
	欧州	16.7	<u>44.4</u>	33.3	5.6	100.0	18
	アフリカ	42.9	14.3	42.9	0.0	100.0	7
	北米	33.3	66.7	0.0	0.0	100.0	6
	南米	30.0	40.0	30.0	0.0	100.0	10

希望就職先として日本・日系企業に注目すると、どのような結果になるのだろうか（表10）。修士課程で、最もこの種の企業への就職を望む者が多いのは、中国 52.5%で、研究職志望者のほぼ倍である（ことに日本での就職を考えている学生の 79.6%が、日本・日系企業を希望している）。他に日本・日系企業希望者が多いのは、東南アジア 42.1%と韓国 36.8%である。博士課程に目を移すと、その志望者は激減する。修士課程で志望比率が高かった三つの国の出身者も 10%に達しない。比較的比率が高いのは台湾 14.3%である。

表 10：出身地域別の希望就職先

	出身地域	希望就職先						合計 (%) (人)	
		復職	研究職	日本・ 日系企業	非日本・ 日系企業	その他	無回答		
修士課程	台湾	0.0	26.7	26.7	20.0	20.0	6.7	100.0	15
	中国	0.0	26.3	52.5	12.5	6.3	2.5	100.0	80
	韓国	0.0	42.1	36.8	21.1	0.0	0.0	100.0	19
	東南アジア	5.3	36.8	42.1	5.3	10.5	0.0	100.0	19
	他アジア	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	1
	欧州	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0	1
	アフリカ	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	1
	南米	0.0	75.0	0.0	0.0	0.0	25.0	100.0	4
博士課程	台湾	9.5	47.6	14.3	19.0	0.0	9.5	100.0	21
	中国	4.8	64.3	8.3	8.3	6.0	8.3	100.0	84
	韓国	6.7	60.0	6.7	6.7	10.0	10.0	100.0	30
	東南アジア	21.1	56.1	5.3	3.5	8.8	5.3	100.0	57
	他アジア	6.3	62.5	12.5	3.1	3.1	12.5	100.0	32
	欧州	11.1	61.1	11.1	0.0	11.1	5.6	100.0	18
	アフリカ	42.9	28.6	14.3	0.0	0.0	14.3	100.0	7
	北米	0.0	33.3	16.7	16.7	16.7	16.7	100.0	6
	南米	0.0	50.0	10.0	10.0	20.0	10.0	100.0	10

3.5 言語と就職

言語能力は、一般的に進学にも就職にも影響すると想定しうる。本節では、日本語と英語という在日留学生にとっての基本言語について、彼らの進路への影響を見てみたい。ここでいう能力とは、留学生自身の評価による。彼らの人生の選択において、この評価が大きな意味を持つと考えるからである。

(1) 言語能力

表 11 の通り、日本語能力は出身地域により大きな差異が見られる。台湾、中国、韓国の出身者の日本語自己評価は総じて高く、「ほとんどできない」と答えた者は、最高でも中国出身の 6.1%とごく一部である。50%以上の学生が、「レポートを書き授業で質疑」、ないし

「論文を読んだり書いたり専門的なことを日本人と同等に議論」のレベルにあると自己評価している。一方、東南アジア、他アジア、アフリカ、北米、南米の出身者は、60%以上が「ほとんどできない」または「日常生活でのコミュニケーション」という低い評価である。欧州出身者はレベルがばらついている。

文系理系の差もある。「ほとんどできない」ないし「日常生活でのコミュニケーション」のレベルは理系 56.2%、文系 7.5%である。文系の 73.1%が「レポートを書き授業で質疑」ないし「論文を読んだり書いたり専門的なことを日本人と同等に議論」との高い評価であった。殊に文学研究科は、このレベルにあるとする学生が 91.3%と突出している（表省略）。

表 11：出身地域別の日本語能力

出身地域	日本語能力					合計 (%) (人)	
	ほとんど できない	日常生活で コミュニ ケーション	教科書を 読み授業を 理解	レポートを 書き授業で 質疑	論文の読み 書き専門的 議論		
台湾	2.6	10.5	26.3	28.9	31.6	100.0	38
中国	6.1	20.6	20.1	25.7	27.6	100.0	214
韓国	1.5	28.8	15.2	22.7	31.8	100.0	66
東南アジア	39.7	44.6	9.1	2.5	4.1	100.0	121
他アジア	25.5	53.2	4.3	0.0	17.0	100.0	47
欧州	8.7	34.8	26.1	4.3	26.1	100.0	23
アフリカ	23.5	76.5	0.0	0.0	0.0	100.0	17
北米	12.5	50.0	25.0	12.5	0.0	100.0	8
南米	21.1	42.1	26.3	5.3	5.3	100.0	19
その他	0.0	25.0	25.0	25.0	25.0	100.0	4
合計 (%)	15.4	32.3	16.2	15.8	20.3	100.0	557

一方、英語能力を出身地域別にみると、ここでも二極化が見られる（表 12）。英語で「論文を読んだり書いたり専門的なことを議論できる」という最高レベルが、台湾、中国、韓国の出身者では 30%前後、これ以外の国・地域は 78.7%から 100.0%である。

また、英語能力に関しても文系理系の差が見られる。「英語で論文を読んだり書いたり専門的なことを議論できる」レベルにある理系が 61.5%なのに対して、文系は 28.3%である。個別の研究科では、経営管理大学院が 13.8%とその比率の低さが際立っている（表省略）。

これまで見てきたデータは、日本語能力が英語能力と対照的な状況にあることを示している。ただ、「ほとんどできない」のレベルにある学生の比率は、日本語 15.4%のほうが英語 2.9%と比べて高いことにも留意が必要である。

表 12：出身地域別の英語能力

出身地域	英語能力					合計 (%) (人)	
	ほとんど できない	日常生活で コミュニケーション	教科書を 読み授業を 理解	レポートを 書き授業で 質疑	論文の読み 書き専門的 議論		
台湾	2.6	20.5	23.1	25.6	28.2	100.0	39
中国	3.7	17.8	17.8	27.1	33.6	100.0	214
韓国	6.1	22.7	16.7	24.2	30.3	100.0	66
東南アジア	1.7	0.0	3.3	13.2	81.8	100.0	121
他アジア	0.0	2.1	4.3	14.9	78.7	100.0	47
欧州	0.0	4.3	0.0	0.0	95.7	100.0	23
アフリカ	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	100.0	17
北米	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	100.0	8
南米	5.3	0.0	0.0	5.3	89.5	100.0	19
その他	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	100.0	4
合計 (%)	2.9	11.3	11.5	19.4	55.0	100.0	558

(2) 言語能力の就職志向への影響

前節の議論を踏まえて、就職と言語能力との関係を見たい。

日本語能力と就職希望地との関係を見ると（表 13）、日本語が「ほとんどできない」学生の 50.9%は母国への就職を希望し、日本での就職希望者は 22.8%、その他の国は 24.6%である。日本希望者が少数派であるのは当然だが、日本語能力がほとんどない学生の 5 人に 1 人が日本での就職を希望していることは、注目に値する。日本語のレベルが上昇すると、おおむね日本での就職希望者の比率は上昇し、母国希望者の比率は下降する。一方、英語に関しては、こうした明確な傾向は現れない（表 14）。

表 13：日本語能力別の就職したい国

日本語能力	就職したい国				合計 (%) (人)	
	母国	日本	その他の国	無回答		
ほとんどできない	50.9	22.8	24.6	1.8	100.0	57
日常生活で コミュニケーション	44.7	26.0	26.8	2.4	100.0	123
教科書を読み授業を 理解	30.6	43.1	25.0	1.4	100.0	72
レポートを書き授業 で質疑	38.1	54.0	7.9	0.0	100.0	63
論文の読み書き 専門的議論	29.3	50.0	15.2	5.4	100.0	92
合計 (%)	38.6	38.3	20.6	2.5	100.0	407

表 14：英語能力別の就職したい国

英語能力	就職したい国				合計 (%) (人)	
	母国	日本	その他の国	無回答		
ほとんどできない	46.7	33.3	13.3	6.7	100.0	15
日常生活で コミュニケーション	47.8	39.1	10.9	2.2	100.0	46
教科書を読み授業を 理解	33.3	48.9	17.8	0.0	100.0	45
レポートを書き授業 で質疑	46.8	41.6	7.8	3.9	100.0	77
論文の読み書き 専門的議論	34.4	35.7	28.1	1.8	100.0	224
合計 (%)	38.6	38.6	20.6	2.2	100.0	407

次に、言語能力と希望就職先との関係を見ておく（表 15、表 16）。日本語が「ほとんどできない」学生に、日本・日系企業を希望している者はおらず、大部分は研究職を希望している。日本語能力が上昇すると、日本・日系企業を希望する比率が概して高まるとともに、研究職志望の比率が低下する。この研究職志望の比率の低下は、主に修士課程正規学生の動向を反映したもので、博士課程正規学生の場合は日本語能力の高いものも研究職を希望する傾向がある。また、程度は小さいが、日本・日系以外の企業への志望者の比率が、日本語レベルの上昇とともに高まっていることは興味深い。逆に、英語に関しては、英語能力の高い者ほど、日本・日系企業への志望比率は低くなる。これも主に修士課程正規学生の動向による。

表 15：日本語能力別の希望就職先

日本語能力	希望就職先						合計 (%) (人)	
	復職	研究職	日本・ 日系企業	非日本・ 日系企業	その他	無回答		
ほとんどできない	12.3	77.2	0.0	3.5	5.3	1.8	100.0	57
日常生活で コミュニケーション	11.4	52.8	11.4	5.7	8.1	10.6	100.0	123
教科書を読み授業を 理解	4.2	54.2	23.6	6.9	8.3	2.8	100.0	72
レポートを書き授業 で質疑	4.8	33.3	38.1	15.9	7.9	0.0	100.0	63
論文の読み書き 専門的議論	1.1	35.9	32.6	13.0	5.4	12.0	100.0	92
合計 (%)	6.9	49.6	20.9	8.8	7.1	6.6	100.0	407

表 16：英語能力別の希望就職先

英語能力	希望就職先						合計	
	復職	研究職	日本・ 日系企業	非日本・ 日系企業	その他	無回答	(%)	(人)
ほとんどできない	6.7	53.3	26.7	0.0	0.0	13.3	100.0	15
日常生活で コミュニケーション	4.3	41.3	37.0	2.2	10.9	4.3	100.0	46
教科書を読み授業を 理解	0.0	33.3	33.3	24.4	4.4	4.4	100.0	45
レポートを書き授業 で質疑	0.0	48.1	28.6	9.1	6.5	7.8	100.0	77
論文の読み書き 専門的議論	11.2	54.9	12.5	7.6	7.1	6.7	100.0	224
合計 (%)	6.9	49.6	21.1	8.8	6.9	6.6	100.0	407

これまでの分析を踏まえると、言語能力の自己評価が進路に大きな影響を与えることがわかる。ことに人生の岐路にある修士課程では、その傾向が明らかに見て取れる。この段階で、日本語能力に自信があれば日本・日系企業を目指す比率が高まるといえそうだ。

3.6 留学先の決定過程と就職

これまで、留学生の進路と直接関連する事項を中心に論じてきたが、留学先の決定過程は就職にどのような意味を持っているのかをここでは考えたい。

(1) 第一志望／非第一志望としての京都大学

京都大学が第一の留学希望先であったか否かは、その後の進路に影響するのだろうか。京都大学を第一志望とする大学院留学生は、85.2%である。では、京都大学が第一志望ではない場合、第一志望の教育機関は京都大学よりどこが優れているとみなされていたのだろうか。

もっとも指摘されることが多いのが、母国での知名度 55.6%で、50%を越えるのは、この項目のみである。就職に関しては、母国での就職が京都大学より有利とする学生は 36.8%、日本での就職が京都大学より有利とする学生が 17.9%という結果が出ている（第 II 部、資料編 p.151 参照）。

職を得たい国としては、京都大学が第一志望の学生の場合は母国 40.5%、日本 37.2%、非第一志望の学生の場合は母国 26.7%、日本 45.0%となる。つまり、第一志望でない学生のほうが、日本を選択する比率が若干高い。これは、志望した大学に留学できなかったという意識がある学生が、第一志望と比較の上で、京都大学の優位性がより確保される日本での就職を選択した可能性が示されている⁴（表省略）。

⁴ これまでの調査の結果によれば、京都大学が第一志望でない場合、本来希望していた大学は欧米の大学か東京大学である。この双方とも母国における認知度では京都大学を上回っている。ことに中国や韓国における東京大学との知名度の差は、日本における差よりも非常に大きいことが示されている（木下 2009）。

(2) 留学要因としての就職

日本への留学理由の各項目において「重要でない」を1点、「あまり重要でない」を2点、「ある程度重要」を3点、「非常に重要」を4点として平均値を大学院正規学生についてみると、「就職に有利」は平均2.98点である。これは、「質の高い学問・研究（3.73点）」、「国際的な経験を獲得したいから（3.47点）」、「奨学金（3.14点）」、「日本文化・社会への関心（3.13点）」の次の5位に位置している。しかし、留学理由の1位と2位からは、大きな差があり、就職が留学理由として最も重要な要因であるとは言えない。

日本への留学を決める際に、就職が重要か否かには、留学生の出身地域による差が見られる。就職が「非常に重要」とする値が高い地域は、東南アジア、他アジア、アフリカ、南米である（表17）。

表17：出身地域別の日本留学理由における「就職に有利」の重要性

出身地域	日本を留学先にした理由（就職に有利）				合計 (%) (人)	
	非常に重要	ある程度重要	あまり重要でない	重要でない		
台湾	26.3	7.9	28.9	36.8	100.0	38
中国	21.6	17.3	39.4	21.6	100.0	208
韓国	21.2	12.1	43.9	22.7	100.0	66
東南アジア	57.9	3.3	31.4	7.4	100.0	121
他アジア	60.0	6.7	26.7	6.7	100.0	45
欧州	43.5	8.7	26.1	21.7	100.0	23
アフリカ	75.0	6.3	18.8	0.0	100.0	16
北米	37.5	37.5	12.5	12.5	100.0	8
南米	68.4	5.3	26.3	0.0	100.0	19
その他	25.0	0.0	75.0	0.0	100.0	4
合計 (%)	37.4	11.1	34.7	16.8	100.0	548

一方、京都大学を選択した理由も、日本を選択した理由と類似しており、「就職に有利」は2.97点で、「質の高い研究の評判（3.79点）」、「質の高い教育の評判（3.66点）」といった上位の事項と比較すると、大きな影響はないと考えられる⁵。また就職を京都大学を選択理由として重視する出身地域は、日本への留学理由の場合と同様、東南アジア、他アジア、アフリカ、南米である。これらの地域からの留学生は、大部分が博士課程正規学生であり、母国での就職希望者が多い。研究科別で見ると、就職が京都大学を選択した理由として相対的に重視されているのは、経営管理大学院（平均3.32点）である（表省略）。

⁵ データの処理方法は、日本への留学理由のところと同じ。

3.7 留学生生活と進路

(1) 悩みとしての進路

日本への留学理由としても、京都大学への留学理由としても、就職は最も重要な理由ではなかった。では、日本での留学生活には、どのような影響を就職は保持するのだろうか。

大学院留学生の悩みについての調査結果は示唆的である。五つの項目に関して悩みの程度を点数化して平均をみると⁶、「専門研究（2.95 点）」と「卒業後の進路（2.80 点）」の 2 項目が、他の三つ（人間関係、日本での生活、心身の健康）よりも明確に高く、これら 2 つが学生たちの悩みの中核であるといえる。卒業後の進路に関しては、とりわけ博士課程正規学生の悩みは深刻で、「とても悩んでいる」が 1 回生のときにすでに 29.6%となっており、2 回生、3 回生では 40%弱に達する。

卒業後の進路の悩みの相談相手（選択肢 15 のなかから 3 つまでを選択）を尋ねると、指導教員 46.4%、家族 44.8%、同じ国からの留学生 37.4%、これら三者に偏っていることがわかった。留学生課やキャリアサポートセンターなど学内の諸機関（及びその関係者）は 5.0%以下で、ほとんど相談相手になっていない。

また文系理系での相違が見いだせる。卒業後の進路の相談相手として指導教員を選ぶ割合は、文系 39.2%で理系 48.0%より低い。逆に、同じ国からの留学生を選ぶ割合は、理系 35.8%の方が文系 44.2%より低い。また身分別にみると、指導教員への相談比率は、学部正規学生、修士課程正規学生、博士課程正規学生と、専門性が高まるとともに順に上昇する。逆に同じ国からの留学生への相談比率は下降する。

(2) 家族と進路

家族と共に生活している留学生（以下、同居）は 22.1%、生活していない留学生（以下、非同居）は 77.9%である。では、同居か非同居かは、留学生の進路にどの程度影響しているのだろうか。

まず進路の傾向としては、研究職への就職希望者は同居の 57.1%、非同居の 51.3%、研究職以外への就職については、同居 14.3%、非同居 24.1%となる。これは、家族と同居しているか否かの影響というよりは、同居学生は年齢が相対的に高く、博士課程正規学生が大部分であるからである。就職したい国に関して分析してみたが、家族と同居しているか否か、あるいは子供の有無は、ほとんど影響していなかった（表省略）。

⁶ 「あなたの心配事や悩みについてお尋ねします」という設問を用い、各項目において「全く悩んでいない」を 1 点、「あまり悩んでいない」を 2 点、「少し悩んでいる」を 3 点、「とても悩んでいる」を 4 点として平均値を出している。無回答、又は「該当しない」を選んだ回答者を除いている。

約 8 割の回答者は家族と一緒に生活していないが、同居していない配偶者や子供、そして付き合っている人の存在が、彼らの進路に影響を与える可能性がある（表 18）。まず、配偶者や付き合っている人がいない場合の就職したい国の比率をみると、母国 38.1%、日本 40.6%、その他の国 19.2%となる。これと比較すると、母国に配偶者や子どもがいる場合、あるいは付き合っている人がいる場合、当然ながら母国での就職を考える人が多く過半数を超える（57.1%）（ことに、女性は、母国に付き合っている人がいる場合、母国での就職希望する比率が 63.8%で男性 48.0%を大きく上回っている）。

一方、日本に付き合っている人がいる場合、日本での就職希望者が 65.1%、母国 14.0%で性別にかかわらず大きな影響があることがわかる。例えば、インタビューした女性（経営管理大学院）の留学生は、日本での就職を選択した理由の一つとして、付き合っている男性が「帰らないでほしい」と要望したことをあげている。

表 18：人間関係別の就職したい国（家族と非同居）

単身／独身	就職したい国				合計 (%) (人)	
	母国	日本	その他の国	無回答		
単身（母国に配偶者や子どもあり）	57.1	32.1	10.7	0.0	100.0	28
独身（母国につき合っている人）	54.1	13.6	29.5	2.3	100.0	44
独身（日本につき合っている人）	14.0	65.1	18.6	2.3	100.0	43
独身（つき合っている人なし）	38.1	40.6	19.2	2.0	100.0	197
その他	33.3	33.3	33.3	0.0	100.0	3
無回答	33.3	44.4	11.1	1.0	100.0	9
合計 (%)	38.6	39.5	19.7	7.0	100.0	324

おわりに 大学院生の日本での就職とその支援

本稿は、日本で就職する留学生の増加という現状を踏まえたうえで、これまで議論の中心ではなかった大学院留学生の進路について、京都大学を事例に分析してきた。そこで示されたのは、京都大学のような「大学院重点化大学」であっても日本での就職、それも研究職以外の、いわゆる一般企業への就職を希望する学生が無視しえない比率で存在することである。本稿を締めくくるにあたって、大学院留学生の日本における一般企業への就職という観点から、議論をまとめたい。

「日本での一般企業就職希望者」

一般企業への就職希望者は、課程の性格や学生の年齢を考慮すれば、身分では修士課程正規学生に多いと想定される。京都大学のデータでも、研究職以外の就職希望者が、博士課程正規学生では 11.5%なのに対して、修士課程正規学生では 38.2%である。しかも、彼らの全就職希望者のうち過半数が日本での就職を希望している。そのうち日本・日系企業を希望する学生が 70%を越え、それ以外の企業の希望者を合わせると、85.6%が研究職以外での就職を希望している。

ただ、研究科により大きな相違がある。日本での就職希望者の相対的多さで注目されるのは、経営管理大学院、工学研究科、そして情報学研究科である。近年設立された経営管理大学院は、専門職大学院で唯一多数の留学生を集めている。その学生のほぼすべてが研究職以外への就職を希望し、70%以上が日本での就職を望んでいる。彼らの場合、留学先の選択理由としても就職を重視していること、すべて近隣アジア出身で、中国人が約 65%を占めることも特筆すべき点である。これらのデータは、世界的な影響力は低下傾向にあるとはいえ、「経済大国日本」にかかわることを学び、それをもとに日本で就職することを考える留学生が、日本近隣では多いことを示している。一方、工学研究科と情報学研究科は理系で、自己の専門分野の探求がまず念頭にあり、就職は留学先選択に大きな影響を与えていないことが多い。したがって、日本で生活するなかで研究者としての自己の適性を見極め、日本での一般企業への就職を最終的に決定している。その背景には、彼らの専門が研究職に限定されない幅を持っていることがある。つまり、大学院で学んだことが実業に密接しており、学生に研究職以外への就職を選びうる余地を与えているのである。

出身地域で注目すべきは中国人で、修士課程在籍者の 61.3%が日本での就職を希望している。しかも、そのなかで日本・日系企業を望んでいるものが 79.6%である。彼ら以外では、東南アジアや韓国といった近隣諸国出身者に、日本で研究職以外の仕事を得ようとする学生が多い。

「言語能力と進路」

これまでみた属性に加えて語学力、とりわけ日本語能力は、日本での研究職以外への就

職に、出身地や所属と関係を持ちつつ大きな影響を与えていた。例えば、経営管理大学院の場合、自己の日本語能力を高く評価する学生が集まっている。インタビューした2人（中国出身者）のように、母国の大学での専攻が日本語である学生がその典型であろう。日本語能力試験の一級にすでに合格してから来日した彼らは、その能力が生かせる専門、そして職を得るために、経営管理大学院を選択している。一方で、この研究科に属する学生の英語能力の自己評価は低い。インタビューした1人のように、英語への苦手意識が日本を選択させている学生が少なくないと考えられる。英語への苦手意識から、日本で日本・日系企業への就職を希望する事例は、インタビューした情報学研究科の学生にもみられた。このように、日本で研究職以外に就くことを希望する場合、高い日本語能力の自己評価と低い英語能力の自己評価の組み合わせが、しばしばみられる。

「将来の志向と京都」

インタビューした、日本での就職を希望している留学生たちは、今後の予定については漠然としていた。就職活動を終えた学生も、例えば滞日予定に関して特定の年数を明確に設定していることはまれである。したがって、一般の日本人学生の就職に関する立ち位置と大きな違いはないように思える。また希望勤務地については、京都に固執するところではなかった。これは、京都大学の日本社会における位置づけを把握しているからだだろう。京都に関して、日本人のような思い入れのない学生が大部分であることも影響していよう。このことは、留学生が学位取得後も滞在を希望するような街づくりの必要性が、少子高齢化が進む現在、京都で浮上する可能性を示唆している。京都大学以外にも多くの有力大学を抱える京都には、今のところ貴重な人材を地元に残めるための努力の跡がみえていない。

「就職活動」

日本で一般企業への就職を希望する京都大学の大学院留学生たちの就職活動は、ほぼ日本人学生と変わらない。彼らは、大学や生活協同組合から送られてきたメールや資料を手掛かりに就職活動を開始している。そしてセミナーや就職説明会に参加し、面接へと進んでいく。この展開にあたっては、日本人を含めた大学院の友人・知人から情報を得ている。つまり、一般企業に就職する日本人学生ならば通る道筋をたどって就職活動をはじめ、そして終わっている。これを可能にするのは、先述の彼らの日本語能力と将来に対する志向である。

「大学院留学生に対する就職支援」

今回の調査結果は、学位取得を目的として来日した留学生が、卒業ないし修了後、日本で就職するという傾向が、京都大学でも顕著になってきたことを裏付けている。これは留学生側の事情に加えて、日本社会が彼らの望むような環境を提供するようになったことに

もよるのだろう。そこには、先行調査でも示唆されているように、日本・日系企業が日本人学生と同じ土俵で、彼らを採用し始めていることも含まれよう。では、この状況に対応する大学側の就職支援の在り方とは、どのようなものであろうか。京都大学側から就職活動に関して留学生に送られる情報は、基本的に日本人学生と同じである。これ自体は誤りでなく、インタビューした学生たちも、これを有効に利用している。彼らの日本語能力が相対的に高く、日本人学生と類似した志向を持ち、企業も日本人と同様に彼らを扱う傾向がみえる以上、これは理にかなっている。

しかしながら、日本語を十分に解せない学生たちには、このような方法は問題となる。たしかに、ほとんどの日本企業は、現在のところ日常会話程度を超えるレベルの日本語能力を応募者に求めている（労働政策研究・研修機構調査部 2009）。しかし楽天やユニクロのように英語を社内公用語にする企業が出現していることにも見られるように、日本語能力にこだわらずに優秀な留学生を採用したいと考える企業が増加しつつある。これを鑑みると、日本で就職しようとする学生に日本語能力が伴っていることを当然視するのは、問題があるのではないだろうか。留学生側の姿勢をみても、今回の調査では、ほとんど日本語ができないという留学生の 5 人に 1 人は、大部分が研究職志望であるものの、日本での就職を希望している。これは、日本語以外の言語による就職情報が無意味でないことを示しているのではないだろうか。さらにいえば、有能な若い人材の争奪戦が世界規模で行われている今日、大学側が企業側とも協力して、少なくとも英語で就職情報を発信し、留学生の日本での就職を導くような、より積極的な行動も有意義ではないだろうか。

もちろん、留学生向けの就職活動支援が行われていないわけではない。こうした支援は、日本各地で様々なレベルで行われるようになっており⁷、京都大学でもいくつかの試みがなされている。例えば、国際交流センターのビジネス日本語講座が提供しているビジネスマナーや日本語のトレーニングは、就職活動において有用である。またキャリアサポートセンターでは、留学生向けの情報提供を行っている。さらに、大学が主催しているわけではないが、京都在住の留学生向けの就職フェアが開かれている。こうした試みの恩恵を受けている学生がいることは事実なのだが、インタビューした限りでは、その存在が十分認知されているわけではない。したがって、キャリアサポートセンターを利用していない、あるいは利用したとしても本を借りる程度といった反応や、一般の就職フェアで留学生の視点に立った情報が得られないことへの不満を述べる学生たちがいるのである。

就職に関する悩みへの対応にも、同様のことがいえる。今回の調査でも明らかなように就職は彼らにとって大きな悩みだが、相談するのは国際交流センターやキャリアサポートセンターではなく、指導教官、家族、そして同胞の留学生である。しかし、これらの人々のいずれもが有効な助言を与えられないことはありうる。例えば、現在は少数派であるが、

⁷ 留学生向けの就職フェアは、厚生労働省や地方自治体、民間業者が主催して各地で行われている。

博士課程修了後、一般企業への就職を希望している留学生がいる。博士課程正規学生の研究職以外への就職は、大学全体としても大きな課題である（京都大学キャリアサポートセンター 2010）。インタビュー協力者のなかに、これに該当する学生がいたが、同様のことを考える学生が少ないこともあって、有効な助言を得られないでいた。こうした場合、手を差し伸べられるのはキャリアサポートセンターなどの大学の機関だろうが、その存在は認知されていなかった。

これらのことは、大学側が留学生の就職支援のためになしうる余地が、まだまだあることを示している。

「留学生獲得と就職」

所属学生の就職状況の向上は、大学の吸引力を高める要因の一つになると一般的に考えられる。しかし、京都大学を希望するような、研究・教育環境を第一に優先する留学生の場合、就職は留学先決定過程において、全般的には大きな影響力を持たない。現時点で日本での就職を希望している学生たちは、留学を決定した当初から日本での就職を念頭に置いていたわけではなく、留學生活のなかで日本での就職を検討しはじめたと考えられる。例外が経営管理大学院であり、日本における就職実績が相対的に大きな意味を持つ。この研究科に関しては、例えば日本研究や日本語を専門とする学部や学科を持つ高校や大学への就職実績を用いた宣伝が有効であろう。また、同じ「大学院重点化大学」である東北大学の経済学研究科が主催したように、経営管理大学院が留学生向け就職フェアをおこなうことは、日本で一般企業への就職を希望する在学生にとって有益であるだけでなく、留学生の将来的な獲得にも資するだろう。

「自然な存在としての留学生」

留学生調査一般において、これまである種自明の前提とされていたのが、①留学を希望する契機や理由の発生、②留学希望国、そして希望大学の選定、③渡航、という経過である。しかし、前回そして今回の調査でも、これに沿わないケースが珍しくないことがインタビューでわかった。留学先を決定するにあたって、「たまたま友達が京都にいたから」、「たまたま募集があったから」といったことがインタビューのなかに出てくことは、珍しくない。彼らの存在を念頭に置くと、現在の多くの留学生調査の限界は明らかである。これは、就職を含めた留学生の進路に関しても当てはまる。滞日期間が長くなるにつれて、彼らは、日本社会に一定の基盤を築いてゆき、日本で人生を組み立てることが「自然」になる。

「すいません、普通で。」象徴的なのは、東南アジア出身の留学生がインタビューの途中で苦笑いをしながら言った、この一言である。つまり、留学生に関して想起しがちな「人生をかけた決断」が見られない道を、来日後、彼は歩んできた。しかし、こうした側面が留学に含まれることは、近隣諸国出身者には珍しくない。もちろん「自然な」というのは

「楽な」ということではない。京都大学の入学や入学後の学業で苦勞するのは、一般的なことからである。しかし学生生活を送るなかで日本での生活に適応し、その「自然な」延長線上に、彼らの日本での就職がある。日本人が日本で就職するのが「自然」であることが多いように。

今後、少子化がさらに進むなかで、留学生が日本社会でさらに大きな存在となっていくことは確実である。京都大学のような日本で高い評価を得ている大学の場合、留学生が日本で、より一層「自然に」多くの進路の選択肢に触れられるように支援することは、欠かせない役割になるだろう。

「今後の調査に向けて」

これまでの留学生調査において、大学院生の就職は十分に扱われていなかった。今回の調査のなかで、さまざまな要素を考慮に入れなければ、彼らの動向が把握しえないことが明示された。とりわけ、身分（修士課程正規学生か博士正規学生）、所属研究科、言語能力（日本語と英語）、出身地といった変数は極めて重要である。今日論じられることが多い、留学生と日本の企業とのマッチングを考察するうえでも、こうした視点が不可欠と思われる。さらに、これらの変数がどう影響しあうのかをより深く解明するには、農学研究科や文学研究科などに所属する学生、あるいは博士課程正規学生を含め、対象者の数をさらに増やしてインタビュー調査を行う必要がある。また、日本全体における留学生の動向を理解するためには、こうしたきめ細かい調査をより多くの大学で協力して展開することが不可欠であろう。

参考文献

愛知県地域振興部国際課 2011『平成 22 年度県内留学生就職活動実態調査報告書』
(<http://www.pref.aichi.jp/cmsfiles/contents/0000039/39873/chousa-houkokusho-22.pdf>)
Retrieved February 17, 2012.

伊藤孝恵，奥村圭子，江崎哲也，高田谷久美子，仲本康一郎 2009「留学生の卒業後の進路と日本での就職活動に対する意識：山梨大学留学生センター『留学生の進路希望調査報告書』を基に」『言葉の学び、文化の交流：山梨大学留学生センター研究紀要』4, 29-42.

大分経済同友会 国際委員会・大学コンソーシアムおおいた 2007『大分県内留学生における卒業後の正社員雇用・就職に関するアンケート調査報告』
(<http://www.ucon-oita.jp/support/cyousa200712.pdf>) Retrieved February 17, 2012.

岡山県留学生交流推進協議会 2011『岡山県内外国人留学生の就職状況に関する調査調査結果（平成 21 年度卒業・修了留学生）』

(http://岡山大学.jp/up_load_files/kokusai-pdf/syusyoku21.pdf) Retrieved February 17, 2012.

神谷順子 2010「日本における外国人留学生の就業に関する研究：大学・企業・行政との連携による就職支援の効果」『北海学園大学学園論集』143, 67-91.

木下昭 2009「留学先「第一志望」とされる京都大学の位置」『京都大学における国際交流の現状と発展に向けての問題提起：第 3 回アンケート・インタビュー調査報告書』京都大学国際交流センター.

京都大学キャリアサポートセンター 2010『ポスドクガイドライン：ポスドクの就職支援への取り組みと現況』京都大学キャリアサポートセンター.

茂住和世 2010「「留学生 30 万人計画」の実現可能性をめぐる一考察」『東京情報大学研究論集』13(2), 40-52.

ディスコ 2010『外国人留学生の就職活動に関する調査結果』11 月
(http://web.disc.co.jp/topics/foreignst_20101227.pdf) Retrieved February 17, 2012.

中村純子 2008「留学生の就職意識とキャリア形成支援(第 1 部 松本大学地域総合研究センター研究員研究報告)」『地域総合研究』8, 67-81.

日本学生支援機構 2008『2009 年 外国人留学生のための就職情報』日本学生支援機構.

日本学生支援機構 2011『平成 21 年度 外国人留学生進路状況・学位授与状況調査結果』
(http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/documents/degrees09.pdf)
Retrieved February 17, 2012.

袴田麻里 2009「静岡県における留学生の就職意識と企業（製造業）の留学生採用意識」『静岡大学国際交流センター紀要』3, 79-93.

法務省入国管理局 2010『平成 21 年における留学生等の日本企業等への就職状況について』7 月 (<http://www.moj.go.jp/content/000050170.pdf>) Retrieved February 17, 2012.

森真理子 2009「留学後の進路：キャリアと日本留学」『京都大学における国際交流の現状と発展に向けての問題提起：第 3 回アンケート・インタビュー調査報告書』京都大学国際交流センター.

労働政策研究・研修機構調査部 2009『日本企業における留学生の就労に関する調査：JILPT 調査シリーズ No.57』労働政策研究・研修機構.

第三章

留学生アドバイジングへの「被援助志向性」に関する分析

戸梶民夫

1. はじめに

留学生は、住み慣れた母国から遠く離れた日本までやってきて、研究に関してはもちろんのこと、同時にさまざまな文化や社会環境の差から来る問題にも対処・適応しつつ留学生生活を送っている。その際に、新たな環境の中で悩みやストレスを抱えることも少なくない。そして文部科学省の「留学生 30 万人計画」に沿うかたちで留学生数が急速に増加しつつある現状において、留学生が留学生活の中で抱えるだろう問題を適切にサポートしていく体制づくりも迎え入れる大学側にとってますます重要な課題となってきている。

しかし、留学生は大学側が提供するサポートを十分利用することができているのだろうか。

表 1. 留学生が選んだ悩みの相談先

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	9位
ア：専門の研究に関して	指導教員 82.9	同国留学生 32.0	チューター外 日本学生 26.4	チューター 15.9	異国 留学生 15.0	家族 14.6	その他 7.4	留学生 担当教員 5.7	所属学部 事務室 4.4
イ：人間関係に関して	同国 留学生 53.2	家族 40.1	異国 留学生 24.6	チューター外 日本学生 18.9	その他 12.7	チューター 10.7	指導教員 7.8	留学生 担当教員 7.8	所属学部 事務室 1.6
ウ：日本での生活に関して	同国 留学生 53.6	家族 31.1	チューター外 日本学生 26.7	異国 留学生 24.2	チューター 16.6	指導教員 16.3	その他 10.0	留学生課 5.5	所属学部 事務室 4.2
エ：心身の健康に関して	家族 46.0	同国 留学生 35.8	病院学内 保健診療 所 32.1	異国 留学生 11.6	その他 10.0	指導教員 9.8	チューター外 日本学生 9.3	チューター 5.2	留学生課 1.6
オ：卒業後進路に関して	家族 45.3	指導教員 41.7	同国 留学生 39.1	異国 留学生 13.5	チューター外 日本学生 13.3	その他 11.6	チューター 5.9	キャリアサポ ートセンター 4.4	留学生 担当教員 2.2

今回のアンケート調査項目の間 42 - b では、留学生が悩みを抱えている時に誰に相談するかを三つまで選択してもらった。その結果、専門研究、人間関係、日本生活、心身健康、卒業後の進路すべての悩みにおいて、同国・異国留学生、日本人学生、家族といったインフォーマルな関係にある人々や、指導教員やチューターといったセミ・フォーマル的と言

える相談先が上位に並んだ。反面、留学生担当教員や留学生課、留学生アドバイジングといったフォーマルな傾向が強い相談先が選択されるのはその後で、(例外として「心身の健康」3位に「病院・診療所」が入るが) 比率としてはほとんどが5%以下であった。

また先行研究においても、留学生が大学側のサポートを利用する際に、何らかの「壁」があることを問題視する記述は複数みられる。例えば、南(2001)は、問題を抱える留学生に留学生相談室を紹介しても、アジア系留学生が持つ共通の文化的メンタリティを背景としたネガティブな反応が見られることを指摘している。寅野(2001)は、留学生が一人で解決できない問題にぶつかった時も大学側のサポートを利用せず一人で抱え込むような、「問題の潜在化」という問題があることを指摘している(その他、箕口 2003、吉川 2002 等)。こうした研究者の指摘には、留学生サポートに訪れた留学生に対していかに適切なサポートを提供できるかどうか「以前に」、そもそも大学側のサポート機関に訪れるかどうかの留学生の選択場面における「壁」が存在していることへの懸念が見て取れる。

そして京都大学においても、留学生の相談体制は、こうした留学生のアクセシビリティの「壁」を低めるためにその体制の変革を行ってきた。京大の留学生相談業務を長い間担当してきた大東は、1990年の留学生センターへの着任以来、留学生アドバイジングがその「アクセシビリティ」を高めるために三期にわたって体制を変更してきたことを指摘している(大東 2010)。第一期は1990年代前半であり、教育学部の留学生心理相談室が窓口になっていた時代である。しかし、この4～5年の時期に来談者の数が増加しないことから、大東は心理的カウンセリングの形式が留学生にとっての壁となっていることを気付いたと述べている。第二期は1990年代後半から2007年までの時期であり、そこではカウンセリングから切り離して留学生相談室を独自に作るようになった。相談を受ける側も、カウンセラーではなく、留学生の事情をよく知る相談員に来てもらうことにし、心理的サポートからより日常生活にも深く関係するふくらみのあるサポートを提供できる体制が整えられていく。しかし大東は、この体制で相談件数が増えてきたことを述べながらも、しかし「相談室」というドアを叩くことがやはり留学生にとって敷居が高くなることを指摘している。そして第三期は、2008年から国際交流センター内の留学生用のラウンジ Kizuna に、相談員を常駐させるようになった体制である。必ずしも相談するために来るわけではない留学生用のラウンジで、派生的に相談が可能な体制にすることで、より留学生アドバイジングのアクセシビリティを高めるための工夫がなされている。こうした本学アドバイジングの工夫の経緯をみても、留学生に大学側のサポートをつなげるための敷居をできるだけ低めていこうとする姿勢が見て取ることができるだろう。

本報告では、こうした本学の留学生アドバイジング(具体的には「留学生相談室」と「ラウンジ Kizuna の生活相談」)に留学生がアクセスするかどうかの選択に影響を与える要因を調べながら、そうしたアクセスする際の「敷居」「壁」が存在するかどうか、そしてそれが存在するとすればどのようなものであるのかを探索してみたい。そしてその壁を低くす

するためにはどのような努力が考えられるのかの提言に結び付けられることができればと考えている。

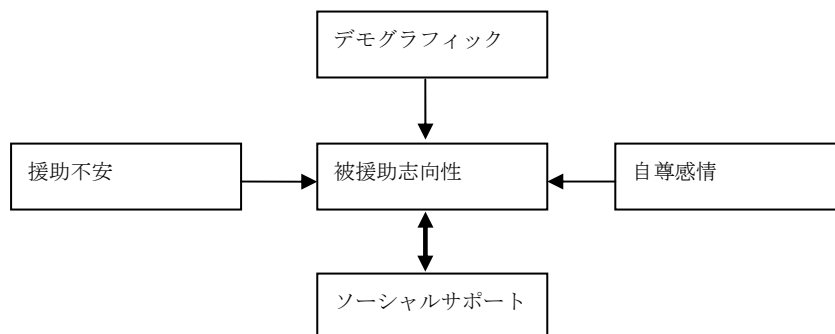
2. 分析方法

(1) 「被援助志向性」

まず、この目的に利用することができる先行研究として、水野治久の「被援助志向性」に関する研究（水野 2003）を参照したい。「被援助志向性 help-seeking」とは、「留学生が、問題に遭遇し自分で問題を解決しようとしても解決できない場合」、さまざまなヘルパーに「どの程度援助を求めるか」を指し示す概念である（水野 2003:11）。水野はこうした「被援助志向性」に対して影響を与える要因をいくつかに分け、それぞれが留学生のヘルパーに援助を求める気持ちを高めることができるかどうかを測定している。

まず、水野が用いる分析枠組みを示したい。水野は「被援助志向性」を被説明変数とし、それに影響を与える可能性のある要因や説明変数として、「デモグラフィック要因」（性別、年齢、社会経済的地位、文化背景の違い）、「ソーシャルサポート」、「援助不安」、「自尊感情」を取り上げて分析を行っている。水野によれば、「ソーシャルサポート」は、過去一年間にヘルパーから実際にもらった援助の程度を指示する指標であり、この被援助の経験が多ければ「被援助志向性」は高くなる可能性がある。次に「援助不安」は、「呼応性への心配」と「汚名への心配」からなり、ヘルパーとの応答関係についてのイメージの項目である。また「自尊感情」は、自己評価に関わる心理的指標である。

図1. 水野の分析枠組



(2) 調査方法の変更点

しかし今回の調査においては、調査法や調査結果の限界もあり、この水野のフレームをそのまま踏襲することができず、いくつかの変更を加えざるを得なかった。

一点目に、今回の調査では留学生アドバイジングに対する「被援助志向性」を直接測定

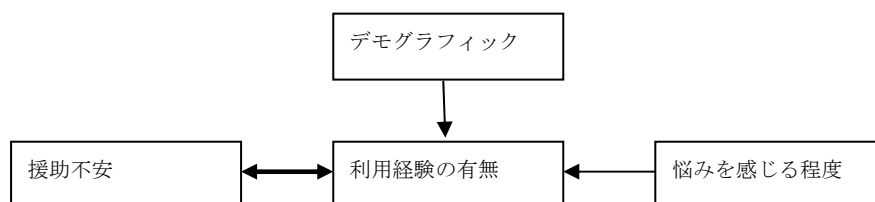
することはできなかった¹。ただ水野は、「サポートを求め、サポートを得ることができた留学生は被援助志向性を高めることができるが、援助を求めない留学生はソーシャルサポートを得る機会がないので、被援助志向性を高めることができない」と論じ（水野 2003:75）、「ソーシャルサポート」と「被援助志向性」が、一面において循環関係にあることを示している。そのため本稿では、「ソーシャルサポート」を、「被援助志向性」に影響を与える説明変数ではなく「被援助志向性」の実践的な現れとして扱い、その二つを、「留学生アドバイジングの利用経験の有無」²という一つの変数で代表させることにした。

二点目に、「援助不安」を測るために、水野は「ヘルパーの呼応性への心配」と「汚名への心配」を中心とした12項目からなる調査項目を作成している。ここではその調査項目を参考にして、「留学生アドバイジング」に対して留学生が持つだろうイメージを調査する指標を作成した（問 47 - b：表 9 参照）。(c) (d) (g) (k) は水野の項目を参照にして作成した「呼応性への心配」を測る項目、(f) (h) は同じく「汚名への心配」を測る項目だが、さらに呼応性を表現すると考えられる項目をいくつか付け加えた。(a) (i) は問題の軽重によって「呼応性」が影響されるかどうかの項目、(b) (e) は問題の具象性によって呼応性が影響されるかどうかの項目である。さらに「呼応性」のイメージとは直接関係しないが、インターカーの必要性について問う項目 (j)、アドバイジングの意味が理解されていないことを問う項目 (l) を加えた。

三点目に、「被援助志向性」に対して影響を与える「自尊感情」という変数は、ヘルパーとの応答関係に関するイメージとは異なり、自己評価の項目と考えられる。今回の調査でこの「自尊感情」を直接評価する項目を挿入することはできなかったため、この「自尊感情」の程度を、「悩みを感じている程度」に置き換えて、問 42 - a で調査した、留学生の悩み評価の指標で代替させてみることにした。

こうした変更によって、留学生アドバイジングに対する援助不安というイメージが留学生アドバイジングの利用有無に与える影響を測定することにした。

図 2. 変更後の分析枠組



¹ 今回の調査では、留学生の悩みの相談先を聞く問 42-b において五種の悩み（専門研究、人間関係、日本生活、心身健康、卒業後進路）それぞれについて、誰に相談するかを留学生アドバイジングも含めた 15 の選択肢の中から 3 つまで選択してもらった。しかし、留学生アドバイジングを選択する回答者数がほとんどゼロに近く、結果的にこの問いにおいて、留学生アドバイジングに対する被援助志向性を測定することはできなかった。

² 問 47、問 47 - a ともに有効回答であり、かつ問 47 - a で利用有りと答えた人々を指すことにした。

ただ、水野が「被援助志向性」と「ソーシャルサポート」の間に見た循環関係は、「援助不安」と「利用経験の有無」との間にも想定されうる。①留学生アドバイザーに対して援助不安を感じない留学生が留学生アドバイザーを利用する、と同時に、②留学生アドバイザーを利用した留学生がアドバイザーに対して援助不安を感じなくなる、という（①←→②の）循環関係を考えることは十分可能である。そのため、水野の研究とは異なり「援助不安」を留学生アドバイザーの利用に一方的に影響を与える独立変数として想定することは難しい。ただ、留学生アドバイザーを利用したことでイメージを上昇させることが、逆にさらなる留学生アドバイザーの利用につながりやすくなるのであれば、留学生アドバイザーの利用しやすさに対してアドバイザー・イメージの構築が切り離せない役割を担っていることを想定することはできるように思われる。

（３）留学生アドバイザーの利用率

最初に、被説明変数である留学生アドバイザーの利用率の推移を見ておきたい。2002年の第一回調査から留学生アドバイザーの利用率を算出してみると以下ようになる。

表 2. 留学生アドバイザー利用率の推移

	2002 年 (第一回)	2005 年 (第二回)	2008 年 (第三回)	2011 年 (第四回)
利用したことがある	29	10	46	54
利用したことがない	281	119	517	680
利用率	9.4%	7.8%	8.2%	7.4%

このように、留学生が留学生アドバイザーを実際に利用している頻度は、調査開始時から現在まで大きくは変化せず、7%後半～9%前半の間で留まっている。2008年にラウンジ Kizuna での生活相談がスタートしてから三年に立つが、その変革により相談の状況が変化したかどうかはこの数値ではまだ明確に確認されない。

3. デモグラフィック要因

ここでは水野があげている、性差、年齢、文化背景、社会経済的地位という留学生の属性と、その他今回の調査で得られた他の質問項目の数値と利用率とを掛け合わせた。

（１）性差

女性の方が被援助志向性の高い傾向が見られることが数々の研究で確かめられているようであるが（水野 2003:29）、今回の調査でのアドバイザー利用率は、男性 7.5%、女性

7.2%で有意な差は見られなかった。

(2) 年齢

年齢を三歳区分でカテゴリー化してみると次の表のようになった。

表3. 年齢と利用率との関係

(人)

年齢	18-20	21-23	24-26	27-29	30-32	33-35	36-38	39-	合計
利用有	1	6	10	19	7	7	3	1	54
利用無	21	93	227	158	107	44	21	8	679
利用率	4.5%	6.1%	4.2%	10.7%	6.1%	13.7%	12.5%	11.1%	7.4%

利用数は27-29歳のグループにおいて最も多い。利用率をみると、27-29歳に一つの山があるが、33歳以上の年齢層を合計して計算すると利用率は13.1%で平均よりかなり高くなる。ただ、これは大学の在籍期間の長さに関係している可能性がある。

(3) 文系／理系／文理融合系

文系／理系／文理融合系の利用率を見ると、文系8.6%、理系7.0%、文理融合系9.5%で、大きくは変わらないが、文理融合系の利用率が多少高かった。

(4) 出身国——文化背景の違い

京都大学の留学生の過半数を占める中国の留学生と欧米諸国出身の留学生において利用率を比較した。欧米諸国のカテゴリーにどの国家が含まれるかは議論があるが、ここでは日本以外のG7に含まれる国家（アメリカ、イギリス、イタリア、カナダ、ドイツ、フランス）を想定してみた。

欧米諸国の母数は少ないが、これを見ると欧米からの留学生の利用率が高く、中国からの留学生よりも倍近くアドバイジングを利用する傾向が強いということになる。

表4. 欧米諸国と中国出身留学生との間での利用率の比較

(人)

	欧米諸国	中国
利用有	3	12
利用無し	29	263
利用率	9.4%	4.4%

(5) 収入

水野は、社会経済的地位が低い人より高い人のほうがメンタルヘルス・サービスの利用率が高い、という調査結果を引用している。今回のアンケートでは社会経済的地位を表す設問はほとんど用意していないが、国元の家族年収、留学生の現在のひと月の生活費、奨学金を受けているか否かと、利用率との関係を調べてみた。

表 5. 留学生の国元の家族の年収と利用率の関係 (人)

	30 万 以下	30~ 100 万	100~ 200 万	200~ 300 万	300~ 600 万	600~ 900 万	1200 万 以上	合計
利用有	16	14	7	4	7	2	0	50
利用無	154	182	96	62	62	24	29	609
利用率	9.4 %	7.1%	6.8%	6.1%	10.1%	7.7%	0.0%	7.6%

国元の家族の年収と利用率の関係をみると、利用数が多いのは国元家族年収が 100 万以内の留学生が多いが、利用率でみれば 30 万以下と 300~600 万の留学生が多かった。

留学生の現在の生活費との関係を見ると、利用率は 15~20 万の留学生が 11.4%と最も多く、20~25 万の留学生は 6.7%、15 万円以下の留学生の利用率は、約 2~5%であった。

また奨学金を受けているかどうかと利用率との関係では、非スカラシップ層の利用率が 4.9%であるのに対して、スカラシップ層では 8.5%だった。

(6) 学んでいるキャンパス

吉田、桂、宇治のキャンパスそれぞれで、利用率の違いがあるかどうかを調べてみた。結果、吉田キャンパス 8.2%、桂キャンパス 4.9%、宇治キャンパス 5.6%、その他 6.3%となり、留学生アドバイジングへの物理的な距離が相談率に影響を与えている可能性があるように思われる。

(7) 日本人学生や他の留学生と知り合う機会

日本人学生とほとんど知り合う機会がない留学生は、ほぼ留学生アドバイジングを利用していない。

また他の留学生とほとんど知り合う機会がない留学生は、全く留学生アドバイジングにアクセスしていない。他の留学生と知り合う機会が多いほど利用率が上がっており、1%水準で有意であった。 $(\chi^2=12.112 \quad p<0.01)$

表 6. 日本人学生と知り合う機会と利用率との関係

	ほとんど 無かった	どちらかと いうと不十分	どちらかと いえば十分	十分	合計
利用有	1	20	14	18	53
利用無	45	187	218	225	675
利用率	2.2%	9.7%	6.0%	7.4%	7.3%

表 7. 他の留学生と知り合う機会と利用率との関係

	ほとんど 無かった	どちらかと いうと不十分	どちらかと いえば十分	十分	合計
利用有	0	8	19	26	53
利用無	55	163	245	197	660
利用率	0.0%	4.7%	7.2%	11.7%	7.4%

(8) 交流する留学生内での同国異国出身割合

交流する留学生内で同国人留学生がほとんどである留学生は、アドバイジングを利用する率が相対的にかなり低い。

表 8. 交流する留学生内での同国異国出身割合と利用率との関係

	ほとんど他国 出身の留学生	他国出身留学 生の方が多い	同国と他国出身 留学生が同程度	同国出身留学 生の方が多い	ほとんど同国 出身の留学生
利用有	18	8	11	15	1
利用無	141	88	101	192	77
利用率	11.3%	8.3%	9.8%	7.2%	1.3%

(9) 国際交流センターの利用頻度

国際交流センターの利用頻度が「ほとんど毎日」から「2～3ヶ月に一回程度」利用の留学生は、アドバイジング利用率が平均を超えている。逆に4、5カ月に一回程度の利用をする留学生は、比較的利用していない。

3. 援助不安——留学生アドバイジングのイメージと利用率の関係

(1) 留学生アドバイジングに関するイメージ

次に、留学生アドバイジングに関して留学生が持っている「援助不安」について考えてみたい。まず問 47 - b の調査結果を示す。

表 9. 留学生アドバイジングに対するイメージ

	はい	いいえ
a) 特別な問題を抱える人が行くところである	328 (50.3%)	324 (49.7%)
b) 悩みや辛い気持ちを打ち明けられる	441 (67.8%)	209 (32.2%)
c) 親身になって相談を聞いてくれる	467 (72.4%)	178 (27.6%)
d) 相談のために日本語能力が必要である	333 (51.4%)	315 (48.6%)
e) 具体的な問題解決に利用すべきである	375 (57.9%)	273 (42.1%)
f) 相談したら弱い人間だと思われる	90 (14.0%)	555 (86.0%)
g) 相談内容が外部に漏れる恐れがある	164 (25.5%)	479 (74.5%)
h) 相談によって奨学金や指導で不利になる	106 (16.5%)	538 (83.5%)
i) 簡単なことでも相談できる	377 (58.2%)	271 (41.8%)
j) 紹介なしに利用するのは難しい	277 (42.8%)	370 (57.2%)
k) 自分の問題をよく理解してくれないと思う	250 (38.6%)	398 (61.4%)
l) 何をする場所かよくわからない	452 (67.1%)	222 (32.9%)

水野は、調査で「汚名への心配」の項目に関して多くの回答者が「全く当てはまらない」を選択し回答の偏りが見られたため、「呼応性への心配」の項目だけに分析を絞っている。ここでも同じく、(f) (h) の項目から分かるように「汚名への心配」を感じる留学生の割合はその数値がかなり低かったので、「呼応性への心配」を測る項目に議論を限定している。

(2) 留学生アドバイジングの利用率と留学生アドバイジングのイメージとの関係

そして、「援助不安」が「利用経験の有無」に影響を与えているかどうかを調べてみると、表 10 のようになった。

この結果を見ると、「c) 親身になって相談を聞いてくれる」、「j) 紹介なしに利用するのは難しい」、「l) 何をする場所かよくわからない」の質問項目において 5%水準での有意差が見られた。その他の項目では、アドバイジング利用の経験がある留学生と無い留学生との間で有意差が見られなかった。

「親身になって相談を聞いてくれる」に関しては、利用者と非利用者の間で 5%水準での有意差がみられる。これは、アドバイジングを利用する実践と、「親身になって相談を聞いてくれる」というイメージの構築が関連している、ということである。逆にいえば、アドバイジングを利用していない留学生に、「親身になって相談を聞いてくれる」という「イメージ」を上昇させることは、アドバイジングの利用に際しての「呼応性への心配」という「壁」を低減させる効果があるということだろう。ただ、その他の b) 悩みや辛い気持

を打ち明けられる、i) 簡単なことでも相談できる、k) 自分の問題をよく理解してくれないと思う、といった分かりやすい「呼応性への心配」を想定した項目ではあまりアドバイジングの利用実践との関連が見られない。また「呼応性への心配」の中でも日本語利用 (d) に関する項目は他の項目よりも利用実践との比較的高い関連を示すが、逆に漏えいへの不安 (g) を調べる項目はほとんど関連が見られない。こうした結果は、「呼応性への心配」が留学生全体にとってアドバイジングの利用に際する「壁」となっている可能性が限定的であることを示しているように思われる。

さらに、j) の「紹介なしに利用するのは難しい」という項目で5%水準での有意差がでているが、これは、利用している留学生と利用していない留学生との間で、インテーカーの必要性に対する感じ方が異なっているということである。逆にいえば、留学生と留学生アドバイジングをつなぐインテーカーの在り方を見直すことで、より潜在的な需要を掘り起こすことができるかもしれない。そして、l) の「何をする場所かよくわからない」は、留学生がそもそもアドバイジング・サービスの意味を理解していないことを示す項目である。この項目で、利用経験がある留学生と利用経験が無い留学生とで有意差がでるのは当然であるかもしれない。ただ、67.1%の留学生がこのように留学生アドバイジングの意味を理解していないことは、入学当初のガイダンスなどで、よりアドバイジングの意味を周知徹底し、利用できるサービスであることをアピールしていく必要があるかもしれない。

表 10. 留学生アドバイジングの利用経験有無とアドバイジングのイメージとの関係

	利用経験有りグループ	利用経験無しグループ	χ^2 値
	はい	はい	
a) 特別な問題を抱える人が行くところである	20(40.8)	303(51.6)	2.111
b) 悩みや辛い気持ちを打ち明けられる	38(77.6)	393(67.2)	2.234
c) 親身になって相談を聞いてくれる	41(85.4)	415(71.3)	4.417*
d) 相談のために日本語能力が必要である	19(39.6)	309(52.9)	3.156
e) 具体的な問題解決に利用すべきである	29(58.0)	336(57.7)	0.001
f) 相談したら弱い人間だと思われる	6(12.2)	83(14.3)	0.159
g) 相談内容が外部に漏れる恐れがある	11(22.9)	150(25.9)	0.208
h) 相談によって奨学金や指導で不利になる	8(14.8)	97(16.7)	0.005
i) 簡単なことでも相談できる	31(62.0)	337(57.9)	0.318
j) 紹介なしに利用するのは難しい	14(28.0)	259(44.6)	5.155*
k) 自分の問題をよく理解してくれないと思う	15(27.8)	230(39.4)	1.236
l) 何をする場所かよくわからない	11(22.0)	432(70.9)	50.219**

* $p<0.05$ ** $p<0.01$ 数字は有効数、括弧内は%

4. 悩みを感じる程度——留学生の心理的安定性と利用率との関係

(1) 自尊感情と総合的な悩み評価

第二節で述べたように水野は、留学生の被援助志向性に影響を与える項目として「自尊感情」を導入している³。そして「自尊感情」が援助を求める志向に作用する場合のその解釈として水野は、「傷つきやすさ仮説」（自尊感情が低い人は援助を求めることでさらに傷つくことを恐れて結果的に援助を求めない）と「認知的一貫性仮説」（自尊感情が高い人は他者に援助を求めることでプライドが傷つくことを避け、結果的に援助を求めない）の二つの解釈を提示している。

今回の調査では、この心理的な自尊感情を直接評価する項目を挿入することができなかった。しかし水野の評価項目を見ると（脚注3）、留学生アドバイジングの「イメージ」の問題がヘルパーとの間の応答関係の評価に関係するのに対して、この「自尊感情」は、ヘルパーとの関係だけでなく、より広い社会や自己との関係での心理的安定さに関係しているように見える。そのため、「自尊感情」の評価項目がないことの限界を踏まえながら、その「自尊感情」の程度を、留学生が日常的に抱える悩みの程度、として説明できないかと考え、問42-aの「悩みの程度」の留学生による自己評価と利用率との関係を見てみることにした。

まず問42-aで調査した、留学生の悩みの程度の結果を見てみたい。

表 11. 五種の悩みに関する留学生の自己評価 人(%)

	専門研究	人間関係	日本生活	心身健康	卒業後進路
全く悩んでいない	68(9.4)	158(22.1)	179(24.9)	184(25.6)	94(12.9)
あまり悩んでいない	127(17.6)	302(42.2)	315(43.8)	305(42.4)	144(19.8)
少し悩んでいる	315(43.7)	197(27.5)	178(24.8)	181(25.2)	299(41.1)
とても悩んでいる	211(29.3)	59(8.2)	47(6.5)	49(6.8)	190(26.1)
合計	721(100.0)	716(100.0)	719(100.0)	719(100.0)	727(100.0)

表 12. 留学生が感じる悩みの程度

	専門研究	人間関係	日本生活	心身問題	卒業後進路
平均値	2.93	2.21	2.13	2.14	2.81

³ この「自尊感情」の評価項目として水野があげているのは、「私は自分に満足している」「自分は全くだめな人間だと思うことがある」「私はいろいろなよい素質をもっている」「物事を人並み（人と同じくらい）には、うまくやれる」「自分には、自慢できるところがあまりない」「何かにつけて（いろいろな場面で）自分は役に立たない人間だと思う」「私は少なくとも人並み（人と同じくらい）には価値のある人間である」「私は自分を尊敬できる」「自分を敗北者だと思うことがよくある」「自分に対して肯定的である（それで良いと思う）」といったものである。

また、「全く悩んでいない」から「とても悩んでいる」までを1～4の点数に振り分けて、五種類の悩みごとの平均値を見ると表12のようになった。

この数値を見る限りでは、留学生は平均して、「専門研究」と「卒業後の進路」に関しては3点「少し悩んでいる」に近い状態であるが、「人間関係」「日本生活」「心身問題」に関しては2点「あまり悩んでいない」に近い状態であることが読み取れる。

(2) 悩みの程度と利用率との関係

そして、この五種の悩みの程度と、利用率の関係を見てみると以下のようなになる。

表13. 五種の悩みの程度と留学生アドバイジングの利用率の関係

		全く悩んで いない	あまり悩 んでない	少し悩ん でいる	とても悩 んでいる	合計
利 用 率	専門研究に悩むグループ	19.7%	4.7%	5.3%	6.5%	6.9%
	人間関係に悩むグループ	9.7%	3.2%	7.5%	12.1%	6.6%
	日本生活に悩むグループ	8.2%	5.3%	7.2%	8.3%	6.7%
	心身問題に悩むグループ	10.5%	5.1%	6.0%	3.9%	6.6%
	卒業後進路に悩むグループ	9.3%	6.8%	6.6%	6.1%	6.9%

この結果から、二つの傾向を読み取ることができる。一つは、どの種類の悩みにおいても「全く悩んでいない」層において、アドバイジングの利用率が平均より高くなっていることである。そしてもう一つの傾向は、その「全く悩んでいない層」を除くなら、悩みの程度が大きくなるにつれて、アドバイジングの利用率が上昇しているように見えることである⁴。

そしてこの悩みの程度からさらに、五種の悩み評価の点数を合計し、5～20点のレンジにわたる個々の留学生の点数表を作成した後、それをもとに留学生を総合的に「悩んでいない：5～9点」「少し悩んでいる：10～14点」「悩んでいる：15～20点」の三段階のグループに区分した⁵。その新しい「総合的な悩み評価」の指標と、利用率の関係を出してみると表14のようになる。

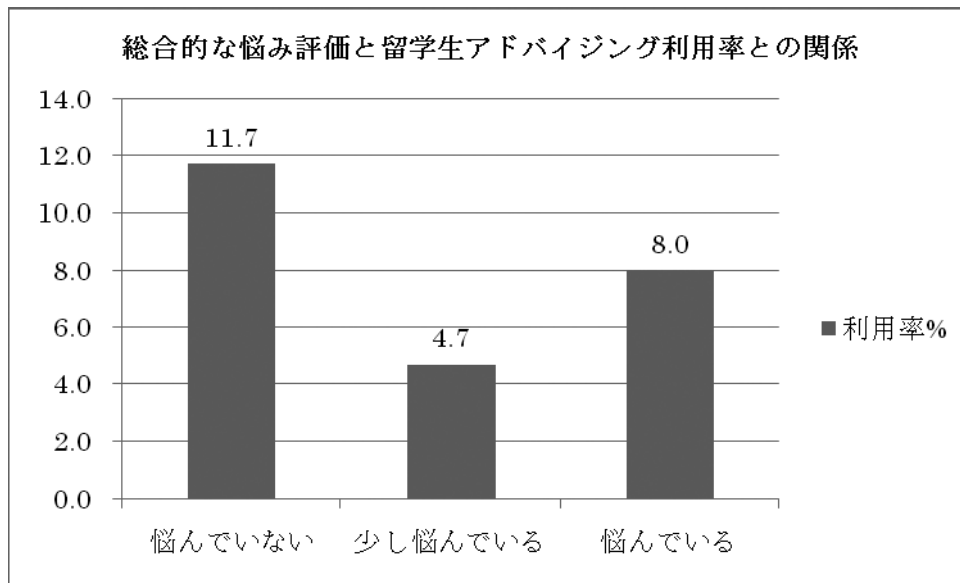
⁴ ただ、心身問題に悩むグループの「とても悩んでいる」層が数値を減少させていることと、卒業後進路に悩むグループが、「全く悩んでいない」の率が高くとも、「あまり悩んでいない」～「とても悩んでいる」の間で大きな利用率の変化を示さず多少減少していることは、ここでの解釈「悩みの程度が大きくなるにつれて、アドバイジングの利用率が上昇しているように見える」にはあてはまっていない。

⁵ この「総合的な悩み評価」により、留学生の心理的な自己評価を代替させることにしたが、しかし悩みの指標をはたして5つに限定させることが妥当かどうかという問題もあり、(最後にのべるように)心理的な自己評価として扱うには、限界があると言わざるをえない。

表 14. 総合的な悩み評価と留学生アドバイジング利用率との関係

	悩んでいない 5~9点	少し悩んでいる 10~14点	悩んでいる 15~20点	合計
利用したことがある	15 (11.7%)	19 (4.7%)	14 (8.0%)	48 (6.6%)
利用したことがない	113 (88.3%)	387 (95.3%)	161 (92.0%)	661 (93.4%)
合計	128 (100.0%)	406 (100.0%)	175 (100.0%)	709 (100.0%)

図 3. 総合的な悩み評価と留学生アドバイジング利用率との関係（グラフ）



この指標でも、留学生アドバイジングの利用率は、「総合的に悩んでいない」グループで高く、また「悩んでいる」グループでも上昇していることが読みとれる。ここで、「総合的な悩みの程度」は、利用率にどのように影響しているのか。

まず理解しやすいのは、「悩んでいる」留学生の利用率が高いことである。水野も、「個人が抱える問題や症状の深刻さと被援助志向性、被援助行動はかねがね関連があるとする結果が出ている」と述べており（水野 2003:39-40）、ここで「悩みの程度の大きさ」が被援助行動に影響を与えていることは読み取れる。しかしそれでは、「総合的に悩んでいない」グループにおける（「総合的に悩んでいる」グループを上回る）利用率を説明できない⁶。

⁶ この「悩んでいない」留学生の利用率が高いことは、本報告での以下の説明以外に別の説明が可能かもしれない。それは、この総合的に悩んでおらずに利用経験のある人々＝過去に悩みをもって留学生アドバイジングを利用していたが現在は悩みをもっていない人々、という説明である。この調査では利用経験を問う際に、一年以内といった期間を設定しなかったため、現在悩んでいるかどうかと、過去に相談したかどうかの指標が時間的にずれている可能性があり、そうした限界がここに表現されている可能性は否定できない。その場合には、この「悩んでいない」留学生の利用と、「悩んでいる」留学生の利用は（極端に言えば）異ならない利用の形式だと言えるだろう。ただ、この後の表 15 の分析では、こうした「悩んでいない」留学生においては、「悩んでいる」留学生と違って、利用経験がある人と無い人との間で、留学

ここには別の説明が必要になるが、水野が「自尊感情」が被援助志向に影響を与える説明で取り上げた「傷つきやすさ」仮説、つまり「自尊感情が低い人は自己に対する認知が否定的で、援助を求めることで更に傷つくことを恐れ、結果的に、援助を求めない」（水野 2003:36）という仮説が逆に反映されていると解釈することはできないだろうか。つまり、総合的に悩みの少ない留学生は、援助を求めることで更に傷つくことを気にする程度が低く、ゆえに悩んでいる留学生よりもアドバイジングを利用しやすくなっているのではないか、ということである。ただ、ここでの分析だけでは、そうした「傷つきやすさ」仮説が、実際に「総合的に悩んでいない」留学生、また「総合的に悩んでいる」留学生の被援助行動にどのような形で作用しているのかを想像することが難しい。

そのため、さらにこの「総合的に悩んでいない」グループの利用者と、「総合的に悩んでいる」グループの利用者に関して、それぞれ一人ずつインタビュー調査を試みた。

5. 留学生アドバイジングの利用の実際——二人の利用者のインタビューから——

本節では、留学生アドバイジングを利用している留学生のうち、「総合的に悩んでいない」グループに属する留学生と、「総合的に悩んでいる」グループに属する留学生それぞれに、インタビュー調査を行った。方法は半構造化インタビューで、以下でとりあげるAさんはスカイプで対話、Bさんは直接面談での対面インタビューである。そして母数の少なさの限界を断ったうえで、二人の留学生のアドバイジング利用を対比させたい。なお被調査者のプライバシーに配慮して、プロフィールや固有名、年月を変更している箇所がある。

（１）「総合的に悩んでいない」グループに属し、留学生アドバイジングを利用する留学生

Aさん、30代後半、男性。インドから00年代後半に、国費留学生として京都大学の博士後期課程に入学。日本滞在後しばらくして家族を呼び寄せ同居。修了した後、現在海外の大学にわたり単身で研究員を務めている。

まずAさんは、京都大学在籍時に、複数の理由で国際交流センターが主催するセミナーや企画を利用していた。授業やセミナーとしては、日本語授業クラスや、留学生対象の交通安全教室があげられる。またAさんは、国際交流センターが企画する、「ホストファミリープログラム」に参加していた。この「ホストファミリープログラム」では、留学生は年に何回か自分の日本人ホストをもつことになるが、Aさんも半年に一度程度、日本の女性ホストを紹介され、食事を行ったり交流を行ったりしている。またAさんは、自身が所属する研

生アドバイジングに関するイメージに有意差が見られなかった。もし利用経験があれば、呼应性への心配の低減につながる、という観点をとるとすれば、「悩んでいる」留学生と「悩んでいない」留学生の間でこうした違いが出ることは説明できないのではないだろうか。

研究所の事務員を通じて、国際交流センターが企画する「フィールトリップ」という留学生対象の交流旅行企画の情報を得て、そしてそれに応募・当選して参加した。そしてその時に、同じ留学生の参加者からKizunaアドバイジングの情報を得ている。

そして来日してから半年後に、Aさんは家族を日本に呼び寄せるという大きな決断をする。そしてその手続きや新しい住居などの契約に関して、情報を得る必要に迫られた。その際に、Aさんは、いったん留学生課に相談に行ったあとで、留学生課からサービス・オフィス、さらにKizunaアドバイジングで相談するのが適当だとアドバイスされ、アクセスしている。その時には、ビザの問題、さらにはアパートメントを借りる時の機関保証の問題などの情報を得た。また住居の問題では、家族で安く入れるところを探すため、公団住宅の情報を得て申し込み、当選して無事入居した。Aさんは現在でも日本語はほとんどできないが、しかし「アドバイジングで非常に英語の上手な相談員がいたので安心して利用できた」、「全員日本語しか話せないようだったら難しかった」、と述べている。

Aさんはこのように国際交流センターやラウンジKizunaに関する情報を得て利用を行っているが、しかし、その家族呼び寄せに関する相談以外は、AさんはKizunaアドバイジングとラウンジKizunaをほとんど利用しなかったという。Aさんは、Kizunaを利用することが目的ではなく、あくまでラウンジKizunaやアドバイジング主催のイベントがあると聞いたらそれに行く、というスタイルで利用をしている。AさんはラウンジKizunaの配信するメーリングリストにも入っておらず、研究所の事務員が流すメールによってその存在を知る。

こうしたAさんの利用は、現在のKizunaアドバイジングに関して比較的に見られる利用の形とすることができる。本報告でこのAさんのKizuna利用に関して注目したいのは、Kizunaで良好な持続的関係を構成することは、Aさんの利用に際してあまり重要な意味を担っていないことである。相談にしても、イベントの利用に関しても、あくまで流れてくる情報をつかみ、その時々で必要に応じてアドバイジングやイベントに参加しており、そこにKizunaと持続的関係をもっていたいという思いをあまり感じるができない。Aさんに、留学生アドバイジング・サービスに関してなにか要望や問題があるかどうかを聞いた時にも、離れたキャンパスでも利用できるようなバスサービスの拡充、Kizunaのオーディオ・ルームをより利用したいといった具体的なアクセスの障害や利用の形式に言及するだけにとどまり、アドバイジングとの関係性についての問題などを述べることはなかった。

(2)「総合的に悩んでいる」グループに属し、留学生アドバイジングを利用する留学生

Bさん、女性、20代前半。台湾出身。2009年に来日し、研究生を半年経て私費留学生として入学。現在修士課程に在籍しているが、修了後は母国に帰国する予定である。

Bさんは、留学生アドバイジングやラウンジKizunaを頻繁に使用している。Bさんが最初にラウンジKizunaにアクセスしたのは、来日してすぐである。Bさんは京都大学の

HP で利用できそうな施設を調べた時に Kizuna のティーチング・アシスタント募集の記事を見て、それに応募した。そのとき TA にはなれなかったが Kizuna の ML に登録して、毎月お知らせのメールをもらうようになった。さらに入学してからは、週に二、三回はラウンジ Kizuna を利用し、また留学生交流イベントにも積極的に参加している。

B さんは、京都大学に来て一番困っていることとして、まず留学生に対する研究のサポートが不十分なことを挙げた。京都大学自体が学生の自主性を重んじる自由な校風であることは有名だが、B さんにはそれが放任主義にも映る。B さんは現在修士論文を書きながらその日本語チェックで困っていること、チューターも先生に頼んでつけてもらっていることを話した。

しかし B さんはこうした研究の問題以上に、自身の研究室での人間関係の問題を語った。B さんの研究室では院生の机がなく研究室に来るも来ないも自由で、先生とのやり取り以外は、他の院生と共にいるのが必然である状況は少ない。そのため、研究で困った時も、資料を集めようにも、助言を得ることができるよう関係にある先輩や同輩がおらず、全然わからない状況だったという。また研究室内での学生同士の交流があっても、日本人学生らに私費留学生である A さんのお金をかせぎながら論文を書くというしんどさや忙しさを理解してもらう機会が少なかった。そのため、時間・金銭的に負担ある付き合いに応じざるをえないことを自身で疑問に感じたこともあった。また、A さんのストレスを他の学生に理解してもらうのが難しかったことなどで、研究室内の日本人学生との間に懸隔が生まれることもあり、一時期はそのことにとっても悩んでいたという。

B さんは、ラウンジ Kizuna は日常的に利用している。そしてそこでは友達をつくるため、勉強をするために利用しているという。そして B さんはアドバイジングにも相談をしている。例えば B さんは勉強に関して調べてもわからないことを相談員に尋ねている。また B さんは、施設の使い方についての情報、例えば図書カードを使う仕方とか、このイベントに参加したい時にはどうするかとかの、情報を収集するためにもアドバイジングを利用している。逆に B さんは、自身の研究室についての悩みや、生活上の問題に関してアドバイジング・サービスに相談はしないという。なぜなら、留学生は学校と生活は分けているからという。B さんは、相談室に相談しても、先生は優しく応答してくれると思うけれども、講座の文脈や私費留学生の立場や学術の面でのサポートがほしい気持ちを、なかなか理解してもらえないのではと感じている。また、人間関係の問題を相談しても、日本人ととりあえず付き合わない方がいいといったアドバイスよりも、やはり日本人と仲良くすべきだといったようなアドバイスになるだろう、と考えている。例外として B さんは、所属学部の相談員の先生を上げているが、その相談員以外は、生活問題や人間関係の問題に関しては知り合いの同国留学生同士で相談するという。

こうした発言を見ると、B さんは Kizuna アドバイジングを、施設などの具体的情報を得るために利用しているように見える。その点で A さんと似ているかもしれないが、しか

し重要なのは、Bさんがこうした研究や具体的情報を得ようと相談する前に、そこで相談しやすい関係やコンテキストがあることを重視しているように見えることである。Bさんは普段接する日本人は自分のことを留学生として扱うのに対して、国際交流センターやKizunaで出会う人は違うと述べる。Kizunaではみんな留学生だから、みんなが情報をシェアしたりするオープンな環境であり、普段の環境とは違う、と述べる。Bさんにとっては、Kizunaで何かを聞くことは、ただ質問することではなくて、そこでのピアとしての関係をつくっていったり維持したりすることでもある。そしてそうした関係を構築することを通じて、同時に身近な問題も楽に聞くことができると感じているようである。たとえ、留学生相談室に対して生活や人間関係の問題を相談しないとしても、その場において関係を作る実践をとおして、研究室では得られていないセーフティな関係性を実践的に取り戻そうとし、同時にその関係性を支えとして積極的に周りにサポートを求めているように思われる。

6. 結論

(1) 考察

本報告では、水野の「被援助志向性」に関する研究を参考にし、留学生のアドバイジングサービスの利用の有無に対して、「デモグラフィック要因」「援助不安」「悩みを感じる程度」の影響の程度を測定することを試みた。

i) 「デモグラフィック要因」

「性別」と「年齢」に関しては、利用率との間で解釈可能な関係が見出せなかった。「出身国」に関しては、(欧米諸国にどの国を入れるか、反対に非欧米諸国として中国を代表させてよいのかといった問題はあるが) カウンセリングへ向かう態度に文化的違いがあるように思われる。欧米、とくにアメリカにおけるカウンセリング文化の存在はよく言われるところであるが、そうした要素が表れているかもしれない。「収入」に関しては、「国元の家族の年収」は、低い層と300万～600万の層において利用率が高い傾向がみられた。また「一か月の生活費」と「奨学金を有無」の項目においては、生活費が低い層や非スカラシップ層が留学生アドバイジングをあまり利用していない傾向が見られる。「文系／理系」の区分では、文理融合系において利用率が少し高かった。「学んでいるキャンパス」の違いでは、吉田キャンパスに通う留学生の方がアドバイジングの利用率が高い傾向が見られた。これは物理的な距離の問題を示しているように思われる。「日本人学生と知り合う機会」、「他の留学生と知り合う機会」と利用率との関係では、どちらにおいても「ほとんど知り合う機会がない」を選んだ留学生は、アドバイジング・サービスをほぼ全く利用していなかった。特に「他の留学生と知り合う機会」の頻度が上がるほど利用率は上昇し、1%水準での有意な相関を示した。また交流する留学生内での「同国異国出身者割合」に関しては、交流する留学生のほとんどが同国人である留学生は、ほぼアドバイジングを利用して

いなかった。「国際交流センターの利用頻度」と利用率の関係では、「2～3ヶ月に一度」を分岐点として、それより利用頻度が少なければアドバイジングを利用する率が低かった。

利用率と強い相関を示していたのは、「他の留学生と知り合う機会」、とくに同国人に限定されない留学生と知り合う機会であったが、これは留学生アドバイジングを利用するときに、他の留学生と知り合う程度のコミュニケーションのスキルが必要であること、そしてそのコミュニケーション・スキルは、同国人留学生と繋がるスキルとは少し違ったものが要求される、ということなのかもしれない。

ii) 「援助不安」

留学生アドバイジングのイメージと利用率の関係では、「親身になって相談を聞いてくれる」「紹介なしに利用するのは難しい」「何をする場所かよくわからない」といった項目で、利用経験有りの留学生と無しの留学生との間に有意な差が見られた。こうした項目に関して、アドバイジングの呼応性のイメージを改善していくことで、より相談に関する需要をほりおこせるかもしれない。

iii) 「悩みを感じる程度」

さらに留学生の「自尊感情」を代替させた「総合的な悩み評価」の指標と利用率との関係では、総合的な悩みの程度が高い留学生と、悩む程度の低い留学生の両極、特に後者の「総合的に悩んでいない」留学生に利用率が高い傾向が見られた。前者の「総合的に悩んでいる」留学生の利用率が高いという結果は、「個人の抱える問題の深刻さが高いほど援助を求める傾向がある」という解釈が可能であるように思われた。しかし、後者の「総合的に悩んでいない」留学生の利用率がそれ以上に高いという結果は、「自尊感情」に関する「傷つきやすさ」仮説の逆解釈のように、「総合的な悩みの程度が低い」留学生は、援助を求めることで傷つくことをそれほど恐れずに相談ができる、という解釈が考えられるのではないと思われる⁷。

iv) 「インタビュー」

最後のインタビューにおいては、総合的な悩みの程度が低く留学生アドバイジングを利用している留学生と、悩みの程度が高く利用している留学生それぞれに、その利用の具体的なプロセスや目的を尋ねた。総合的な悩みの程度が低い留学生のカテゴリーに入る Aさんは、アドバイジングに関してそれを手段的に利用する傾向が強かった。自らが選んだイベントやセミナーには積極的に参加しているが、少なくとも相談担当の教員や Kizuna サポートの相談員、さらにはラウンジ Kizuna における留学生同士の関係構築にはそれほど大きなウェイトを置いていないように思われた。それに対して、総合的な悩みの程度が高い留学生のカテゴリーに入る Bさんは、ラウンジ Kizuna に頻繁に立ち寄り相談員のアドバイジングもこまめに利用していた。しかし、その相談実践は、情報を得ることだけが目

⁷ そしてその場合は、表 14 における「総合的に悩んでいる」留学生の相談率は、「傷つきやすさ」のために、本来相談したい留学生の率よりも低く抑えられた数値、ということになるかもしれない。

的ではなく、相談員やラウンジ Kizuna に訪れる他の留学生とのセーフティな関係や共有しうるコンテキスト（Bさんはそれを「コミュニティ」という言葉で表現した）を作ることとも同時に伴っていた。

こうしたインタビューの結果から考えるなら、「総合的に悩んでいない」で利用する留学生の利用率が高いことは、やはり「傷つきやすさ仮説」の逆解釈、つまりアドバイジングへ援助を求めること自体によって傷つけられる心配を気にせず相談できるから、というように解釈できそうである。そして、Bさんがそうした相談に関する傷つきやすさのために研究室の日本人学生になかなか相談できない反面で、Kizuna において比較的楽に相談をしているということは、「総合的に悩んでいる」留学生において、相談以前に（もしくは相談と同時に）、傷つけないコンテキストを共有できる場や関係性を構築することが、相談することの可能性を高める一つの手段となりうることを示唆しているように思われる。

参考までに、「悩んでいない」で利用する留学生のグループと「悩んでいて」利用する留学生のグループのそれぞれにおいて、留学生アドバイジングの利用経験がある留学生と利用経験がない留学生とで、留学生アドバイジングに関する「イメージ」の差が見られるかどうかを検証してみた。その結果が表 15 である。

表 15. 総合的悩み評価ごとのアドバイジング利用有無とアドバイジング・イメージの関係

	悩んでないグループ			悩んでいるグループ		
	利用有り	利用無し	χ^2 値	利用有り	利用無し	χ^2 値
a) 特別な問題を抱える人が行くところである	8(66.7)	47(50.5)	1.109	7(50.0)	72(51.8)	0.016
b) 悩みや辛い気持ちを打ち明けられる	9(75.0)	68(74.7)	0.000	12(85.7)	80(57.6)	4.207*
c) 親身になって相談を聞いてくれる	10(90.9)	69(75.8)	1.279	13(92.9)	82(59.9)	5.930*
d) 相談のために日本語能力が必要である	3(25.0)	37(39.8)	0.985	8(57.1)	79(56.8)	0.000
e) 具体的な問題解決に利用すべきである	8(61.5)	52(57.1)	0.090	8(57.1)	84(60.9)	0.074
f) 相談したら弱い人間だと思われる	0(0.0)	7(7.7)	0.990	5(35.7)	28(20.1)	1.823
g) 相談内容が外部に漏れる恐れがある	2(18.2)	11(12.2)	0.310	4(28.6)	53(38.1)	0.497
h) 相談によって奨学金や指導で不利になる	1(8.3)	9(10.0)	0.033	5(35.7)	32(22.9)	1.153
i) 簡単なことでも相談できる	9(69.2)	64(70.3)	0.007	10(71.4)	60(43.2)	4.094*
j) 紹介なしに利用するのは難しい	5(38.5)	31(34.1)	0.097	5(35.7)	78(56.1)	2.133
k) 自分の問題をよく理解してくれないと思う	2(18.2)	20(22.2)	0.094	7(50.0)	74(52.1)	0.023
l) 何をする場所がよくわからない	3(23.1)	64(64.6)	8.262**	4(28.6)	117(81.3)	19.74**

* $p<0.05$ ** $p<0.01$ 数字は質問に「はい」と答えた人の数、カッコ内は%

この表では、「総合的に悩んでいない」グループは、「呼応性への心配」がアドバイジン

グ利用に大きな影響を与えていないようにみえるのに対して、「総合的に悩んでいる」グループでは b)、c)、i) 等の「応答性への心配」の項目に関して利用者と非利用者の間で 5% 水準での有意な差が出ている。この結果を見る限り、留学生アドバイザーに対して「総合的に悩んでいる」留学生のアクセス率を上げるためには、「応答性のイメージ」の改善が重要である、という結論が導けるかもしれない。ただこの分析で「自尊心」を代替させた問 42 - a の「悩みの程度」の指標には (イ)「人間関係の悩みの程度」が含まれているため、対他関係のイメージと関連のある「応答性への心配」との間に、ある種の疑似相関（人間関係に悩んでいる人は、ヘルパーから応答してもらえるかどうかをより強く悩む傾向がある）が表れている可能性がある。これは、「イメージ」や対他関係とは独立した形で「自尊心」を調査できる項目を想定しなかったことの限界である。そのため、アドバイザーの「イメージ」を改善することがはたして、「自尊心」に関する「傷つきやすさ」という「壁」への有効な対処法になるのかどうかについては、判断を保留しておきたい。

(2) 提言

ここで、問 44 で、留学生アドバイザーの利用以外にラウンジ Kizuna を利用していると回答する留学生において、留学生アドバイザーの利用率や、また留学生アドバイザーを利用したいと思ったことがあるかどうか（問 47）、を調べてみると、ともに有意な相関が見られた。

表 16. アドバイザー以外のラウンジ Kizuna 利用と Kizuna アドバイザー利用との関係

		Kizuna のアドバイザー利用		合計
		利用有り	利用無し	
アドバイザー以外 で Kizuna 利用	利用有り	48 (23.2%)	159 (76.8%)	207 (100.0%)
	利用無し	33 (6.0%)	514 (94.0%)	547 (100.0%)
合計		81 (10.7%)	673 (89.3%)	754 (100.0%)

$$\chi^2 = 46.093 \quad p < 0.01$$

表 17. アドバイジング以外のラウンジ Kizuna 利用と Kizuna アドバイジングの利用意思との関係

		Kizuna のアドバイジング利用		合計
		思ったこと有り	思ったこと無し ・知らない	
アドバイジング以外 で Kizuna 利用	利用有り	63 (31.2%)	67 (68.8%)	202 (100.0%)
	利用無し	90 (17.0%)	440 (83.0%)	530 (100.0%)
合計		153 (20.9%)	579 (79.1%)	732 (100.0%)

$$\chi^2 = 17.856 \quad p < 0.01$$

これをみると、アドバイジング以外の Kizuna 利用者は、有意に留学生アドバイジングを利用する傾向が高い。ゆえに冒頭でのべたように Kizuna 利用と留学生アドバイジングをつなげアドバイジングをより留学生に身近なものにする京都大学アドバイジング体制第三期の試みは、一定の成功を収めていることが読み取れる。

ただ、京都大学の留学生サポートの展開の中では、留学生が留学生アドバイジングに相談する選択をする際にどのような変数が働いているのかという点に関しては、まだ十分に考察されてはいなかったように思われる。本報告では、最終的に、「自尊感情」の「傷つきやすさ」仮説のように、「総合的な悩みの程度の高さ」がアドバイジングの利用に際して、否定的な影響を及ぼしている可能性があることを明らかにし、その結果、利用率が高い「総合的に悩んでいる」留学生と「総合的に悩んでいない」留学生それぞれで、アドバイジングにアクセスする形式に違いがあることを示唆することができた。もしこの二つのグループで異なった態度でアドバイジング利用がなされているとすれば、それら二つのグループの異なった需要に応じて、アドバイジングの方でも複層的なアプローチをしていく必要があるように思われる。心理的な相談業務に携わっていない報告者にとって、現場に提言を行うこと自体が力量の範囲を大きく超えているが、それを踏まえてこの分析から考えられる選択肢を簡単に記述してみたい。

まず「総合的に悩んでいて」アドバイジングを利用する留学生は、B さんのように、アドバイジングへの相談で傷つく不安を低減するための安定したそしてピアに近い文脈を求める傾向があることを考えて、相談員と彼ら留学生との関係を考えていく必要があるだろう。もちろん、Kizuna での相談サポートの開設は、そうした相談員と相談者との間の溝を低くするという意味で重要な試みであるが、B さんの語りからは、相談に際して、なかなか年齢や社会的地位の異なる相談員に対してピアな関係を見出すことが難しい問題もあることが読み取れる。それに際して、より対等で文脈を共有しやすくピアな立場に立つことが可能な留学生の TA をうまく活用したり、留学生同士のグループワークを活用するといったことが考えられないだろうか。

さらに、こうした「総合的に悩んでいる」留学生に対して、「仮に」その傷つきやすさの「壁」を低くするために留学生アドバイジングの「応答性のイメージ」を改善させる試みが有効だとすれば、そうした（留学生アドバイジングを利用していない留学生が持つ）「悩みや辛い気持ちを打ち明けられる」「親身になって相談を聞いてくれる」「簡単なことでも相談できる」といったイメージを強化していくことが必要になるかもしれない。例えば、相談以前に応答する相談員の顔を見えやすくするような努力——HP を活用し、プロフィールや顔写真を載せる、専門とする問題や関心を提示する、相談員のブログを開始するといった方向——や、HP や資料を見ただけで留学生が相談を疑似体験し「応答性への心配」を低減させることができるように、実際の相談のプロセスや経緯を目に見えるようにする、というアピールが考えられる。

次に、「総合的に悩んでいない」留学生が留学生アドバイジングを利用しやすくするためには、Kizuna やアドバイジングの関係に巻き込んでいくよりも、むしろ「情報の流通」が重要になるのかもしれない。つまり、その状況それぞれに応じて必要な情報を集めようとする留学生にとって、その情報利用にフレキシブルに応答できるように体制を整える、という努力が考えられるのではないか。もちろん、A さんがアドバイジングへ相談することを他の留学生に勧められたように、Kizuna にアクセスする留学生が、そこで培われるネットワークを通じて、留学生アドバイジングで提供できる情報やサービスの詳細を流してくれることは、有力な伝達手段となっているはずである。ただ、それ以外にも、こうした留学生は必ずしも留学生アドバイジングに直接コミットする必要性が少ないことを考慮すれば、HP などに、留学生が困ったことに関する対処の方法や必要とする経緯を、Q&A の蓄積という形でリソース化し、容易に検索できるようにすることも重要であるように思われる。現在は、相談室でも、留学生が日常生活で困る可能性がある、住居契約、公共料金、保険といったやり取りを翻訳し、留学生が利用しやすいようにデータ化している。そうしたデータベースのさらなる拡充は、こうした需要に答えていくことであると思われる。

本報告は、多くの分析的な限界があるが、二つの問題点を提示しておきたい。一つは、留学生アドバイジングというフォーマルなサポートのみに議論を集中させることで、留学生個々人が持つパーソナルなネットワーク的資源の意味を掬い取ることができなかったことである。もしパーソナルなネットワーク資源によって多くのサポートが引き出せるのであれば、フォーマルなサポートをどの領域に拡充していくかの判断も異なっていくように思われる。さらにもう一つ問題なのは、「自尊感情」に関する調査項目を調査票に盛り込むことができなかったことである。結局「総合的な悩みの程度」でそれを代替させたが、ゆえにこうした独立しうる「自尊感情」を盛り込んだ別の調査では異なった結果が得られる可能性がある。留学生が留学生アドバイジングにアクセスする際の「壁」に関するさらなる調査が行われることを期待したい。

参考文献

大東祥孝、「アドバイジングと精神医学：大東祥孝 国際交流センター教授 退職インタビュー」『多文化交流フォーラム第五号』京都大学国際交流センター、2010.

水野治久、『留学生の被援助志向性に関する心理学的研究』風間書房、2003.

南砂、「留学生の相談体制について」『留学交流 2001 年 11 月号』日本国際教育協会.

箕口雅博、「留学生の心のケアと多様なアプローチの必要性について」『留学交流 2003 年 11 月号』日本国際教育協会.

寅野滋、「東京大学における留学生相談体制」『留学交流 2001 年 11 月号』日本国際教育協会.

吉川明美、「広島修道大学における留学生へのサポート体制」『留学交流 2002 年 11 月号』日本国際教育協会.

第四章

留学生と家族関係

赤枝香奈子

はじめに

自分が生まれ育った国とは異なる国で暮らすということは、楽しみや刺激と同時に、さまざまなストレスをももたらす。もちろん、そのとらえ方は個々人によって異なるが、言葉も通じ、土地勘もある国で暮らす場合に比べると、言葉も十分に習得していない、異文化の国で暮らす場合には、母国では一人で判断したり解決できたことでも、他者に尋ねたり、相談したりしなければならないことが多くなる。どのような人であれ、相対的に他者への依存度は高くなる。そのように考えると、留学生活を送る上で、人間関係が及ぼす影響は非常に大きいと言えよう。では、京都大学に留学している人々は、どのような人間関係を形成しているのだろうか。本章では留学生の人間関係、特に家族との関係について留学生アンケートをもとに考察したい。

1. 留学生と家族関係

留学生の中には、家族—ここでは、親きょうだいではなく、配偶者やパートナー¹、子どもを指す—がいる人もいる。その場合、本国に家族をおいて単身で留学する人もいれば、家族と一緒に日本で生活している人もいる。あるいは、留学期間中に知り合った相手と一緒に暮らし始める場合もある。横田・白土によると、米国の NAFSA では、留学生の学費と生活費、その配偶者と子どもの生活費から、米国で給付される奨学金の額を差し引いて、彼らが消費する外貨の額を算出することで、留学生の受け入れが受け入れ国にどの程度の経済的利益を与えるか算出し、それをホームページで公表しているという（横田・白土 2004: 178）。しかし日本では、「家族数の統計がないだけでなく、家族同伴は勉学に専念すべき学生にあるまじき行為であるという目で見える人々もいる」という（同 179）。また渡部によれば、「留学生のなかに、彼らの家族を母国から帯同している者がいることは、学内のものであっても留学生に接したことのない学生、教職員にはあまり知られていないのではないだろうか」（渡部 2008: 336）とのことである。このように、留学生が母国から連れてくる家族（帯同家族）については、日本ではまだ十分に研究されていないどころか、認知もされていない状況といえる。

¹ 現在、世界のいくつかの国や地域では、同性間の結婚やパートナーシップ登録の制度が存在する。留学生の中にもそれらの制度が存在する国や地域から来日する人々がいる。また男女のカップルであっても、正式な結婚をしない事実婚のような場合もある。そこで家族関係について尋ねる際、婚姻カップルにおける妻や夫を意味する「配偶者」に加え、同性カップルや事実婚の相手の意味も含む「パートナー」という用語を併記し、質問票を作成した。

これまでの京都大学留学生アンケートの報告書でも、家族関係に特化して分析を行った論文はない。先行研究では、「留学生のうち大学院レベルの留学生には既婚者が多い。従って、大学院レベルの留学生を多く受け入れている研究型大学では留学生の家族同伴者が目立つ」（横田・白土 2004: 178）、「2007年5月現在、全留学生の約25%が大学院生であるが、国立大学法人であるところの割合はさらに高くなり、約65%が大学院生である。つまり、大学院生のなかには結婚をしている者も少なからず存在し、来日時に帯同あるいは、来日後生活基盤が安定してから家族を呼び寄せるケースがしばしば見られるのである」（渡部 2008: 336）と、漠然とではあるが、大学院、特に国立大学法人では家族連れの留学生が少なくないことが指摘されている。国立大学法人であり、また大学院生の留学生が多い京都大学でも、家族を帯同している留学生は少なからずいると思われる。そこで本章ではまず、京都大学の留学生のうち、家族と一緒に生活している人がどれくらいいるかを確認したのち、家族と一緒に生活している人がどのような人々かを丁寧に見ていくことにする。

なお、家族と一緒に生活しているかどうかについては、後述の通り、ジェンダー差が存在する。そこでまず、今回の調査における男女比を確認しておく、女性350人（45.9%）、男性411人（53.9%）、無回答2名で、女性の方がやや少なくなっているが、極端なひらきはない。以下、ジェンダー差を見る際、この数値が基準になる。

2. 同居／非同居

2. 1 家族と一緒に生活しているかどうか

問20および問20-bの回答から、留学生の家族関係を整理すると以下の通りである。

表1

問20「あなたは、家族と一緒に日本で生活していますか」	人	%		
はい	135	17.7%	→	問20b いいえ（＝「家族と一緒に日本で生活していない」）626人の内訳
いいえ	626	82.0%		人(全体比)
無回答	2	0.3%		単身：母国に配偶者や子どもがいる
合計	763	100.0%		50(6.6%)
				独身：母国につき合っている人がいる
				81(10.6%)
				独身：日本につき合っている人がいる
				88(11.5%)
				独身：つき合っている人はいない
				387(50.7%)
				その他
				5(0.7%)
				無回答
				15(2.0%)

表1の通り、家族と一緒に生活している人の割合は17.7%となっている。これは前回2008年度の調査の際の17.4%と比べてもほとんど変化はない。

以下ではまず、家族と一緒に生活している留学生（「同居」と呼ぶ）と、家族と一緒に

生活していない留学生（「非同居」と呼ぶ）を比較したのち、さらに、家族と一緒に生活している留学生と、家族を母国に残して単身で留学している留学生（「単身」と呼ぶ）を比較して見ていきたい。

2. 2 家族と一緒に生活している人のプロフィール

2. 2. 1 性別、京都大学における身分、文系／理系

前述の通り、留学生のうち、配偶者／パートナーや子どもなど、家族と一緒に生活している人は、763 人中 135 人である。この 135 人について、性別、京都大学における身分、文系／理系の別についてまとめたものが表 2 である。

表 2 家族と一緒に生活している人のプロフィール (人、%)

		同居者		非同居者		回答者全体	
性別	女性	41	30.4%	307	49.0%	350	45.9%
	男性	93	68.9%	318	50.8%	411	53.9%
	無回答	1	0.7%	1	0.2%	2	0.3%
	計	135	100.0%	626	100.0%	763	100.0%
身分	学部生	1	0.7%	37	5.9%	38	5.0%
	研究生・聴講生	9	6.7%	87	13.9%	96	12.6%
	修士課程	13	9.6%	209	33.4%	223	29.2%
	博士課程	111	82.2%	227	36.3%	339	44.4%
	上記以外の身分	0	0.0%	56	8.9%	56	7.4%
	無回答	1	0.7%	10	1.6%	11	1.4%
計		135	100.0%	626	100.0%	763	100.0%
文理	文系	21	15.6%	180	28.8%	202	26.5%
	理系	92	68.1%	357	57.0%	450	59.0%
	文理融合系	12	8.9%	52	8.3%	64	8.4%
	未決定・無回答	10	7.4%	37	5.9%	47	6.2%
	計	135	100.0%	626	100.0%	763	100.0%

同居者のうち、女性は約 3 割であるのに対し、男性は 7 割弱であり、一見して男性が多い。さらに、回収票全体に男女差がほとんどないことを考え合わせると、家族と一緒に生活している人に男性が多いことは明らかであり、その差は統計的にも有意である ($\chi^2=15.25^{***2}$)。

次に京大における身分別に見てみると、家族と一緒に生活している人は、学部生が 1 人、研究生・聴講生が 9 人であるほかは、修士課程の学生が 13 人、博士課程の学生が 111 人と、大半が大学院、特に博士課程に所属している学生であり、家族と一緒に生活している人の 8 割以上を占めている。

² 男女の比較、および文系／理系の比較には、 χ^2 乗検定を用いた。 χ^2 乗値に添付してある「*」「**」「***」は、それぞれ 5%、1%、0.1%水準で有意であることを示している。

また、文系／理系の別でも差が見られる ($\chi^2=9.88^{**}$)。家族と生活している人は、文系 202 人中 21 人、理系 450 人中 92 人であり、文系では回答者の約 1 割、理系では約 2 割の人が家族と一緒に生活している。同居者の中に占める理系の割合は、回答者全体に見る理系の割合よりも高い。これは大学院生および研究生・聴講生のみのデータを取り出した場合にも言えることである。

なお、以下の表 3 の通り、回収票における留学生の性別と文系／理系の別には明らかな相関があり ($\chi^2=42.06^{***}$)、文系では女性 64.2%、男性 35.8%であるのに対し、理系では女性 37.6%、男性 62.4%となっている（文理融合系は、女性 52.4%、男性 47.6%）。

表 3 回収票における京大身分と文理、ジェンダー (人、%)

	文系			理系		
	女性	男性	計	女性	男性	計
学部の正規学生	2 1.6% (33.3%)	4 5.6% (66.7%)	6 3.0% (100.0%)	14 8.3% (45.2%)	17 6.0% (54.8%)	31 6.9% (100.0%)
大学院修士課程の 正規学生	52 40.3% (73.2%)	19 26.4% (26.8%)	71 35.3% (100.0%)	58 34.3% (47.5%)	64 22.8% (52.5%)	122 27.1% (100.0%)
大学院博士課程の 正規学生	23 17.8% (47.9%)	25 34.7% (52.1%)	48 23.9% (100.0%)	76 45.0% (32.2%)	160 56.9% (67.8%)	236 52.4% (100.0%)
研究生・聴講生	23 17.8% (62.2%)	14 19.4% (37.8%)	37 18.4% (100.0%)	13 7.7% (29.5%)	31 11.0% (70.5%)	44 9.8% (100.0%)
一般交換留学生	6 4.7% (75.0%)	2 2.8% (25.0%)	8 4.0% (100.0%)	0 0.0% (0.0%)	3 1.1% (100.0%)	3 0.7% (100.0%)
KUINEP 学生	8 6.2% (61.5%)	5 6.9% (38.5%)	13 6.5% (100.0%)	0 0.0% (0.0%)	2 0.7% (100.0%)	2 0.4% (100.0%)
日本語・日本文化 研修留学生	11 8.5% (84.6%)	2 2.8% (15.4%)	13 6.5% (100.0%)	0 0.0% (0.0%)	0 0.0% (0.0%)	0 0.0% (0.0%)
短期交流学生	1 0.8% (100.0%)	0 0.0% (0.0%)	1 0.5% (100.0%)	5 3.0% (71.4%)	2 0.7% (28.6%)	7 1.6% (100.0%)
その他、無回答	3 2.3% (75.0%)	1 1.4% (25.0%)	4 2.0% (100.0%)	3 1.8% (60.0%)	2 0.7% (40.0%)	5 1.0% (100.0%)
計	129 100.0% (64.2%)	72 100.0% (35.8%)	201 100.0% (100.0%)	169 100.0% (37.6%)	281 100.0% (62.4%)	450 100.0% (100.0%)

ただし、女性が多い文系においても、家族と一緒に生活している女性は9人（文系女性回答者の7%）、男性は11人（文系男性回答者の15.3%）と、人数も割合も、男性の方が多くなっている。

まとめると、家族と一緒に生活しているのは、男性、理系、博士課程の留学生が多いと言える。よって以下では、ジェンダー、京大における身分、文系／理系の別に注意しながら分析を進めていく。

なお、表は省略するが、学部／研究科別に見た場合、留学生のうち2割以上が家族と一緒に生活している学部／研究科は、エネルギー科学研究科（29.4%）、農学部／農学研究科（27.2%）、医学部／医学研究科（25.5%）、生命科学研究科（25%）、工学部／工学研究科（21.6%）である。

地域別に見てみると、家族と一緒に生活している留学生が多い地域から、アフリカ（当該地域出身留学生の54.5% 以下同）、南アジア（47.2%）、西アジア（40.0%）、北米（28.6%）、東南アジア（27.1%）、オセアニア（14.3%）、ヨーロッパ（11.3%）、東アジア（9.9%）、中南米（4.5%）となっている³。

2. 2. 2 学位取得希望の有無と語学力

前節で、家族がいる留学生のおおまかなプロフィールが確認されたが、以下では同居と非同居を比較しながら、同居の特徴を考察していきたい。

まず、学位取得希望と語学力について見てみよう。

問8の学位取得について尋ねた質問に対する回答では、同居のうち、学位取得を目的としているのは、97.8%（131人）であるのに対し、非同居の場合、学位取得を目的としているのは、89.7%（551人）である⁴。

同居の場合、博士課程の学生が多いので、当然のことながら博士の学位取得を目指している者が多い（表4）。京大における身分ごとに確認した場合、博士課程では同居／非同居でほとんど差はなく、同居の98.2%、非同居の97.3%が博士の学位取得を目指している。ただし、修士課程の場合、同居の84.6%が修士の学位取得を目指しているのに対し、非同居の場合は74.3%とやや低くなっている。

次に、同じく問8の回答から、学位プログラムの主要な教授言語を見ておきたい（表4）。同居の場合は英語と答えた人が6割以上で、非同居の場合とは英語と日本語の比率がほぼ逆になっている。これもやはり、同居の場合、理系、博士課程学生が多いことによるものと考えられる。

³ 人数の少ない中央アジア、アジア（分類無）は除く。表25を参照のこと。

⁴ 非同居全体で学位取得を目的としている人が少なくなっているのは、全員が非同居に含まれる、一般交換留学生、KUINEP学生、日本語・日本文化研究留学生、短期交換留学生で学位取得を目指す者が少ないためである。

表4 同居／非同居と取得を目指している学位の種類（問 8-a）及び学位プログラムの
主要な教授言語（問 8-b）（人、%）

		同居		非同居		合計	
問 8-a 取得目的 学位	博士	115	87.8%	308	55.9%	423	62.0%
	修士	15	11.5%	213	38.7%	228	33.4%
	学士	1	0.8%	24	4.4%	25	3.7%
	無回答	0	0%	6	1.1%	6	0.9%
	計	131	100%	551	100%	682	100.0%
問 8-b 主要教授 言語	日本語	47	35.9%	326	59.8%	373	55.2%
	英語	81	61.8%	188	34.5%	269	39.8%
	その他	2	1.5%	17	3.1%	19	2.8%
	無回答	1	0.8%	14	2.6%	15	2.2%
	計	131	100%	545	100%	676	100.0%

表5 同居／非同居と現在の英語能力（問 36）及び日本語の必要性（問 35）
（人、%）

		同居		非同居		全体	
問 36 現在の英 語力	ほとんどできない	5	3.7%	16	2.6%	21	2.8%
	日常生活でのコミュニケーションができる	9	6.7%	86	13.8%	95	12.6%
	教科書を読み、授業をほぼ理解できる	11	8.2%	92	14.8%	103	13.6%
	レポートを書き、授業で質疑ができる	13	9.7%	124	19.9%	137	18.1%
	論文を読んだり書いたりし、専門的なことを議論できる	96	71.6%	304	48.9%	400	52.9%
	計	134	100.0%	622	100.0%	756	100.0%
問 35 日本語 必要 性	日常生活でも、授業・研究でも 必要ない	3	2.3%	16	2.6%	19	2.5%
	入門・初級レベル（授業、研究ではほとんど必要ないが、日常生活ができる）が必要	45	33.8%	83	13.3%	128	16.9%
	中級レベル（教科書を読み、授業をほぼ理解できる）が必要	37	27.8%	103	16.5%	140	18.5%
	中上級レベル（レポートを書き、授業で質疑ができる）が必要	22	16.5%	133	21.3%	155	20.5%
	上級レベル（論文を読んだり書いたりし、専門的なことを日本人と同等に議論できる）が必要	26	19.5%	289	46.3%	315	41.6%
	計	133	100.0%	624	100.0%	757	100.0%

関連する質問として、問 36「あなたの英語力はどうのくらいですか」に対する回答を見ると、同居の場合は、「英語で論文を読んだり書いたりし、専門的なことを議論できる程度」と答えた人が、7割以上となっており、同居の場合は、英語力が高い人が多い。

一方、日本語能力の必要性について尋ねた問 35 の回答では、同居の場合、最も多いの

は入門・初級レベルで、6割強の人が、中級レベル以下と答えている。それに対し、非同居の場合、最も多いのは上級レベルで、中上級レベル以上が必要と考えている人が6割強以上となっている。

これらの留学生の語学力に関連する質問の回答から、同居の場合は、京都大学における研究・教育生活は英語が中心であり、少なくとも大学の中にいる限りは日本語の必要性はそれほど高くない人が多いと考えられる。

2. 3 誰と一緒に、いつから生活しているか

次に、同居の人が一緒に生活している家族が誰で、いつから一緒に生活しているか、また、なぜ一緒に生活しているかについて考察したい。

一緒に生活している家族が誰かを尋ねた問 20-a の回答では、配偶者／パートナーと答えた人が同居の 95.6% (129 人)、子どもと答えた人は 56.3% (76 人) である。

では、それらの家族とはいつから同居を始めたのだろうか。問 20-c の回答から配偶者／パートナーとの同居開始時期について見ると、最初（来日時）から一緒に生活している人は 30.6%、自分が日本に来た後に来日したのは 54.5%、日本で知り合ってから結婚／同居を始めたのは 7.5% である。ここには、性別による差が見られる。女性の場合、最初から同居している人は全体の 4割強であるのに対し、男性の場合は全体の 4分の1程度で、約 6割の人が、自分が来日後に配偶者／パートナーが来日している（表 6）。

表 6 ジェンダーとパートナーとの同居開始時期（問 20-c） (人、%)

	最初（来日時）から	自分が日本に来た後に来日	日本で知り合ってから結婚／同居開始	無回答	計
女性	17 42. 5%	15 37. 5%	3 7. 5%	5 12. 5%	40 100%
男性	24 25. 5%	58 61. 7%	7 7. 4%	5 5. 3%	94 100%
計	41 30. 6%	73 54. 5%	10 7. 5%	10 7. 5%	134 100%

子どもについても、男性の場合は 49 人が子どもと生活しているが、最初から同居している人はそのうちのわずか 3 人 (6.1%) で、自分が来日後に日本にやってきた人が 35 人 (71.4%) と、最も多くなっている。女性の場合は、子どもと一緒に生活している 26 人のうち、最初から子どもと同居している人と、日本に来てから子どもが生まれた人とが同数 (各 10 人、38.5%) で、自分が日本に来た後に子どもが来日したという人は 5 人 (19.2%) にとどまる。

2. 4 同居を始めた理由

家族がいても、日本で一緒に生活していない場合もある。今回の調査では、50 人の人が本国に配偶者や子どもがいるものの、単身で留学している。留学生が家族と同居する場合、それはどのような理由によるのだろうか。同居を始めた理由を尋ねた問 20 - d の回答から推測したい。

家族と同居を始めた理由として、特にあてはまるもの 3 つを選んでもらったところ、最も多くの人を選んだのは「家族と一緒に暮らすのが当たり前だから」で、同居の約 66%にあたる 89 人があてはまると答えている。そのほか、選んだ人数が多い理由を順に上げると、「学業の励みになるから」(40 人, 29.6%)、「一人暮らしだと寂しいから」(38 人, 28.1%)、「困難や成功を分かち合えるから」(38 人, 28.1%)、「日本滞在は配偶者／パートナーにとって有意義だと思ったから」(25 人, 18.5%)、「日本滞在は子どもにとって有意義だと思ったから」(19 人, 14.1%) などとなっている。しかし、「家族と一緒に暮らすのが当たり前」以外は、すべて、それぞれの選択肢を選んだ人は 3 割に満たず、「家族と一緒に暮らすのが当たり前」を選んだ人だけが突出して多い。よって、家族と一緒に暮らすことは何か理由があって、というよりも、むしろ「家族がいるからには同居が当たり前」と考え、日本で一緒に生活している人が多いと言えよう。それは裏を返せば、家族が日本に来る積極的理由はあまり見出せないということかもしれないし、あるいはそれ以外の理由は人それぞれであるため、各選択肢に分散しているとも考えられる。

ただ、これらの回答すべてに際立った男女差は見られなかったが、「困難や成功を分かち合える」「研究／学業の励みになる」などでは、やや男女差が見られ、前者を選択したのは女性 16 人（女性同居者の 39%）、男性 22 人（男性同居者の 23.7%）、後者については女性 14 人（34.1%）、男性 26 人（28%）であった。記述回答でも「お互いの研究を刺激しあい、家族と共に住むことが大きな心の支えとなっている」との女性（研究生）の回答が見られたが、女性の方が、家族と一緒に暮らすことに、精神面、研究面にプラスの影響を見出しているかもしれない。

また、問 20-d の「その他」に書かれている記述回答を見ると、「夫も学生だから」（院、女性）、「私の配偶者は京都大学の学生です」（院、男性）、「配偶者もここで同様に研究しなければならなかった」（研究生、男性）、「妻もまた日本で学んでいる」（院、男性）、「彼女は京都で学んでいる」（院、男性）、「夫婦で京都大学生」（研究生、女性）など、配偶者／パートナーも京都大学もしくは日本で学んでいるとの回答が見られた。

2. 5 生活

家族と一緒に暮らす場合は、一人暮らしなどの場合とは、生活そのものにどのような違いが見られるだろうか。まず考えられるのは、生活費の違いである。家族がいれば当然、一人暮らしよりは生活費が多くかかることが想像される。そこで、一ヶ月の生活費を同居

／非同居別に見てみると、同居の場合、10～15 万円未満が最も多く、5～10 万円未満が次に多い。非同居の場合は、逆に 5～10 万円未満が最も多く、10～15 万円未満が次に多くなっている（表 7）。

表 7 同居／非同居と一ヶ月の生活費 (人、%)

	同居		非同居		合計	
5 万円未満	4	3.0%	41	6.6%	45	6.0%
5～10 万円未満	50	37.0%	270	43.5%	320	42.4%
10～15 万円未満	59	43.7%	233	37.6%	292	38.7%
15～20 万円未満	15	11.1%	66	10.6%	81	10.7%
20～25 万円未満	6	4.4%	8	1.3%	14	1.9%
25～30 万円未満	0	0.0%	2	0.3%	2	0.3%
30 万円以上	1	0.7%	0	0.0%	1	0.1%
計	135	100.0%	620	100.0%	755	100.0%

現在の住居について見たところ、同居、非同居ともアパート・マンション・文化住宅が最も多く、約 64 %の人が生活している。それ以外の住居を見てみると、同居の場合は非同居に比べ「一戸建て、間借り」に住んでいる人の割合が高い。

表 8 同居／非同居と現在の住居（問 18） (人、%)

	同居		非同居		合計	
京都大学の国際交流会館	19	14.2%	93	14.9%	112	14.8%
その他の外国人留学生用宿舎	0	0.0%	35	5.6%	35	4.6%
京都大学の学生寮	0	0.0%	46	7.4%	46	6.1%
アパート・マンション・文化住宅	87	64.9%	400	64.1%	487	64.2%
一戸建て、間借り	14	10.4%	37	5.9%	51	6.7%
その他	14	10.4%	13	2.1%	27	3.6%
計	134	100.0%	624	100.0%	758	100.0%

では、非同居の場合よりも相対的に多くかかる生活費はどのようにまかなわれるのだろうか。問 15 の国元の家族・親類に留学費用をサポートしてもらっているかどうか尋ねた質問に対する回答から、同居の場合、サポートしてもらっていない人が 8 割以上と、非同居とは大きな差があることがわかった。

表 9 同居／非同居と国元の家族・親類からの留学費用サポート（問 15）

(人、%)

	同居		非同居		合計	
サポート有	21	15.8%	248	40.9%	269	36.4%
サポート無	112	84.2%	358	59.1%	470	63.6%
計	133	100.0%	606	100.0%	739	100.0%

以下の通り、同居が多い大学院修士課程、博士課程別に限って見ても、同居の場合は家族・親類から留学費用をサポートしてもらっている人が少ない。

表 10 大学院課程別同居／非同居と国元の家族・親類からの留学費用サポート（問 15）

(人、%)

	修士		博士	
	同居	非同居	同居	非同居
サポート有	3 (23.1%)	109 (54.2%)	16 (14.7%)	55 (24.7%)
サポート無	10 (76.9%)	92 (45.8%)	93 (85.3%)	168 (75.3%)
計	13 (100.0%)	201 (100.0%)	109 (100.0%)	223 (100.0%)

このように、家族と一緒に生活している場合、生活費が多くかかるにもかかわらず、留学費用のサポートを国元の家族・親類から得ている場合が少ない。よって、主たる収入源は、奨学金およびアルバイトと考えられる。そこでまず、問 12 の回答から、同居／非同居別に奨学金の取得状況を見ておきたい。

表 11 は、同居／非同居別に奨学金の取得状況について、全体的な傾向と、同居の大半を占める大学院生、研究生・聴講生について見たものである。全体的に、同居と非同居を比較すると、奨学金を受けていないと答えた留学生が同居の場合は 10%以上少なく、なんらかの奨学金を受けている留学生が非同居よりも多くなっている。取得している奨学金で最も多いのは「日本政府など日本側からの奨学金」で、同居の 6 割の人が取得している。

次に、問 13 の回答をもとに、同居／非同居別にアルバイトの状況を見てみたい(表 12)。

現在アルバイトをしていないと答えた人は、同居の方がやや少ない。しているバイトとしては「TA・RA・チューター」が最も多く、36 人（同居のうち 26.9%）がやっていると答えている。他のバイトについては、やっている人は 4 人（語学講師・塾講師）～0 人とわずかである。

表 11 同居／非同居と奨学金（問 12） ※複数回答 人（％）

	同居				非同居			
	全体 (n=135)	修士 課程	博士課程	研究生・ 聴講生	全体 (n=628)	修士 課程	博士課程	研究生・ 聴講生
出身国の 公的奨学 金/在籍大 学からの 奨学金	17 (12.6%)	0 (0.0%)	16 (14.4%)	1 (11.1%)	54 (8.7%)	13 (6.3%)	15 (6.6%)	6 (6.9%)
日本政府 等日本側 からの奨 学金	81 (60.0%)	4 (30.8%)	71 (64.0%)	6 (66.7%)	309 (49.7%)	72 (35.0%)	137 (60.4%)	43 (49.4%)
京都大学 からの奨 学金	2 (1.5%)	1 (7.7%)	1 (0.9%)	0 (0.0%)	6 (1.5%)	3 (1.5%)	1 (0.4%)	0 (0.0%)
その他の 奨学金	7 (5.2%)	1 (7.7%)	6 (5.4%)	0 (0.0%)	58 (9.3%)	22 (10.7%)	21 (9.3%)	4 (4.6%)
奨学金を 受けてい ない	28 (20.7%)	7 (53.8%)	18 (16.2%)	2 (22.2%)	201 (32.3%)	98 (47.6%)	53 (23.3%)	34 (39.1%)

全体には、学部正規生、その他のプログラムに所属する学生を含む。

表 12 同居／非同居とアルバイト（問 13） ※複数回答 （人、％）

	同居 (n=135)		非同居 (n=620)		合計	
語学講師・塾講師	4	3.0%	39	6.3%	43	5.7%
TA・RA・チューター	36	<u>26.9%</u>	113	18.2%	149	19.8%
学内アルバイト	1	0.7%	13	2.1%	14	1.9%
通訳・ガイド	3	2.2%	9	1.5%	12	1.6%
飲食店・コンビニ	1	0.7%	39	6.3%	40	5.3%
サービス業	2	1.5%	14	2.3%	16	2.1%
その他	2	1.5%	23	3.7%	25	3.3%
現在していない	79	59.0%	385	62.1%	464	61.5%

2. 6 情報収集、ネットワーク

今回の調査で、同居／非同居別に集計結果を分析した結果、回答に有意な差が見られた質問の一つに、問 25「母国にいたとき、京都大学についての情報はどこから得ましたか」がある。この質問に対する回答では、「家族や親戚」($\chi^2=9.04^{**}$)「日本から帰国した留学生」($\chi^2=11.09^{**}$)で、同居の方がこれらを選んだ人が多くなっている。「日本から帰国した留学生」については「京都大学のホームページ」に次いで 2 番目に多く、約 3 割の人が選んでいる。逆に、「京都大学のパンフレット」「京都大学に在籍中の留学生」「京都大学のホームページ」($\chi^2=5.92^*$)「留学フェア」については、非同居の人が多く選んでいる。

表 13 同居／非同居と京大についての情報入手先（問 25） ※複数回答（人、%）

	同居 (n=135)		非同居 (n=620)		合計	
家族や親戚	20	<u>14.8%</u>	43	6.9%	63	8.3%
知人や友人	36	26.7%	147	23.7%	183	24.2%
母国の先生	40	29.6%	208	33.5%	248	32.8%
日本大使館	16	11.9%	51	8.2%	67	8.9%
京大パンフレット	6	4.4%	59	9.5%	65	8.6%
京大に在籍中の 留学生	14	10.4%	103	16.6%	117	15.5%
日本から 帰国した留学生	43	<u>31.9%</u>	118	19.0%	161	21.3%
京大の ホームページ	73	54.1%	405	<u>65.2%</u>	478	63.2%
留学フェア	3	2.2%	40	6.5%	43	5.7%
京大の先生	37	27.4%	154	24.8%	191	25.3%
同窓会	5	3.7%	7	1.1%	12	1.6%
留学斡旋会社	1	0.7%	10	1.6%	11	1.5%
その他	16	11.9%	59	9.5%	75	9.9%

同じく、同居／非同居で回答に有意な差が見られた質問を含むものに、京都大学を留学先に選んだ時の理由を尋ねた問 23 がある。15 の項目別に、その項目を重要視した程度を回答してもらったところ、「就職に有利」（表 14 $\chi^2=8.33^{**}$ ）、「自分の出身地の留学生が

いる」(表 15 $\chi^2=11.66^{**}$)、「同窓会組織がある」(表 16 $\chi^2=20.66^{***}$)で、有意な差が見られた。「就職に有利」では、同居のうち「非常に重要」と考える人が 45%であるのに対し、非同居の場合は 31.8%であった。「自分の出身地の留学生がいる」では、同居、非同居とも「重要でない」を選んだ人が最も多く、非同居の場合は約 5 割の人が選んでいるが、同居の場合、「ある程度重要」を選んでいる人も約 2 割いる。「同窓会組織がある」についても、「重要でない」を選んだ人が最も多く、非同居の場合は 45.2%となっている。しかし同居の場合、「非常に重要」「ある程度重要」を選択した人も 4 割近くいるのに対し、非同居の場合は 2 割程度にとどまっている。

表 14 同居／非同居と京都大学を留学先に選んだ理由 (問 23-i 就職に有利)

	同居		非同居		合計	
重要でない	12	9.3%	64	10.6%	76	10.4%
あまり重要でない	20	15.5%	109	18.1%	129	17.6%
ある程度重要	39	30.2%	238	39.5%	277	37.8%
非常に重要	58	45.0%	192	31.8%	250	34.2%
合計	129	100.0%	603	100.0%	732	100.0%

表 15 同居／非同居と京都大学を留学先に選んだ理由

(問 23-j 自分の出身地の留学生がいる)

	同居		非同居		合計	
重要でない	51	39.5%	304	50.2%	355	48.3%
あまり重要でない	44	34.1%	211	34.8%	255	34.7%
ある程度重要	27	20.9%	65	10.7%	92	12.5%
非常に重要	7	5.4%	26	4.3%	33	4.5%
合計	129	100.0%	606	100.0%	735	100.0%

表 16 同居／非同居と京都大学を留学先に選んだ理由 (問 23-n 同窓会組織がある)

	同居		非同居		合計	
重要でない	40	31.0%	272	45.2%	312	42.7%
あまり重要でない	39	30.2%	201	33.4%	240	32.8%
ある程度重要	29	22.5%	88	14.6%	117	16.0%
非常に重要	21	16.3%	41	6.8%	62	8.5%
合計	129	100.0%	602	100.0%	731	100.0%

また有意な差が見られたわけではないが、「留学生が多く、国際的な環境である」(表 17)では、同居の場合「ある程度重要」が 43.4%で、「非常に重要」と合わせると 57.4%の人が重要と考えているのに対し、非同居の場合は両者合わせて 47.5%と、同居よりも 10%ほど低い結果が出た。

表 17 同居／非同居と京都大学を留学先に選んだ理由

(問 23-k 留学生が多く、国際的な環境である)

	同居		非同居		合計	
重要でない	23	17.8%	134	22.2%	157	21.4%
あまり重要でない	32	24.8%	183	30.3%	215	29.3%
ある程度重要	56	43.4%	195	32.3%	251	34.2%
非常に重要	18	14.0%	92	15.2%	110	15.0%
合計	129	100.0%	604	100.0%	733	100.0%

同居の場合、留学前から直接的な人間関係を通じた情報収集が行われており、留学先を決めるに当たっても、同窓会組織の有無を考慮するなど、人間関係を通じた情報ネットワークを意識した思考が見られる。すなわち、留学にかかわる人間関係は留学前から構築されつつあると考えられる。家族を連れていく可能性があるため、留学経験者に京大についての情報をより求めようとするのかもしれない。あるいは家族を連れて日本にやってくる留学生は、もともと国際的環境を求めるような指向性を持っているため、積極的に人間関係を作る傾向があるのかもしれない。もちろんそこには、博士課程の学生、理系が多いという同居者のプロフィール、すなわち、学年が上であることで情報収集のノウハウをより多く見につけている可能性や、研究テーマが国際的なものか、それとも日本に特化されたものかというようなことも影響しているに違いない。それゆえ、ここでの調査結果が、非同居の場合は人間関係の構築に消極的ということの意味しているわけではないことはことわっておきたい。

2. 7 進路希望

家族と同居している場合と一人暮らしの場合とでは、将来設計に何らかの違いがあるのだろうか。

進路について尋ねた問 39 の回答を見てみると、同居の場合、研究職に就職を希望する人が 58.1%と最も多く、「学生として研究を継続」が 22.5%、「研究職以外に就職」が 13.2%となっている(表 18)。

表 18 同居／非同居と希望する進路（問 39）（人、％）

	同居		非同居		合計	
学生として研究を継続	29	22.5%	169	27.8%	198	26.8%
研究職に就職	75	58.1%	265	43.5%	340	46.1%
研究職以外に就職	17	13.2%	144	23.6%	161	21.8%
その他	8	6.2%	31	5.1%	39	5.3%
合計	129	100.0%	609	100.0%	738	100.0%

学生として研究継続の場合、同居では、母国で継続希望と日本で継続希望が同数で約 4 割ずつとなっている。一方、非同居で学生として研究継続を希望している場合、その場所としては日本を希望する人が最も多く 5 割以上を占め、母国希望とその他の国希望がほぼ同じになっている（表 19）。就職希望の場合、その就職を希望する場所としては、日本と母国を希望する人がほぼ同数で、こちらは同居・非同居とも同じような傾向である。ただ、その他の国と答えた人は同居の方がやや多い（表 20）。

表 19 同居／非同居と学生として研究継続希望の際の国（問 39-a）（人、％）

	学生として研究継続の場合、どこで続けたいか					
	同居		非同居		合計	
母国	12	41.4%	41	24.3%	53	26.8%
日本	12	41.4%	87	51.5%	99	50.0%
その他の国	5	17.2%	39	23.1%	44	22.2%
無回答	0	0.0%	2	1.2%	2	1.0%
合計	29	100.0%	169	100.0%	198	100.0%

表 20 同居／非同居と就職希望の際の国（問 39-b）（人、％）

	就職する場合、どこで就職したいか					
	同居		非同居		合計	
母国	33	35.9%	160	39.1%	193	38.5%
日本	34	37.0%	160	39.1%	194	38.7%
その他の国	22	23.9%	78	19.1%	100	20.0%
無回答	3	3.3%	11	2.7%	14	2.8%
合計	92	100.0%	409	100.0%	501	100.0%

では、学生として研究継続希望の場合に顕著に見られるように、同居は非同居よりも、将来的に母国に戻ることを希望している人が多いかという点、単純にそうとも言い切れない。同居者が最も多い博士課程のみを見てみると、学生として研究継続の場合、母国を希望する人が5割以上（55%, 11人）、日本でと答えた人が30%（6人）、その他の国は15%（3人）となっている。非同居の場合は、やはり母国希望がちょうど5割（13人）だが、ついで他の国と答えた人が30.8%（8人）で、日本希望は19.2%（5人）にとどまる。母国希望者は、同居／非同居でそれほど差はないことがわかる。就職希望の場合も、博士課程のみでは、同居の場合、母国希望と日本希望がほぼ同数（母国36.7%, 29人 日本35.4%, 28人）その他の国が24.1%（19人）、非同居の場合、母国希望が最も多く45.7%（86人）、日本が28.2%（53人）、その他の国が22.9%（43人）となっている。

このように博士課程に限って見た場合、同居では、日本での研究継続／就職希望の割合が非同居より多いことを考えると、単に「家族だから」という消極的理由だけではなく、今後も家族そろって日本に暮らすことも視野にいれつつ、同居している可能性もある（配偶者やパートナーが日本人であればなおのことであろう）。非同居の場合は、母国か他国か、という選択肢であり、おそらく日本も「母国以外」の選択肢の一つであるのに対し、同居の場合は、母国か日本かという選択で、日本とその他の国を同じ比重で考えてはいないと言える。

3 同居／単身

3. 1 単身者のプロフィール

3. 1. 1 京都大学における身分、文系／理系、性別

単身、すなわち、家族は母国にいて一人で来日しているのは、どのような人たちだろうか。ここでは、家族のいる人という観点から、これら単身で来日している留学生と家族と一緒に生活している留学生を比較してみていきたい。

まず京大における身分を見ると、単身者は、大学院修士課程の学生7人、博士課程の学生32人、研究生・聴講生5人、一般交換留学生と日本語・日本文化研修留学生2人、無回答4人の計50人である。単身は同居に比べ、やや博士課程学生の比率が下がり、単身全体の64%となっている（表21）。

また、文系／理系の別を見ると、同居に比べ単身者に占める理系の割合はやや低く、文系の割合はやや高い（表22）。

表 21 同居／単身と京大における身分 (人、%)

	同居		単身		合計	
学部生	1	0.7%	0	0.0%	1	0.5%
修士課程	13	9.6%	7	14.0%	20	10.8%
博士課程	111	82.2%	32	64.0%	143	77.3%
研究生・聴講生	9	6.7%	5	10.0%	14	7.6%
一般交換留学生	0	0.0%	1	2.0%	1	0.5%
日本語・日本文化研修 留学生	0	0.0%	1	2.0%	1	0.5%
無回答	1	0.7%	4	8.0%	5	2.7%
合計	135	100.0%	50	100.0%	185	100.0%

表 22 同居／単身と文系／理系 (人、%)

	同居		単身		合計	
文系	21	15.6%	12	24.0%	33	17.8%
理系	92	68.1%	28	56.0%	120	64.9%
文理融合系	12	8.9%	4	8.0%	16	8.6%
未決定・無回答	10	7.4%	6	12.0%	16	8.6%
合計	135	100.0%	50	100.0%	185	100.0%

表 23 同居／単身とジェンダー (人、%)

	同居		単身		合計	
女性	41	30.4% (65.1%)	22	44.0% (34.9%)	63	34.1% (100.0%)
男性	93	68.9% (76.9%)	28	56.0% (23.1%)	121	65.4% (100.0%)
合計	135※	100.0% (73.0%)	50	100.0% (27.0%)	185※	100.0% (100.0%)

※無回答 1 人を含む

表 24 同居／単身と年齢

(人、%)

年齢（歳）	同居		単身	
21～25	4	3.0%	8	16.0%
26～30	59	43.7%	14	28.0%
31～35	55	40.7%	20	40.0%
36～40	13	9.6%	8	16.0%
41～45	3	2.2%	0	0.0%
45～50	1	0.7%	0	0.0%
合計	135	100.0%	50	100.0%

性別を見ると、単身者 50 人中、女性は 22 人（44%）、男性は 28 人（56%）と、同居に比べると女性の割合が高くなり、今回の留学生調査全体の男女比と近くなっている。男性では、家族がいる人（同居＋単身＝121 人）のうち 4 分の 3 以上の人同居、すなわち家族と一緒に生活しているが、女性は 63 人中 22 人が単身と、家族がいる人のうち約 3 分の 1 の人は家族を母国に残して留学している（表 23）。

表 6 と合わせて考えると、女性の場合は、家族と一緒に暮らす場合は最初から一緒に暮らし、もしそうでない場合は留学中ずっと単身であるのかもしれない。女性の場合は配偶者／パートナーが本国で仕事を持っており、それを続けているためかもしれない。

なお、同居／単身の年齢の分布は表 24 の通りである。同居、単身とも 30 代前半が約 4 割を占め、最も多くなっている。

3. 1. 2 地域

ここで、家族がいる留学生を国・地域別に見てみたい。京大にやってくる留学生はアジア出身者が多いので、アジア地域はやや細かく分類している。東アジアは国・地域別に、東南アジアは、家族のいる留学生が 10 人以上いるインドネシア、ベトナムを独立させ、その他地域と分けた（表 25）。

全体としては、家族がいる留学生 185 人中、同居は 135 人（73%）、単身は 50 人（27%）だが、国・地域別に見てみると、それぞれの同居／単身の比率に大きな違いがあることがわかる。

表 25 同居／単身と地域

		同居 (女, 男)	単身 (女, 男)	同居+単身 (女, 男)	当該 国・地 域出身 留学生 数	家族のい る人(同 居+単 身)が占 める割合	同居が 占める 割合
東アジア	(全体)	43 (10, 33)	27 (12, 15)	70 (22, 48)	433	16.2%	9.9%
	中国	19 (8, 11)	20 (8, 12)	39 (16, 23)	286	13.6%	6.6%
	台湾	5 (1, 4)	4 (1, 3)	9 (2, 7)	51	17.6%	9.8%
	香港	0 (0, 0)	0 (0, 0)	0 (0, 0)	3	0.0%	0.0%
	韓国	18 (1, 17)	1 (1, 0)	19 (2, 17)	86	22.1%	20.9%
	モンゴル	1 (0, 1)	2 (2, 0)	3 (2, 1)	7	42.9%	14.3%
東南アジア	(全体)	39 (15, 24)	19 (9, 10)	58 (24, 34)	144	40.3%	27.1%
	インド ネシア	19 (7, 12)	5 (1, 4)	24 (8, 16)	36	66.7%	52.8%
	ベトナム	8 (1, 7)	7 (4, 3)	15 (5, 10)	25	60.0%	32.0%
	東南アジ アその他	12 (7, 5)	7 (4, 3)	19 (11, 8)	83	22.9%	14.5%
南アジア		17 (6, 11)	1 (1, 0)	18 (7, 11)	36	50.0%	47.2%
西アジア		10 (2, 8)	0 (0, 0)	10 (2, 8)	25	40.0%	40.0%
中央アジア		1 (1, 0)	0 (0, 0)	1 (1, 0)	2	50.0%	50.0%
アジア (分類無)		1 (1, 0)	0 (0, 0)	1 (1, 0)	2	50.0%	50.0%
オセアニア		1 (0, 1)	0 (0, 0)	1 (0, 1)	7	14.3%	14.3%
ヨーロッパ		6 (2, 3 不明 1)	0 (0, 0)	6 (2/3, 不明 1)	53	11.3%	11.3%
北米		4 (2, 2)	1 (0, 1)	5 (2, 3)	14	35.7%	28.6%
中南米		1 (0, 1)	0 (0, 0)	1 (0, 1)	22	4.5%	4.5%
アフリカ		12 (2, 10)	2 (0, 2)	14 (2, 12)	22	63.6%	54.5%
無回答		0 (0, 0)	0 (0, 0)	0 (0, 0)	3	0.0%	0.0%
計		135 (41, 93 不明 1)	50 (22, 28)	185 (63, 121 不明 1)	763	24.2%	17.7%

家族のいる人（同居＋単身）が5人以下の国・地域を除いて見ていくと、単身が同居を上回っているのは、中国である。同居が単身よりもやや多いのは、台湾、ベトナムである。逆に、韓国、南アジア、西アジア、ヨーロッパ、アフリカでは、単身での留学は0かわずかである。インドネシア、東南アジアその他では、それらの地域よりも単身は多くなっている。また、東南アジアその他では、家族のいる人のうち、男性よりも女性の方が多い。またベトナムについては、女性の単身が多いが、この点については人数が少な

いので、特徴とまでは言うことができないかもしれない。しかしながら、モンゴルでも女性の単身が多くなっていることを考慮すると、アジアの社会主義国では、女性が単身で来日する傾向が他の地域よりもやや高いと言えるかもしれない⁵。

3. 2 家族関係とメンタルヘルス

大橋は、留学生の精神障害を予防するためには配偶者の存在が重要と指摘している（大橋 2008: 145）。たしかに、家族と一緒に生活していれば、大きな悩みはもちろん、日常の小さなことでも、言葉の違いをあまり気にせず、いつでも気軽に相談したり、話題にしたりすることができる。そのことで、悩みごとや問題が深刻化する前に解決することもしばしばあるだろう。そこで、留学生は具体的に、どのようなことを家族に相談するのか、また家族がいても同居している場合とそうでない場合とではなんらかの違いがあるのか、問42-b「心配事や悩みを誰に相談するか」に対する回答から見てみたい（表 26～30）。

同居の場合、「専門の研究に関して」については、9割以上の人が指導教官を選択しており、次いで「同じ国からの留学生」（25.2%）、「家族」（24.4%）、「チューター以外の日本人学生」（21.5%）となっている。しかし、それ以外の悩みについては、「家族」は、「日本での生活に関して」が僅差で「同じ国からの留学生」に次いで2位になっている他は、「人間関係に関して」「心身の健康に関して」「卒業後の進路に関して」のいずれでも最も多く、半数以上の人を選択している。

一方、単身の場合、「専門研究に関して」では、「指導教官」「チューター以外の日本人学生」「同じ国からの留学生」「違う国からの留学生」「チューター」について家族が選ばれている。「人間関係に関して」では、「同じ国からの留学生」について「家族」が多く、ほぼ同数の人が選んでいるが、「日本での生活に関して」では、「同じ国からの留学生」が最も多く、ついで「チューター以外の日本人学生」と「家族」になっている。「心身の健康に関して」は「病院・学内の保険診療所」が最も多く、「家族」「同じ国からの留学生」がほぼ同数、「卒業後の進路に関して」では「家族」が最も多くなっている。「日本での生活に関して」と「心身の健康に関して」では、非同居全体と比べても、家族を選ぶ人の割合が低くなっている。もちろんここでは、家族が誰を指すのか特定はできないのだが、このように同居と単身で差があることを考えると、同居の場合の相談相手として想定されている家族とは、配偶者／パートナーであると推測できる。

ここから、家族がいても、日本で一緒に生活していない場合には、家族が身近な相談相手とはなりにくいと言えよう。単身の場合、人間関係や、日本での生活については同じ国からの留学生に相談する人が最も多いが、同居の場合であっても同じ国からの留学生を相談相手として選ぶ人は多く、彼／彼女たちとの人間関係の重要さがうかがえる。

⁵ ベトナム、モンゴル出身留学生の男女比は、ベトナムが女性10人（40%）、男性15人（60%）、モンゴルが女性3人（42.9%）、男性4人（57.1%）であり、両国とも特に女性の比率が高いわけではない。

表 26 専門研究の悩みの相談相手（同居、単身共に 10%以下の項目は省略。以下、表 27～30 同様。同居における%の多い順に並べた。） ※複数回答（人、%）

	同居		単身	
指導教員	126	93.3%	43	86.0%
同じ国からの留学生	34	25.2%	12	24.0%
家族	33	24.4%	7	14.0%
チューター以外の日本人学生	29	21.5%	15	30.0%
違う国からの留学生	21	15.6%	11	22.0%
チューター	14	10.4%	9	18.0%

表 27 人間関係の悩みの相談相手 ※複数回答（人、%）

	同居		単身	
家族	70	51.9%	20	40.0%
同じ国からの留学生	48	35.6%	21	42.0%
チューター以外の日本人学生	24	17.8%	8	16.0%
違う国からの留学生	24	17.8%	12	24.0%
指導教員	14	10.4%	8	16.0%

表 28 日本生活の悩みの相談相手 ※複数回答（人、%）

	同居		単身	
同じ国からの留学生	59	43.7%	22	44.0%
家族	57	42.2%	12	24.0%
指導教員	34	25.2%	13	26.0%
チューター以外の日本人学生	33	24.4%	12	24.0%
違う国からの留学生	28	20.7%	11	22.0%
チューター	16	11.9%	8	16.0%

表 29 心身の健康の悩みの相談相手 ※複数回答（人、%）

	同居		単身	
家族	69	51.1%	16	32.0%
病院・学内の保健診療所	60	44.4%	18	36.0%
同じ国からの留学生	30	22.2%	15	30.0%
指導教員	25	18.5%	5	10.0%
その他	11	8.1%	6	12.0%
チューター以外の日本人学生	7	5.2%	7	14.0%
違う国からの留学生	7	5.2%	6	12.0%

表 30 卒業後進路の悩みの相談相手 ※複数回答（人、%）

	同居		単身	
家族	70	51.9%	23	46.0%
指導教員	65	48.1%	20	40.0%
同じ国からの留学生	34	25.2%	15	30.0%
違う国からの留学生	16	11.9%	5	10.0%
チューター以外の日本人学生	8	5.9%	8	16.0%

限られた質問項目から、留学生のメンタルヘルスについて知ることは難しいが、精神状態が良好であるかどうかの一つの指標として、睡眠に関する問題がないということが考えられる。そこで、問 21-b の「睡眠に関して何か問題がありますか」という質問に対する答えを見てみると、単身の場合、「問題はない」と答えたのは 73.3%であり、同居よりも 10%ほど低くなっている（表 31）。単身で「問題がある」と答えたのは 26.7%であるが、これは非同居全体の中でも最も高い割合であった。さらに、同居／単身とも所属している留学生が最も多い博士課程だけで比べてみると、「問題がない」と答えたのは、同居は 82.4%、単身は 69%であり、博士課程単身の 31%が「問題がある」と答えている。

表 31 同居／単身と睡眠に関する問題（問 21-b） (人、%)

	同居		単身		合計	
問題がある	21	15.9%	12	26.7%	33	18.6%
問題がない	111	84.1%	33	73.3%	144	81.4%
合計	132	100.0%	45	100.0%	177	100.0%

3. 3 進路希望

同居と単身とでは、将来設計になんらかの差が見られるのだろうか。

問 39 の回答を見てみると、単身の場合、同居の場合と同様、研究職に就職を希望する人が最も多く、割合もほぼ等しくなっている。研究職以外に就職を希望する人の割合もほぼ等しいが、学生として研究を継続の割合が同居の場合に比べるとやや低くなっている。

表 32 同居／単身と希望する進路（問 39） (人、%)

	同居		単身		合計	
学生として研究を継続	29	22.5%	8	17.0%	37	21.0%
研究職に就職	75	58.1%	27	57.4%	102	58.0%
研究職以外に就職	17	13.2%	7	14.9%	24	13.6%
その他	8	6.2%	5	10.6%	13	7.4%
合計	129	100.0%	47	100.0%	176	100.0%

就職希望の場合、単身では、母国での就職を希望する人が最も多く（55.9%, 19人）、ついで日本（35.3%, 12人）、その他の国を希望は 8.8%（3人）となっている。表 20 の同居の場合と比べて見てみると、単身は母国希望が 20%高く、その他の国希望が約 15%低くなっている。また表 33 の通り、どのような就職先を希望するかの間については、研究職に新たに就職が 47.1%と最も多いが、留学前の仕事に復職が 26.5%と、同居の 13%と比べて

も多く、これは単身全体（50 人）の 18%に相当する。このことから、単身の場合は、母国に戻って仕事に復職できる見込みがあり、家族を置いて日本に留学している人も多いと考えられる。

表 33 同居／単身と希望する就職先（問 39-c） (人、%)

	同居		単身		合計	
留学前の仕事に復帰	12	13.0%	9	26.5%	21	16.7%
研究職に新たに就職	47	51.1%	16	47.1%	63	50.0%
日本・日系企業	5	5.4%	4	11.8%	9	7.1%
日本・日系企業以外の企業	8	8.7%	1	2.9%	9	7.1%
その他	9	9.8%	3	8.8%	12	9.5%
無回答	11	12.0%	1	2.9%	12	9.5%
合計	92	100.0%	34	100.0%	126	100.0%

4. 考察

今回の調査から、留学生の約 18%が家族と一緒に生活していることがわかった。単身で留学している者と合わせると、留学生の約 4 分の 1 は家族がいることになる。また、地域別に見た場合、当該地域出身留学生の約半数が家族と一緒に生活している地域もある。たしかに、留学生の半数以上は、家族やつき合っている人がいない独身であるが、家族がいる人も決して無視できる人数ではない。もし「留学生＝家族がいない一人暮らし」というイメージがあるならば、それは修正される必要があるだろう。

また、今回の分析結果から、家族と生活している人は男性、博士課程、理系の人が多く、それに比べると、単身者は女性が多いこと、また家族と一緒に生活している男性は、自身が先に一人で来日し、あとから家族を呼び寄せるケースが多いことがわかった。留学生が必ずしも独身ではないこと、また家族がいても母国に残して留学しているケースもあること、さらには将来的に家族を呼び寄せたいと考えている者もいることを前提として、留学生の生活や、将来設計などの相談に応じる体制が今後も求められるであろう。

さらに京都大学の場合、カップルの双方が研究者というケースも少なからずあると考えられる。その場合、留学生が主、家族が従という関係性とは異なる。一方だけが研究者である場合とは異なるニーズがあると思われるが、それらのケースについては今後、さらなる調査を進める必要があるだろう。

現在、家族と一緒に生活している人は、単に「家族だから」という理由で生活を共にしているように見えるが、留学後の進路については、必ずしも母国に帰ることを希望してい

るとは限らないことを考慮すると、留学後も日本で暮らす可能性も想定した同居であるとも考えられる。現段階では、家族を伴ってくることに、それが家族にとっても大きなメリットとなるような積極的理由はないかもしれないが、結果として、留学生本人にとっては、家族が身近な相談相手となるなど、同居によってメリットが生み出される場合もある。現在、インターネットの発達により、スカイプなどで簡単に国際電話をかけることも可能になり、物理的距離が意味をなさなくなりつつあるように考えられているが、今回の調査から、たとえ家族がいても単身の場合は、より物理的に近くにいる人々に心配事や悩みを相談することがわかった。インターネットのアクセスは世界中のどこでも可能なわけではないし、離れて生活している家族を心配させてはいけないという気遣いから、家族に話すのをためらうこともあるだろう。

ライフスタイルは多様であり、単身で来日するには個々人の事情がある。配偶者やパートナーが母国で仕事を持っており、希望はあっても同居できない場合や、あるいは配偶者やパートナーであっても、同居しない方が良好な関係を築ける場合もある。「留学生＝家族がいない一人暮らし」というイメージを修正すると同時に、家族がいても、そのライフスタイルは一樣ではないことを心に留めておく必要がある。

そしてもちろん、一緒に生活している家族が万能なわけではない。一緒に生活している家族は確かに、心配事や悩みの相談相手として重要な存在であるが、たとえ家族と一緒に生活していても、悩みや心配事の内容によっては、同じ国からの留学生、違う国からの留学生、チューター以外の日本人学生、指導教員らも重要な相談相手となっており、当然のことではあるが、留学生はこれらの人間関係のネットワークの中で生活していることがわかる。

そしてこれらの人間関係の構築はすでに留学前から始まっている。京都大学に関する情報源についての分析結果から明らかになったように、京都大学で学んだ留学生は、また別の留学生を京都大学に呼びよせる牽引力を持っている。そのような留学を終えた者も含めた留学生間ネットワークについても、今後考察を深めることができると考えている。

【引用文献】

- 大橋敏子、2008『外国人留学生のメンタルヘルスと危機介入』京都大学学術出版会
 横田雅弘・白土悟、2004『留学生アドバイジング』ナカニシヤ出版
 渡部留美、2009「日本の大学における留学生・研究者の家族の支援——帯同配偶者への調査から」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』第35号、333-338頁

第五章

京都大学における留学生と日本人学生の交流の実態

貫田優子

はじめに

日本の高等教育機関で学ぶ留学生の総数は、今や 138,075 人に及んでいる¹。その中でも京都大学は特に留学生数の多い大学の 1 つであり、現在 1,631 人の留学生を受け入れている²。留学生数が増加するのに伴って、当然のことながら留学生と日本人学生とが接触する機会がますます広がっていくものと予測され、これによって学生たちの国際的な視野が広がり、大学生活のいっそうの充実がもたらされることが期待されてもいる。

留学生と日本人学生の交流の実態については、留学生受け入れ 10 万人計画が策定され、留学生数が顕著に増加し始めた 1980 年代から数々の研究が蓄積されてきた³。ただ、これらの先行研究の多くが共通して指摘してきているのは、留学生と日本人学生の交流が円滑に進まないという実態である。そして両者の交流を阻害する要因について早い段階から関心が寄せられてきた。

京都大学においては、留学生と日本人学生は果たしてどの程度、また、どのような交流を行っているのだろうか。

今回の調査では、留学生対象のアンケートにおいても「一般学生⁴」対象のアンケートにおいても交友関係に関する質問項目を設けており、留学生側および日本人学生側の双方から交流の実態を検証することが可能である。そこで本稿は、留学生および日本人学生をそれぞれ対象とした 2 つのアンケートデータを分析の対象とし、まずは、日本人学生側から見たときの留学生との交流の実態、続いて留学生側から見たときの日本人学生との交流の実態を明らかにしていきたい。本稿で提出する基本的なデータが、留学生と日本人学生の交流の現状を改善するための一助となれば幸いである。

¹ 2011 年 5 月 1 日時点。日本学生支援機構ホームページ

(http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data11.html) (最終アクセス日 2012 年 2 月 3 日)

² 2011 年 5 月 1 日時点。京都大学は全国で 8 番目に留学生数の多い大学である。同上ホームページ (最終アクセス日 2012 年 2 月 3 日)

³ 1980 年代から 1990 年代初頭にかけての初期の研究として代表的なものに、たとえば、岩男寿美子・萩原滋『日本で学ぶ留学生—社会心理学的分析—』(勁草書房、1988 年)、横田雅弘「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」『異文化間教育』5 号 (1991 年)、横田雅弘「自己開示からみた留学生と日本人学生の友人関係」『一橋論叢』105 巻 5 号 (1991 年)、坪井健「アジアの学生・日本の学生—留学生調査と日本・台湾・韓国の比較調査を通して—」『駒沢社会学研究』23 号 (1991 年)、など。

⁴ この調査における「一般学生」とは、大学入学以前の教育機関の大半を日本で過ごし、一般入学試験を受験して京都大学へ入学した学生 (帰国子女を含む) のことを指す。本稿では、これを日本人学生として扱う。

1. 日本人学生側から見た留学生との交流

1. 1. 留学生と知り合う機会

(1) 所属による比較

まず、京都大学の日本人学生のうち留学生と知り合ったことがある人の割合を文系／理系別、身分（学部／修士課程／博士課程）別に見てみよう。表 1-1 では、留学生と知り合ったことがある人全体の割合と、授業／部活・サークル活動／チューターとして／研究室／学内のパーティ・イベント／その他、といったそれぞれの場で留学生と知り合ったことがある人の割合（複数回答）を示している。

表1-1 留学生と知り合ったことがある人の割合

		全体		場所別%(複数回答)						(N)
		%	(N)	授業で	部活・サークル活動で	チューターとして	研究室で	学内のパーティ・イベントなどで	その他	
文系	学部	63.7	146	34.9	35.6	2.1	6.8	10.3	6.2	146
	修士課程	88.2	17	41.2	11.8	17.6	58.8	5.9	5.9	17
	博士課程	100.0	16	31.3	37.5	31.3	75.0	6.3	0.0	16
	合計	69.3	179	35.2	33.5	6.1	17.9	9.5	5.6	179
理系	学部	64.8	270	24.8	25.6	1.1	19.9	6.8	10.2	266
	修士課程	83.5	85	28.2	24.7	2.4	64.7	12.9	7.1	85
	博士課程	100.0	29	3.4	17.2	10.3	96.6	10.3	13.8	29
	合計	71.6	384	23.9	24.7	2.1	35.8	8.4	9.7	380
文理融合型	学部	90.0	10	30.0	50.0	0.0	10.0	20.0	30.0	10
	修士課程	100.0	4	50.0	25.0	0.0	100.0	0.0	0.0	4
	合計	92.9	14	35.7	42.9	0.0	35.7	14.3	21.4	14
未決定	学部	50.0	2	0.0	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2
	合計	50.0	2	0.0	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2

※太字太枠は、 χ^2 検定の結果、身分によって有意差($p<0.05$)が見られた項目を示す

この表から明らかなように、文系・理系のどちらにおいても、大学院生は学部生よりも留学生と知り合う機会を多く持っている。京都大学では留学生の多くが大学院生であることを考えれば、これは当然の結果であろう。自分と同じ研究室に留学生がいて、必然的に留学生と出会う機会が設けられるからである。実際に、上の表で日本人学生が留学生と知り合った場所を見てみると、大学院生は研究室で留学生と知り合うケースが圧倒的に多く、学部生とは対照的である。学部生の場合は、授業や部活動・サークル活動を除けば、通常の活動範囲の中で留学生と知り合う機会があまり多くないことが分かる。(ただし、理系の学部生は文系の学部生と比べて研究室で留学生とよく知り合っている。理系の学部生は文系の学部生よりも研究室を利用することが多いためだろう。)

(2) 外国語能力との関連

次に、留学生と知り合う機会と外国語能力の関係を見てみたい。

調査票では、最もなじみのある外国語について（97.1%の学生が、最もなじみのある外国語は英語であると回答している）、「話す」「書く」「聴く」「読む」の4技能の水準を尋ねている。ここでは対面式のコミュニケーションを行う際に必要とされる「話す」力と「聴く」力のみを取り上げて分析する。

留学生と知り合った機会の有無については、「1＝知り合ったことがある」「0＝知り合ったことがない」、外国語能力については、「1＝ほとんど話せない（聴きとれない）」「2＝身近なことについてやりとりができる（聴きとれる）」「3＝日常生活での話題についてやりとりができる（聴きとれる）」「4＝社会性の高い話題についてやりとりができる（聴きとれる）」とスコア化した上で、相関係数を算出すると表 1-2 のようになる。

表1-2 留学生と知り合った機会の有無と外国語能力の相関係数

	学部生		大学院生	
	相関係数	(N)	相関係数	(N)
話す	0.168 **	428	0.159	151
聴く	0.191 **	428	0.180 *	151

**：p<0.01 *：p<0.05

全般的に、外国語能力が高い学生ほど留学生と知り合う機会を多く持っていることが分かる。ただ、学部生と大学院生との間にはやや異なった傾向を見出すことができる。外国語能力の高さと留学生と知り合う機会の相関の強さは、学部生の方により顕著に表れているのである。大学院生においては、「話す」能力と留学生と知り合う機会の間には有意な相関が見られないほどだ。

これは前述したとおり、大学院生は研究室で留学生と知り合う機会が多いことが関わっているだろう。大学院生の場合、少なくとも留学生と知り合うか否かというレベルにおいては、外国語能力の高さはさほど重要な要素にはならないのである（本調査では質問をしていないが、知り合った後の留学生との付き合い方には外国語能力が何らかの形で影響を及ぼしている可能性がある）。それに対して、学部生は大学院生と比べて留学生と自然に出会う機会が少ないため、留学生と出会うためには自ら主体的な働きかけをしなければならぬ。外国語に堪能な学生ほど、留学生と出会える場に積極的に足を踏み入れたり、留学生と同じ場に居合わせたときにも、積極的に関わりを持ちやすいということではないだろうか。

(3) 子どもの頃の（異）文化接触経験

調査票では、各学生に対して子どもの頃（幼児期～12 歳頃）の文化的環境についても質

問している。子どもの頃に①日本人以外と交流する機会があったか、②家族が本を読んできたか、③家族と美術展や博物館へ行ったか、④外国のメディアに触れたか、という4項目である。

留学生と知り合った機会の有無（「1＝あった」「0＝なかった」）と、子どもの頃の経験に関する変数（「1＝なかった」「2＝あまりなかった」「3＝ときどきあった」「4＝よくあった」とスコア化）の相関係数を算出すると表1-3のようになる。

表1-3 留学生と知り合った機会の有無と子どもの頃の経験の相関係数

	学部生		大学院生	
	相関係数	(N)	相関係数	(N)
日本人以外と交流	0.140 **	428	0.008	151
家族が本を読んできた	0.066	429	0.076	151
家族と美術展や博物館へ行った	0.102 *	429	0.108	151
外国のメディアにふれた	0.129 **	429	0.034	149

**: $p<0.01$ *: $p<0.05$

大学院生については、子どもの頃の経験のどの項目も留学生と知り合う機会との間に有意な相関が見られない。一方、学部生については対照的であり、子どもの頃、日本人以外と交流することがよくあった学生ほど、また、家族と美術展や博物館へよく行った学生ほど、そして、外国のメディアによく触れていた学生ほど、留学生とよく知り合っている。

先に述べたとおり、大学院生であれば、研究室で留学生と出会い、交流する機会が必然的に存在するのであるが、学部生の場合は留学生と知り合う機会が比較的少なく、一人一人の学生のもつ意志や資質などが留学生と出会う機会の多寡に影響を及ぼしやすい。外国語能力に加えて、幼い頃から外国人や外国文化に接触する経験を持ち、それらに対する親しみや関心が培われていることも、留学生と交流する上で有効に働いているのである。子どもの頃の異文化接触経験は、外国人との交流に関心を差し向け、交流を促す、ある種の文化資本としての意味合いをもっていると言ってもよさそうである。

1. 2. 留学生と知り合うことによって日本人学生が受ける影響

(1) 留学生との交流がもたらす満足

留学生と知り合うことによって、日本人学生が受けている影響については次のようなことが明らかになった。

まず、留学生と知り合ったことがある人となない人との間で、友人知人関係への満足度を比較すると、留学生と知り合ったことがある人の方が満足度が高いという結果を得られた。

日頃交流のある人的ネットワークの輪の中に留学生がいて、多様性に富んだ人間関係を形成することが、友人知人関係全体への満足度を高める働きをしていることをうかがい知

ることができる。

表 1-4 では、2 変数のクロス表および χ^2 乗検定の結果に加えて、相関係数も示している（満足度については「1 = 不満足」「2 = どちらかといえば不満足」「3 = どちらかといえば満足」「4 = 満足」という方法でスコア化した）。

表1-4 留学生と知り合った機会の有無と友人知人関係への満足度

	友人知人関係への満足度					(N)
	(%)					
	不満足	どちらかといえ ば不満足	どちらかといえ ば満足	満足	合計	
留学生と知り合ったことがある	1.7	8.7	48.2	41.4	100.0	413
留学生と知り合ったことがない	4.9	9.8	60.7	24.5	100.0	163

$\chi^2=17.4^{**}$ $r=0.154^{**}$ (**: $p<0.01$)

また、留学生と同じ研究室に所属し、留学生と席を並べて研究活動を行うことを日本人学生がポジティブに受け止めている傾向もあるようだ（表 1-5）。

表1-5 留学生と研究室で知り合った機会の有無と研究環境への満足度

	研究環境への満足度					(N)
	(%)					
	不満足	どちらかといえ ば不満足	どちらかといえ ば満足	満足	合計	
留学生と研究室で知り合ったことがある	0.6	8.1	57.2	34.1	100.0	173
留学生と研究室で知り合ったことがない	3.6	11.1	59.9	25.4	100.0	389

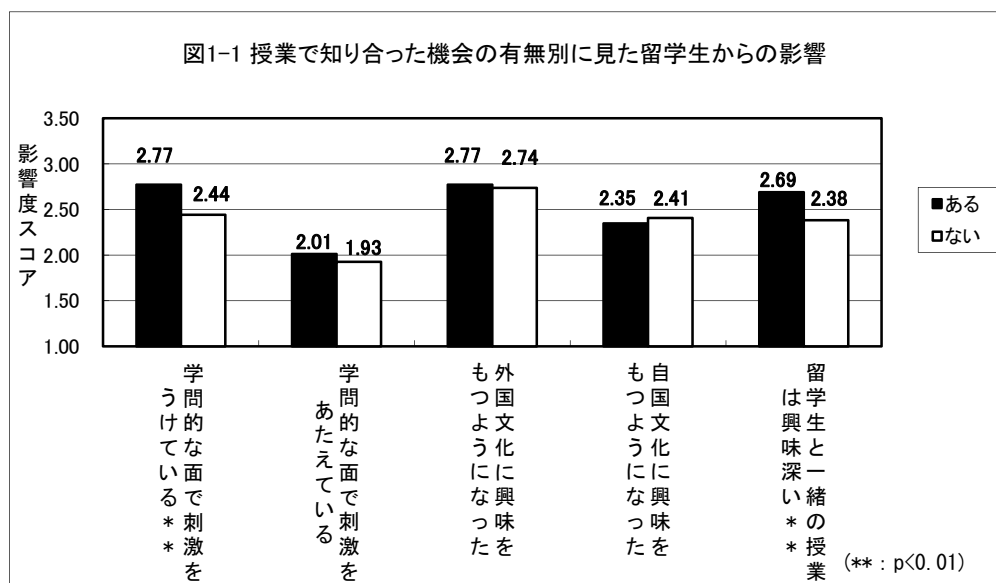
$\chi^2=8.5^*$ $r=0.118^{**}$ (**: $p<0.01$ *: $p<0.05$)

留学生と研究室で知り合ったことがある人となない人との間で、研究環境への満足度を比較してみると、前者のグループの学生の方で満足度が高くなっているのである。

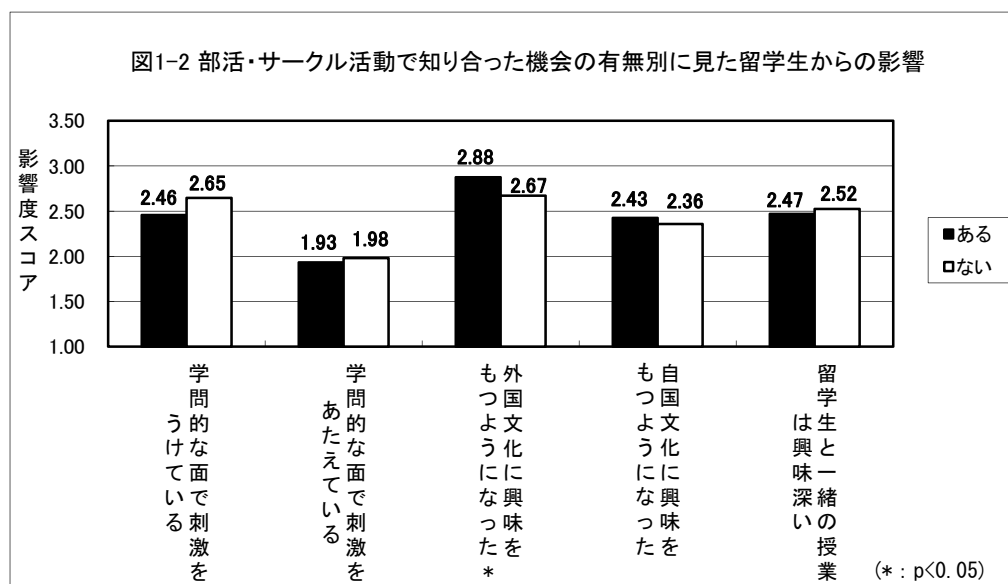
（２）留学生からの直接的影響、留学生への直接的影響

留学生から受けている直接的影響、留学生に対して与えている直接的影響についても、「学問的な面で刺激を受けている」「学問的な面で刺激をあたえていると感じる」「外国の文化に興味をもつようになった」「自国の文化に興味をもつようになった」「留学生と一緒に授業に興味深いと感じる」の 5 項目にわたって尋ねている。

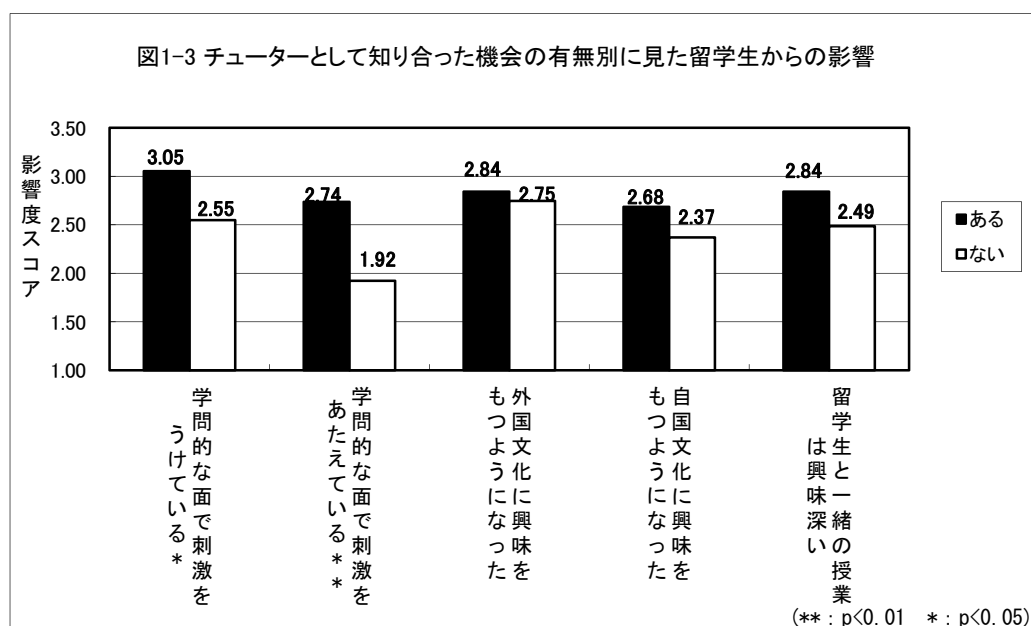
以下では、これらの質問に対する回答を「1 = あてはまらない」「2 = どちらかといえばあてはまらない」「3 = どちらかといえばあてはまる」「4 = あてはまる」という形でスコアとして扱い、知り合った場ごとに各項目のスコアの平均値を比較してみる（図 1-1～1-5）。t 検定の結果、それぞれの場で知り合ったことがある人となない人との間で、影響度スコアの平均値に有意差が見られた項目については、「* ($p<0.05$)」「** ($p<0.01$)」を表示する。



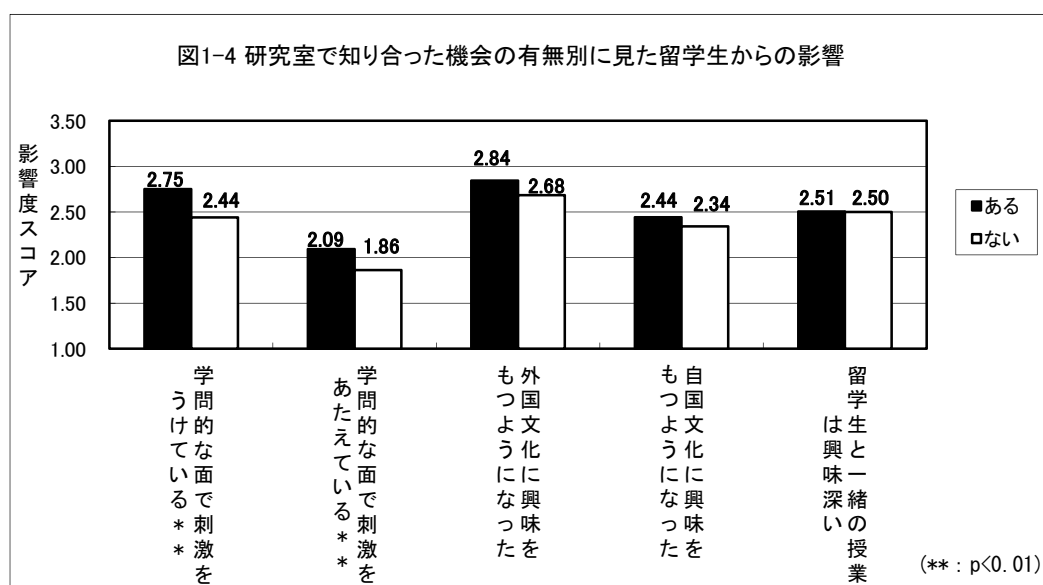
まず、授業で留学生と知り合ったことがある人と知り合ったことのない人との間に有意な差が見られたのは、「学問的な面で刺激を受けている」「留学生と一緒に授業に興味深いと感じる」という2項目である。どちらの項目についても、授業で留学生と知り合った人においてスコアが高くなっている。



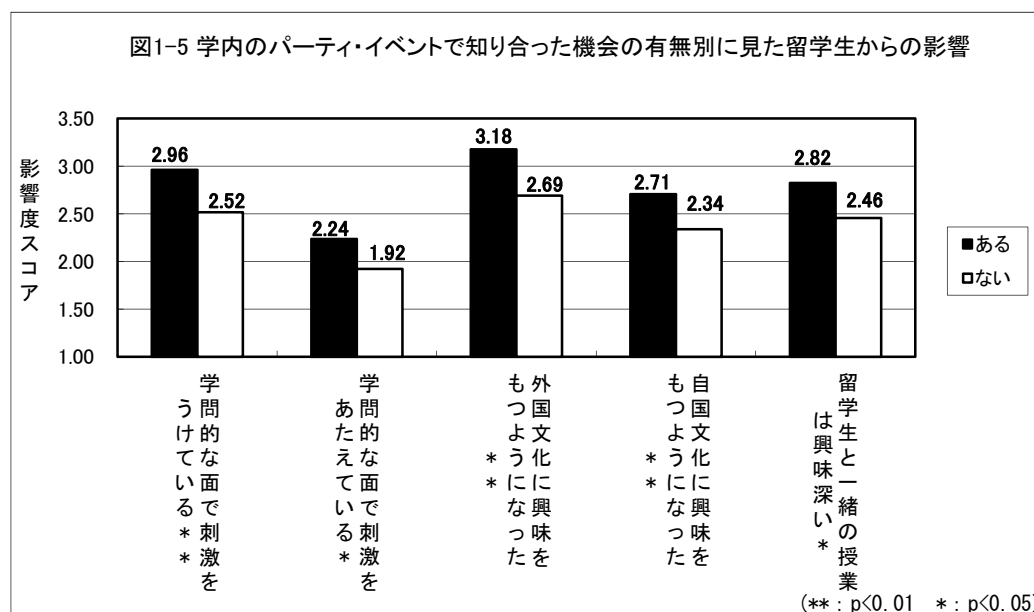
部活動・サークル活動で留学生と知り合ったことがある人は、知り合ったことがない人と比べると「外国文化に興味をもつようになった」のスコアが有意に高い。



チューターとして留学生と知り合ったことのある人において最も特徴的なのは、「学問的な面で刺激を与えていると感じる」傾向が顕著に見られる点である。チューターは留学生を主に勉学面においてサポートする立場にあることから、当然の結果といえよう。「学問的な面で刺激を受けている」のスコアも有意に高くなっている。



研究室で留学生と知り合った場合には、留学生から学問的な面での刺激を受けるばかりでなく、自らも留学生に対して刺激を与えていると感じる双方向の関係性が作られやすいことが分かる。



学内のパーティ・イベントで留学生と知り合った人については、知り合ったことのない人と比べて5つの全ての項目においてスコアが有意に高くなっている。

これらの結果は次のように整理できる。まず、授業や研究室といったフォーマルな教育・研究活動の場で知り合った場合は、学問的な面での刺激のやりとりが留学生との間に生じやすい。ただ、授業で知り合う場合は、留学生から刺激を受ける傾向のみが強まり、いわば留学生から日本人学生に向けた一方向的な影響であるのに対して、研究室で知り合う場合は、自らも留学生に学問的な刺激を与えていると意識する双方向的な関係性になりやすいという違いがある。部活・サークル活動のようなインフォーマルな課外活動で留学生と知り合った場合には、留学生との交流を通じて、外国文化への関心が高まりやすい。学内のパーティ・イベントについては、今回の調査ではそれが具体的にどのようなパーティ・イベントであるのかという所まで踏み込んだ質問はしていないのだが、おそらくフォーマルなイベントとインフォーマルなイベントの両方が含まれているのではないかと予想される。このように、留学生とどのように知り合ったのかという場の性質が、日本人学生と留学生の関係性を一定程度枠づける働きをしていることが分かる。

1. 3. 留学生との交流と留学志向・留学観との関連

(1) 留学志向との関連

留学生と知り合ったことがある人となない人との間で、自分自身が留学することに対する関心に違いがあるのか否かを、身分別に見てみよう (表 1-6)。

留学生と知り合ったことのある人においては、知り合ったことのない人と比べて、留学がすでに決定している人や留学したいと思ったことがある人の割合が高くなっている。これは学部生についても大学院生についても共通した現象である。

表1-6 留学生と知り合った機会の有無と留学志向

		留学したいと思ったことはあるか				
		(%)				(N)
		はい	いいえ	留学が決定している	合計	
学部生	留学生と知り合ったことがある	76.7	19.4	3.9	100.0	279
	留学生と知り合ったことがない	64.0	33.3	2.7	100.0	150
	合計	72.3	24.2	3.5	100.0	429
大学院生	留学生と知り合ったことがある	65.2	29.6	5.2	100.0	135
	留学生と知り合ったことがない	31.3	68.8	0.0	100.0	16
	合計	61.6	33.8	4.6	100.0	151

学部生: $\chi^2=10.5^{**}$ 大学院生: $\chi^2=10.0^{**}$ (**: $p<0.01$)

(2) 国際交流センターの活動への参加状況

表 1-7 では、留学生と知り合った機会がある人となない人との間で、国際交流センターの活動への参加状況を比較してみた。

表1-7 留学生と知り合った機会の有無別に見た国際交流センターの活動への参加状況

		参加状況(複数回答)										(N)
		(%)										
	留学生と知り合った	説明会	個別相談	ホームページ	メーリングリスト	ポケットゼミ	多文化交流クラス	講演会	留学フェア	ラウンジ	英語聴講制度	
学部生	ある	45.0	2.5	18.3	19.4	21.6	1.8	3.6	8.6	10.1	0.4	278
	ない	35.2	1.4	3.4	14.5	16.6	2.1	0.7	0.7	1.4	0.0	145
	合計	41.6	2.1	13.2	17.7	19.9	1.9	2.6	5.9	7.1	0.2	423
大学院生	ある	16.4	0.0	9.0	6.0	5.2	0.0	0.0	3.7	4.5	0.7	134
	ない	6.3	0.0	12.5	0.0	6.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	16
	合計	15.3	0.0	9.3	5.3	5.3	0.0	0.0	3.3	4.0	0.7	150

※太字太枠は、 χ^2 検定の結果、留学生と知り合った機会の有無によって有意差($p<0.05$)が見られた項目を示す

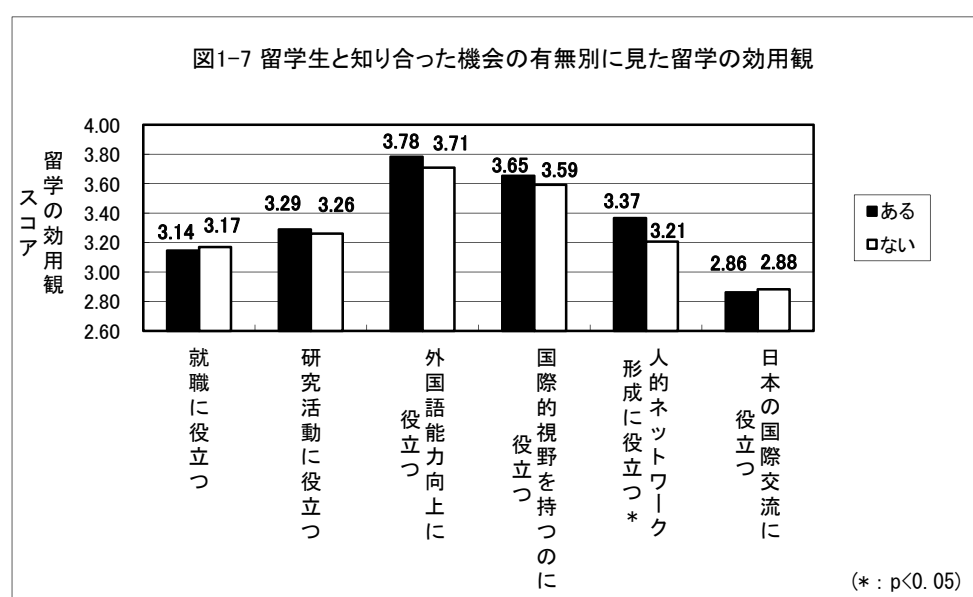
全体的に、大学院生よりも学部生の方がセンターの活動へよく参加していることが分かる。そして学部生の中でも特に、留学生と知り合ったことがある人において参加状況が良く、ホームページ、留学フェア、ラウンジの利用率には有意差が出ている。

これには2つの原因が想定できる。1つは、留学生と知り合ったことのある人が、留学生を媒介としてセンターの活動について知り、関心を高めたという可能性である。さらに、もう1点考えられる。先に指摘したとおり、学部生にとっては留学生と知り合う機会が比較的少ないため、留学生と付き合いのある人は特定の層（外国語能力や異文化接触経験が豊かであるなど）の学生に限られやすい。したがって、留学生と知り合ったことのある学部生はもともと海外や国際交流に対して強い関心を抱いている可能性があり、それがセンターの活動への参加を促しているのかもしれない。

いずれの場合においても、留学生と付き合いのある人は、留学のための情報にアクセスする機会も同時に多く持っているものであり、留学を実現しやすい層であるといえるだろう。

(3) 留学の効用観

留学生と交流する機会をもつことが、留学に対する見方にも影響を及ぼすようである。調査票では、自分が留学した場合にそれがどのようなことに役立つと思うかを4段階で尋ねている。各項目への回答を、「1＝役立たないと思う」「2＝あまり役立たないと思う」「3＝ある程度役立つと思う」「4＝役立つと思う」とスコア化し、留学生と知り合ったことがある人となない人との間で、スコアの平均値を比較すると図1-7のようになる。



t検定の結果、2群の間で有意差が見られたのは、留学が「人的ネットワーク形成に役立つ」という項目である。留学生と知り合ったことがある人は、留学の効用として友人・知人などを作れることを視野に入れている。学内で留学生と交流することによって、留学先で新たな人間関係を開拓することに対する明確なビジョンが形成されやすくなっているのであろうし、外国人と交流するためのスキルや自信を培ったりする機会にもなっていることが推測される。

2. 留学生側から見た日本人学生との交流

2. 1. 日本人学生と知り合う機会

留学生側から見たときの日本人学生との交流はどのような状況なのだろうか。まずは、留学生が日本人学生と知り合う機会を、①所属（文系／理系、身分）、②来日した時期、③言語能力によって比較分析してみる。

(1) 所属による違い

日本人と知り合う機会を留学生がどの程度持っているのかを、文理別および身分別に集

計すると、表 2-1 のようになる。

表2-1 日本人学生と知り合ったことがある人の割合

		日本人学生と知り合う機会					(N)
		(%)					
		ほとんど なかった	どちらかとい うと不十分	どちらかとい えば十分	十分	合計	
文 理	文系	8.0	38.5	33.0	20.5	100.0	200
	理系	6.6	24.7	31.4	37.3	100.0	442
	文理融合系	0.0	23.8	30.2	46.0	100.0	63
	未決定	11.1	44.4	22.2	22.2	100.0	9
身 分	学部の正規学生	8.3	30.6	38.9	22.2	100.0	36
	大学院修士課程の正規学生	4.5	28.2	34.1	33.2	100.0	220
	大学院博士課程の正規学生	6.6	23.3	29.0	41.2	100.0	335
	研究生・聴講生	8.4	45.3	30.5	15.8	100.0	95
	一般交換留学生	0.0	16.7	41.7	41.7	100.0	12
	KUINEP学生	0.0	22.2	61.1	16.7	100.0	18
	日本語・日本文化研修留学生	18.8	43.8	25.0	12.5	100.0	16
	短期交流学生	0.0	11.1	44.4	44.4	100.0	9
	その他	0.0	0.0	0.0	100.0	100.0	1

文理: $\chi^2=31.5^{**}$ 身分: $\chi^2=54.4^{**}$ (**: $p<0.01$)

まず、文系と比べて理系の学生の方が日本人学生と知り合う機会を多くもっていることが分かる。また、京都大学の学部・大学院への正規学生は日本人学生と知り合う機会を一定以上もっており、とりわけ大学院生においてその機会が多い。

研究生・聴講生は、所属する特定の集団を学内に持たない傾向が他の身分の学生より強いいためか、日本人学生と知り合う機会が「ほとんどなかった」「どちらかというとな十分」という人が比較的多い。

短期留学生については、コースによって大きな差が出ている。「一般交換留学生」「KUINEP 学生」「短期交流学生」は日本人学生と「十分」あるいは「どちらかといえば十分」知り合っている人が大半を占めているのであるが、「日本語・日本文化研修留学生」においては逆に、日本人学生と知り合う機会が「ほとんどなかった」「どちらかといえば不十分」という人の方が多く、60%以上を占めている。

また、次の表 2-2 では、日本人学生とどのように知り合ったのかを整理した。日本人学生と「授業で」「部活・サークル活動で」「チューターとして」「研究室で」「学内のパーティ・イベントなどで」「その他で」知り合った人のパーセンテージをそれぞれ算出している。

表2-2 日本人学生と知り合ったことがある人の割合(場所別)

		日本人学生と知り合ったことがある人の割合(複数回答)						(N)
		(%)						
		授業で	部活・サークル活動で	チューターとして	研究室で	学内のパーティ・イベントなどで	その他	
文理	文系	45.0	17.0	26.5	50.0	26.5	5.5	200
	理系	24.3	14.5	13.2	80.5	23.4	5.2	441
	文理融合系	46.0	22.2	22.2	76.2	34.9	9.5	63
	未決定	33.3	55.6	44.4	33.3	33.3	11.1	9
身分	学部の正規学生	66.7	33.3	25.0	25.0	25.0	5.6	36
	大学院修士課程の正規学生	45.2	12.8	11.9	70.3	23.7	3.7	219
	大学院博士課程の正規学生	21.5	10.1	13.1	86.3	23.0	6.3	335
	研究生・聴講生	18.9	21.1	25.3	63.2	28.4	6.3	95
	一般交換留学生	25.0	58.3	50.0	50.0	41.7	8.3	12
	KUINEP学生	100.0	55.6	61.1	0.0	44.4	16.7	18
	日本語・日本文化研修留学生	12.5	62.5	50.0	6.3	43.8	0.0	16
	短期交流学生	11.1	11.1	22.2	77.8	0.0	22.2	9
	その他	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	1

※太字太枠は、 χ^2 検定の結果、文理・身分によって有意差($p<0.05$)が見られた項目を示す

理系学生や大学院生が研究室で日本人学生と知り合うことが多い点、文系学生が授業で知り合うことが多い点などは、日本人学生側のデータ分析結果と共通している。

研究生・聴講生が日本人学生と研究室でよく知り合うのは、大学院入学を志す立場から研究室に出入りする機会があることを反映しているのだろう。

短期留学生については、コースによって日本人学生と知り合う場が異なっており、たとえば KUINEP 学生が授業で 100%日本人学生と知り合っていたり、短期交流留学生が研究室で日本人学生とよく知り合っている点などが特徴的である。一般交換留学生、KUINEP 学生、日本語日本文化研修留学生は、部活・サークル活動、学内のパーティ・イベントやチューターとしてよく知り合っている点で共通している。ここで挙げられる部活・サークル活動や学内のパーティ・イベントがどのような類のものなのかは調査票データからはうかがい知ることができないのだが、学部や大学院の正規留学生が部活・サークル活動や学内のパーティ・イベントで日本人学生とあまり多く知り合っていないことを踏まえるならば、短期留学生が参加しやすいサークルやイベントが存在するということだろうか。

(2) 滞日期間の長さによる違い

表 2-3 に示すように、日本人学生と知り合う機会は、滞日期間の長さとは関連がない。

2011 年に来日したばかりで、滞日期間が約半年にも満たない留学生については、日本人学生と知り合う機会が不十分だと回答する人が他カテゴリーの留学生よりも若干多いが、有意な差ではない。日本人と知り合う機会が十分にあるかどうかは、滞日期間の長さ以外の要因によって規定されるようだ。

表2-3 日本に来た時期別に見た日本人学生と知り合う機会

		日本人学生と知り合う機会					(N)
		(%)					
		ほとんど なかった	どちらかとい うと不十分	どちらかとい えば十分	十分	合計	
日本に来た年	2008年以前	9.1	26.5	28.8	35.6	100.0	219
	2009年	5.0	25.2	33.3	36.5	100.0	159
	2010年	5.3	28.3	32.3	34.1	100.0	226
	2011年	5.2	33.9	32.2	28.7	100.0	115

 $\chi^2=7.9$

(3) 言語能力による違い

次に、留学生たちの日本語能力、英語能力が日本人学生と知り合う機会とどのように関連しているのかを見てみたい。表2-4は、日本語能力、英語能力の水準別に、日本人学生と知り合う機会の量をクロス集計した結果である。表の右下に、 χ^2 乗検定の結果と相関係数も示しておく（相関係数を算出するにあたって、日本人学生と知り合う機会については、「1＝ほとんどなかった」「2＝どちらかというと不十分」「3＝どちらかといえば十分」「4＝十分」、日本語能力と英語能力については「1＝ほとんどできない」「2＝日常生活でのコミュニケーションができる程度」「3＝教科書を読み、授業をほぼ理解できる程度」「4＝レポートを書き、授業で質疑ができる程度」「5＝論文を読んだり書いたりし、専門的なことを議論できる程度」という方法でスコア化した）。

表2-4 日本語能力・英語能力別に見た日本人学生と知り合う機会

		日本人学生と知り合う機会					(N)
		(%)					
		ほとんど なかった	どちらかとい うと不十分	どちらかとい えば十分	十分	合計	
日本語能力	ほとんどできない	4.7	25.5	26.4	43.4	100.0	106
	日常生活でのコミュニケーション	3.8	24.7	32.3	39.1	100.0	235
	教科書を読み授業をほぼ理解	11.3	29.3	34.6	24.8	100.0	133
	レポートを書き授業で質疑	5.2	34.1	39.3	21.5	100.0	135
	専門的なことを議論	8.1	29.4	24.3	38.2	100.0	136
英語能力	ほとんどできない	13.6	40.9	36.4	9.1	100.0	22
	日常生活でのコミュニケーション	11.8	41.9	30.1	16.1	100.0	93
	教科書を読み授業をほぼ理解	10.9	34.7	32.7	21.8	100.0	101
	レポートを書き授業で質疑	3.7	28.9	38.5	28.9	100.0	135
	専門的なことを議論	4.3	22.2	29.5	43.9	100.0	396

日本語能力: $\chi^2=33.0^{**}$ $r=-0.094^{**}$ 英語能力: $\chi^2=60.6^{**}$ $r=0.266^{**}$ (**: $p<0.01$)

これを見ると、日本語能力、英語能力のどちらもが、日本人学生と知り合う機会に有意な差をもたらしていることが分かる。ここでとても興味深いのは、2言語が逆向きの働きをしている点だ。すなわち、日本語については概ね運用能力が低い留学生ほど日本人とよ

く知り合っているのに対して、英語については逆に運用能力が高い留学生ほど日本人学生とよく知り合っているのである。なぜこのようなことが起きるのであろうか。

原因として考えられることの1つは、留学生と日本人学生とが自然に知り合う機会が学内に多くは存在せず、もしも知り合う機会を自分の意志で積極的に持とうとした場合、その要求に応えてくれる場の多くが英語を用いたコミュニケーションの場になっている可能性である（たとえば国際交流を目的としたサークル活動やイベント）。そういった場では、当然のことながら、英会話が堪能であるか、もしくは英会話のスキルを磨くことに強い意志をもつ一部の限られた日本人学生と、英会話の堪能な一部の留学生が集うことになり、逆に、英会話があまり得意でない上にそのスキルの上達に対してもそれほどの意欲をもっていない日本人学生の多くや英会話が得意でない留学生は、互いに知り合いたくともそれを可能にする場自体が存在しない。

あるいは、日本人学生が全体として英語を話す留学生を好んでいる可能性もある。言い換えると、日本人学生は留学生に対して一定の役割（「外国人」であること、英会話の練習相手になってくれること）を期待しているのかもしれない。

2. 2. 留学生の交友関係全体の構造

留学生たちが京都大学で交流する学生は日本人学生だけではなく、対日本人学生との関係ばかりでなく、留学生間との関係も、留学生たちが京都大学での生活に首尾よく適応できるか否かの鍵を握っているはずだ。対日本人学生、対留学生との関係の両方を含めて、留学生たちの交友関係全体の傾向を見てみたい。

（1）日本人学生と知り合う機会と留学生と知り合う機会

留学生が他の留学生と知り合う機会の多さを、日本人学生と知り合う機会の程度別に集計したのが表 2-5 である。2 変数間の相関係数も示しておく（他の留学生と知り合う機会についても、日本人学生と知り合う機会と同様に、「1＝ほとんどなかった」「2＝どちらか」というと不十分」「3＝どちらかといえは十分」「4＝十分」という方法でスコア化した）。

この2変数には正の相関があり、日本人学生とよく知り合っている留学生ほど、他の留学生ともよく知り合っているし、逆に日本人学生と知り合う機会があまりない留学生は、他の留学生ともあまり知り合わずにいるのである。

表2-5 日本人学生と知り合う機会と他の留学生と知り合う機会

		他の留学生と知り合う機会					(N)
		(%)					
		ほとんど なかった	どちらかとい うと不十分	どちらかとい えば十分	十分	合計	
日本人学生と 知り合う機会	ほとんどなかった	28.3	39.1	23.9	8.7	100.0	46
	どちらかという と不十分	9.3	43.1	32.4	15.2	100.0	204
	どちらかとい えば十分	3.8	17.7	50.6	27.8	100.0	237
	十分	5.3	10.9	31.6	52.2	100.0	247

$$\chi^2=168.0^{**} \quad r=0.396^{**} \quad (**:p<0.01)$$

他の留学生と知り合う機会があった人（「ほとんどなかった」と回答した人以外の人）に対しては、さらに一步踏み込んで、交流している留学生のうち、自分と同じ国の出身者と異なる国の出身者がそれぞれ占める割合についても質問している。

日本人学生と知り合う機会の多さと、交流相手の留学生の国籍割合のクロス集計結果と相関係数を表 2-6 に示す（交流のある留学生の国籍割合については「1＝ほとんど他国出身者」「2＝他国出身者の方が多い」「3＝同じくらい」「4＝同国出身者の方が多い」「5＝ほとんど同国出身者」という方法でスコア化した）。

表2-6 日本人学生と知り合う機会と交流する留学生の国籍割合

		交流する留学生中に占める同国出身者・他国出身者割合						
		(%)						(N)
		ほとんど他国 出身者	他国出身者の 方が多い	同じくらい	同国出身者の 方が多い	ほとんど同国 出身者	合計	
日本人学生と 知り合う機会	ほとんどなかった	9.1	18.2	18.2	27.3	27.3	100.0	33
	どちらかというと不十分	23.9	9.8	14.1	35.9	16.3	100.0	184
	どちらかといえば十分	20.6	14.8	17.5	35.9	11.2	100.0	223
	十分	30.9	18.3	18.7	24.8	7.4	100.0	230

$$\chi^2=34.3^{**} \quad r=-0.173^{**} \quad (**:p<0.01)$$

日本人学生と知り合う機会が多い留学生ほど、他国出身の留学生と多く交流しており人間関係が多国籍化しやすいのに対して、逆に、日本人学生と知り合う機会が少ない留学生ほど、人間関係が同国出身の留学生集団内に閉じやすい傾向が見いだせる。

（2）留学生の交友関係の種類と特徴

ここで試みに、留学生が学内の他の学生との間に取り結んでいる交流のあり方を、相手の学生の国籍に基づいて分類してみたい。

1つ目の基準として、まずは日本人学生と知り合う機会が十分（調査票で「十分」「どちらかといえば十分」と回答）であるか不十分（調査票で「どちらかといえば不十分」「ほとんどなかった」と回答）であるかどうかによって回答者を分類し、2つ目の基準として留学生と知り合う機会が十分であるか不十分であるか、さらに留学生間の交流が十分に行わ

れている場合には、他国出身者が同国出身者と同程度以上含まれているか（調査票で「ほとんど他国出身の留学生」「他国出身の留学生の方が多い」「同国出身と他国出身の留学生が同じくらい」と回答）、他国出身者よりも同国出身者の方の割合が多いか（調査票で「同国出身の留学生の方が多い」「ほとんど同国出身の留学生」と回答）、によって回答者を分類すると次のような6つの交流タイプを抽出することができる。

- A：日本人学生との交流も留学生との交流も十分に行われており、かつ、交流する留学生としては他国出身者が多いタイプ
- B：日本人学生との交流も留学生との交流も十分に行われており、かつ、交流する留学生としては同国出身者が多いタイプ
- C：日本人学生との交流は十分に行われているが、留学生との交流は不十分であるタイプ
- D：日本人学生との交流は不十分であるが、留学生との交流は十分に行われており、かつ交流する留学生としては他国出身者が多いタイプ
- E：日本人学生との交流は不十分であるが、留学生との交流は十分に行われており、かつ交流する留学生としては同国出身者が多いタイプ
- F：日本人学生との交流も留学生との交流も不十分であるタイプ

そして、これら6タイプの留学生がそれぞれ回答者全体の中に占める割合は、表2-7に示す通りである。

表2-7 交友関係の6類型の割合

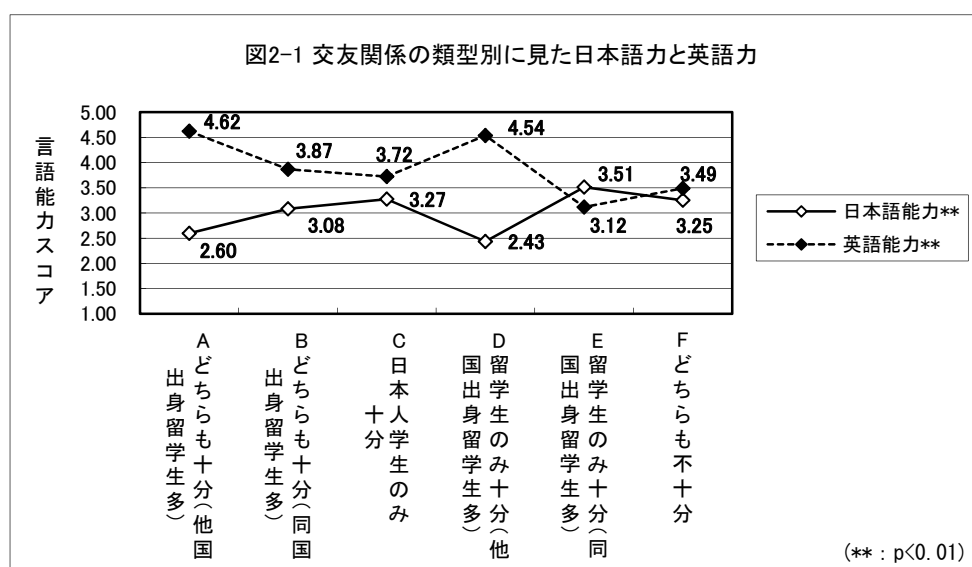
	(N)	(%)
A どちらも十分(他国出身留学生多)	250	34.4
B どちらも十分(同国出身留学生多)	135	18.6
C 日本人学生のみ十分	91	12.5
D 留学生のみ十分(他国出身留学生多)	69	9.5
E 留学生のみ十分(同国出身留学生多)	43	5.9
F どちらも不十分	138	19.0
合計	726	100.0

最も割合が多いのはAタイプ、すなわち学内で多国籍のネットワークを形成しながら大学生活を送っている留学生たちであり、これが34.4%を占めている。

次に多いのは、日本人学生とも留学生とも十分に知り合う機会を持つことができていないFタイプの留学生たち(19.0%)である。そして、Bタイプ(18.6%)、Cタイプ(12.5%)がこれに続く。

これら6タイプの留学生たちのプロフィールをさらに詳しく分析してみよう。

まず、言語能力を比較してみたい。図2-1では、日本語能力と英語能力の平均スコアを、交友関係のタイプ別に示している。分散分析を行った結果、日本語能力と英語能力のどちらにおいても、交友関係タイプの主効果が見られた⁵。



目立った傾向としてまず指摘できるのは、AタイプとDタイプの留学生の英語能力が群を抜いて高いことである。この2タイプの留学生はどちらも、他の留学生との交流機会を十分に持っており、英語が国籍の異なる留学生たちを結ぶ共通言語として機能していることがうかがえる。

また、日本人学生とよく交流する学生の日本語能力が必ずしも高いわけではない事実もここで今一度確認することができる。そして、日本人学生との交流が不十分であると回答した留学生が、Dタイプを除いてむしろ一様に高水準の日本語能力を持っている点は注目に値する。Eタイプ、Fタイプの留学生は、日本語力を十分に持ちながらも、日本人学生と知り合う機会を得ておらず、日本の大学にいながらも同一国籍内に人間関係が閉じているか、学生との交流自体を十分に行っていないのである。

A～Fタイプは、学生の出身地域についても対照的な特徴を有している(表2-8)。AタイプとDタイプはヨーロッパ出身の学生の割合が比較的高く、アジア出身の学生の割合が

⁵ HSD法による多重比較の結果、日本語能力スコアにおいて5%水準で有意差が見られた交友関係のタイプの組み合わせは、 $B > A$ 、 $B > D$ 、 $C > A$ 、 $C > D$ 、 $E > A$ 、 $E > D$ 、 $F > A$ 、 $F > D$ であった。また、英語能力スコアにおいて5%水準で有意差が見られた組み合わせは、 $A > B$ 、 $A > C$ 、 $A > E$ 、 $A > F$ 、 $B > E$ 、 $B > F$ 、 $C > E$ 、 $D > B$ 、 $D > C$ 、 $D > E$ 、 $D > F$ であった。(ここで、「 $\square > \triangle$ 」とは、 \square タイプの留学生のスコアが \triangle タイプの留学生のスコアよりも有意に高いという意味である。)

比較的低くなっている。ヨーロッパ出身の学生は、交流する相手の学生の顔ぶれが多国籍的になる傾向があるらしい。それに対して、Bタイプ、Cタイプ、Eタイプ、Fタイプにおいてはアジア出身の学生が90%を超え、圧倒的多数を占めている。アジア出身の学生は、同じ国出身の学生か日本人学生に人間関係の比重が置かれやすく、また孤立もしやすい傾向もあるということだ。

表2-8 交友関係の類型別に見た留学生の出身地域

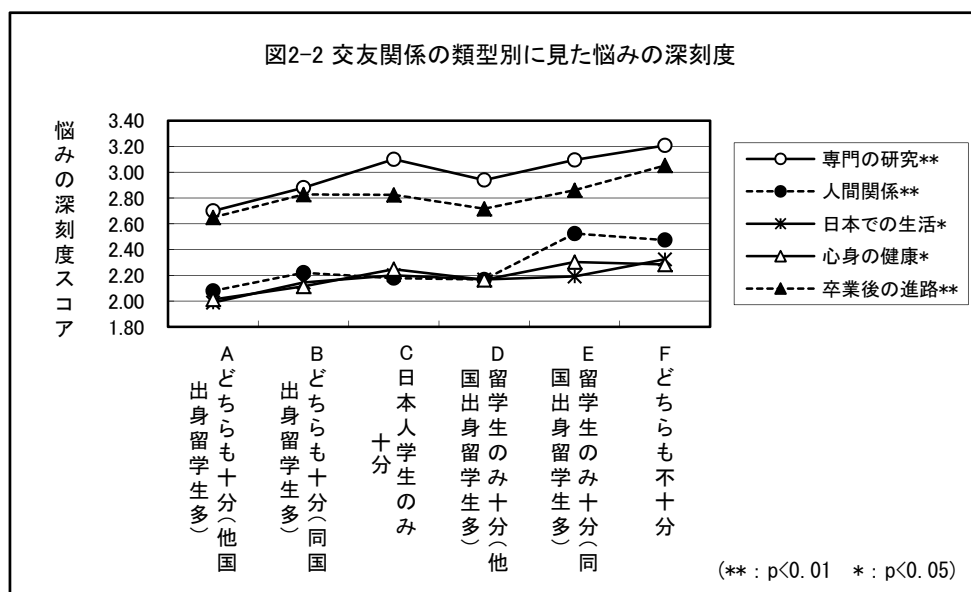
	出身地域									(N)
	(%)									
	アジア	北米	中南米	ヨーロッパ	オセアニア	中東	アフリカ	合計		
A どちらも十分(他国出身留学生多)	64.4	2.8	6.0	14.8	2.4	5.6	4.0	100.0	250	
B どちらも十分(同国出身留学生多)	97.8	0.0	0.0	1.5	0.0	0.0	0.7	100.0	135	
C 日本人学生のみ十分	94.4	2.2	0.0	0.0	0.0	2.2	1.1	100.0	90	
D 留学生のみ十分(他国出身留学生多)	52.2	2.9	8.7	20.3	1.4	4.3	10.1	100.0	69	
E 留学生のみ十分(同国出身留学生多)	95.3	0.0	0.0	2.3	0.0	2.3	0.0	100.0	43	
F どちらも不十分	92.6	2.2	0.0	1.5	0.0	1.5	2.2	100.0	136	

 $\chi^2=148.9^{**}$

悩みを持つ度合いについても対照的な特徴が見出せる。調査票では、①専門の研究に関する悩み、②人間関係に関する悩み、③日本での生活に関する悩み、④心身の健康に関する悩み、⑤卒業後の進路についての悩みがそれぞれどの程度深刻であるのかを4段階で留学生たちに回答してもらっている。その回答を「1＝全く悩んでいない」「2＝あまり悩んでいない」「3＝少し悩んでいる」「4＝とても悩んでいる」とスコア化した上で、交友関係の6タイプ別に悩みの深刻度スコアの平均値を比較してみた(図2-2)。分散分析を試みた結果、どの悩みにおいても、交友関係のタイプによる主効果があることが分かった⁶。

⁶ HSD法による多重比較を行ったところ、悩みの深刻度スコアに5%水準での有意差が見られたのは、以下の交友タイプ間においてであった。①専門の研究に関する悩みについては、C>A、F>A、F>B、②人間関係に関する悩みについては、E>A、F>A、③日本での生活に関する悩みについては、F>A、④心身の健康に関する悩みについては、F>A、⑤卒業後の進路についての悩みについては、F>A。

図2-2 交友関係の類型別に見た悩みの深刻度



全般的に見て、日本人学生とも他の留学生とも十分に知り合う機会を持つことが出来る人（特にAタイプ）は、悩みの深刻度スコアが他タイプの留学生よりも低いことが分かる。それに対して、悩みの深刻度スコアが高い傾向が目立つのは、日本人学生とも他の留学生とも知り合う機会が不十分であるFタイプの留学生、そして交友関係が同国出身の留学生に閉じているEタイプの留学生である。人間関係において孤立していることと悩みが深刻化しやすい傾向の間には関連性があるというわけである。

こういった留学生たちが学内の人間関係に関して何らかのサポートを必要としているのか、もしサポートが必要ならばどのようなサポートを得たいのか、など、さらに踏み込んだ調査をすることも大事になってくるだろう。

2. 3. 日本人学生との交流の特徴

(1) 悩みを誰に相談するか

留学生が日々さまざまな国籍の学生たちと交流する中でも、日本人学生とはどのような性質の関わり方をしているのだろうか。ボクナーら（1977）⁷によれば、留学生にとって、ホスト国の学生との交流、同国出身の留学生との交流、他国出身の留学生との交流は、それぞれ異なる機能を果たしているのだという。ホスト国の学生はアカデミックな領域での道具的サポートを提供し、同国出身の留学生との関係は自らの文化的アイデンティティを確認したり表明したりする機会をもたらし、さらに他国出身の留学生との関係はレクリエーション機能をもつ、とする、いわゆる「機能モデル (functional model)」は、留学生の交友関係を説明する基本的モデルとして、その後、数々の研究者たちによる継承と発展を

⁷ Bochner, S., McLeod, B. & Lin, A. (1977) "Friendship patterns of overseas students : a functional model" *International Journal of Psychology* 12

みてきた。

京都大学の留学生にとって日本人学生との関係がいかなる性格をもつものであるのかを、同国出身の留学生との関係、他国出身の留学生との関係との比較から把握することは、本調査のデータによってもある程度可能である。調査票の中では、留学生が抱きやすいであろう様々な種類の悩み（①専門の研究に関する悩み、②人間関係に関する悩み、③日本での生活に関する悩み、④心身の健康に関する悩み、⑤卒業後の進路についての悩み）について、相談する相手を15の選択肢の中から最大3つまで回答してもらっているのだが、その選択肢の中に、日本人学生、同国出身留学生、他国出身留学生というカテゴリーが設けられている。そこで、留学生たちが、日本人学生、同国出身留学生、他国出身留学生を、それぞれの悩みの相談相手としてどれくらいの割合で選んでいるのかを分析してみたい。

以下の5つのグラフは、5種類の悩みの相談相手として日本人学生（チューターを含む）、同国出身の留学生、他国出身の留学生を選んでいる人の割合を、それぞれ悩みの深刻さの度合い別に示している（図2-3～2-7）。

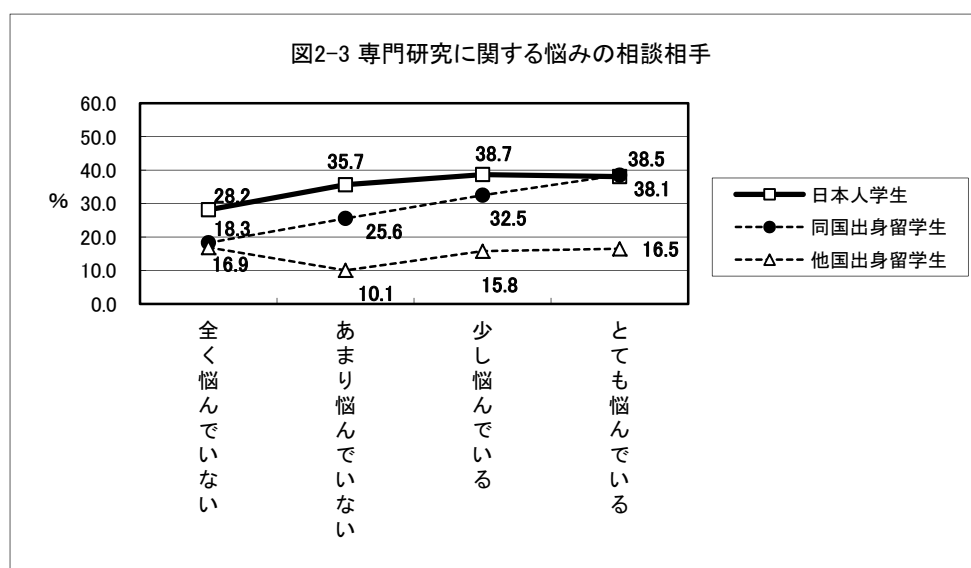


図2-4 人間関係に関する悩みの相談相手

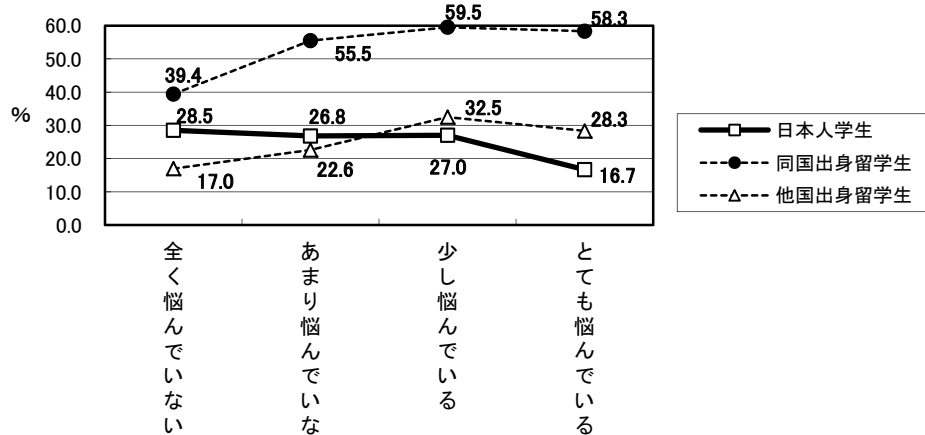


図2-5 日本での生活に関する悩みの相談相手

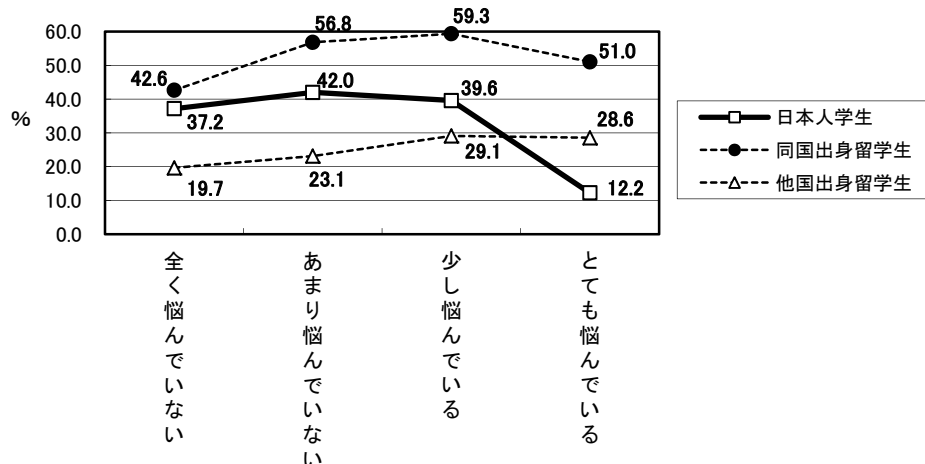
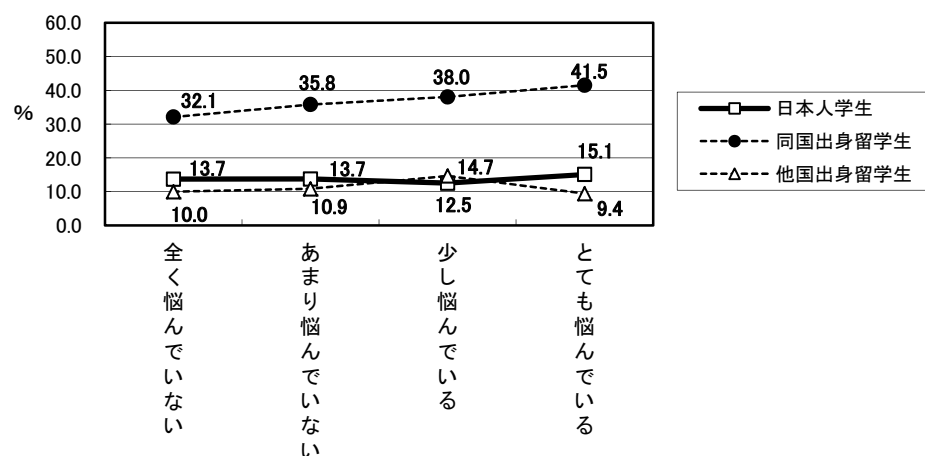
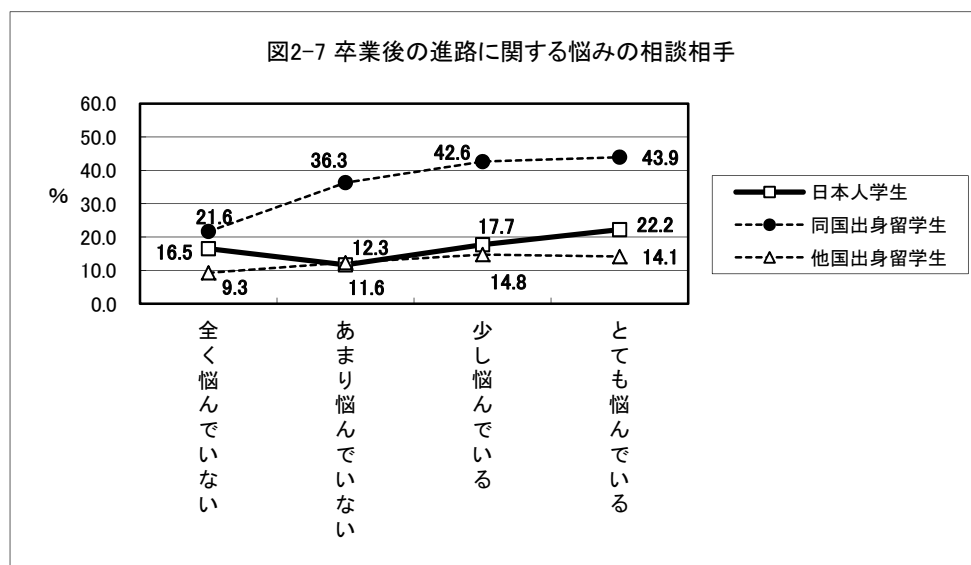


図2-6 心身の健康に関する悩みの相談相手





まず目を引くのは、同国出身留学生を相談相手として選ぶ人の多さである。専門研究に関する悩みを除けば、全ての領域の悩みについて同国出身留学生に相談を持ちかける人が最も多い。留学生にとって、同国出身者は日本での学生生活に適応するためのサポートを行うとても重要な存在であることが分かる。

日本人学生が留学生から最も相談されやすいのは、専門研究に関する悩みである。これは、ホスト国学生が留学生に対して果たす機能として、学業面でのサポート機能を挙げたボクナー仮説を支持する結果である。他には、日本での生活に関する悩みを日本人学生に相談する人が比較的多いが、こういった類の悩みについては日本の社会や文化をよく知る人間に相談するのが効果的である以上、当然の結果であろう。ただ、興味深いことに、日本での生活に関して悩みが深刻な人（「とても悩んでいる」人）は、日本人学生に相談をもちかけることが少なくなる。日本での生活について深く思い悩んでいる留学生は、相談相手に対して日本の社会や文化に対する違和感や不満を吐露することも少なくないはずであり、そういったことを日本人を前にしては口にしにくいということだろうか。

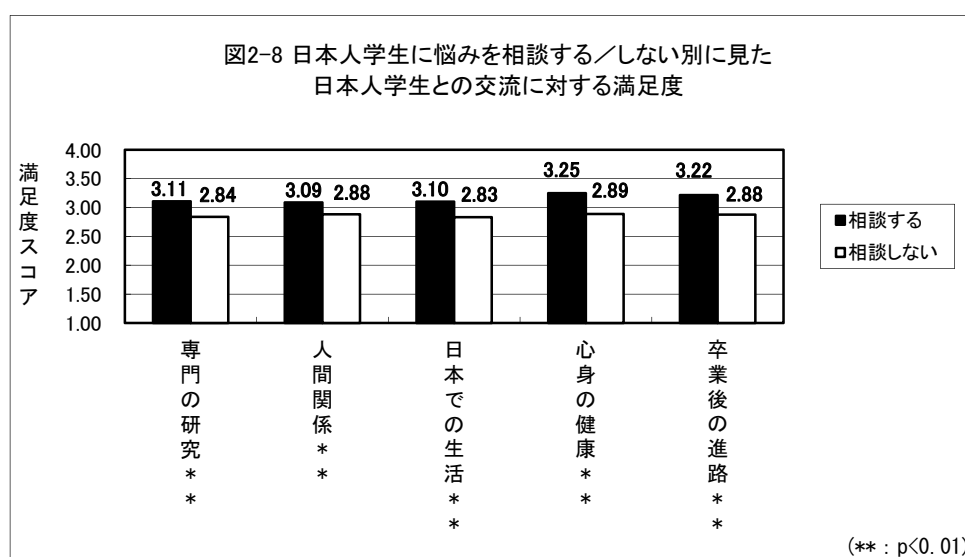
人間関係に関する悩みも同様である。人間関係に関する悩みの中には、おそらく日本人との人間関係に関する悩みが多く含まれているだろうと想像される。人間関係に関する悩みが深刻なときは、一番よく相談する相手はもちろん同国出身の留学生であるが、それに次いで相談しやすいのは日本人学生よりもむしろ他国出身留学生なのである。対日本人、という関係性の中では、出身国が異なっていようと留学生同志で悩みや経験に共通する点が多く、話をしやすいのだろう。

日本人学生は、専門研究に関する悩みと、日本での生活に関する比較的軽度な悩み以外は留学生からあまり悩みを打ち明けられていない実態が浮かび上がってくる。日本人学生と留学生の関係は、深い自己開示を伴うところにはまではなかなか発展しないようだ。

（２）日本人学生との交流に対する満足度

数は決して多くはないものの、日本人学生に悩みを打ち明けることができている留学生は日本人学生との交流からより多くの満足を得ている。

図 2-8 は、5 種類の悩みについて、相談相手として日本人学生を選んでいる人と選んでいない人との間で、日本人学生との交流に対する満足度に差があるかどうかを調べた結果である。満足度は「1 = 不満足」「2 = やや不満足」「3 = やや満足」「4 = 満足」の 4 段階でスコア化し、その平均値を比較した。



t 検定の結果、いずれの領域の悩みについても、相談相手として日本人学生を挙げた人と挙げていない人との間では、日本人学生との交流に対する満足度に有意な差が見られた。特に、「心身の健康」「卒業後の進路」について日本人学生と相談できる留学生において満足度が高い。

まとめ

今回、アンケートデータの分析を通じて確認されたのは、留学生と日本人学生の交流の実態を把握し、その改善のためのサポート等を行うにあたっては、少なくとも 2 つの段階が存在するという事実だ。1 つは、両者が知り合う段階であり、2 つ目は知り合った後に両者が交流を進展させていく段階である。つまり、留学生にしても日本人学生にしてもお互いに知り合う機会を一樣に持つことができていないわけではなく、中には知り合いたくても知り合えない状態の人もいるのである。誰が日本人学生／留学生とよく知り合っているのか、知り合わずにいるのか、また、(必要に応じて) 知り合う機会を増やすにはどうしたらよいのか、という議論がまずは求められる。そしてこれとは別の段階の課題として、すでに知り合う機会をもっている学生については、その交流の質を問うていく必要がある。

この2つの段階別に、本稿の論点を簡潔に整理しておこう。

(1) 日本人学生データの分析から明らかになったこと

①留学生と知り合う機会

日本人学生が留学生と出会う機会にはまず、学部生であるか大学院生であるかによって大きな差が見られる。留学生の多くが大学院に所属していることから、大学院生であれば必然的に留学生と知り合う機会が多い。それに比すれば学部生の場合は留学生と知り合う機会は割合に少なく、一部の特化された層（英語力が比較的高い学生、異文化接触経験や異文化に対する強い関心を持つ学生など）が留学生と積極的に交流している傾向が目立つ。多くの学部生にとって、留学生は同じ学内にありながらも遠い存在なのかもしれない。

②留学生との交流の質

留学生と接点を持つことが出来た日本人学生が、留学生から多方面にわたるポジティブな影響を受けていることは、本調査のデータの範囲内からも十分にうかがい知ることができる。学問的な面での刺激を受けたり、自他の文化に対する関心を深める機会になっていることに加えて、留学生と知り合ったことがある日本人学生は友人・知人関係に対する満足度が高く、また、留学生のいる研究室で学ぶ日本人学生は研究環境への満足度が高い傾向もある。さらに、留学生と接点をもつ学生ほど、自分自身が留学することへ強い関心を抱いていることが確認された。留学生との交流は日本人学生の国際的な視野を広げ、文化的バックグラウンドを異にする他者と共存していくための社会的スキルを磨くための好機になっているのである。

今回の調査では、留学生との交流が生み出すポジティブな影響のみに焦点化しているのだが、逆に留学生との交流に伴うさまざまな困難や葛藤についても今後追究していく必要があるだろう。特に大学院生の場合は、自分の意思の有無にかかわらず留学生と研究室で恒常的に関わり合い、切磋琢磨しあう関係の中にあるため、固有の問題が生じていることも予測される。

(2) 留学生データの分析から明らかになったこと

①日本人学生と知り合う機会

日本人学生データの分析結果と同様に、所属するコースや言語能力による差が生じていることが明らかになった。

とりわけ興味深く感じられたのは、日本語能力の高い留学生が日本人学生と知り合う機会を多くもっているわけではなく、むしろ逆に英語ができることの方が日本人学生と知り合う上でのアドバンテージになっている点だ。日本語がよく出来る留学生の方が日本人学生との接点を持てず、交流を妨げられているのはなぜなのだろうか。このことは今後十分に検証されていかなければならない。日本人学生と留学生の接触を増やしていくためには、留学生が日本語を上達させるのみでは不十分なのであり、それ以外にある要因を突き止め

ていくことこそが肝要になる。

②日本人学生との交流の質

あくまで同国出身の留学生との比較にすぎないのだが、日本人学生に対する自己開示の程度がそれほど深くない可能性が垣間見られた。日本人学生は、専門研究に関する悩みと、日本での生活に関する軽度な悩み以外は留学生からの相談をあまり受けていないのである。全般的に日本人学生に悩みを打ち明けられる状態にある留学生ほど日本人学生との交流に対して満足していることを考え合わせると、日本人学生に対してもっと「深い」交友関係を求めている留学生が少なくないのかもしれない。留学生が日本人学生との交友関係に対して寄せている期待と現実はいかなるものなのか、詳細にわたる分析が必要である。

③その他

本稿の分析を通じて、日本人学生との交流ばかりでなく、留学生間の交流も、留学生たちが大学生活に適應するために重要な働きをしていることが明らかになった。留学生の人間関係に関する分析結果の中でも特に注目されるのは、日本人学生と知り合う機会の多さと留学生と知り合う機会の多さに正の相関が見られる点である。なぜなら、このことは日本人学生との交流を十分に行っていない学生ほど、他の留学生との交友関係も十分に持つことができていないということであり、学内で孤立している可能性を意味するからだ。日本人学生との交流も留学生との交流も不十分であると回答した人は留学生全体の約 20%を占めており、しかも、このカテゴリーに属する留学生たちが、さまざまな深刻な悩みを抱え込みがちであることも分かった。こういった、二重に孤立している留学生たちをどう支援していくのかも、重要な課題となろう。

第 II 部

【資料編】

【資料編】では、以下の順で、アンケート・インタビューの集計結果を収録した。

2011 年度 留学生アンケート (R 票)

アンケート調査票・単純集計

各設問「その他」項目への回答

自由記述

2011 年度 日本人学生アンケート (A 票)

アンケート調査票・単純集計

自由記述

インタビュー

留学生対象「留学生活と進路に関するインタビュー」依頼文・質問内容

留学生対象「留学生アドバイジング利用に関するインタビュー」

依頼文・質問内容

返送先：京都大学国際交流センター アンケート調査班

京都大学における留学生生活に関する調査のお願い

2011年6・7月

留学生の皆様

国際交流センターでは、この度、京都大学で学ぶ留学生の皆さんの生活や教育・研究環境について、実情と意識をお尋ねする調査を企画しました。留学生の皆さんの日常生活、京都大学での教育・研究活動、国際交流センターの利用の仕方などについて、現状と率直なご意見をお教えてください。この調査は、京都大学のすべての留学生の皆さんにお願いしています。

調査の結果は、報告書及び学術論文として学内外に公開し、教育・研究環境の改善に役立てます。調査票は無記名です。調査で得られたデータは記号化して統計的に処理しますので、皆さんのプライバシーが侵害されることはありません。また皆さんの本学での立場に関わることもありません。

以上の趣旨をご理解いただき、ご協力をお願いします。

本調査に関するご質問やご意見は下記までお寄せください。

京都大学国際交流センター

アンケート調査班

問い合わせ先：survey2011@ryugaku.kyoto-u.ac.jp

回収について

回答が終わりましたら、下記のいずれかの方法で提出してください。

- (1) 添付の封筒に回答済みアンケートを入れ、「学内便」で国際交流センターまで御返送ください。学内便は、学科事務室か学部事務室などに願い出てください。「学内便です。」と渡してくだされば、利用できます。
- (2) 留学生課の入り口にある回収ボックスに入れてください。
- (3) 授業内で実施した場合は、担当教員の指示に従ってください。

回答の締め切り

2011年7月22日（金）

記入上の注意

1. アンケートは、日本語／英語で作成されていますので、回答しやすい方を選んでお答えください。
2. 質問には、選択式の質問と記述式の質問があります。

選択式の質問について

- ① 該当する答えの番号を、直接○で囲んでください。

(例) 性別

1. 女性 2. 男性

(例) 不十分 あまり充分でない ある程度充分 充分 該当しない

1 ——— 2 ——— 3 ——— 4 8

- ② 質問の中に、あなたにあてはまらないものや、よく分からないものがある場合は、「該当しない」「わからない」の番号を○で囲んでください。
- ③ 「その他」を選んだ場合は、具体的に御記入ください。

記述式の質問について

- ① 日本語、英語、中国語、韓国語のいずれかの言語でご回答ください。

3. どうしても答えにくい場合は、その質問をとばしていただいて結構です。
4. すでに今年（2011 年）このアンケート調査に回答したことがある人は、何も記入せずに返却してください。

I. あなたご自身について伺います

問 1. 性別 n=763

1. 女性 (45.9%)

2. 男性 (53.9%)

無回答 (0.3%)

問 2. 年齢 n=763 無回答 (0.1%)

2011 年 4 月 1 日現在 満 平均 27.23 歳

問 3. 出身国・地域

n=763、回答数 99.6%

問 4. 所属学部 (一つに○) n=763

【国際交流センター】

1. 国際交流センター (4.2%)

【学部・研究科・専門職大学院】

- | | |
|----------------------------|-----------------------------|
| 2. 総合人間学部／人間・環境学研究科 (7.1%) | 1 2. エネルギー科学研究科 (4.5%) |
| 3. 文学部／文学研究科 (4.2%) | 1 3. アジア・アフリカ地域研究研究科 (0.5%) |
| 4. 教育学部／教育学研究科 (0.8%) | 1 4. 情報学研究科 (5.5%) |
| 5. 法学部／法学研究科 (4.3%) | 1 5. 生命科学研究科 (1.6%) |
| 6. 経済学部／経済学研究科 (2.2%) | 1 6. 地球環境学舎 (5.5%) |
| 7. 理学部／理学研究科 (5.5%) | 【専門職大学院】 |
| 8. 医学部／医学研究科 (6.2%) | 1 7. 公共政策大学院 (0.7%) |
| 9. 薬学部／薬学研究科 (3.5%) | 1 8. 経営管理大学院 (4.1%) |
| 1 0. 工学部／工学研究科 (24.9%) | 1 9. 法科大学院 (0.3%) |
| 1 1. 農学部／農学研究科 (10.7%) | 2 0. 医学研究科社会健康医学系専攻 (0.4%) |

【研究所・センター】(具体名をご記入願います)

2 1. () (3.4%)

問 5. 文系／理系 n=763

- | | |
|----------|---------|
| 1. 文系 | (26.5%) |
| 2. 理系 | (59.0%) |
| 3. 文理融合系 | (8.4%) |
| 4. 未決定 | (1.2%) |

問 6. 京都大学における身分 (一つに○) **n=763**

- | | |
|---------------------------------|----------|
| 1. 学部の正規学生 | (5.0%) |
| 2. 大学院修士課程の正規学生 | (29.2%) |
| 3. 大学院博士課程の正規学生 | (44.4%) |
| 4. 研究生、聴講生 | (12.6%) |
| 5. 京都大学との学術交流協定による留学生 (一般交換留学生) | (1.6%) |
| 6. KUINEP (京都大学国際教育プログラム) 学生 | (2.4%) |
| 7. 日本語・日本文化研修留学生 | (2.1%) |
| 8. 短期交流学生 | (1.2%) |
| 9. その他 (具体的に : |) (0.1%) |

無回答 (1.4%)

問 7. 専門の研究分野

n=763、回答率 95.5%

問 8. 学位の取得を目的としていますか。 **n=763**

1. 目的としている (89.6%) 2. 目的としていない (8.7%) 無回答 (1.7%)



問 9 にお進みください。

問 8 - a. 取得を目指している学位の種類は何ですか。 **n=684**

- | | |
|-------|---------|
| 1. 博士 | (55.6%) |
| 2. 修士 | (30.0%) |
| 3. 学士 | (3.3%) |

無回答 (2.0%)

問 8 - b. あなたの学位プログラムの主要な教授言語は何ですか。 **n=678**

- | | |
|----------------|----------|
| 1. 日本語 | (49.1%) |
| 2. 英語 | (35.3%) |
| 3. その他 (具体的に : |) (2.5%) |

無回答 (2.0%)

問 9. 日本での滞在期間についてお尋ねします。 **n=763**

問 9 - a. 今回はいつ日本に来ましたか。(西暦でお答えください。)

年 月

2011 年	(15.1%)
2010 年	(30.1%)
2009 年以前	(50.4%)
無回答	(4.3%)

問 9 - b. 今回の滞在は初めてですか。 **n=763**

- | | | |
|-----------------|---------|------------|
| 1. 初めて | (69.3%) | |
| 2. 以前に滞在したことがある | (26.3%) | 無回答 (4.3%) |



以前の合計滞日期間はどのくらいですか。 **n=201**

年 カ月間 **平均 20.30** ※無回答 0.5%を除く

問 10. あなたの一ヶ月の収入の内訳を書いてください。

a : 奨学金・学習奨励費・助成金など	<u>平均 98,390</u> 円	n=749
b : アルバイト(TA、RA、チューターを含む)	<u>平均 12,954</u> 円	n=749
c : 家族(配偶者を含む)から	<u>平均 14,915</u> 円	n=749
d : 貯金を少しずつ使っている	<u>平均 5,401</u> 円	n=749
e : ローン・借金(家族以外)	<u>平均 1,061</u> 円	n=749
f : その他	<u>平均 943</u> 円	n=749

収入合計	<u>平均 133,842</u> 円	n=748
------	---------------------	-------

問 11. 一ヶ月の生活費は、どのくらいですか。(家賃を含む。授業料を除く。)

(一つに○) n=763

- | | |
|------------------|---------|
| 1. 5 万円未満 | (5.9%) |
| 2. 5 万円～10 万円未満 | (42.1%) |
| 3. 10 万円～15 万円未満 | (38.3%) |
| 4. 15 万円～20 万円未満 | (10.7%) |
| 5. 20 万円～25 万円未満 | (1.8%) |
| 6. 25 万円～30 万円未満 | (0.3%) |
| 7. 30 万円以上 | (0.1%) |

無回答 (0.8%)

問 12. あなたが受けている奨学金の番号すべてに○をつけてください。奨学金を受けていない方は5に○をつけて問 13 にお進みください。 n=763

- | | |
|----------------------------|----------|
| 1. 出身国の公的奨学金もしくは在籍大学からの奨学金 | (9.3%) |
| 2. 日本政府など日本側からの奨学金 | (51.4%) |
| 3. 京都大学からの奨学金 | (1.0%) |
| 4. その他の奨学金(具体的に : |) (8.5%) |
| 5. 奨学金を受けていない | (30.1%) |

無回答 (0.5%)

問 13. あなたは現在どのようなアルバイトをしていますか。該当するものにすべて○をつけてください。アルバイトをしていない人は10を選んで問 14.に進んでください。 **n=763**

- | | |
|--|------------|
| 1. 語学講師・塾講師 | (5.6%) |
| 2. TA(Teaching Assistant)・RA(Research Assistant)・チューター | (19.5%) |
| 3. 学内アルバイト (図書館など) | (1.8%) |
| 4. 通訳・ガイド | (1.6%) |
| 5. 飲食店・コンビニ | (5.4%) |
| 6. 配達 | (0.0%) |
| 7. 建設・土木などの肉体労働 | (0.0%) |
| 8. ホテルや旅館などのサービス業 | (2.1%) |
| 9. その他 (具体的に:) | (3.3%) |
| 10. 現在アルバイトをしていない | (60.9%) |
| | 無回答 (0.9%) |

問 13 - a. 一ヶ月に何時間ぐらいアルバイトをしていますか。 **n=291**

平均 31.98 時間

無回答 52 名を除く

問 14. 日本に留学するに当たり、どのくらいの貯金を準備しましたか。 **n=462**

有効回答 (n=462) は、無回答 192 名および「0」と回答した 109 名を除く。

貯金を準備した人の平均	884,428 円	(n=462)
全員の平均	535,519 円	(n=763)

問 15. あなたは国元の家族・親類に留学費用をサポートしてもらっていますか。 **n=763**

- | | | |
|---------------|----------------|------------|
| 1. はい (35.3%) | 2. いいえ (61.9%) | 無回答 (2.9%) |
|---------------|----------------|------------|

問 16. あなたの国元の家族の年収はいくらぐらいですか。 (一つに○) **n=763**

- | | |
|-----------------|---------|
| 1. 30 万円以下 | (23.7%) |
| 2. 30～100 万円 | (26.3%) |
| 3. 100～200 万円 | (14.0%) |
| 4. 200～300 万円 | (8.7%) |
| 5. 300～600 万円 | (9.3%) |
| 6. 600～900 万円 | (3.4%) |
| 7. 900～1200 万円 | (2.2%) |
| 8. 1200～2000 万円 | (1.3%) |
| 9. 2000 万円以上～ | (0.4%) |

無回答 (10.6%)

問 17. 授業料免除を受けたことがありますか。(一つに○) n=763

- | | |
|------------------|----------|
| 1. 受けたことがある | (42. 1%) |
| 2. 出願したが免除されなかった | (2. 4%) |
| 3. 出願しなかった | (33. 7%) |
| 4. 該当しない | (20. 8%) |
| 無回答 | (1. 0%) |

問 18. 現在、どのような住居に住んでいますか。(一つに○) n=763

- | | |
|--------------------|----------|
| 1. 京都大学の国際交流会館 | (14. 7%) |
| 2. 上記以外の外国人留学生用宿舎 | (4. 7%) |
| 3. 京都大学の学生寮 | (6. 0%) |
| 4. アパート・マンション・文化住宅 | (64. 0%) |
| 5. 一戸建て、間借り | (6. 7%) |
| 6. その他(具体的に:) | (3. 5%) |
| 無回答 | (0. 4%) |

問 19. どのキャンパスで主に学んでいますか。(一つに○) n=763

- | | |
|----------------|----------|
| 1. 吉田キャンパス | (71. 3%) |
| 2. 桂キャンパス | (13. 8%) |
| 3. 宇治キャンパス | (9. 8%) |
| 4. その他(具体的に:) | (4. 7%) |
| 無回答 | (0. 4%) |

問 20. あなたは、家族といっしょに日本で生活していますか。 n=763

- | | | |
|----------------|-----------------|-------------|
| 1. はい (17. 7%) | 2. いいえ (82. 0%) | 無回答 (0. 3%) |
|----------------|-----------------|-------------|

↓

↓

問 20 - a. 誰と暮らしていますか? 問 20 - b. 該当するもの一つに○を
該当するものすべてに○をつけて つけてください。 n=626
ください。 n=135

- | | |
|----------------------------|--------------------------------|
| 1. 配偶者／パートナー (95. 6%) | 1. 単身(母国に配偶者や子どもがいる) (8. 0%) |
| 2. 子ども 平均 1. 39 人 (56. 3%) | 2. 独身(母国につき合っている人がいる) (12. 9%) |
| 3. その他(父、母、兄弟姉妹など) (0. 7%) | 3. 独身(日本につき合っている人がいる) (14. 1%) |
| 無回答 (1. 5%) | 4. 独身(つき合っている人はいない) (61. 8%) |
| ↓ | 5. その他(具体的に:) (0. 8%) |
| | ↓ 無回答 (2. 4%) |

問 20 - c. にお進みください。

問 21 にお進みください。

↓

問 20 - c. (p.5 より続く) 家族と同居している人のみお答えください。

いつから同居していますか。それぞれ該当する番号に○をつけてください。

配偶者／パートナー n=129	1. 最初（来日時）から	(31.0%)
	2. 自分が日本に来た後に来日した	(55.0%)
	3. 日本で知り合って、結婚した／同居を始めた	(7.8%)
	無回答	(6.2%)
子ども n=76	1. 最初（来日時）から	(15.8%)
	2. 自分が日本に来た後に来日した	(50.0%)
	3. 日本で生まれた	(25.0%)
	無回答 (3.9%)、1 と 3 (2.6%)、2 と 3 (2.6%)	
その他:誰といつ同居し始めたかお書きください n=1 (記述は 14 ケース)		

問 20 - d. 同居を始めた理由は何ですか。特にあてはまるものに 3 つまで ○をつけてください。 n=135

- | | |
|---------------------------------|------------|
| 1. 一人暮らしだと寂しいから | (28.1%) |
| 2. 家族と一緒に暮らすのが当たり前だから | (65.9%) |
| 3. 家事に煩わされたくないから | (6.7%) |
| 4. 困難や成功を分かち合えるから | (28.1%) |
| 5. 研究／学業の励みになるから | (29.6%) |
| 6. 日本滞在は配偶者／パートナーにとって有意義だと思ったから | (18.5%) |
| 7. 日本滞在は子どもにとって有意義だと思ったから | (14.1%) |
| 8. 配偶者／パートナーが日本に来たいと言ったから | (7.4%) |
| 9. 子どもが日本に来たいと言ったから | (2.2%) |
| 10. 経済的に楽になるから | (10.4%) |
| 11. 同じ国の留学生もそうしているから | (0.7%) |
| 12. その他（具体的に： | ） (16.3%) |
| | 無回答 (1.5%) |

問 21. 睡眠についてお尋ねします。

問 21 - a. あなたの睡眠時間は、一日平均何時間ぐらいですか。 n=763

平均 6.76 時間 無回答 9 名は除く

問 21 - b. 睡眠に関して何か問題がありますか。 n=763

1. はい。問題があります。 (22.4%) 2. いいえ。問題はありません。 (74.6%)
無回答 (3.0%)

問 21 - c. 睡眠について、ご自由にお書きください。

n=763、回答率 31.6%

II. 京都大学に留学する前の状況について

問 22. 日本を留学先に選ぶ時に、以下の理由はどれくらい重要でしたか。a～s
の重要度について、それぞれあてはまる番号に○をつけてください。 n=763

	重要で ない	あまり重 要でない	ある程 度重要	非常に 重要	無回答
a.質の高い学問・研究	(1.4%)	(1.8%)	(21.9%)	(73.9%)	(0.9%)
b.日本の文化(日本語を含む)や社会への関心	(2.5%)	(13.4%)	(46.0%)	(37.1%)	(1.0%)
c.母国での日本留学に対する高い評価	(10.9%)	(28.8%)	(40.0%)	(18.2%)	(2.1%)
d.母国に適当な大学・プログラムがない	(38.9%)	(26.6%)	(19.1%)	(11.1%)	(4.2%)
e.母国の大学に入学するのが難しかった	(73.5%)	(15.7%)	(4.7%)	(3.1%)	(2.9%)
f.日本語の能力	(20.4%)	(19.9%)	(36.4%)	(20.3%)	(2.9%)
g.奨学金	(10.4%)	(12.5%)	(28.3%)	(46.8%)	(2.1%)
h.母国の先生の勧め	(28.3%)	(25.6%)	(27.1%)	(17.0%)	(2.0%)
i.家族や親戚の勧め	(38.9%)	(33.2%)	(19.5%)	(6.7%)	(1.7%)
j.友人や知人の勧め	(36.8%)	(35.1%)	(20.8%)	(4.6%)	(2.6%)
k.就職に有利	(10.7%)	(17.0%)	(34.9%)	(35.5%)	(1.8%)
l.国際的な経験を獲得したかった	(3.3%)	(6.6%)	(29.2%)	(59.6%)	(1.3%)
m.治安	(10.0%)	(19.5%)	(39.1%)	(29.8%)	(1.7%)
n.自分の出身地の留学生がいる	(42.2%)	(34.3%)	(15.3%)	(5.6%)	(2.5%)
o.留学生が多く、国際的な環境である	(20.8%)	(30.5%)	(32.1%)	(14.8%)	(1.7%)
p.親類や知人が日本に住んでいる	(60.8%)	(21.9%)	(10.6%)	(4.8%)	(1.8%)
q.日本と母国の地理的な距離	(37.6%)	(25.4%)	(27.1%)	(8.1%)	(1.7%)
r.アルバイトができる	(53.7%)	(25.2%)	(15.1%)	(3.8%)	(2.2%)
s.その他 (具体的に：	(0.5%)	(0.3%)	(0.9%)	(5.1%)	(93.2%)

)

問 23. 京都大学を留学先に選ぶ時、以下の理由はどれくらい重要でしたか。a~o
の重要度について、それぞれあてはまる番号に○をつけてください。 n=763

	重要で ない	あまり重 要でない	ある程 度重要	非常に 重要	無回答
a. 質の高い <u>研究</u> の評判	(2.0%)	(1.7%)	(14.8%)	(79.0%)	(2.5%)
b. 質の高い <u>教育</u> の評判	(1.6%)	(3.9%)	(23.1%)	(68.0%)	(3.4%)
c. 優れた教員がいる	(2.1%)	(5.5%)	(24.8%)	(64.5%)	(3.1%)
d. 母国の先生の勧め	(28.4%)	(20.7%)	(27.5%)	(19.9%)	(3.4%)
e. 家族や親戚の勧め	(42.7%)	(28.8%)	(17.3%)	(7.6%)	(3.5%)
f. 京大への受入れ許可が得られた	(8.7%)	(10.2%)	(30.5%)	(47.7%)	(2.9%)
g. 京都への興味	(6.6%)	(19.7%)	(41.0%)	(29.2%)	(3.5%)
i. 就職に有利	(10.2%)	(16.9%)	(36.3%)	(32.8%)	(3.8%)
j. 自分の出身地の留学生がいる	(46.7%)	(33.6%)	(12.1%)	(4.3%)	(3.4%)
k. 留学生が多く、国際的な環境である	(20.7%)	(28.3%)	(32.9%)	(14.4%)	(3.7%)
l. 充実した施設・研究環境	(2.9%)	(5.9%)	(35.0%)	(52.9%)	(3.3%)
m. 適したプログラムがあった	(6.2%)	(11.8%)	(35.4%)	(43.1%)	(3.5%)
n. 同窓会組織がある	(41.0%)	(31.6%)	(15.3%)	(8.1%)	(3.9%)
o. その他 (具体的に :	(0.0%)	(0.8%)	(3.7%)	(4.5%)	(95.5%)

問 24. 京都大学は留学先として第一志望でしたか。n=763

1. はい (81.5%) 2. いいえ (15.3%) 無回答 (3.1%)

↓

問 25 へ

↓

問 24 - a. 京都大学よりも留学したかった大学はどこですか。国と大学名を志望順に3つまでお答えください。n=117

第一志望：国 (回答率 96.6%) 大学名 (回答率 94.0%)

第二志望：国 (回答率 48.7%) 大学名 (回答率 46.2%)

第三志望：国 (回答率 27.4%) 大学名 (回答率 27.4%)

詳細は pp. 167-169 に掲載

問 24 - b. 第一志望の大学は、京都大学と比べて、どの点で優れていますか。(該当するものすべてに○) n=117

1. 教育研究指導が充実している (29.1%)
2. 施設・研究環境が充実している (38.2%)
3. 母国における知名度、評価が高い (56.4%)
4. 日本における知名度、評価が高い (35.9%)
5. 学生への支援(奨学金や授業料免除、住居など)が充実している (26.5%)
6. 母国における就職がしやすい (36.8%)
7. 日本における就職がしやすい (17.9%)
8. 大学が存在する国が良い (12.8%)
9. 大学が存在する都市が良い (20.5%)
10. 入学制度(入学試験の方法など)が分かりやすい (12.8%)
11. 周囲の人に勧められた (25.6%)
12. 英語で提供されるプログラムが充実している (43.6%)
13. その他(具体的に：) (17.1%)
- 無回答 (0.9%)

問 25. 母国にいたとき、京都大学についての情報はどこから得ましたか。主要な情報源に3つまで○をつけてください。n=763

- | | |
|-------------------------|------------------------|
| 1. 家族や親戚 (8.4%) | 8. 京都大学のホームページ (62.8%) |
| 2. 知人や友人 (24.0%) | 9. 留学フェア (5.8%) |
| 3. 母国の先生 (32.8%) | 10. 京都大学の先生 (25.0%) |
| 4. 日本大使館 (8.8%) | 11. 同窓会 (1.6%) |
| 5. 京都大学パンフレット (8.5%) | 12. 留学斡旋会社 (1.4%) |
| 6. 京都大学に在籍中の留学生 (15.3%) | 13. その他(具体的に：) (9.8%) |
| 7. 日本から帰国した留学生 (21.1%) | 無回答 (0.7%) |

問 26. 留学前、京都大学に関する次の情報は充分でしたか。a～i について、あてはまる番号に○をつけてください。 n=763

	不十分	あまり充分でない	ある程度充分	充分	該当しない	無回答
a. 入学試験の方法	(6.3%)	(13.1%)	(26.7%)	(40.6%)	(10.7%)	(2.5%)
b. 授業料	(5.2%)	(8.7%)	(24.0%)	(41.0%)	(18.0%)	(3.1%)
c. 指導教員	(5.1%)	(12.3%)	(29.9%)	(43.6%)	(6.3%)	(2.8%)
d. 専攻分野	(3.5%)	(11.7%)	(32.4%)	(42.2%)	(7.1%)	(3.1%)
e. 研究生になる方法	(8.8%)	(15.2%)	(30.7%)	(26.7%)	(14.9%)	(3.7%)
f. 学位取得の条件	(8.7%)	(17.4%)	(32.1%)	(29.9%)	(8.7%)	(3.3%)
g. 住居（学生寮など）	(14.8%)	(25.0%)	(26.1%)	(27.0%)	(3.9%)	(3.1%)
h. 奨学金	(10.9%)	(23.2%)	(25.8%)	(28.2%)	(8.8%)	(3.1%)
i. 大学の歴史や学風	(6.6%)	(15.6%)	(40.8%)	(27.8%)	(6.3%)	(3.0%)

問 27. あなたは指導教員をどのように探しましたか。該当するものにすべて○をつけてください。指導教員のいない方は、10. に○をつけて問 28 にお進みください。 n=763

- | | |
|--|------------|
| 1. 家族や親戚の紹介 | (2.5%) |
| 2. 知人や友人の紹介 | (13.1%) |
| 3. 母国の先生の紹介 | (19.3%) |
| 4. 京都大学の先生の紹介 | (12.8%) |
| 5. 京都大学のホームページ | (46.4%) |
| 6. 京都大学のパンフレットを見て | (2.4%) |
| 7. 論文を読んで | (18.0%) |
| 8. 京都大学や文部科学省による指定 | (7.6%) |
| 9. 京都大学の AAO (Admissions Assistance Office) を通して | (0.4%) |
| 10. 指導教員はいない | (6.4%) |
| 11. その他（具体的に： | ） (7.6%) |
| | 無回答 (1.0%) |

問 28. 留学前にどのような情報を提供して欲しかったですか。ご自由にお書きください。

n=763、回答率 41.5%

III. 京都大学の教育・研究について

問 29. 京都大学の教育・研究環境について、どのような印象をお持ちですか。

a～q について、あてはまる番号に○をつけてください。 n=763

		不満足	やや 不満足	やや 満足	満足	知らない わからない	無回答
a.	指導教員の指導	(1.7%)	(6.6%)	(26.6%)	(59.5%)	(4.2%)	(1.4%)
b.	研究水準	(0.5%)	(2.2%)	(25.2%)	(66.4%)	(4.2%)	(1.4%)
c.	授業や講義の質	(2.9%)	(13.6%)	(36.0%)	(42.5%)	(3.8%)	(1.2%)
d.	研究室の雰囲気	(2.5%)	(8.4%)	(30.3%)	(49.5%)	(7.9%)	(1.4%)
e.	所属学部 of 留学生担当教員	(4.7%)	(10.1%)	(28.2%)	(38.9%)	(15.9%)	(2.2%)
f.	日本人学生との交流	(6.4%)	(21.0%)	(42.1%)	(27.7%)	(1.7%)	(1.2%)
g.	チューターのサポート	(9.8%)	(15.5%)	(30.1%)	(26.6%)	(16.3%)	(1.7%)
h.	国際交流センターの日本語授業	(4.7%)	(11.8%)	(31.5%)	(29.8%)	(20.6%)	(1.7%)
i.	国際交流センターのアドバイジング	(3.8%)	(12.5%)	(29.1%)	(22.0%)	(30.5%)	(2.1%)
j.	ラウンジ Kizuna	(3.5%)	(8.4%)	(31.3%)	(25.8%)	(28.4%)	(2.5%)
k.	所属学部の事務サービス	(2.1%)	(8.0%)	(34.2%)	(48.8%)	(5.6%)	(1.3%)
l.	留学生課の事務サービス	(1.8%)	(6.3%)	(34.5%)	(44.8%)	(10.7%)	(1.8%)
m.	カウンセリングセンターのサービス	(3.4%)	(7.6%)	(21.0%)	(17.6%)	(46.0%)	(4.5%)
n.	図書館	(0.8%)	(6.4%)	(31.8%)	(54.5%)	(5.1%)	(1.3%)
o.	実験設備・建物	(1.2%)	(5.2%)	(29.6%)	(54.3%)	(7.9%)	(1.8%)
p.	コンピュータ設備	(5.2%)	(12.8%)	(30.9%)	(46.4%)	(3.8%)	(0.8%)
q.	地域との交流	(7.7%)	(20.7%)	(35.4%)	(17.7%)	(16.9%)	(1.6%)

問 30. 京都大学の教育・研究環境について、あなたが満足している点は何ですか。具体的にお書きください。

n=763、回答率 68.9%

問 31. 京都大学の教育・研究環境について、あなたが不満を感じている点は何ですか。具体的にお書きください。

n=763、回答率 60.9%

問 32. あなたの母語は何ですか。

n=763、回答率 94.6%

問 33. 現在のあなたの日本語能力はどれくらいですか。一番近いものに1つだけ○をつけてください。n=763

1. ほとんどできない (13.9%)
 2. 日常生活でのコミュニケーションができる程度 (31.1%)
 3. 教科書を読み、授業をほぼ理解できる程度 (17.7%)
 4. レポートを書き、授業で質疑ができる程度 (18.0%)
 5. 論文を読んだり書いたりし、専門的なことを日本人と同等に議論できる程度 (18.3%)
- 無回答 (1.0%)

問 34. 日本語能力試験を受けたことがありますか。n=763

1. はい (57.4%) 2. いいえ (41.3%) 無回答 (1.3%)



問 35 にお進みください。

問 34 - a. 最近いつ受けましたか。西暦で答えて下さい。n=438

年

2011 年	(9.6%)
2010 年	(18.5%)
2009 年	(25.1%)
2008 年以前	(45.2%)
無回答	(1.6%)

問 34 - b. 何級・レベルを受けましたか。(一つだけに○) n=438

新試験	旧試験	
1. N1	1. 1 級	(70.8%)
2. N2	2. 2 級	(18.3%)
3. N3		(8.2%)
4. N4	3. 3 級	(1.1%)
5. N5	4. 4 級	(0.7%)

無回答 (0.9%)

問 34 - c. 合格しましたか。n=438

1. はい (83.3%)
2. いいえ (8.4%)

無回答 (8.2%) うち結果待ち 4.1%を含む

問 35. あなたは、日本語能力について、どのような必要性を感じていますか。
あなたの考えに一番近いものに 1 つだけ ○をつけてください n=763

1. 日常生活でも、授業・研究でも日本語は必要ない。 (2. 5%)
 2. 入門・初級レベル（授業・研究ではほとんど必要ないが、日常生活ができる程度）が必要 (16. 8%)
 3. 中級レベル（教科書を読み、授業をほぼ理解できる程度）が必要。 (18. 3%)
 4. 中上級レベル（レポートを書き、授業で質疑ができる程度）が必要。 (20. 4%)
 5. 上級レベル（論文を読んだり書いたりし、専門的なことを日本人と同等に議論できる程度）が必要 (41. 4%)
- 無回答 (0. 5%)

問 36. あなたの英語力はどのくらいですか。（一番近いものに 1 つだけ ○）
ほとんどできない n=763

1. 英語で日常生活でのコミュニケーションができる程度 (2. 9%)
 2. 英語で教科書を読み、授業をほぼ理解できる程度 (12. 5%)
 3. 英語でレポートを書き、授業で質疑ができる程度 (13. 5%)
 4. 英語で論文を読んだり書いたりし、専門的なことを議論できる程度 (52. 6%)
- 無回答 (0. 7%)

問 37. あなたには指導教員がいますか。 n=763

1. はい (93. 2%)
 2. いいえ (5. 8%)
- 無回答 (1. 0%)

↓
↓

└─→ 問 39 へ

問 37 - a. 指導教員との関係はどうですか。（あてはまる番号に ○） n=711

うまいってない		どちらかといえば うまいってない		どちらかといえば うまいっている		うまいっている		無回答
1	2	3	4					
(2.0%)	(3.7%)	(24.6%)	(68.2%)	(1.5%)				
↓	↓	↓	↓					
↓	↓	↓	↓					
				問 38 へ				

問 37 - b. 指導教員との関係でどういう点で困っていますか。

n=215、回答率 73. 5%

（回答率：本来非該当であるが回答有り 15 ケースを除く）

問 37 - c. 困っている点をどのように解決していますか。

n=215、回答率 61. 4%

（回答率：本来非該当であるが回答有り 15 ケースを除く）

問 38. あなたの指導教員は、研究活動をするための日本語能力について、あなたにどの程度のレベルを期待していると思いますか。(一番近いものに1だけ○)
指導教員のいない方は問 39 にお進みください。n=763

1. 日常生活でも、授業・研究でも日本語は必要ない。(2.5%)
2. 入門・初級レベル(授業・研究ではほとんど必要ないが、日常生活ができる程度)を期待。(16.8%)
3. 中級レベル(教科書を読み、授業をほぼ理解できる程度)を期待。(18.3%)
4. 中上級レベル(レポートを書き、授業で質疑ができる程度)を期待。(20.4%)
5. 上級レベル(論文を読んだり書いたりし、専門的なことを日本人と同等に議論できる程度)を期待。(41.4%)
- 無回答 (0.5%)

問 39. 京都大学での留学が終わった後、どういった進路をとりたいと考えていますか。最もあてはまるものに1だけ○をつけてください。n=763

- | | | | |
|------------------------------|--------------------------------------|----------------------------|---------------------------------------|
| 1. 学生として
研究を継続
(26.0%) | 2. 研究職に就職
(ポストドクターを含む)
(44.7%) | 3. 研究職以外
に就職
(21.2%) | 4. その他 → 問 40 へ
(具体的に:)
(5.1%) |
|------------------------------|--------------------------------------|----------------------------|---------------------------------------|

問 39 - a.

どこで最も研究を続けたいですか。

1だけ○をつけてください。n=198

1. 母国 (26.8%)
2. 日本 (50.0%)
3. その他の国 (22.2%)

(具体的に:)

無回答 (1.0%)

問 40 へ

問 39 - b.

どこで最も就職したいですか。

1だけ○をつけてください。n=503

→ 問 39 - c へ

1. 母国 (38.6%)
2. 日本 (38.8%)
3. その他の国 (19.9%)

(具体的に:)

無回答 (2.8%)

問 39 - c.

どのような就職先を希望しますか。

(1だけ○) n=503

1. 留学前の仕事に復職 (6.4%)
2. 研究職に新たに就職 (48.3%)
3. 日本・日系企業に新たに就職 (22.3%)
4. 日本・日系企業以外の企業に
新たに就職 (8.7%)
5. その他(具体的に:) (7.4%)

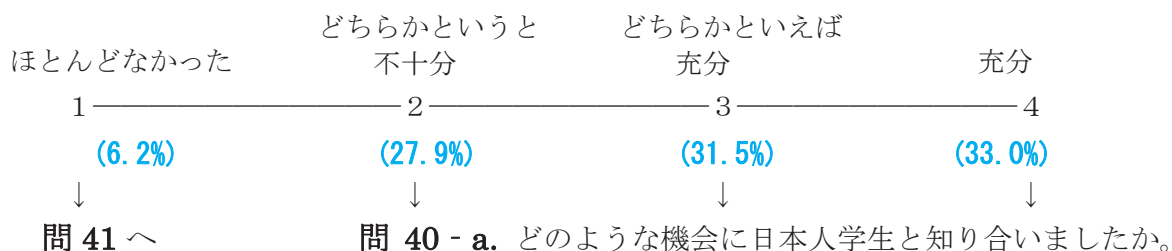
無回答 (7.0%)

問 40. これまで京都大学で日本人学生と知り合う機会が充分ありましたか。

(1つだけに○) n=763

知り合う機会は、

無回答 (1.4%)

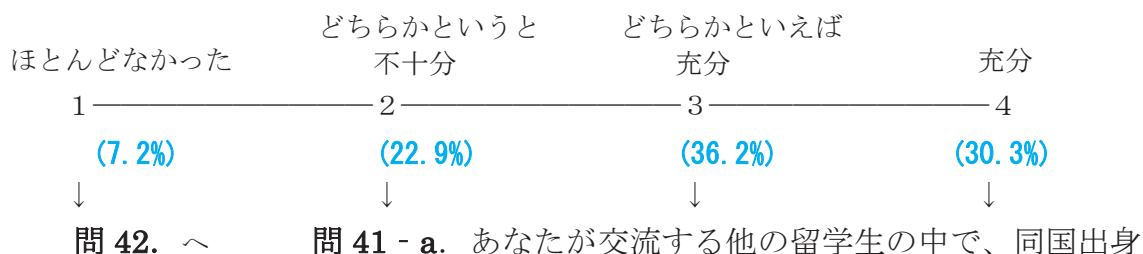


(すべてに○) n=705

- | | |
|-----------------------|------------|
| 1. 授業 | (34.0%) |
| (授業名 : _____) | |
| 2. 部活・サークル活動で | (17.4%) |
| 3. チューターとして | (18.7%) |
| 4. 研究室で | (75.6%) |
| 5. 学内のパーティ・イベントなどで | (26.5%) |
| 6. その他 (具体的に : _____) | (26.5%) |
| | 無回答 (0.1%) |

問 41. 他の留学生との交流についてお尋ねします。これまで京都大学で他の留学生と知り合う機会が充分にありましたか。(1つだけに○) n=763

無回答 (3.4%)



- | | |
|------------------------|------------|
| 1. ほとんど他国出身の留学生 | (24.0%) |
| 2. 他国出身の留学生の方が多い | (14.5%) |
| 3. 同国出身と他国出身の留学生が同じくらい | (16.9%) |
| 4. 同国出身の留学生の方が多い | (31.1%) |
| 5. ほとんど同国出身の留学生 | (12.0%) |
| | 無回答 (1.5%) |

問 42. あなたの心配事や悩みについてお尋ねします。

問 42 - a. あなたは、ア～オの事柄に関して悩んでいますか。1～4のあてはまる番号に一つだけ○をつけてください。n=763

	全く悩んでいない	あまり悩んでいない	少し悩んでいる	とても悩んでいる	無回答
ア. 専門の研究に関して	(9.3%)	(16.9%)	(42.3%)	(28.6%)	(2.9%)
イ. 人間関係に関して	(21.6%)	(40.6%)	(26.2%)	(7.9%)	(3.7%)
ウ. 日本での生活に関して	(24.0%)	(42.5%)	(23.9%)	(6.4%)	(3.3%)
エ. 心身の健康に関して	(24.9%)	(41.0%)	(24.1%)	(6.9%)	(3.0%)
オ. 卒業後の進路に関して	(12.7%)	(19.1%)	(40.0%)	(26.0%)	(2.2%)

問 42 - b. (全員お答えください。) 次のような心配事や悩みを、誰に相談しますか。下記の選択肢 1～15 から最大 3 つまで選んで、番号をご記入ください。「その他」を選んだ場合は、の中に具体的に書いてください。

誰に相談するか、選択肢の番号 1～15 を記入して下さい。

ア. 専門の研究に関して n=763 無回答 (2.9%)	1 位. 指導教員 (74.6%)	2 位. 同じ国からの留学生 (4.5%)	3 位. チューター以外の日本人学生 (4.2%)
イ. 人間関係に関して n=763 無回答 (13.1%)	1 位. 同じ国からの留学生 (33.7%)	2 位. 家族 (19.7%)	3 位. チューター以外の日本人学生 (7.5%)
ウ. 日本での生活に関して n=763 無回答 (10.4%)	1 位. 同じ国からの留学生 (29.1%)	2 位. 家族 (16.3%)	3 位. チューター以外の日本人学生 (10.9%)
エ. 心身の健康に関して n=763 無回答 (13.5%)	1 位. 家族 (29.4%)	2 位. 病院・学内の保健診療所 (20.2%)	3 位. 同じ国からの留学生 (16.4%)
オ. 卒業後の進路に関して n=763 無回答 (13.6%)	1 位. 指導教員 (29.8%)	2 位. 家族 (23.9%)	3 位. 同じ国からの留学生 (16.1%)

問 42 - b. の選択肢：

- 1.指導教員 2.所属学部の留学生担当教員 3.国際交流センターの教員 4.所属学部の事務室
5.留学生課 6.チューター 7.チューター以外の日本人学生 8.同じ国からの留学生
9.違う国からの留学生 10.国際交流センター・ラウンジ Kizuna のアドバイジング
11.学内のキャリアサポートセンター 12.病院・学内の保健診療所
13.学内のカウンセリングセンター 14.家族 15.その他

問 42 - c. 心配事や悩みに関して、ご自由にお書きください。

n=763、回答率 30.7%

問 43. チューターに関してお尋ねします。

問 43 - a. 現在、あなたにはチューターがいますか。(1つだけに○) n=763

- | | | | |
|---------|-------------------|---------|---------------------|
| 1. いる | 2. 以前いたが
今はいない | 3. いない | 4. チューター制度
を知らない |
| (32.1%) | (23.2%) | (32.5%) | (11.0%) |

↓
↓↓
↓↓
問 43 - d へ↓
問 43 - d へ

無回答 (1.2%)

問 43 - b. どれくらいの頻度で会っていますか／会っていましたか。

該当するものに1つだけ○をしてください。 n=422

- | | |
|---------------|----------|
| 1. ほとんど毎日 | (27.0%) |
| 2. 週に2～3回程度 | (15.6%) |
| 3. 週に1回程度 | (28.2%) |
| 4. 月に1回程度 | (12.6%) |
| 5. 2～3ヶ月に1回程度 | (4.7%) |
| 6. 4～5ヶ月に1回程度 | (1.9%) |
| 7. その他（具体的に： | ） (9.2%) |

無回答 (0.7%)

問 43 - c. チューターとはどのような相談をしていますか／しましたか。

該当するものに3つまで○をつけてください。 n=422

- | | |
|-------------------|-----------|
| 1. 日本語について | (41.2%) |
| 2. 専門の研究について | (48.6%) |
| 3. 大学生活について | (38.2%) |
| 4. 日本での一般的な生活について | (55.5%) |
| 5. 人間関係について | (9.0%) |
| 6. 生活費などの経済面について | (4.5%) |
| 7. その他（具体的に： | ） (10.9%) |

無回答 (0.9%)

問 43 - d. (全員お答えください) チューター制度についての意見をご自由にお書きください。

n=763、回答率 60.6%

IV. 国際交流センター・留学生課の活動について

問 44. 国際交流センター・留学生課をどのように利用していますか。該当するものにすべて○をつけてください。 **n=763**

- | | |
|-------------------------------------|------------|
| 1. 日本語授業 | (60.3%) |
| 2. 英語講義 (KUINEP) | (6.8%) |
| 3. 新聞・教材・図書の閲覧および借出 | (19.0%) |
| 4. 国際交流センター・ラウンジ Kizuna のアドバイジング | (10.6%) |
| 5. 国際交流センター教員と面談 | (5.6%) |
| 6. 奨学金に関わる相談、情報収集 | (24.5%) |
| 7. 住居に関わる相談、情報収集 | (16.3%) |
| 8. アルバイトに関わる情報収集 | (5.4%) |
| 9. 催し物の情報収集 | (19.7%) |
| 10. 他の留学生との交流を求めて | (18.0%) |
| 11. 日本人学生との交流を求めて | (7.9%) |
| 12. ラウンジ Kizuna (アドバイジング以外のサービスの利用) | (27.1%) |
| 13. 国際交流センター主催の講演会 | (7.6%) |
| 14. 安全講習会 | (10.0%) |
| 15. その他 (具体的に:) | (6.0%) |
| | 無回答 (1.2%) |

問 45. 国際交流センター・留学生課をどの程度利用していますか。該当するものに1つだけ○をしてください。 **n=763**

- | | |
|---------------|------------|
| 1. ほとんど毎日 | (2.2%) |
| 2. 週に2～3回程度 | (6.3%) |
| 3. 週に1回程度 | (11.0%) |
| 4. 月に1回程度 | (23.7%) |
| 5. 2～3ヶ月に1回程度 | (10.0%) |
| 6. 4～5ヶ月に1回程度 | (10.2%) |
| 7. ほとんど利用しない | (33.8%) |
| | 無回答 (2.8%) |

問 46. 国際交流センターの日本語教育についてお尋ねします。

問 46 - a. 日本語を学びたいですか。／継続したいですか。 **n=763**

- | | | |
|----------------------|-----------------------|-------------------|
| 1. はい (67.8%) | 2. いいえ (29.8%) | 無回答 (2.5%) |
| ↓ | ↓ | |
| ↓ | 問 46 - c へ | |

問 46 - b. どのような内容の日本語教育クラスを提供してほしいですか。

(3つまで○) **n=517**

- | | |
|------------|-------------------|
| 1. 文法 | (34.2%) |
| 2. 漢字 | (27.9%) |
| 3. 読解 | (22.1%) |
| 4. 聴き取り | (34.0%) |
| 5. 発音練習・会話 | (57.4%) |
| 6. 作文 | (32.3%) |
| 7. その他 () | (12.9%) |
| | 無回答 (0.2%) |

問 46 - c. (桂・宇治キャンパスで学んでいる皆さんのみお答えください。)

国際交流センターでは、桂・宇治キャンパスで、遠隔講義システムを使った日本語講義を開講しています。そのことを知っていますか。 **n=287**

- | | |
|----------------------|-----------------------|
| 1. はい (34.1%) | 2. いいえ (65.9%) |
|----------------------|-----------------------|

問 46 - d. (全員お答えください。) 国際交流センターの日本語教育について、ご意見ご要望をご自由にお書きください。

n=763、回答率 48.4%

問 47. 国際交流センターのアドバイジング（「留学生相談室」又は「Kizuna のピアサポート」(*)）を利用してみたいと思ったことがありますか。(一つだけに○) **n=763**

(*)ラウンジ Kizuna で行われている生活相談。

無回答 **(3.1%)**

- | | | |
|-------------------------------|-------------------------------|--|
| 1. 思ったことがある
(20.2%) | 2. 思ったことはない
(34.3%) | 3. 国際交流センターのアドバイジングを知らない
(42.3%) |
| ↓ | ↓ | ↓ |
| 問 47 - a へ | 問 47 - b へ | 問 47 - b へ |

問 47 - a. 国際交流センターのアドバイジングを利用したことがありますか。

n=154

1. はい
(35.1%)

2. いいえ
(61.7%)

無回答 (3.2%)

以下、全員お答えください。

問 47 - b. 国際交流センターのアドバイジングについてどのようなイメージを持ちますか。a～l のそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

n=763

	はい	いいえ	無回答
a. 重大な問題を抱える人が行くところだと思う。	(43.0%)	(42.5%)	(14.5%)
b. 悩みや辛い気持ちを打ち明けられる場所だと思う。	(57.8%)	(27.4%)	(14.8%)
c. 相談員は留学生の問題をよくわかってくれるだろう。	(61.2%)	(23.3%)	(15.5%)
d. 相談するには日本語能力が必要だと思う。	(43.6%)	(41.3%)	(15.1%)
e. 具体的な問題解決のために利用すべきだと思う。	(49.1%)	(35.8%)	(15.1%)
f. 相談したら弱い人間だと他人に思われる。	(11.8%)	(72.7%)	(15.5%)
g. 相談内容が外部に漏れるのではないかと思う。	(21.5%)	(62.8%)	(15.7%)
h. 相談すると別の事（奨学金、成績評価等）で不利になると思う。	(13.9%)	(70.5%)	(15.6%)
i. 簡単なことでも相談できる場所だと思う。	(49.4%)	(35.5%)	(15.1%)
j. 誰かの紹介なしに利用するのは難しいと思う。	(36.3%)	(48.5%)	(15.2%)
k. 相談しても自分の問題をよく理解してくれないと思う。	(32.8%)	(52.2%)	(15.1%)
l. 何をする場所かよくわからない。	(59.2%)	(29.1%)	(11.7%)

問 47 - c. 今後、国際交流センターのアドバイジングを利用するとすればどのような場合ですか。相談したいと思う項目にすべて○をつけてください。 n=763

1. 研究上の相談	(19.8%)	9. 家族問題に関連すること	(5.4%)
2. 進学・転学(学部・研究科)	(18.3%)	10. 人間関係に関連すること	(15.2%)
3. 指導教員に関連すること	(11.1%)	11. 卒業後の進路	(31.2%)
4. 日本語の問題	(30.9%)	12. 心理相談	(18.9%)
5. 奨学金に関連すること	(39.6%)	13. 事件・事故に遭遇した場合	(25.0%)
6. 就職に関連すること	(29.6%)	14. その他（具体的に：	
7. 宿舎に関連すること	(29.1%))	(2.2%)
8. 医療に関連すること	(23.1%)	15. 特にない	(13.6%)
		無回答	(1.7%)

問 47 - d. 国際交流センターのアドバイジングについてご自由にお書きください。

n=763、回答率 31.1%

問 48. あなたが利用している SNS（ソーシャル・ネットワーキング・システム）をすべて挙げてください。（例：Facebook、Mixi、Twitter など）

n=763、回答率 81.7%

問 49 最後に、京都大学における留学生生活、教育、研究環境全般について、感想、要望などをご自由にお書きください。

n=763、回答率 49.4%

質問は以上です。
ご協力ありがとうございました。

~~~~~  
インタビューへのご協力をお願い

京都大学での留学生生活についてのインタビューにご協力いただける方は、差し支えない範囲で、お名前、御連絡先を御記入ください。下記の情報はインタビューのための連絡を取る以外には使用しません。

お名前：

Email または電話番号：



## 問 3. 国籍 n=769, 回答率 99.6%

| 国名       | 回答数 | 割合(%) |
|----------|-----|-------|
| 中国       | 290 | 38.0  |
| 韓国       | 86  | 11.3  |
| 台湾       | 51  | 6.7   |
| インドネシア   | 36  | 4.7   |
| タイ       | 31  | 4.1   |
| ベトナム     | 25  | 3.3   |
| マレーシア    | 23  | 3.0   |
| インド      | 18  | 2.4   |
| フィリピン    | 14  | 1.8   |
| バングラデシュ  | 10  | 1.3   |
| エジプト     | 9   | 1.2   |
| アメリカ     | 9   | 1.2   |
| イラン      | 8   | 1.0   |
| ブラジル     | 8   | 1.0   |
| ドイツ      | 7   | 0.9   |
| フランス     | 7   | 0.9   |
| モンゴル     | 7   | 0.9   |
| ネパール     | 6   | 0.8   |
| ミャンマー    | 6   | 0.8   |
| イギリス     | 5   | 0.7   |
| カナダ      | 5   | 0.7   |
| メキシコ     | 5   | 0.7   |
| オーストラリア  | 4   | 0.5   |
| ブルガリア    | 4   | 0.5   |
| ウクライナ    | 3   | 0.4   |
| カンボジア    | 3   | 0.4   |
| シリア      | 3   | 0.4   |
| スウェーデン   | 3   | 0.4   |
| トルコ      | 3   | 0.4   |
| ニュージーランド | 3   | 0.4   |
| ペルー      | 3   | 0.4   |
| ベルギー     | 3   | 0.4   |
| アジア      | 2   | 0.3   |
| アゼルバイジャン | 2   | 0.3   |
| アフリカ     | 2   | 0.3   |
| イスラエル    | 2   | 0.3   |
| オーメン     | 2   | 0.3   |
| ギリシア     | 2   | 0.3   |
| クロアチア    | 2   | 0.3   |
| ケニア      | 2   | 0.3   |
| スロバキア    | 2   | 0.3   |
| チリ       | 2   | 0.3   |
| パキスタン    | 2   | 0.3   |

| 国名           | 回答数 | 割合(%) |
|--------------|-----|-------|
| アフガニスタン      | 1   | 0.1   |
| イエメン         | 1   | 0.1   |
| イラク          | 1   | 0.1   |
| ウズベキスタン      | 1   | 0.1   |
| エクアドル        | 1   | 0.1   |
| エストニア        | 1   | 0.1   |
| エチオピア        | 1   | 0.1   |
| オーストリア       | 1   | 0.1   |
| オランダ         | 1   | 0.1   |
| ガーナ          | 1   | 0.1   |
| カザフスタン       | 1   | 0.1   |
| カメルーン        | 1   | 0.1   |
| クウェート        | 1   | 0.1   |
| コロンビア        | 1   | 0.1   |
| コンゴ民主共和国     | 1   | 0.1   |
| シンガポール       | 1   | 0.1   |
| スイス          | 1   | 0.1   |
| スペイン         | 1   | 0.1   |
| スワジランド       | 1   | 0.1   |
| セネガル         | 1   | 0.1   |
| タンザニア        | 1   | 0.1   |
| チェコ          | 1   | 0.1   |
| 東南アジア        | 1   | 0.1   |
| ニカラグア        | 1   | 0.1   |
| ハンガリー        | 1   | 0.1   |
| 東ティモール       | 1   | 0.1   |
| フィンランド       | 1   | 0.1   |
| ブルネイ         | 1   | 0.1   |
| ベネズエラ        | 1   | 0.1   |
| ベラルーシ        | 1   | 0.1   |
| ポーランド        | 1   | 0.1   |
| ポルトガル        | 1   | 0.1   |
| マラウイ         | 1   | 0.1   |
| マレーシア(カナダ永住) | 1   | 0.1   |
| 南アフリカ        | 1   | 0.1   |
| モザンビーク       | 1   | 0.1   |
| ヨルダン         | 1   | 0.1   |
| ラオス          | 1   | 0.1   |
| リトアニア        | 1   | 0.1   |
| ロシア          | 1   | 0.1   |
| 無回答          | 3   | 0.4   |
| 合計           | 769 | 100.0 |

※中国は香港（4人）を含む

## 問 7. 専門の研究分野

|                                                       |       | 回答数 | 割合(%) |
|-------------------------------------------------------|-------|-----|-------|
| 文系                                                    |       | 194 | 25.4  |
| 理系                                                    |       | 433 | 56.7  |
| 文理融合系                                                 |       | 63  | 8.3   |
| 未決定                                                   |       | 6   | 0.8   |
| その他                                                   |       | 33  | 4.3   |
| 無回答                                                   |       | 34  | 4.5   |
| 合計                                                    |       | 763 | 100.0 |
| 理系<br>内訳<br>(n=455,<br>理系 433+<br>文理融合<br>系の理系<br>12) | 工学    | 180 | 41.6  |
|                                                       | 農学    | 76  | 17.6  |
|                                                       | 理学    | 42  | 9.7   |
|                                                       | 医学・薬学 | 70  | 16.2  |
|                                                       | エネルギー | 37  | 8.5   |
|                                                       | 情報    | 40  | 9.2   |

## 問 10. 一か月の収入

|          | 回答数 | 割合(%) |
|----------|-----|-------|
| 5 万円以下   | 47  | 6.2   |
| 5-10 万円  | 193 | 25.3  |
| 10-15 万円 | 153 | 20.1  |
| 15-20 万円 | 306 | 40.1  |
| 20-30 万円 | 37  | 4.8   |
| 30-40 万円 | 12  | 1.6   |
| 無回答      | 15  | 2.0   |
| 合計       | 763 | 100.0 |

## 問 13a. 一か月のアルバイト時間

|          | 回答数 | 割合(%) |
|----------|-----|-------|
| 1-15 時間  | 77  | 26.5  |
| 16-30 時間 | 71  | 24.4  |
| 31 時間以上  | 91  | 31.3  |
| 無回答      | 52  | 17.9  |
| 合計       | 291 | 100.0 |

## 問 14. 日本留学にあたり準備した貯金

|           | 回答数 | 割合(%) |
|-----------|-----|-------|
| 50 万円未満   | 249 | 53.6  |
| 51-100 万円 | 110 | 24.0  |
| 101 万円以上  | 103 | 22.4  |
| 合計        | 462 | 100.0 |

## 問 21a. 睡眠時間

| 睡眠時間数     | 人数  | 割合(%) |
|-----------|-----|-------|
| 3-4 時間未満  | 3   | 0.4   |
| 4-5 時間未満  | 13  | 1.7   |
| 5-6 時間未満  | 61  | 8.0   |
| 6-7 時間未満  | 235 | 30.8  |
| 7-8 時間未満  | 264 | 34.6  |
| 8-9 時間未満  | 162 | 21.2  |
| 9-10 時間未満 | 13  | 1.7   |
| 10 時間以上   | 3   | 0.4   |
| 無回答       | 9   | 1.2   |
| 合計        | 763 | 100.0 |

## 問 48. 利用している SNS(ソーシャル・ネットワーキング・システム)

|        | 人数  | 割合(%)  |
|--------|-----|--------|
| SNS あり | 573 | 75.1%  |
| SNS なし | 42  | 5.5%   |
| その他記述  | 7   | 0.9%   |
| 無回答    | 141 | 18.5%  |
| 合計     | 763 | 100.0% |

その他の記述 (7 名) 「?何です?」 (1 名)、「yahoo msg;social networking はあまり好きではありません。大事で必要な人とのつながりを優先しています。」 (1 名)、「ほとんど使用していない」 (5 名)の記述があった。

SNS 利用者のうち、二種類が 251 人、三種類が 80 人、四種類が 24 人、五種類が 8 人、六種類が 1 人。以下利用 SNS のうちわけ (のべ 937(=573+171+56\*2+16\*3+7\*4+1\*5)名)

| 名称          | 人数  | 割合(%) | 名称               | 人数  | 割合(%)  |
|-------------|-----|-------|------------------|-----|--------|
| Facebook    | 507 | 54.1% | B kontakte       | 1   | 0.1%   |
| Twitter     | 134 | 14.3% | cyfield          | 1   | 0.1%   |
| mixi        | 66  | 7.0%  | Hotmail          | 1   | 0.1%   |
| MSN         | 48  | 5.1%  | Science Stage    | 1   | 0.1%   |
| 人人・校内網      | 40  | 4.3%  | mailgroup        | 1   | 0.1%   |
| QQ          | 28  | 3.0%  | Edmodo           | 1   | 0.1%   |
| Skype       | 21  | 2.2%  | mimiblog         | 1   | 0.1%   |
| google+     | 18  | 1.9%  | Gtalk            | 1   | 0.1%   |
| yahoo       | 7   | 0.7%  | Multiply         | 1   | 0.1%   |
| orkut       | 7   | 0.7%  | Myspace          | 1   | 0.1%   |
| 微博          | 7   | 0.7%  | youtube          | 1   | 0.1%   |
| LinkedIn    | 6   | 0.6%  | odnokalassnikiru | 1   | 0.1%   |
| Cyworld     | 4   | 0.4%  | livepanel        | 1   | 0.1%   |
| gmail       | 4   | 0.4%  | Ptt              | 1   | 0.1%   |
| plurk       | 4   | 0.4%  | 開心網              | 1   | 0.1%   |
| tumblr      | 3   | 0.3%  | blogspot         | 1   | 0.1%   |
| Hi5         | 2   | 0.2%  | Ameba            | 1   | 0.1%   |
| kakaotalk   | 2   | 0.2%  | Livedoor         | 1   | 0.1%   |
| nate on     | 2   | 0.2%  | Viber            | 1   | 0.1%   |
| bbs         | 2   | 0.2%  | Academia.edu     | 1   | 0.1%   |
| World press | 2   | 0.2%  | sina             | 1   | 0.1%   |
| 小春          | 2   | 0.2%  | 合計               | 937 | 100.0% |

問 24a.

留学先として希望していた国

| 第一志望国    | 人数  | 割合(%)  |
|----------|-----|--------|
| 日本       | 67  | 58.3%  |
| アメリカ     | 29  | 25.2%  |
| イギリス     | 6   | 5.2%   |
| オーストラリア  | 2   | 1.7%   |
| オランダ     | 2   | 1.7%   |
| シンガポール   | 2   | 1.7%   |
| スイス      | 2   | 1.7%   |
| 中国       | 2   | 1.7%   |
| ドイツ      | 1   | 0.9%   |
| ニュージーランド | 1   | 0.9%   |
| フランス     | 1   | 0.9%   |
| 合計       | 115 | 100.0% |

| 第一志望大学   | 回答数 |
|----------|-----|
| 日本(67 人) |     |
| 東京大学     | 49  |
| 大阪大学     | 3   |
| 早稲田大学    | 3   |
| 九州大学     | 2   |
| 名古屋大学    | 2   |
| 関西学院大学   | 1   |
| 京都外国語大学  | 1   |
| 京都工芸繊維大学 | 1   |
| 京都大学     | 1   |
| 慶応大学     | 1   |
| 神戸大学     | 1   |
| 一橋大学     | 1   |
| 立命館大学    | 1   |

右列に続く

続き

|                                   |   |
|-----------------------------------|---|
| アメリカ(29 人)                        |   |
| スタンフォード大学                         | 5 |
| マサチューセッツ工科大学                      | 4 |
| ハーバード大学                           | 3 |
| ワシントン大学                           | 2 |
| ジョージア工科大学                         | 1 |
| ジョンズホプキンス大学                       | 1 |
| カリフォルニア大学バークレー校                   | 1 |
| サウスカロライナ大学                        | 1 |
| イエール大学                            | 1 |
| カリフォルニア大学ロスアンゼルス校                 | 1 |
| コーネル大学                            | 1 |
| シカゴ大学                             | 1 |
| ニューヨーク大学                          | 1 |
| ハワイ大学                             | 1 |
| ハワイ大学マノア校                         | 1 |
| 無回答                               | 4 |
| イギリス(6 人)                         |   |
| インペリアルカレッジロンドン                    | 2 |
| ケンブリッジ大学                          | 2 |
| シェフィールド大学                         | 1 |
| カーディフ大学                           | 1 |
| オーストラリア(2 人)                      |   |
| クイーン大学                            | 1 |
| メルボルン大学                           | 1 |
| オランダ(2 人)                         |   |
| デルフト大学                            | 1 |
| ワーゲニンゲン大学                         | 1 |
| シンガポール(2 人)                       |   |
| シンガポール国立大学                        | 2 |
| スイス(2 人)                          |   |
| FMI(Friedrich Miescher Institute) | 1 |
| 無回答                               | 1 |
| 中国(2 人)                           |   |
| 上海交通大学                            | 1 |
| 清華大学                              | 1 |
| ドイツ(1 人)                          |   |
| 欧州分子生物学研究所                        | 1 |
| ニュージーランド(1 人)                     |   |
| オークランド大学                          | 1 |
| フランス(1 人)                         |   |
| リヨン大学                             | 1 |

## 2011 年度 留学生アンケート 調査票・単純集計

| 第二志望国    | 人数 | 割合(%)  |
|----------|----|--------|
| 日本       | 33 | 56.9%  |
| アメリカ     | 12 | 20.7%  |
| イギリス     | 5  | 8.6%   |
| ドイツ      | 3  | 5.2%   |
| オランダ     | 1  | 1.7%   |
| スウェーデン   | 1  | 1.7%   |
| スペイン     | 1  | 1.7%   |
| 中国       | 1  | 1.7%   |
| ニュージーランド | 1  | 1.7%   |
| 合計       | 58 | 100.0% |

| 第二志望大学            | 回答数 |
|-------------------|-----|
| 日本(33 人)          |     |
| 京都大学              | 17  |
| 東京大学              | 5   |
| 早稲田大学             | 3   |
| 立命館大学             | 2   |
| 大阪大学              | 1   |
| 関西学院大学            | 1   |
| 神戸大学              | 1   |
| 筑波大学              | 1   |
| 東北大学              | 1   |
| 一橋大学              | 1   |
| アメリカ(12 人)        |     |
| マサチューセッツ工科大学      | 2   |
| カリフォルニア大学サンタバーバラ校 | 2   |
| フロリダ大学            | 2   |
| カリフォルニア工科大学       | 1   |
| カリフォルニア大学バークレー校   | 1   |
| イエール大学            | 1   |
| テキサス大学            | 1   |
| ハーバード大学           | 1   |
| 複数ある              | 1   |
| イギリス(5 人)         |     |
| インペリアルカレッジロンドン    | 1   |
| リード大学             | 1   |
| 無回答               | 3   |
| ドイツ(3 人)          |     |
| マックス・プランク研究所      | 1   |
| ハイデルベルグ大学         | 1   |
| ミュンヘン大学           | 1   |
| オランダ(1 人)         |     |
| ユレヒト大学            | 1   |
| スウェーデン(1 人)       |     |
| スウェーデン王立工科大学      | 1   |
| スペイン(1 人)         |     |
| オビエド大学            | 1   |
| 中国(1 人)           |     |
| 香港科技大学            | 1   |
| ニュージーランド(1 人)     |     |
| オークランド大学          | 1   |

2011 年度 留学生アンケート 調査票・単純集計

| 第三志望国 | 人数 | 割合(%)  |
|-------|----|--------|
| 日本    | 21 | 63.6%  |
| アメリカ  | 4  | 12.1%  |
| イギリス  | 3  | 9.1%   |
| ドイツ   | 2  | 6.1%   |
| オランダ  | 1  | 3.0%   |
| カナダ   | 1  | 3.0%   |
| 北朝鮮   | 1  | 3.0%   |
| 合計    | 33 | 100.0% |

| 第三志望大学           | 回答数 |
|------------------|-----|
| 日本(21 人)         |     |
| 大阪大学             | 6   |
| 京都大学             | 4   |
| 東京大学             | 3   |
| 東京工業大学           | 2   |
| 名古屋大学            | 2   |
| 立命館アジア太平洋大学      | 1   |
| 神戸大学             | 1   |
| 千葉大学             | 1   |
| 同志社大学            | 1   |
| アメリカ(4 人)        |     |
| カリフォルニア大学ロサンゼルス校 | 1   |
| スタンフォード大学        | 1   |
| テキサス大学オースティン校    | 1   |
| ハーバード大学          | 1   |
| イギリス(3 人)        |     |
| ケンブリッジ大学         | 1   |
| ヨーク大学            | 1   |
| リーズ大学            | 1   |
| ドイツ(2 人)         |     |
| ゲッティンゲン大学        | 1   |
| ミュンヘン大学          | 1   |
| オランダ(1 人)        |     |
| ワーゲニンゲン大学        | 1   |
| カナダ(1 人)         |     |
| ブリティッシュコロンビア大学   | 1   |
| 北朝鮮(1 人)         |     |
| 金日成総合大学校         | 1   |

## 問 32. 母語

| 言語名      | 回答数 | 割合 (%) | 言語名            | 回答数 | 割合 (%) |
|----------|-----|--------|----------------|-----|--------|
| 中国語      | 296 | 38.8   | アフリカーンス語       | 1   | 0.1    |
| 韓国語      | 87  | 11.4   | アラビア語・英語       | 1   | 0.1    |
| 英語       | 34  | 4.5    | アラム語・オロモ語      | 1   | 0.1    |
| インドネシア語  | 30  | 3.9    | 英語・中国語         | 1   | 0.1    |
| タイ語      | 30  | 3.9    | 英語・ヒンディー語      | 1   | 0.1    |
| ベトナム語    | 24  | 3.1    | 英語・フィリピン語      | 1   | 0.1    |
| アラビア語    | 16  | 2.1    | エウエ語           | 1   | 0.1    |
| スペイン語    | 13  | 1.7    | エストニア語         | 1   | 0.1    |
| ベンガル語    | 12  | 1.6    | カザフ語           | 1   | 0.1    |
| マレー語     | 12  | 1.6    | カンボジア語         | 1   | 0.1    |
| 台湾語      | 11  | 1.4    | キワール語          | 1   | 0.1    |
| フランス語    | 11  | 1.4    | クロアチア語         | 1   | 0.1    |
| モンゴル語    | 11  | 1.4    | スペイン語・カタルーニャ語  | 1   | 0.1    |
| フィリピン語   | 10  | 1.3    | スワジ語           | 1   | 0.1    |
| ヒンディー語   | 8   | 1.0    | タガログ語・英語       | 1   | 0.1    |
| ペルシア語    | 8   | 1.0    | タジク語           | 1   | 0.1    |
| ポルトガル語   | 8   | 1.0    | チェコ語           | 1   | 0.1    |
| ドイツ語     | 7   | 0.9    | チェワ語           | 1   | 0.1    |
| ミャンマー語   | 5   | 0.7    | 中国語・英語         | 1   | 0.1    |
| ネパール語    | 4   | 0.5    | 中国語・英語・マレー語    | 1   | 0.1    |
| ブルガリア語   | 4   | 0.5    | 中国語・韓国語        | 1   | 0.1    |
| アゼリー語    | 3   | 0.4    | 中国語・朝鮮語        | 1   | 0.1    |
| ウイグル語    | 3   | 0.4    | 朝鮮語            | 1   | 0.1    |
| スウェーデン語  | 3   | 0.4    | テトゥン語          | 1   | 0.1    |
| 中国語・台湾語  | 3   | 0.4    | ビルマ語           | 1   | 0.1    |
| ポーランド語   | 3   | 0.4    | ヒンディー語・英語      | 1   | 0.1    |
| ウクライナ語   | 2   | 0.3    | フィリピン語・英語      | 1   | 0.1    |
| ウルドゥー語   | 2   | 0.3    | フィンランド語        | 1   | 0.1    |
| 英語・スワヒリ語 | 2   | 0.3    | マラーティー語・ヒンディー語 | 1   | 0.1    |
| オランダ語    | 2   | 0.3    | マラガシ語・フランス語    | 1   | 0.1    |
| ギリシャ語    | 2   | 0.3    | マラヤーラム語        | 1   | 0.1    |
| クメール語    | 2   | 0.3    | マレー語・英語        | 1   | 0.1    |
| ジャワ語     | 2   | 0.3    | 満珠文字           | 1   | 0.1    |
| スロバキア語   | 2   | 0.3    | ラオ語            | 1   | 0.1    |
| スワヒリ語    | 2   | 0.3    | リトアニア語・ロシア語    | 1   | 0.1    |
| タミル語     | 2   | 0.3    | ロシア語           | 1   | 0.1    |
| トルコ語     | 2   | 0.3    | ロシア語・ブルガリア語    | 1   | 0.1    |
| ハンガリー語   | 2   | 0.3    | ロシア語・ベラルーシ語    | 1   | 0.1    |
| ヘブライ語    | 2   | 0.3    | 無回答            | 41  | 5.4    |
| マラティ語    | 2   | 0.3    | 合計             | 763 | 100.0  |





## 国際交流と留学支援制度に関する調査のお願い

### <一般学生※対象>

2011 年 7 月

京都大学国際交流センターでは、この度、本学に学ぶ学生・大学院生のみなさんを対象に、国際交流および留学に関する実態調査を計画しました。みなさんのご意見をもとに本学の国際交流の現状をよりよく把握し、本学の留学支援体制の改善と今後の国際交流の推進に役立てたく思います。みなさんの留学経験、これからの留学希望、京都大学の留学支援体制への要望などについて、率直なご意見をお教え下さい。

この調査の結果は報告書及び学術論文として学内外に公開します。なお、調査票は無記名です。調査で得られたデータは記号化して統計的に処理しますので、みなさんのプライバシーが侵害されることはありません。また、みなさんの本学での立場に関わることもありません。

なお、本調査は2002年より3年に一度実施しています。  
以上の主旨をご理解いただき、ご協力をお願いします。

締め切り： 2011 年 **7月29日(金)**

本調査に関するご質問やご意見は以下までお寄せ下さい。

京都大学国際交流センター アンケート調査班  
問い合わせ先：survey2011@ryugaku.kyoto-u.ac.jp

※一般学生：大学入学以前の教育期間の大半を日本で過ごし、一般入学試験（帰国子女を含む）を受験して京都大学へ入学してきた方を指します。留学生は除きます。

(ここには何も記入しないで下さい)

整理番号

|   |
|---|
| — |
|---|

回収日

|   |   |
|---|---|
| 月 | 日 |
|---|---|

## 記入上の注意

質問には、選択式の質問と記述式の質問があります。

### 選択式の質問について

- ① 該当する答えの番号を、直接○で囲んでください。

(例) 性別

1. 女性

2. 男性

(例)

不十分    あまり充分でない    ある程度充分    充分    該当しない  
1 ——— 2 ——— 3 ——— 4                      8

- ② 「その他」を選んだ場合は、具体的にご記入ください。

### 記述式の質問について

- ①  または (       ) の中に具体的にご記入下さい。

どうしても答えにくい場合は、その質問をとばしていただいて結構です

**\*\*\* 回答後は、次のいずれかの方法で回収に協力してください。\*\*\***

- ① 担当の先生から指示がある場合は、その指示に従ってください。
- ② 留学生課前にアンケート回収ボックスが設置されていますので、投入してください。
- ③ 上記以外の場合は、各自、学内便\*にて「国際交流センター アンケート調査班」まで御返送ください。

**\*学内便は、学科事務室か学部事務室などに願い出てください。「学内便です。」とお渡しくださいれば、利用できます。**

問1. 性別 **n=581**1. 女性 **(26.2%)**2. 男性 **(73.8%)**問2. 年齢 **n=581**

2011 年 4 月 1 日現在

平均  
**21.11**歳 無回答 **0.9%**をのぞく問3. 所属学部・研究科（一つに○） **n=581**

- |                                   |                                   |
|-----------------------------------|-----------------------------------|
| 1. 総合人間学部／人間・環境学研究科 <b>(5.3%)</b> | 11. エネルギー科学研究科 <b>(1.4%)</b>      |
| 2. 文学部／文学研究科 <b>(10.8%)</b>       | 12. アジア・アフリカ地域研究研究科 <b>(0.0%)</b> |
| 3. 教育学部／教育学研究科 <b>(2.4%)</b>      | 13. 情報学研究科 <b>(1.5%)</b>          |
| 4. 法学部／法学研究科 <b>(8.1%)</b>        | 14. 生命科学研究科 <b>(0.0%)</b>         |
| 5. 経済学部／経済学研究科 <b>(7.2%)</b>      | 15. 地球環境学舎 <b>(0.2%)</b>          |
| 6. 理学部／理学研究科 <b>(14.1%)</b>       | 【専門職大学院】                          |
| 7. 医学部／医学研究科 <b>(6.9%)</b>        | 16. 公共政策大学院 <b>(0.5%)</b>         |
| 8. 薬学部／薬学研究科 <b>(4.1%)</b>        | 17. 経営管理大学院 <b>(0.0%)</b>         |
| 9. 工学部／工学研究科 <b>(29.4%)</b>       | 18. 法科大学院 <b>(0.0%)</b>           |
| 10. 農学部／農学研究科 <b>(7.6%)</b>       | 19. 医学研究科社会健康医学系専攻 <b>(0.0%)</b>  |
| 【研究所・センターに所属されている方は具体名をご記入願います。】  |                                   |
| 20. ( ) <b>(0.0%)</b>             |                                   |

無回答 **(0.3%)**問4. 文系／理系（一つに○） **n=581**1. 文系 **(30.8%)**2. 理系 **(66.3%)**3. 文理融合型 **(2.4%)**4. 未決定 **(0.3%)**無回答 **(0.2%)**問5. 専門の研究分野（具体的にご記入下さい。例：エネルギー環境科学専攻） **n=581**回答率 **70.9%**問6. 京都大学における身分（一つに○） **n=581**

- |                                |   |
|--------------------------------|---|
| 1. 学部の正規学生 <b>(73.8%)</b>      | } |
| 2. 大学院修士課程の正規学生 <b>(18.2%)</b> |   |
| 3. 大学院博士課程の正規学生 <b>(7.7%)</b>  |   |
| 4. 研究生・聴講生 <b>(0.0%)</b>       |   |
| 5. 科目等履修生 <b>(0.0%)</b>        |   |
| 6. 研修員 <b>(0.0%)</b>           |   |
| 7. その他 <b>(0.0%)</b>           |   |
| (具体的に: )                       |   |

無回答 **(0.2%)**回生 **n=580**

|     |      |       |
|-----|------|-------|
| 学部  | 1 回生 | 33.4% |
|     | 2 回生 | 6.6%  |
|     | 3 回生 | 9.7%  |
|     | 4 回生 | 20.2% |
|     | 5 回生 | 2.6%  |
|     | 6 回生 | 1.0%  |
| 修士  | 1 回生 | 12.6% |
|     | 2 回生 | 5.7%  |
| 博士  | 1 回生 | 2.2%  |
|     | 2 回生 | 2.2%  |
|     | 3 回生 | 3.1%  |
|     | 4 回生 | 0.2%  |
| 無回答 |      | 0.5%  |

問 7. あなたにもっともなじみのある外国語は、以下のうちどれですか。(一つに○) **n=581**

1. 英語 (97.1%)    2. ドイツ語 (1.4%)    3. 中国語 (1.0%)  
 4. フランス語 (0.5%)    5. その他(具体的に: \_\_\_\_\_) (0.0%)

付問 7-a. 問 7 で選んだ外国語を、どのくらい話せますか。(一つに○) **n=581**

1. ほとんど話せない (14.6%)  
 2. 身近なこと(ものごとの「好き」「嫌い」など)についてやりとりができる (49.9%)  
 3. 日常生活での話題についてやりとりができる (30.8%)  
 4. 社会性の高い話題(時事問題など)についてやりとりができる (4.5%)  
 無回答 (0.2%)

付問 7-b. 問 7 で選んだ外国語を、どのくらい書けますか。(一つに○) **n=581**

1. ほとんど書けない (5.7%)  
 2. 身近なこと(ものごとの「好き」「嫌い」など)について文章を書ける (31.2%)  
 3. 日常生活での話題について文章を書ける (53.7%)  
 4. 社会性の高い話題(時事問題など)について文章を書ける (9.3%)  
 無回答 (0.2%)

付問 7-c. 問 7 で選んだ外国語を、どのくらい聴きとれますか。(一つに○) **n=581**

1. ほとんど聴きとれない (12.4%)  
 2. 身近なこと(ものごとの「好き」「嫌い」など)について聴きとれる (46.6%)  
 3. 日常生活での話題について聴きとれる (34.1%)  
 4. 社会性の高い話題(時事問題など)について聴きとれる (6.7%)  
 無回答 (0.2%)

付問 7-d. 問 7 で選んだ外国語を、どのくらい読めますか。(一つに○) **n=581**

1. ほとんど読めない (2.6%)  
 2. 身近なこと(ものごとの「好き」「嫌い」など)について書かれた文を読むことができる (11.0%)  
 3. 日常生活の話題について書かれた文章を読める (42.9%)  
 4. 社会性の高い話題(時事問題など)について書かれた文章を読める (43.4%)  
 無回答 (0.2%)

問 8. 問 7 で選んだ外国語を用いる場合、学問的・専門的な話題について以下のことはどのくらいできますか。それぞれ、あてはまる数字に○をつけてください。 **n=581**

|       | できない    | どちらかといえば<br>できない | どちらかといえば<br>できる | できる     | 無回答    |
|-------|---------|------------------|-----------------|---------|--------|
| 1. 話す | (35.6%) | (46.5%)          | (14.5%)         | (3.3%)  | (0.2%) |
| 2. 書く | (16.7%) | (39.8%)          | (37.2%)         | (6.2%)  | (0.2%) |
| 3. 聴く | (26.0%) | (44.4%)          | (25.0%)         | (4.5%)  | (0.2%) |
| 4. 読む | (3.4%)  | (20.5%)          | (52.0%)         | (23.8%) | (0.3%) |

問9. これまでに受けた語学検定と、その結果をお書きください。語学検定を受けたことがない人は「なし」とお書きください。 **n=581**

例) TOEFL iBT82 点, 中国語検定1級

回答率 94.0%

問10. あなたご自身のことについてうかがいます。

付問10-a. あなたのご出身の高校では、どのくらいの割合の人が大学・短大に進学しましたか。(一つに○) **n=581**

- |             |         |
|-------------|---------|
| 1. ほとんど全員   | (81.4%) |
| 2. 7割から8割程度 | (10.5%) |
| 3. 半数くらい    | (5.2%)  |
| 4. 2割から3割程度 | (0.5%)  |
| 5. ほとんどいない  | (0.7%)  |
| 6. わからない    | (1.7%)  |

付問10-b. あなたのご出身(15歳までにすごした主なところ)はどのようなところですか。(一つに○) **n=581**

- |                       |         |
|-----------------------|---------|
| 1. 人口100万人以上の都市       | (28.4%) |
| 2. 人口50万人から100万人未満の都市 | (12.6%) |
| 3. 人口25万人から50万人未満の市   | (17.7%) |
| 4. 人口10万人から25万人未満の市   | (16.5%) |
| 5. 人口10万人未満の市         | (13.8%) |
| 6. 町                  | (8.6%)  |
| 7. 村                  | (1.4%)  |

無回答 (1.0%)

付問10-c. 日本の世帯平均所得は548万円という調査があります。これとくらべてあなたの親(保護者)の世帯収入は以下のうちどれくらいですか。(一つに○)

**n=581**

- |               |         |
|---------------|---------|
| 1. 平均よりかなり少ない | (7.9%)  |
| 2. 平均より少ない    | (9.5%)  |
| 3. ほぼ平均       | (20.1%) |
| 4. 平均より多い     | (46.0%) |
| 5. 平均よりかなり多い  | (14.8%) |

無回答 (1.7%)

(次ページへつづく) ➡

付問 10-d. あなたが利用している SNS (ソーシャル・ネットワーキング・システム) をすべて挙げてください。(例: Facebook, Mixi, Twitter など) **n=581**

回答率 90.2%

問 11. あなたの子どものころ (幼児期～12 歳ごろまで) 思い出してお答えください。次のようなことはどのくらいありましたか。それぞれ、あてはまる数字に○をつけてください。 **n=581**

|                           | 全く<br>なかった | あまり<br>なかった | ときどき<br>あった | よくあった   | 無回答    |
|---------------------------|------------|-------------|-------------|---------|--------|
| 1. 日本人以外の人との交流            | (42.0%)    | (29.3%)     | (19.8%)     | (8.6%)  | (0.3%) |
| 2. 家族の誰かが本を読んできた          | (7.2%)     | (16.9%)     | (35.8%)     | (39.9%) | (0.2%) |
| 3. 家族と美術展や博物館へ行った         | (13.6%)    | (32.4%)     | (37.7%)     | (16.2%) | (0.2%) |
| 4. 外国のメディア (本やテレビなど) にふれた | (40.4%)    | (33.9%)     | (16.5%)     | (8.6%)  | (0.5%) |

問 12. これまでに、海外に行ったことがありますか。 **n=581**

1. ある (68.2%)

2. ない (31.5%) → 問 13 へ。

無回答 (0.3%)

付問 12-a. それはどのような形態でしたか。その形態と、回数があるものについては回数もお答え下さい。(すべてに○) **n=396**

- |                                                                                 |         |
|---------------------------------------------------------------------------------|---------|
| 1. 海外で生まれた                                                                      | (2.3%)  |
| 2. 子どもの頃、家族と一緒に海外に居住していた                                                        | (16.2%) |
| 3. 留学 (語学や専門研究などのキャリアアップを目的とした海外渡航) をした<br>* 高校での留学も含む。留学期間の長さは問わない。 → 合計 ( ) 回 | (22.2%) |
| 4. ツアーで旅行をした → 合計 ( ) 回程度                                                       | (45.7%) |
| 5. 個人で旅行をした → 合計 ( ) 回程度                                                        | (49.7%) |
| 6. ボランティア活動をした → 合計 ( ) 回程度                                                     | (2.3%)  |
| 7. 主に働いた → 合計 ( ) 回程度                                                           | (0.0%)  |
| 8. その他 (具体的に: )                                                                 | (15.4%) |

付問 12-b. [付問 12-a] で、3. を選んだ方のみお答えください。留学期間はどのくらいでしたか。複数回の経験のある方は、最長のものについて、お答えください。

n=75

|            |       |
|------------|-------|
| 1か月未満      | 42.7% |
| 1か月以上3か月未満 | 33.3% |
| 3か月以上6か月未満 | 13.3% |
| 6か月以上1年未満  | 1.3%  |
| 1年以上       | 8.0%  |

無回答 1.3%



問 13. あなたのご両親※の海外留学経験についてお尋ねします。

付問 13－a. あなたの父親は、6 ヶ月以上の海外留学経験がありますか。 **n=581**

(一つに○)

- 1. 海外留学経験がある (11.9%)
- 2. 海外留学経験がない (73.0%)
- 3. わからない (13.9%)

無回答 (1.2%)

付問 13－b. あなたの母親は、6 ヶ月以上の海外留学経験がありますか。 **n=581**

(一つに○)

- 1. 海外留学経験がある (6.5%)
- 2. 海外留学経験がない (80.6%)
- 3. わからない (11.7%)

無回答 (1.2%)

※ ご両親として、実父母のほか、養父母等の保護者をお持ちの方は、あなたがこれまで最も長くかかわった方についてお答えください。

問 14. 今後、海外に行ってみたいと思いますか。 **n=581**

- 1. はい (91.9%)
- 2. いいえ (7.4%)
- 無回答 (0.7%)



付問 14－a. どのような形態で海外に行きたいですか。 (すべてに○) **n=534**

- 1. 留学（語学や専門研究などのキャリアアップを目的とした海外渡航）をしたい (62.5%)
- 2. ツアーで旅行をしたい (27.5%)
- 3. 個人で旅行をしたい (78.1%)
- 4. ボランティア活動をしたい (11.0%)
- 5. 働いてみたい (30.0%)
- 6. その他（具体的に： ) (2.4%)

問 15. これまで学内の留学生と知り合ったことがありますか。 **n=581**

- 1. はい (71.3%)
- 2. いいえ→問 15－cへ. (28.6%)
- 無回答(0.2%)



付問 15－a. どのように知り合いましたか。 (すべてに○) **n=414**

- 1. 授業で（授業名を分かる範囲でお答えください： ) (38.6%)
- 2. 部活・サークル活動で (39.1%)
- 3. チューターとして (4.6%)
- 4. 研究室で (41.8%)
- 5. 学内のパーティ・イベントなどで (12.3%)
- 6. その他（具体的に： ) (12.1%)

(次ページへつづく)



付問 15－b. 留学生の影響についておたずねします。それぞれについて、1～4のあてはまるところに○をつけてください。 **n=414**

|                                            | あてはまらない | どちらかといえば<br>あてはまらない | どちらかといえば<br>あてはまる | あてはまる   | 無回答    |
|--------------------------------------------|---------|---------------------|-------------------|---------|--------|
| 1. 学問的な面で刺激をうけている                          | (18.1%) | (25.1%)             | (36.5%)           | (19.3%) | (1.0%) |
| 2. 学問的な面で刺激をあたえていると感じる                     | (33.6%) | (41.3%)             | (18.8%)           | (5.3%)  | (1.0%) |
| 3. 外国の文化に興味をもつようになった                       | (12.3%) | (23.7%)             | (40.6%)           | (22.5%) | (1.0%) |
| 4. (留学生に紹介することなどを通して)<br>自国の文化に興味をもつようになった | (18.6%) | (35.0%)             | (34.8%)           | (10.6%) | (1.0%) |
| 5. 留学生と一緒にの授業を興味深いと感じる                     | (19.8%) | (26.1%)             | (36.7%)           | (16.4%) | (1.0%) |

付問 15－c. 全員がお答えください。その他、留学生から受けている影響、あるいは留学生に与えている影響について自由に記述してください。 **n=581**

回答率 68.7%

問 16. これまでに留学してみたいと思ったことはありますか。(一つに○) **n=581**  
(これまでに留学したことがある人は、それ以降の希望についてお答え下さい)

|                 |                          |         |
|-----------------|--------------------------|---------|
| 1. 思ったことがある     | → 問 17 (次ページ) におすすみ下さい   | (69.4%) |
| 2. 思ったことはない     | → 問 34 (13 ページ) におすすみ下さい | (26.7%) |
| 3. 現在、留学が決定している | → 問 40 (17 ページ) におすすみ下さい | (3.8%)  |
|                 | 無回答                      | (0.2%)  |

問 17. 今後、留学するなら、いつ留学したいですか。(一つに○) **n=403**

- |                |            |
|----------------|------------|
| 1. 大学学部で       | (36.2%)    |
| 2. 大学卒業後       | (13.2%)    |
| 3. 大学院修士課程で    | (18.4%)    |
| 4. 大学院修士課程修了後  | (8.4%)     |
| 5. 大学院博士課程で    | (8.4%)     |
| 6. 博士学位取得後     | (8.7%)     |
| 7. その他(具体的に: ) | (6.0%)     |
|                | 無回答 (0.7%) |

問 18. 留学するとすれば、どのくらい留学したいですか。(一つに○) **n=403**

- |          |            |
|----------|------------|
| 1. 1ヶ月程度 | (12.2%)    |
| 2. 3ヶ月程度 | (19.4%)    |
| 3. 6ヶ月程度 | (16.9%)    |
| 4. 1年程度  | (32.5%)    |
| 5. 2年程度  | (11.2%)    |
| 6. 3年程度  | (4.5%)     |
| 7. 4年程度  | (0.5%)     |
| 8. 5年程度  | (0.5%)     |
| 9. 6年以上  | (2.2%)     |
|          | 無回答 (0.2%) |

問 19. どこの国に留学したいですか。あれば第3希望まで、国名でお答え下さい。 **n=403**

| 第1希望      | 第2希望      | 第3希望      |
|-----------|-----------|-----------|
| 回答率 94.3% | 回答率 81.4% | 回答率 59.1% |

問 20. 留学するなら、どういう目的で留学したいですか。下記から3つまで選んで順にお答えください。 **n=403**

| 一番目の目的    | 二番目の目的    | 三番目の目的    |
|-----------|-----------|-----------|
| 回答率 98.3% | 回答率 95.0% | 回答率 89.3% |

- |                        | 第1希望<br><b>n=396</b> | 第2希望<br><b>n=383</b> | 第3希望<br><b>n=360</b> |
|------------------------|----------------------|----------------------|----------------------|
| 1. 専門分野での勉強・研究に役立てたい   | (44.4%)              | (8.9%)               | (10.6%)              |
| 2. 外国語能力を高めたい          | (33.3%)              | (35.8%)              | (15.3%)              |
| 3. 海外を経験したい            | (9.3%)               | (22.2%)              | (22.5%)              |
| 4. 異文化交流をしたい・異文化を理解したい | (5.6%)               | (13.3%)              | (21.9%)              |
| 5. 見聞を広げたい             | (6.6%)               | (16.4%)              | (23.6%)              |
| 6. 就職に役立てたい            | (0.3%)               | (2.6%)               | (5.8%)               |
| 7. その他(具体的に: )         | (0.5%)               | (0.8%)               | (0.3%)               |

問 21. 留学先を選ぶとすれば、次のうちどの機関がいいですか。(一つに○) **n=403**

- |                |                    |
|----------------|--------------------|
| 1. 大学          | (46.7%)            |
| 2. 大学院         | (35.2%)            |
| 3. 研究所         | (10.9%)            |
| 4. 語学学校・語学研修所  | ( 5.0%)            |
| 5. 専門学校        | ( 0.0%)            |
| 6. その他(具体的に: ) | ( 1.7%)            |
|                | <b>無回答 ( 0.5%)</b> |

問 22. 留学するとしたら、日本の学校の学籍はどうしたいですか。(一つに○) **n=403**

- |                           |         |
|---------------------------|---------|
| 1. 休学したい                  | (20.6%) |
| 2. 休学はしたくない               | (39.2%) |
| 3. どちらでもいい                | (26.3%) |
| 4. 該当しない(大学院修了後に留学したい人など) | (13.9%) |

問 23. 留学するとしたら、留学先で得た単位はどうしたいですか。(一つに○) **n=403**

- |                                     |                    |
|-------------------------------------|--------------------|
| 1. 日本の大学(大学院)の、卒業に必要な単位として認定して欲しい   | (62.3%)            |
| 2. 日本の大学(大学院)の、卒業に必要な単位として認定されなくてよい | ( 8.7%)            |
| 3. どちらでもいい                          | (28.8%)            |
|                                     | <b>無回答 ( 0.2%)</b> |

問 24. 留学するなら、留学先で学位を取得したいと思いますか。(一つに○) **n=403**

- |            |                    |
|------------|--------------------|
| 1. 取得したい   | (54.6%)            |
| 2. 取得しない   | ( 2.7%)            |
| 3. どちらでもいい | (42.4%)            |
|            | <b>無回答 ( 0.2%)</b> |

問 25. あなたが留学したとしたら、その経験は、帰国してから、つぎのことに役立つと思いますか。(それぞれに○) **n=403**

- |                                         | 役立たない<br>と思う | あまり役立たない<br>と思う | ある程度役立つ<br>と思う | 役立つ<br>と思う | 無回答     |
|-----------------------------------------|--------------|-----------------|----------------|------------|---------|
| 1. 就職                                   | ( 4.0%)      | (12.2%)         | (45.9%)        | (37.7%)    | ( 0.2%) |
| 2. 今後の研究活動                              | ( 3.0%)      | ( 9.7%)         | (36.2%)        | (50.4%)    | ( 0.7%) |
| 3. 外国語能力の向上                             | ( 0.2%)      | ( 1.2%)         | (18.4%)        | (79.7%)    | ( 0.5%) |
| 4. 国際的な視野を持つこと                          | ( 0.5%)      | ( 2.0%)         | (23.6%)        | (73.0%)    | ( 1.0%) |
| 5. 友人・知人関係などの人的ネットワーク形成                 | ( 1.2%)      | ( 8.4%)         | (37.2%)        | (52.6%)    | ( 0.5%) |
| 6. 日本の国際交流                              | ( 3.5%)      | (23.1%)         | (44.7%)        | (26.6%)    | ( 2.2%) |
| 7. その他留学経験が役に立つだろうと思うことがあれば、具体的にお書き下さい。 |              |                 |                |            |         |

回答率 9.4%

問 26. 以下に挙げる条件は、あなたが留学を実現するのに、どの程度関係があると思いますか。 (それぞれに○) **n=403**

| 実現には…                                        | 関係が<br>ないと思う | ある程度関係が<br>あると思う | かなり関係が<br>あると思う | 無回答     |
|----------------------------------------------|--------------|------------------|-----------------|---------|
| 1. 奨学金                                       | ( 4.2%)      | (31.0%)          | (64.3%)         | ( 0.5%) |
| 2. 単位認定制度                                    | (26.3%)      | (44.9%)          | (28.3%)         | ( 0.5%) |
| 3. 交換留学制度                                    | (21.1%)      | (44.7%)          | (33.5%)         | ( 0.7%) |
| 4. 日本と海外の学期の調整                               | (16.1%)      | (50.6%)          | (32.8%)         | ( 0.5%) |
| 5. 京都大学での学業・研究との両立                           | (10.7%)      | (39.2%)          | (49.6%)         | ( 0.5%) |
| 6. 就職活動との両立                                  | (23.1%)      | (39.7%)          | (36.5%)         | ( 0.7%) |
| 7. 事務的な手続きのしやすさ                              | ( 8.4%)      | (48.4%)          | (42.2%)         | ( 1.0%) |
| 8. 留学に関する京都大学の<br>サポート体制 (悩みの相談, 情報提供など)     | ( 6.9%)      | (42.2%)          | (50.1%)         | ( 0.7%) |
| 9. 日本と受け入れ国の関係                               | ( 8.7%)      | (42.4%)          | (48.4%)         | ( 0.5%) |
| 10. 自分自身の外国語能力                               | ( 5.5%)      | (25.3%)          | (68.7%)         | ( 0.5%) |
| 11. 自分自身の興味・関心                               | ( 1.2%)      | (16.1%)          | (81.9%)         | ( 0.7%) |
| 12. 親の理解                                     | (14.6%)      | (45.4%)          | (39.2%)         | ( 0.7%) |
| 13. 友人, 知人の勧め                                | (42.9%)      | (44.4%)          | (11.9%)         | ( 0.7%) |
| 14. 指導教員の勧め                                  | (24.6%)      | (49.9%)          | (24.8%)         | ( 0.7%) |
| 15. 偶然の要因・縁                                  | (10.7%)      | (50.6%)          | (38.0%)         | ( 0.7%) |
| 16. その他, 留学を実現するために重要だと思うことがあれば, ご自由にお書き下さい。 |              |                  |                 |         |

回答率 15.4%

問 27. 以下に挙げる情報が充分であったら、留学は、どの程度実現しやすくなると思いますか。 (それぞれに○) **n=403**

| 実現には…                                        | 関係が<br>ないと思う | ある程度関係が<br>あると思う | かなり関係が<br>あると思う | 無回答     |
|----------------------------------------------|--------------|------------------|-----------------|---------|
| 1. 受け入れ機関の施設・設備                              | ( 1.0%)      | (31.8%)          | (66.3%)         | ( 1.0%) |
| 2. 受け入れ機関の授業カリキュラム                           | ( 6.9%)      | (39.0%)          | (53.1%)         | ( 1.0%) |
| 3. 受け入れ機関の指導教員・教員                            | ( 6.2%)      | (36.7%)          | (56.1%)         | ( 1.0%) |
| 4. 受け入れ国の文化・風土・歴史                            | ( 4.7%)      | (48.6%)          | (45.7%)         | ( 1.0%) |
| 5. 受け入れ国の経済状況                                | ( 7.7%)      | (48.6%)          | (42.7%)         | ( 1.0%) |
| 6. 受け入れ国・受入れ機関の所在地の生活環境                      | ( 0.7%)      | (34.5%)          | (61.8%)         | ( 3.0%) |
| 7. その他, 留学を実現するために知りたいと思うことがあれば, ご自由にお書き下さい。 |              |                  |                 |         |

回答率 7.7%

問 28. 外国語の学習を行うとしたら、以下に挙げた場所・方法をどの程度利用したいと思いますか. **n=403**

|                 | 利用したくない | ある程度利用したい | かなり利用したい | 無回答     |
|-----------------|---------|-----------|----------|---------|
| 1. 日本国内の語学学校    | (34.5%) | (49.4%)   | (14.4%)  | (1.7%)  |
| 2. 短期の海外語学研修    | (23.8%) | (43.9%)   | (30.8%)  | (1.5%)  |
| 3. 学内の外国語会話サークル | (38.2%) | (47.6%)   | (12.9%)  | (1.2%)  |
| 4. 京都大学が行う授業・講義 | (17.6%) | (51.9%)   | (29.3%)  | (1.2%)  |
| 5. ラジオ・テレビの講座   | (25.8%) | (53.1%)   | (19.6%)  | (1.5%)  |
| 6. 市販の教材        | (22.8%) | (52.6%)   | (23.3%)  | (1.2%)  |
| 7. インターネット      | (19.9%) | (48.9%)   | (30.0%)  | (1.2%)  |
| 8. その他          | (14.4%) | (9.2%)    | (4.5%)   | (72.0%) |

(具体的にお書き下さい)

回答率 20.4%

問 29. 以下に挙げることがらについて、あなたのお気持ちに近いものに○をつけてください. **n=403**

|               | 不満足    | どちらかといえば<br>不満足 | どちらかといえば<br>満足 | 満足      | 無回答    |
|---------------|--------|-----------------|----------------|---------|--------|
| 1. 京都大学の講義    | (9.2%) | (34.0%)         | (47.9%)        | (7.7%)  | (1.2%) |
| 2. 京都大学の研究環境  | (3.0%) | (10.2%)         | (56.1%)        | (28.0%) | (2.7%) |
| 3. 学生生活       | (3.2%) | (13.9%)         | (52.4%)        | (29.3%) | (1.2%) |
| 4. 大学以外の生活    | (3.5%) | (18.4%)         | (47.6%)        | (29.5%) | (1.0%) |
| 5. 指導教員       | (5.2%) | (17.9%)         | (53.1%)        | (22.3%) | (1.5%) |
| 6. 現在の友人・知人関係 | (2.5%) | (7.9%)          | (50.6%)        | (38.0%) | (1.0%) |

|           | 悲観的    | どちらかといえば<br>悲観的 | どちらかといえば<br>楽観的 | 楽観的     | 無回答    |
|-----------|--------|-----------------|-----------------|---------|--------|
| 7. 卒業後の展望 | (4.2%) | (25.1%)         | (52.6%)         | (14.6%) | (3.5%) |

問 30. いま現在、留学に向けて具体的に準備をしていることがありますか. (すべてに○)  
**n=403 無回答(1.0%)**

|                |         |
|----------------|---------|
| 1. 奨学金など経費の確保  | (6.5%)  |
| 2. 留学に関する情報の収集 | (16.1%) |
| 3. 受け入れ先の確保    | (4.2%)  |
| 4. 外国語の学習      | (34.0%) |
| 5. 周囲への説明      | (7.7%)  |
| 6. その他(具体的に: ) | (1.5%)  |
| 7. 特に何もしていない   | (59.8%) |

問 31. あなたの所属学部・研究科では、留学に関する以下のサポートを行っていますか。  
n=403

|                                   | 行っている   | 行っていない  | 行っているかどうか知らない | 無回答     |
|-----------------------------------|---------|---------|---------------|---------|
| 1. 単位認定制度                         | (10.4%) | ( 5.0%) | (82.9%)       | ( 1.7%) |
| 2. 奨学金制度                          | (17.1%) | ( 3.5%) | (77.7%)       | ( 1.7%) |
| 3. 交換留学制度                         | (19.9%) | ( 3.5%) | (74.9%)       | ( 1.7%) |
| 4. 留学情報の提供                        | (26.1%) | ( 3.2%) | (68.7%)       | ( 2.0%) |
| 5. 留学（送り出し）相談                     | (15.6%) | ( 1.7%) | (80.6%)       | ( 2.0%) |
| 6. その他、行われているサポートがあれば、具体的にお書き下さい。 |         |         |               |         |

回答率 3.0%

付問 31-a. 留学に関して、所属学部・研究科にサポートして欲しいことはありますか。  
ご自由にお書き下さい。 n=403

回答率 19.6%

問 32. 京都大学国際交流センター・留学生課では、国際交流・海外留学支援に関する以下のような活動を行っています。利用・参加したことがあるものにすべて○をつけて下さい。

n=403 無回答( 1.5%)

1. 「留学・英語講義 (KUINEP)・インターンシップ・英語教育」についての説明会(39.0%)
2. センター教員による個別相談 ( 1.0%)
3. 国際交流センターホームページ (14.4%)
4. 海外留学・国際交流に関するメーリングリスト (17.4%)
5. センター教員提供のポケットゼミ・全学共通科目 A 群 (19.6%)
6. センター教員提供の多文化間交流クラス ( 1.7%)  
(Science Today, Science Tomorrow, 英語圏留学のためのフルコース)
7. センター主催の講演会 ( 2.5%)
8. 留学フェア international week (センターにて 6 月昼休みに開催) ( 5.7%)
9. ラウンジ (KIZUNA) の利用又はラウンジ (KIZUNA) 主催のイベント ( 6.7%)
10. KCJS/SCTI 英語講義聴講制度 (0.5%)
11. どれも利用・参加したことがない (41.4%)

付問 32-a. あなたは、国際交流や海外留学に関する情報を誰／どこから受けとっていますか。すべて挙げてください。(例. 指導教員, 友だち, 所属部局, 新聞, 雑誌, 指導教員以外の教員など)

n=403

回答率 41.4%

(次ページへつづく) ➡



付問 32－b. 留学に関して、国際交流センターにサポートして欲しいと思うことはありますか. ご自由にお書き下さい. **n=403**

回答率 16.6%

問 33. 京都大学の留学支援体制への要望・意見があれば, ご自由にお書き下さい. **n=403**

回答率 21.6%

京都大学生の留学に関するより詳細な調査のため, インタビューをさせていただく場合があります. もしご協力いただける方は, 差し支えない範囲で, お名前, 御連絡先を御記入いただければ幸いです. なお, 下記の情報は本目的以外には使用いたしません.

|                |
|----------------|
| お名前            |
| Email または電話番号: |

ご協力ありがとうございました.

問 34～問 39 は、留学したいと思ったことがない人にお尋ねします。

問 34. 留学したいと思わない理由について **n=155**

|                                            | あてはまらない    | どちらかといえば<br>あてはまらない | どちらかといえば<br>あてはまる | あてはまる   | 無回答    |
|--------------------------------------------|------------|---------------------|-------------------|---------|--------|
| 1. 京都大学の授業に満足しているから                        | (16.8%)    | (23.9%)             | (48.4%)           | (9.7%)  | (1.3%) |
| 2. 京都大学の研究環境に満足しているから                      | (12.3%)    | (17.4%)             | (47.7%)           | (19.4%) | (3.2%) |
| 3. 京都大学の教育・研究への満足度とは関係なく、そもそも留学する必要を感じないから | (7.1%)     | (26.5%)             | (38.1%)           | (27.7%) | (0.6%) |
| 4. 留学の手続きが面倒だから                            | (14.8%)    | (22.6%)             | (32.3%)           | (29.7%) | (0.6%) |
| 5. 時間が足りないから                               | (11.6%)    | (23.9%)             | (31.0%)           | (33.5%) | (0.0%) |
| 6. お金が足りないから                               | (12.3%)    | (18.1%)             | (32.9%)           | (36.8%) | (0.0%) |
| 7. 外国語能力が不足しているから                          | (10.3%)    | (9.7%)              | (36.8%)           | (41.9%) | (1.3%) |
| 8. 海外での経験は、旅行などで充分味わえるから                   | (32.9%)    | (33.5%)             | (23.2%)           | (9.0%)  | (1.3%) |
| 9. 留学という形式をとると、海外での行動が制約されてしまうから           | (43.2%)    | (35.5%)             | (14.8%)           | (5.8%)  | (0.6%) |
| 10. 京都大学での学業・研究と両立できない                     | (20.6%)    | (25.2%)             | (36.8%)           | (16.8%) | (0.6%) |
| 11. 就職活動と両立できない                            | (31.6%)    | (25.8%)             | (27.1%)           | (14.8%) | (0.6%) |
| 12. 就職に役立たない                               | (54.8%)    | (31.6%)             | (10.3%)           | (2.6%)  | (0.6%) |
| 13. そもそも、留学について考えたことがない                    | (20.6%)    | (32.3%)             | (23.9%)           | (20.6%) | (2.6%) |
| 14. その他(具体的に :                             | 回答率 (5.8%) |                     |                   |         | )      |

問 35. 以下に挙げることがらについて、あなたのお気持ちに近いものに○をつけてください。 **n=155**

|               | 不満足           | どちらかといえば<br>不満足            | どちらかといえば<br>満足             | 満足             | 無回答           |
|---------------|---------------|----------------------------|----------------------------|----------------|---------------|
| 1. 京都大学の講義    | (3.2%)        | (24.5%)                    | (61.3%)                    | (11.0%)        | (0.0%)        |
| 2. 京都大学の研究環境  | (1.3%)        | (7.7%)                     | (61.9%)                    | (27.1%)        | (1.9%)        |
| 3. 学生生活       | (1.3%)        | (12.9%)                    | (52.9%)                    | (32.9%)        | (0.0%)        |
| 4. 大学以外の生活    | (1.9%)        | (18.7%)                    | (50.3%)                    | (29.0%)        | (0.0%)        |
| 5. 指導教員       | (3.9%)        | (13.5%)                    | (57.4%)                    | (23.2%)        | (1.9%)        |
| 6. 現在の友人・知人関係 | (3.2%)        | (12.3%)                    | (52.3%)                    | (32.3%)        | (0.0%)        |
| 7. 卒業後の展望     | 悲観的<br>(8.4%) | どちらかといえば<br>悲観的<br>(27.1%) | どちらかといえば<br>楽観的<br>(52.9%) | 楽観的<br>(10.3%) | 無回答<br>(1.3%) |

(次ページへつづく)



問 36. もし、あなたが留学したとしたら、その経験は、帰国してから、つぎのことに役立つと思いますか。 (それぞれに○) **n=155**

|                                         | 役立つ<br>と思う | あまり役立つ<br>と思う | ある程度役立つ<br>と思う | 役立つ<br>と思う | 無回答    |
|-----------------------------------------|------------|---------------|----------------|------------|--------|
| 1. 就職                                   | (4.5%)     | (14.8%)       | (47.7%)        | (32.9%)    | (0.0%) |
| 2. 今後の研究活動                              | (2.6%)     | (14.2%)       | (56.8%)        | (26.5%)    | (0.0%) |
| 3. 外国語能力の向上                             | (0.6%)     | (3.2%)        | (20.6%)        | (75.5%)    | (0.0%) |
| 4. 国際的な視野を持つこと                          | (1.9%)     | (7.7%)        | (34.2%)        | (54.8%)    | (1.3%) |
| 5. 友人・知人関係などの人的ネットワーク形成                 | (3.9%)     | (18.7%)       | (45.2%)        | (32.3%)    | (0.0%) |
| 6. 日本の国際交流                              | (10.3%)    | (34.2%)       | (40.6%)        | (14.8%)    | (0.0%) |
| 7. その他留学経験が役に立つだろうと思うことがあれば、具体的にお書き下さい。 |            |               |                |            |        |

回答率 10.3%

問 37. あなたの所属学部・研究科では、留学に関する以下のサポートを行っていますか。  
**n=155**

|                                   | 行っている   | 行っていない | 行っているかどうか知らない |
|-----------------------------------|---------|--------|---------------|
| 1. 単位認定制度                         | (14.2%) | (3.2%) | (82.6%)       |
| 2. 奨学金制度                          | (15.5%) | (3.2%) | (81.3%)       |
| 3. 交換留学制度                         | (12.3%) | (3.2%) | (84.5%)       |
| 4. 留学情報の掲示                        | (27.1%) | (3.9%) | (69.0%)       |
| 5. 留学（送り出し）相談                     | (12.9%) | (2.6%) | (84.5%)       |
| 6. その他、行われているサポートがあれば、具体的にお書き下さい。 |         |        |               |

回答率 4.5%

付問 37-a. 留学に関して、所属学部・研究科にサポートして欲しいことはありますか。  
ご自由にお書き下さい。 **n=155**

回答率 18.7%

問 38. 京都大学国際交流センター・留学生課では、国際交流・海外留学支援に関する以下のような活動を行っています。利用・参加したことがあるものにすべて○をつけて下さい。

n=155

- |                                                                            |         |
|----------------------------------------------------------------------------|---------|
| 1. 「留学・英語講義 (KUINEP)・インターンシップ・英語教育」についての説明会                                | (21.3%) |
| 2. センター教員による個別相談                                                           | (0.6%)  |
| 3. 国際交流センターホームページ                                                          | (2.6%)  |
| 4. 海外留学・国際交流に関するメーリングリスト                                                   | (3.2%)  |
| 5. センター教員提供のポケットゼミ・全学共通科目 A 群                                              | (6.5%)  |
| 6. センター教員提供の多文化間交流クラス<br>(Science Today, Science Tomorrow, 英語圏留学のためのフルコース) | (0.6%)  |
| 7. センター主催の講演会                                                              | (0.6%)  |
| 8. 留学フェア international week (センターにて 6 月昼休みに開催)                             | (0.0%)  |
| 9. ラウンジ (KIZUNA) の利用又はラウンジ (KIZUNA) 主催のイベント                                | (1.9%)  |
| 10. KCJS/SCTI 英語講義聴講制度                                                     | (0.0%)  |
| 11. どれも利用・参加したことがない                                                        | (61.3%) |

付問 38-a. あなたは、国際交流や海外留学に関する情報を誰／どこから受けとっていますか。すべて挙げてください。(例. 指導教員, 友だち, 所属部局, 新聞, 雑誌, 指導教員以外の教員など)

n=155

回答率 51.6%

付問 38-b. 留学に関して、国際交流センターにサポートして欲しいと思うことはありますか。ご自由にお書き下さい。 n=155

回答率 18.7%

問 39. 京都大学の留学支援体制への要望・意見があれば、ご自由にお書き下さい。 n=155

回答率 16.1%

(次ページへつづく) ➡

京都大学生の留学に関するより詳細な調査のため、インタビューをさせていただく場合があります。もし、ご協力いただける方は、差し支えない範囲で、お名前、御連絡先を御記入いただければ幸いです。なお、下記の情報は本目的以外には使用いたしません。

|                |
|----------------|
| お名前            |
| Email または電話番号: |

ご協力ありがとうございました。

---

---

---

問 40～問 49 は、留学が決定している方にお尋ねします。

問 40. どここの国に留学しますか。国名でお答え下さい。 n=22

|           |
|-----------|
| 回答率 90.9% |
|-----------|

---

問 41. あなたの留学先での身分は、次のどれですか。 n=22

- |                         |             |
|-------------------------|-------------|
| 1. 京都大学との学術交流協定による交換留学生 | (40.9%)     |
| 2. 上記以外の学部・大学院などの正規学生   | (4.5%)      |
| 3. 研究生・聴講生など            | (22.7%)     |
| 4. その他（具体的に：            | ） (18.2%)   |
|                         | 無回答 (13.6%) |

---

問 42. 奨学金を受けますか。 n=22

- |                |                 |             |
|----------------|-----------------|-------------|
| 1. 受ける (45.5%) | 2. 受けない (36.4%) | 無回答 (18.2%) |
|----------------|-----------------|-------------|



付問 42－a. 奨学金名をわかる範囲で具体的にお書きください。 n=10

|           |
|-----------|
| 回答率 80.0% |
|-----------|

(次ページへつづく) ➡

問 43. 今回の留学を決心するにあたって、重要であった要因を、以下の中から順に3つまで選んで下さい。 **n=22**

| 1 番目      | 2 番目      | 3 番目      |
|-----------|-----------|-----------|
| 回答率 90.9% | 回答率 90.9% | 回答率 90.9% |

|                                    | 1 番目    | 2 番目    | 3 番目    |
|------------------------------------|---------|---------|---------|
| 1. 奨学金                             | ( 4.5%) | ( 0.0%) | ( 9.1%) |
| 2. 単位認定制度                          | ( 4.5%) | ( 0.0%) | ( 0.0%) |
| 3. 交換留学制度                          | ( 4.5%) | ( 0.0%) | ( 9.1%) |
| 4. 日本と海外の学期の調整                     | ( 0.0%) | ( 0.0%) | ( 4.5%) |
| 5. 京都大学の学業・研究との両立                  | ( 4.5%) | ( 0.0%) | (13.6%) |
| 6. 就職活動との兼ね合い                      | ( 0.0%) | ( 0.0%) | ( 4.5%) |
| 7. 事務的な手続きのしやすさ                    | ( 0.0%) | ( 0.0%) | ( 0.0%) |
| 8. 留学に関する京都大学のサポート体制（悩みの相談、情報提供など） | ( 0.0%) | ( 0.0%) | ( 4.5%) |
| 9. 受け入れ機関の施設・設備                    | ( 4.5%) | ( 0.0%) | ( 0.0%) |
| 10. 受け入れ機関の授業カリキュラム                | ( 9.1%) | ( 4.5%) | ( 4.5%) |
| 11. 受け入れ機関の指導教員                    | ( 0.0%) | (18.2%) | ( 0.0%) |
| 12. 日本と受け入れ国の研究水準の差                | ( 0.0%) | ( 9.1%) | ( 0.0%) |
| 13. 日本と受け入れ国の国家間交流                 | ( 4.5%) | ( 0.0%) | ( 0.0%) |
| 14. 受け入れ国の文化・風土・歴史                 | ( 9.1%) | ( 9.1%) | ( 9.1%) |
| 15. 受け入れ国の経済状況                     | ( 0.0%) | ( 0.0%) | ( 0.0%) |
| 16. 受け入れ国・受入機関の所在地の生活環境            | ( 0.0%) | ( 4.5%) | ( 0.0%) |
| 17. 自分自身の外国語能力                     | ( 9.1%) | ( 9.1%) | ( 0.0%) |
| 18. 自分自身の研究に関する興味・関心               | ( 4.5%) | ( 0.0%) | ( 0.0%) |
| 19. 自分自身の <u>留学</u> に関する興味・関心      | (13.6%) | (18.2%) | ( 9.1%) |
| 20. 親の勧め                           | ( 4.5%) | ( 0.0%) | ( 0.0%) |
| 21. 指導教員の勧め                        | ( 4.5%) | ( 0.0%) | (13.6%) |
| 22. 友人、知人の勧め                       | ( 4.5%) | ( 4.5%) | ( 0.0%) |
| 23. 偶然の要因・縁                        | ( 0.0%) | ( 4.5%) | ( 4.5%) |
| 24. その他、重要であったことがあれば、ご自由にお書き下さい。   |         |         |         |

・2 番目の要因として 1 ケース

・3 要因以上選択 1 ケース



問 44. 留学が決定するまでに、最も苦労したことは何ですか。具体的にお書き下さい。

n=22

回答率 86.4%

問 45. 以下に挙げることがらについて、あなたのお気持ちに近いものに○をつけてください。 n=22

|               | 不満足     | どちらかといえば<br>不満足 | どちらかといえば<br>満足  | 満足            |
|---------------|---------|-----------------|-----------------|---------------|
| 1. 京都大学の講義    | ( 9.1%) | (31.8%)         | (50.0%)         | ( 9.1%)       |
| 2. 京都大学の研究環境  | ( 4.5%) | (18.2%)         | (59.1%)         | (18.2%)       |
| 3. 学生生活       | ( 0.0%) | ( 4.5%)         | (63.3%)         | (31.8%)       |
| 4. 大学以外の生活    | ( 0.0%) | (18.2%)         | (50.0%)         | (31.8%)       |
| 5. 指導教員       | ( 4.5%) | ( 9.1%)         | (45.5%)         | (40.9%)       |
| 6. 現在の友人・知人関係 | ( 0.0%) | ( 4.5%)         | (59.1%)         | (36.4%)       |
|               | 悲観的     | どちらかといえば<br>悲観的 | どちらかといえば<br>楽観的 | 楽観的           |
| 7. 卒業後の展望     | (0.0%)  | (31.8%)         | (45.5%)         | (18.2%)       |
|               |         |                 |                 | 無回答<br>(4.5%) |

問 46. あなたの所属学部・研究科では、留学に関する以下のサポートを行っていますか。

n=22

|                                   | 行っている   | 行っていない  | 行っているかどうか知らない |
|-----------------------------------|---------|---------|---------------|
| 1. 単位認定制度                         | (50.0%) | ( 9.1%) | (40.9%)       |
| 2. 奨学金制度                          | (40.9%) | ( 9.1%) | (50.0%)       |
| 3. 交換留学制度                         | (68.2%) | ( 0.0%) | (31.8%)       |
| 4. 留学情報の提供                        | (59.1%) | ( 9.1%) | (31.8%)       |
| 5. 留学（送り出し）相談                     | (40.9%) | (13.6%) | (45.5%)       |
| 6. その他、行われているサポートがあれば、具体的にお書き下さい。 |         |         |               |

回答率 4.5%

付問 46-a. 留学に関して、所属学部・研究科にサポートして欲しいことはありますか。ご自由にお書き下さい。 n=22

回答率 40.9%

問 47. 留学の経験は、帰国してから、つぎのことに役立つと思いますか。 (それぞれに○)

n=22

|                                         | 役立つ<br>と思う | あまり役立つ<br>と思う | ある程度役立つ<br>と思う | 役立つ<br>と思う |
|-----------------------------------------|------------|---------------|----------------|------------|
| 1. 就職                                   | (0.0%)     | (22.7%)       | (40.9%)        | (36.4%)    |
| 2. 今後の研究活動                              | (0.0%)     | (9.1%)        | (31.8%)        | (59.1%)    |
| 3. 外国語能力の向上                             | (0.0%)     | (4.5%)        | (18.2%)        | (77.3%)    |
| 4. 国際的な視野を持つこと                          | (0.0%)     | (9.1%)        | (9.1%)         | (81.8%)    |
| 5. 友人・知人関係などの人的ネットワーク形成                 | (0.0%)     | (13.6%)       | (36.4%)        | (50.0%)    |
| 6. 日本の国際交流                              | (9.1%)     | (18.2%)       | (36.4%)        | (36.4%)    |
| 7. その他留学経験が役に立つだろうと思うことがあれば、具体的にお書き下さい。 |            |               |                |            |

回答率 31.8%

問 48. 京都大学国際交流センターでは、国際交流・海外留学支援に関する以下のような活動を行っています。利用・参加したことがあるものにすべて○をつけて下さい。

n=22 無回答 (4.5%)

1. 「留学・英語講義 (KUINP)・インターンシップ・英語教育」についての説明会 (40.9%)
2. センター教員による個別相談 (18.2%)
3. 国際交流センターホームページ (36.4%)
4. 海外留学・国際交流に関するメーリングリスト (36.4%)
5. センター教員提供のポケットゼミ・全学共通科目 A 群 (13.6%)
6. センター教員提供の多文化間交流クラス (0.0%)  
(Science Today, Science Tomorrow, 英語圏留学のためのフルコース)
7. センター主催の講演会 (0.0%)
8. 留学フェア international week (センターにて 6 月昼休みに開催) (31.8%)
9. ラウンジ (KIZUNA) の利用又はラウンジ (KIZUNA) 主催のイベント (27.3%)
10. KCJS/CTI 英語講義聴講制度 (0.0%)
11. どれも利用・参加したことがない (18.2%)

付問 48-a. あなたは、国際交流や海外留学に関する情報を誰／どこから受けとっていますか。すべて挙げてください。(例. 指導教員, 友だち, 所属部局, 新聞, 雑誌, 指導教員以外の教員など)

n=22

回答率 77.3%

(次ページへつづく) ➡

付問 48－b. 留学に関して、国際交流センターにサポートして欲しいと思うことはありますか. ご自由にお書き下さい. **n=22**

回答率 50.0%

問 49. 京都大学の留学支援体制への要望・意見があれば, ご自由にお書き下さい. **n=22**

回答率 50.0%

京都大学生の留学に関するより詳細な調査のため, インタビューをさせていただく場合があります. もしご協力いただける方は, 差し支えない範囲で, お名前, 御連絡先を御記入いただければ幸いです. なお, 下記の情報は本目的以外には使用いたしません.

|                |
|----------------|
| お名前            |
| Email または電話番号: |

ご協力ありがとうございました.

問9. これまでに受けた語学検定と、その結果をお書きください。語学検定を受けたことがない人は「なし」とお書きください。

|        | 人数  | 割合(%)  |
|--------|-----|--------|
| 資格検定あり | 351 | 60.4%  |
| 資格検定なし | 205 | 35.3%  |
| 無回答    | 25  | 4.3%   |
| 合計     | 581 | 100.0% |

検定試験ありのうち、70 名が 2 種類、8 名が 3 種類の検定資格を所有している。以下語学検定のうちわけ (のべ 437(=351+70+8\*2)名)

|        | 人数  | 割合(%)   |
|--------|-----|---------|
| 英語検定   | 197 | 45.1%   |
| うち 1 級 | 7   | (3.6%)  |
| 準 1 級  | 20  | (10.2%) |
| 2 級    | 98  | (49.7%) |
| 準 2 級  | 30  | (15.2%) |
| 3 級    | 36  | (18.3%) |
| 4 級    | 4   | (2.0%)  |
| 5 級    | 1   | (0.5%)  |
| 不明     | 1   | (0.5%)  |
| TOEFL  | 63  | 14.4%   |
| TOEIC  | 148 | 33.9%   |
| IELTS  | 6   | 1.4%    |
| うち 7.0 | 1   | (16.7%) |
| 6.5    | 3   | (50.0%) |
| 5.5    | 1   | (16.7%) |
| 5.0    | 1   | (16.7%) |
| その他    | 23  | 5.3%    |
| 合計     | 437 | 100.0%  |



| その他検定名        | 人数 | 割合(%)   |
|---------------|----|---------|
| 実用英語検定        | 4  | 17.3%   |
| うち 準 1 級      | 2  | (8.7%)  |
| 準 2 級         | 1  | (4.3%)  |
| 2 級           | 1  | (4.3%)  |
| GTEC          | 2  | 8.7%    |
| うち 770        | 1  | (4.3%)  |
| 740           | 1  | (4.3%)  |
| キャセック (680)   | 1  | 4.3%    |
| 中国語検定         | 5  | 21.7%   |
| うち 準 1 級      | 1  | (4.3%)  |
| 3 級           | 1  | (4.3%)  |
| 4 級           | 3  | (13.0%) |
| ドイツ語検定        | 4  | 17.3%   |
| うち 2 級        | 1  | (4.3%)  |
| 3 級           | 1  | (4.3%)  |
| 4 級           | 2  | (8.7%)  |
| フランス語検定 (3 級) | 2  | 8.7%    |
| 韓国語検定 (準 2 級) | 1  | 4.3%    |
| スペイン語検定 (4 級) | 1  | 4.3%    |
| 新 HSK (4 級)   | 1  | 4.3%    |
| OeSD (B2)     | 1  | 4.3%    |
| 漢字検定 (2 級)    | 1  | 4.3%    |
| 合計            | 23 | 100.0%  |

TOEFL 成績統計表

| TOEFL | 人数 | 割合(%)  |
|-------|----|--------|
| iBT   | 61 | 96.8%  |
| PBT   | 1  | 1.6%   |
| 不明    | 1  | 1.6%   |
| 合計    | 63 | 100.0% |

具体的点数記述：

| iBT |    |    |      | その他    |     |
|-----|----|----|------|--------|-----|
| 点数  | 人数 | 点数 | 人数   | 点数     | 人数  |
| 114 | 1  | 68 | 2    | PBT500 | 1   |
| 104 | 3  | 67 | 3    | 不明     | 1   |
| 103 | 2  | 66 | 1    | 合計     | 2 人 |
| 96  | 1  | 65 | 4    |        |     |
| 92  | 1  | 63 | 2    |        |     |
| 90  | 1  | 60 | 3    |        |     |
| 89  | 1  | 59 | 4    |        |     |
| 88  | 2  | 57 | 1    |        |     |
| 86  | 1  | 56 | 1    |        |     |
| 82  | 1  | 55 | 2    |        |     |
| 78  | 1  | 53 | 2    |        |     |
| 77  | 1  | 50 | 1    |        |     |
| 76  | 1  | 49 | 1    |        |     |
| 75  | 2  | 47 | 1    |        |     |
| 74  | 1  | 45 | 1    |        |     |
| 73  | 1  | 43 | 1    |        |     |
| 72  | 1  | 40 | 2    |        |     |
| 71  | 1  | 33 | 1    |        |     |
| 70  | 2  | 31 | 1    |        |     |
|     |    | 30 | 1    |        |     |
|     |    | 28 | 1    |        |     |
|     |    | 合計 | 61 人 |        |     |

TOEIC 成績統計表

| TOEIC  | 人数  | 割合(%)  |
|--------|-----|--------|
| 900 点台 | 11  | 7.4%   |
| 800 点台 | 32  | 21.6%  |
| 700 点台 | 49  | 33.1%  |
| 600 点台 | 36  | 24.3%  |
| 500 点台 | 15  | 10.1%  |
| 400 点台 | 1   | 0.7%   |
| 不明     | 4   | 2.7%   |
| 合計     | 148 | 100.0% |

具体的点数記述：

|        | 点数  | 人数 |        | 点数  | 人数 |        | 点数  | 人数  |
|--------|-----|----|--------|-----|----|--------|-----|-----|
| 900 点台 | 985 | 1  | 700 点台 | 795 | 4  | 600 点台 | 695 | 4   |
|        | 980 | 2  |        | 790 | 3  |        | 690 | 2   |
|        | 975 | 1  |        | 785 | 1  |        | 675 | 3   |
|        | 970 | 1  |        | 780 | 1  |        | 670 | 2   |
|        | 950 | 2  |        | 775 | 5  |        | 660 | 2   |
|        | 940 | 1  |        | 770 | 1  |        | 650 | 5   |
|        | 920 | 1  |        | 765 | 2  |        | 645 | 1   |
|        | 910 | 1  |        | 760 | 2  |        | 640 | 2   |
|        | 905 | 1  |        | 755 | 1  |        | 635 | 1   |
|        | 小計  | 11 |        | 750 | 3  |        | 630 | 3   |
| 800 点台 | 885 | 1  |        | 745 | 1  |        | 620 | 3   |
|        | 875 | 1  |        | 740 | 4  |        | 615 | 2   |
|        | 870 | 1  |        | 735 | 1  |        | 610 | 1   |
|        | 865 | 1  |        | 730 | 3  |        | 600 | 5   |
|        | 860 | 1  |        | 720 | 6  |        | 小計  | 36  |
|        | 855 | 1  |        | 715 | 1  | 500 点台 | 595 | 1   |
|        | 850 | 4  |        | 710 | 2  |        | 590 | 2   |
|        | 845 | 2  |        | 705 | 3  |        | 580 | 1   |
|        | 830 | 5  |        | 700 | 5  |        | 575 | 1   |
|        | 825 | 2  |        | 小計  | 49 |        | 570 | 1   |
|        | 820 | 3  |        |     |    |        | 560 | 2   |
|        | 815 | 1  |        |     |    |        | 555 | 1   |
|        | 809 | 1  |        |     |    |        | 550 | 1   |
|        | 805 | 5  |        |     |    |        | 545 | 1   |
|        | 800 | 3  |        |     |    |        | 530 | 1   |
|        | 小計  | 32 |        |     |    |        | 515 | 1   |
|        |     |    |        |     |    |        | 510 | 1   |
|        |     |    |        |     |    |        | 505 | 1   |
|        |     |    |        |     |    |        | 小計  | 15  |
|        |     |    |        |     |    | 400 点台 | 492 | 1   |
|        |     |    |        |     |    | 小計     | 1   | 1   |
|        |     |    |        |     |    | 不明     |     | 4   |
|        |     |    |        |     |    | 合計     |     | 148 |

付問 10－ d. あなたが利用している SNS (ソーシャル・ネットワーキング・システム) をすべて挙げてください。(例: Facebook, Mixi, Twitter など)

|        | 人数  | 割合(%)  |
|--------|-----|--------|
| SNS あり | 410 | 70.6%  |
| SNS なし | 116 | 20.0%  |
| 無回答    | 55  | 9.5%   |
| 合計     | 581 | 100.0% |

SNS 利用者のうち、二種類が 121 人、三種類が 69 人、四種類が 10 人、五種類が 1 人、七種類が 1 人。以下利用 SNS のうちわけ (のべ 709(=410+121+69\*2+10\*3+1\*4+1\*6)名)

|                   | 人数    | 割合(%)  |
|-------------------|-------|--------|
| Mixi              | 294   | 41.5%  |
| Twitter           | 210   | 29.6%  |
| Facebook          | 160   | 22.6%  |
| Skype             | 14    | 2.0%   |
| Google+           | 10    | 1.4%   |
| mobage            | 3     | 0.4%   |
| MSN               | 2     | 0.3%   |
| windows messenger | 2     | 0.3%   |
| ameba             | 1     | 0.1%   |
| ARSTA             | 1     | 0.1%   |
| blog              | 1     | 0.1%   |
| fowrsquare        | 1     | 0.1%   |
| linkedin          | 1     | 0.1%   |
| mendeley          | 1     | 0.1%   |
| myspace           | 1     | 0.1%   |
| pixiv             | 1     | 0.1%   |
| second life       | 1     | 0.1%   |
| sound cloud       | 1     | 0.1%   |
| tumblr            | 1     | 0.1%   |
| youtube           | 1     | 0.1%   |
| 関心空間              | 1     | 0.1%   |
| スマコム              | 1     | 0.1%   |
| 合計                | 709 人 | 100.0% |



問 19. どの国に留学したいですか。あれば第三希望まで、国名をお答えください。

| 第一希望           |     |        | 第二希望               |     |        | 第三希望           |     |        |
|----------------|-----|--------|--------------------|-----|--------|----------------|-----|--------|
| 国名             | 人数  | %      | 国名                 | 人数  | %      | 国名             | 人数  | %      |
| アメリカ           | 200 | 34.4%  | イギリス               | 90  | 15.5%  | アメリカ           | 37  | 6.4%   |
| イギリス           | 65  | 11.2%  | アメリカ               | 62  | 10.7%  | イギリス           | 33  | 5.7%   |
| ドイツ            | 37  | 6.4%   | ドイツ                | 48  | 8.3%   | ドイツ            | 29  | 5.0%   |
| カナダ            | 25  | 4.3%   | カナダ                | 33  | 5.7%   | オーストラリア        | 27  | 4.6%   |
| スイス            | 9   | 1.5%   | フランス               | 20  | 3.4%   | カナダ            | 20  | 3.4%   |
| オーストラリア        | 8   | 1.4%   | オーストラリア            | 12  | 2.1%   | フランス           | 17  | 2.9%   |
| 中国             | 8   | 1.4%   | 中国                 | 10  | 1.7%   | 中国             | 15  | 2.6%   |
| フランス           | 8   | 1.4%   | スウェーデン             | 6   | 1.0%   | スイス            | 10  | 1.7%   |
| スウェーデン         | 3   | 0.5%   | イタリア               | 5   | 0.9%   | イタリア           | 7   | 1.2%   |
| ニュージーランド       | 2   | 0.3%   | 韓国                 | 4   | 0.7%   | スウェーデン         | 6   | 1.0%   |
| フィンランド         | 2   | 0.3%   | ニュージーランド           | 4   | 0.7%   | ニュージーランド       | 4   | 0.7%   |
| イタリア           | 1   | 0.2%   | フィンランド             | 4   | 0.7%   | シンガポール         | 3   | 0.5%   |
| インド            | 1   | 0.2%   | シンガポール             | 4   | 0.7%   | フィンランド         | 3   | 0.5%   |
| オーストリア         | 1   | 0.2%   | スイス                | 3   | 0.5%   | インド            | 2   | 0.3%   |
| オランダ           | 1   | 0.2%   | ヨーロッパ              | 3   | 0.5%   | エジプト           | 2   | 0.3%   |
| 韓国             | 1   | 0.2%   | インド                | 2   | 0.3%   | オランダ           | 2   | 0.3%   |
| スペイン           | 1   | 0.2%   | スペイン               | 2   | 0.3%   | 韓国             | 2   | 0.3%   |
| 台湾             | 1   | 0.2%   | ロシア                | 2   | 0.3%   | スペイン           | 2   | 0.3%   |
| デンマーク          | 1   | 0.2%   | オーストリア             | 1   | 0.2%   | ノルウェー          | 2   | 0.3%   |
| ノルウェー          | 1   | 0.2%   | 台湾                 | 1   | 0.2%   | フィリピン          | 2   | 0.3%   |
| ロシア            | 1   | 0.2%   | ノルウェー              | 1   | 0.2%   | ベルギー           | 2   | 0.3%   |
| 英語圏の国          | 1   | 0.2%   | アイスランド             | 1   | 0.2%   | インドネシア         | 1   | 0.2%   |
| 治安のいい国         | 1   | 0.2%   | アイルランド             | 1   | 0.2%   | 北スーダン          | 1   | 0.2%   |
| どこでもかまい<br>ません | 1   | 0.2%   | イラン                | 1   | 0.2%   | ギリシャ           | 1   | 0.2%   |
| 無回答            | 201 | 34.6%  | カンボジア              | 1   | 0.2%   | チェコ            | 1   | 0.2%   |
| 合計             | 581 | 100.0% | スイス（フラン<br>ス語圏の欧州） | 1   | 0.2%   | 東南アジア          | 1   | 0.2%   |
|                |     |        | スコットランド            | 1   | 0.2%   | トルコ            | 1   | 0.2%   |
|                |     |        | ベルギー               | 1   | 0.2%   | ロシア            | 1   | 0.2%   |
|                |     |        | 南スーダン              | 1   | 0.2%   | 治安のいい国         | 1   | 0.2%   |
|                |     |        | モンゴル               | 1   | 0.2%   | どこでもかまい<br>ません | 1   | 0.2%   |
|                |     |        | 治安のいい国             | 1   | 0.2%   | 無回答            | 345 | 59.4%  |
|                |     |        | どこでもかまい<br>ません     | 1   | 0.2%   | 合計             | 581 | 100.0% |
|                |     |        | 無回答                | 253 | 43.5%  |                |     |        |
|                |     |        | 合計                 | 581 | 100.0% |                |     |        |



2011 年 11 月

京都大学 留学生の皆様

京都大学における留学生生活と進路に関するインタビュー調査へのご協力をお願い

本年の 6 月～7 月に国際交流センターが実施しましたアンケート調査「京都大学における留学生生活に関する調査」にご協力くださりありがとうございました。

この度は、皆さんの本学における留学生生活について、さらに詳しいお話を聞かせていただくために個別のインタビュー調査を計画しました。本学での皆さんの日常生活と教育・研究活動、そして希望進路などについて、現状と率直なご意見をお聞かせください。インタビュー調査の結果は、報告書及び学術論文として学内外に公開し、教育・研究環境の改善に役立てます。

インタビューにかかる時間は 1 時間ぐらいで、日時や場所は、皆さんと相談の上、決定します。このインタビュー調査は、先のアンケート調査に参加された留学生の中から、修士課程に属して日本での就職を希望している方で、且つ連絡先を提供して下さった方をお願いしています。

インタビューで得られたデータは、匿名で処理しますので、皆さんのプライバシーを侵害することは一切ありません。利害に関係することはありません。ご提供いただいた個人情報の管理につきましては、本学の基準を厳守します。

なお、皆さんのご承諾を得た上で、インタビューを録音させていただきます。録音された内容につきましても、上記の基準を遵守します。

以上の趣旨をご理解いただき、ご協力をお願いします。

本調査に関するご質問やご意見は下記までお寄せください。

本インタビュー担当

京都大学国際交流センター  
アンケート調査班メンバー  
木下 昭

調査班連絡先

〒606-8501  
京都市左京区吉田本町  
京都大学国際交流センター  
アンケート調査班  
[survey2011@ryugaku.kyoto-u.ac.jp](mailto:survey2011@ryugaku.kyoto-u.ac.jp)  
電話：075-753-2569 (河合淳子准教授室)

京都大学における留學生活と進路に関するインタビュー調査  
内容概要

木下 昭

0. 京都大学での所属、専門、身分

- ・所属
- ・専門
- ・身分・回生
- ・入学してから何年？／来日してから何年？

1. 京都大学に留學する前の環境

- ・留學前の将来プラン
- ・留學に至る経過
- ・留學の準備（予算、家族、語学）

2. 留學生活の概況

- ・経済状況
- ・家族
- ・研究内容
- ・日本語能力、英語能力

3. 将来設計（就職、居住地、家族）

- ・就職活動（準備、実際の活動）
- ・進路に関して大学に望むサポート

2011 年 12 月

京都大学 留学生の皆様

京都大学における留学生アドバイジングの利用状況に関する  
インタビュー調査へのご協力をお願い

本年の 6 月～7 月に国際交流センターが実施しましたアンケート調査「京都大学における留学生生活に関する調査」にご協力くださりありがとうございました。

この度は、皆さんの本学における留学生生活について、さらに詳しいお話を聞かせていただくために個別のインタビュー調査を計画しました。留学生の皆さんが、留学生相談室や Kizuna 生活相談のような本学の留学生アドバイジングについて、どのように感じられ利用されているか、現状と率直なご意見をお聞かせください。インタビュー調査の結果は、報告書及び学術論文として学内外に公開し、教育・研究環境の改善に役立てます。

インタビューにかかる時間は 30 分～1 時間ぐらいで、日時や場所は、皆さんと相談の上、決定します。このインタビュー調査は、先のアンケート調査に参加された留学生の中から、留学生アドバイジングの利用経験を記入され、且つ連絡先を提供して下さった方をお願いしています。

インタビューで得られたデータは、匿名で処理しますので、皆さんのプライバシーを侵害することは一切ありません。利害に関係することもあります。また、いかなる質問も回答はあなたの任意です。ご提供いただいた個人情報の管理につきましては、本学の基準を厳守します。

なお、皆さんのご承諾を得た上で、インタビューを録音させていただきます。録音された内容につきましても、上記の基準を遵守します。

以上の趣旨をご理解いただき、ご協力をお願いします。

本調査に関するご質問やご意見は下記までお寄せください。

本インタビュー担当

戸梶 民夫

京都大学文学研究科 COE 研究員

調査班連絡先

〒606-8501

京都市左京区吉田本町

京都大学国際交流センター

アンケート調査班

[survey2011@ryugaku.kyoto-u.ac.jp](mailto:survey2011@ryugaku.kyoto-u.ac.jp)

電話：075-753-2569 (河合淳子准教授室)

留学生向け「留学生アドバイジングの利用状況」質問内容

0. 京都大学での所属、専門、身分

所属

専門

身分・回生

入学してから何年ですか／来日してから何年ですか。

1. 留学生活を送る上で、不満や困っていること／これまでに困ったことはありますか？

2. もし不満や困っていることがありましたら、誰かに相談しましたか？

3. 京都大学の留学生アドバイジング（Kizuna ピアサポートと留学生相談室）を利用されましたか？

（1）利用された場合は、どのような経緯で利用されたかを教えてください。

（2）利用されなかった場合は、利用しようかと考えたことはなかったかどうか、考えたことがあればなぜ利用しなかったか、を教えてください。

4. 留学生アドバイジングを利用するのであれば、どのような目的で利用したいと思いますか？

5. 留学生アドバイジングに対してお持ちのイメージを教えてください。

京都大学における国際交流の現状と新たな展開への視点  
ー第4回アンケート・インタビュー調査報告書ー

平成23年度京都大学全学共通経費 I-2. 教育研究活動支援  
「国際交流と留学支援体制に関する調査・研究」

---

2012年（平成24年）3月発行

編集 京都大学国際交流推進機構 国際交流センター  
アンケート調査班

発行 京都大学国際交流推進機構 国際交流センター  
〒606-8501 京都市左京区吉田本町  
TEL 075-753-2242

---

印刷 株式会社 田中プリント  
TEL 075-343-0006







